帝国主義と革命

エンベル・ホッジャ

人民の星社

http://www.enverhoxha.ruはこの電子書籍を作成しました

帝国主義と革命

エンベル・ホッジャ

人民の星社

凡例

一、本書は『エンベル・ホッジャー帝国主義と革命』の英語版（一九七九年、チラナ、アルバニア労働党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所、「一一月八日」出版社発行）の翻訳である。翻訳にあたっては、同出版社発行のアルバニア語版、その他を参照した。

一、原書の引用出典は、＊、＊＊……で示し、また、原書の注は（注）で、訳者注は（訳注）で示して、それぞれ本文段落後に掲げた。なお、本文中著者が（　）を用いて補足している箇所、ならびに簡単な訳者注については、（　）にかこんで本文中に挿入した。

一、原書のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所は、「　」でかこんで、さらに傍点を付した。

一、引用部分は原書ではイタリック体であるが、訳文中では区別しなかった。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの引用部分は、原書では間隔をあけ、さらに本文より下げて区別しているので、訳文中でも同様にあらわした。毛沢東の引用については、原書通り本文中に含めた。

一、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンからの引用、また、毛沢東からの引用は、いずれも、これまでの日本語訳を採用した。しばしば引用されるレーニンの著作、『資本主義の最高の段階としての帝国主義』については、本文中および引用出典注において、章の冒頭など一部を除いて『帝国主義論』と略称した。

一、人名、地名、企業名については、現地読みに近く表現することを主にしながら、日本語でも発音しやすいように心がけた。慣用のものはそれを採用した。

刊行にあたって

本書はアルバニア労働党第一書記エンベル・ホッジャ同志の最近の著作を翻訳したもので、そのうちの**第一部**はわが党の中央理論機関誌『革命戦士』に二回にわけて掲載された。本書の**第二部**は、日本語訳としてはじめて公表されるものである。

現代は、帝国主義とプロレタリア革命の時代である。それは金融資本の時代、資本の輸出、国際トラストによる世界市場の分割と再分割の時代、各国の資本が帝国主義の世界戦線という単一の鎖のそれぞれの環に転化し、一国のプロレタリア革命がプロレタリア社会主義世界革命の一環となった時代である。

世界はいま激動の過程にある。国際的範囲における階級闘争の激化を基礎に、革命と反革命、社会主義と帝国主義の二大陣営の闘争がかつてない規模で発展している。今日の情勢の特徴は、帝国主義、社会帝国主義とすべての反動勢力が衰退し、全世界のプロレタリアート、被抑圧人民、被抑

圧民族が、帝国主義、社会帝国主義、現代修正主義、すべての反動勢力との闘争を通じて、革命と社会主義、社会進歩への志向を強めつつ自己の隊列を強大化していることである。

帝国主義、社会帝国主義とすべての反動勢力は、旧世界の崩壊をくいとめ、新世界の到来を阻止しようとして躍起になっている。そのことは一方で世界戦争の危機を増大させ、他方で世界の諸矛盾をいっそう先鋭なものにし革命を引きよせている。

日本帝国主義もまた、軍国主義復活と侵略戦争準備の道を必死になって突きすすんでいる。そのためにかれらは、マルクス・レーニン主義と社会主義にたいする政治的、イデオロギー的攻撃を強めている。これに呼応して宮本修正主義集団、トロツキズム集団、社会民主主義者や一部の小ブルジョア・インテリゲンチャなども反マルクス主義的エセ社会主義論を盛んにばらまいている。帝国主義ブルジョアジーとその共犯者どもはその本質からして脆弱である。だが同時にこうした状況は、日本の革命的人民がマルクス・レーニン主義と社会主義の旗印をよりいっそう鮮明に掲げてたたかうことを必要としている。

国際共産主義運動は、いま新しい発展段階に立っている。第二次世界大戦の末期に発生したブラウダー修正主義から、戦後のユーゴスラビア修正主義、ソ連修正主義、ユーロコミュニズム、宮本修正主義、さらには中国修正主義に至る一連の修正主義潮流の発生、ソ連、中国など大多数の社会

主義国の変質、これらの事実は、国際共産主義運動にとって重大な損失であった。しかし、国際プロレタリアートは、帝国主義、社会帝国主義との闘争、現代修正主義のさまざまな潮流との闘争を通じて、真のマルクス・レーニン主義党をきたえ、成長させてきた。今日、アルバニア労働党をはじめとする真のマルクス・レーニン主義諸党は、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義にもとづいて相互の団結を強化している。国際共産主義運動は、とりわけ中国修正主義との闘争を通じて現在新しい飛躍をかちとろうとしている。

エンベル・ホッジャ同志は『帝国主義と革命』のなかで、マルクス・レーニン主義の原則的観点はけっして時代遅れにはなっておらず、とりわけ、レーニンの帝国主義についての理論は、今日の情勢のもとでもまったく正しいものであることを証明している。そして、現代が帝国主義とプロレタリア革命の時代であり、革命の勝利は不可避であるという確固とした結論を導き出している。ホッジャ同志はこの著作において、帝国主義、社会帝国主義、現代修正主義のさまざまな潮流について、また、プロレタリアートと革命的人民の状況について深く分析をおこなっている。とりわけ、**第二部**において、中国修正主義と「毛沢東思想」に全面的、歴史的検討を加え、それがマルクス・レーニン主義とは無縁の反革命的なものであることを十分に暴露している。

ホッジャ同志のこの著作は、帝国主義と修正主義にたいする闘争における重要な成果であり、新

しい発展段階に立つ国際共産主義運動にたいする大きな貢献である。それはまた、これまでに日本語訳で出版されたホッジャ同志の著作――『アルバニア労働党第七回大会における報告』『修正主義と闘うアルバニア労働党』――と同様日本の革命的人民にとって、敵との闘争における有力な武器となるであろう。

一九七九年　一〇月一日

日本共産党(左派)中央委員会

目次

凡　例　Ⅰ

刊行にあたって　Ⅲ

第一版への序文……3

第二版はしがき……6

第　一　部

第一章　帝国主義と現代修正主義の戦略……8

世界帝国主義の戦略……18

ソ連社会帝国主義の戦略……27

中国社会帝国主義の戦略……32

帝国主義、社会帝国主義の世界戦略におけるチトー主義とその他の修正主義潮流の役割……43

革命は、プロレタリアートと各国人民の敵の戦略を打ち破る唯一の武器である……56

第二章　レーニン主義の帝国主義理論はその有効性を完全に保っている……60

第三章　革命と各国人民……121

われわれは革命に関するマルクス・レーニン主義の教えを擁護し実行しなければならない……125

各国人民の解放闘争は世界革命の一構成部分である……149

真の革命家は各国のプロレタリアと人民に新たな世界、社会主義の世界をめざして立ち上がるよう呼びかける……183

第二部

第一章　「三つの世界」論は、反革命の排外主義理論である……220

「三つの世界」の概念はマルクス・レーニン主義の否定である……221

矛盾にたいする中国修正主義者の態度は観念論、修正主義、降伏主義の態度である……241

「第三世界」の団結についての中国の観点は反動的である……274

中国の「第三世界」論とユーゴスラビアの「非同盟世界」論は各国人民の革命闘争を破壊するものである…………283
第二章　超大国に成り上がる中国の計画…………297
第三章　「毛沢東思想」は反マルクス主義の理論である…………337
マルクス・レーニン主義の擁護はすべての真の革命家にとって重大な責務である…………401

帝国主義と革命

エンベル・ホッジャ

万国のプロレタリア、団結せよ！

第一版*への序文

＊アルバニア語で出版

マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』が一八四八年に公刊されてから今日に至るまで、革命的マルクス主義と日和見主義の政治とイデオロギーの両分野における闘争は、一つの問題に集中してきた。すなわちそれは、社会を変革し、それを社会主義の基盤のうえに打ち立てるためには革命が必要であるのか否か、革命を遂行する諸条件は存在するのか否か、また、革命は平和的方法によって遂行しうるのか、それとも革命的暴力が不可欠なのかどうか、という問題である。

ブルジョアジーと日和見主義者は、数十もの——数百とは言わないまでも——あらゆる理論を並べたて、資本主義社会の基本的矛盾は搾取者と被搾取者との矛盾であるという論駁の余地のない真理を否定し、歴史における労働者階級の地位と役割を抹殺し、人類社会の発展と進歩の決定的要素である階級闘争そのものを否認しようとつねに試みてきた。かれらの目的はつねに、プロレタリアートをイデオロギー的に混乱させ、革命を妨げ、資本主義的搾取を永久化させ、革命と社会主義建設の不敗の科学であるマルクス・レーニン主義を滅ぼすことであった。

これらプロレタリアートと革命の反対者、敵はすべて、マルクス・レーニン主義を時代遅れと宣

告し、新たな歴史的条件、すなわち、資本主義と帝国主義が経てきた変化と人類社会全般の進歩とに合致すると称した、雑多な「理論」を考案しようと努めてきた。

こうして、ベルンシュタインはマルクスを時代遅れと宣言し、またカウツキーは資本主義から帝国主義への移行に故意に誤った解釈を加え、革命を否定したのである。ブラウダーやチトー、フルシチョフ、「ユーロコミュニスト」から中国の「三つの世界」論者に至る現代修正主義者もすべて、かれらの前例と手口に従った。

これらの反マルクス主義者はみな、かれらがマルクス・レーニン主義を「創造的方法」で実践し発展させ、それを今日の世界に存在する新たな条件に適合させているという虚偽の口実のもとに、労働者階級の科学的イデオロギーを否定し、それをブルジョア的日和見主義にすりかえようとしている。

プロレタリアートと革命家、およびその真のマルクス・レーニン主義党は、つねに、現代修正主義とその雑多な潮流にたいする仮借ない断固とした闘争をくり広げてきたし、この闘争は今後もけっしてやむことはないであろう。

修正主義者、反動的ブルジョアジーとその政党は、われわれの理論、マルクス・レーニン主義に、硬直した固定的な教条というレッテルを張り、それは生命力と躍動に満ちた時代である現代の実際に適合しないなどとのべている。しかし、躍動性と生命力について言うならば、それらの特質を備えた唯一の理論はマルクス・レーニン主義なのである。なぜならそれは、社会でもっとも先進

的な階級、もっとも革命的な階級であり、正しい思想をもち、物質的な福利をもたらし、つねに活動してやまない労働者階級の理論だからである。

ブルジョアジーとそのイデオローグは、マルクス・レーニン主義が時代遅れで「現代」と調和しないなどということを人類に納得させようと策動しているが、それが意図しているのは、プロレタリアートの科学的イデオロギーに反対し、それを、堕落した生活やルンペンの生活を説き、果てしない退廃の社会やいわゆる消費社会を説く理論に置きかえることである。また、絶えざる変化発展をつづける新しい社会の形態がいまや見出されたなどと主張する理論も、プロレタリアートの進歩的、革命的思考とプロレタリアートを導くイデオロギーに打撃を加え、資本主義的抑圧・搾取を永久化することを意図しているのである。

レーニンが教えているように、われわれの理論は階級闘争の形態と方法を正しく判断し決定するものである。それは依然として、実生活と時代から生じる実践的諸問題と密接に結びついている。この武器は、われわれが人類社会の発展方向をその時時において正しく分析し認識するうえで、また、社会の歴史的転換点をそれぞれ正しく分析・認識し、社会の革命的変革をおしすすめるうえで、助けとなるものである。

わが党は第七回大会において、中国の「三つの世界」論を含むさまざまな修正主義潮流をすべて暴露した。わが党は、革命と社会主義、各国人民の解放の勝利にとってマルクス・レーニン主義が死活の重要性をもっていることを強調し、世界史的過程の現段階についてのブルジョア的、日和見

主義的な命題と見解――それは、革命を拒絶し資本主義的搾取を擁護するものである――に断固とした論駁を加えるとともに、資本主義と帝国主義の発展におけるいかなる変化も修正主義の「考案」やねつ造を正当化しはしないと、強く力説した。反革命、反共産主義の諸理論を原則的に批判し不断に暴露することは、マルクス・レーニン主義を擁護し、革命と各国人民の事業を前進させるうえで、また、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの理論がつねに生気に満ちており、いまもなお未来の勝利への誤ることのない指針であることを明確に示すうえでも、絶対に不可欠なのである。

一九七八年四月

第二版はしがき

本書『帝国主義と革命』は、一九七八年四月、党内配布用として（アルバニア語で）最初に出版された。

本書を読んだ共産主義者の要望に応じて、このほど公刊されるはこびとなった。第一版以降の時期に起こった諸事件の一部は補足して含めた。

一九七八年一二月

第一部

第一章　帝国主義と現代修正主義の戦略

アルバニア労働党第七回大会は、今日の国際情勢と世界の革命運動の現状を分析して、帝国主義と現代修正主義が革命と各国人民の解放にもたらしている危険を指摘するとともに、それらにたいする仮借ない闘争の必要性と、世界のマルクス・レーニン主義運動にあたえられるべき積極的な支持とを強調した。

これらの諸問題は大きな重要性をもつものである。なぜならば、社会主義の建設、プロレタリアート独裁と祖国防衛の強化のための闘争は、国際情勢および世界の全般的発展過程と切り離せないからである。

今日、暗黒を代表し、プロレタリアート、各国人民にたいする搾取と隷属を代表する支配勢力——アメリカ帝国主義とその代理人、ソ連社会帝国主義、中国社会帝国主義、大ブルジョアジーと反動は、マルクス・レーニン主義に対抗し、たたかいを挑んでいる。社会民主主義、現代修正主義などの反革命的イデオロギー潮流やその他多くの反革命潮流もまた、われわれの革命的イデオロギーに対抗している。

こうしたあらゆる敵との闘争において、われわれは確固としてマルクス・レーニン主義理論と世

界プロレタリアートに依拠しなければならない。理論的分野におけるわれわれの闘争は、国際情勢と発展しつつある諸事件にたいして、また、互いに対立・闘争し、つねに変動するすべての社会的勢力の目標と狙いにたいして正確な弁証法的分析を加えるとき、成果を収めることができる。国際情勢を科学的に分析し、革命闘争の戦略を明らかにすることは、状況のちがいに応じて連戦連勝のための正しい戦術を確定するうえで、われわれの助けとなるものである。わが党はつねに、このような方法で活動してきた。

社会主義は資本主義との闘争をくり広げており、世界プロレタリアートは資本主義ブルジョアジーとの仮借ない不断の闘争のなかに固く組み込まれており、また、世界各国人民は内外の抑圧者と闘争している。世界プロレタリアートが闘争において自らの指針とするイデオロギーは、この闘争の必然性を解明し、諸勢力を戦闘に立ち上がらせるマルクス・レーニン主義のイデオロギーである。だからこそ、資本主義と帝国主義はつねに、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの理論にたいする激しい闘争を組織してきたのである。

カール・マルクスは、社会発展と社会の革命的変革の法則、低次の社会制度からより高次の社会制度への社会の移行の法則を発見した。かれは、生産手段の私的所有と資本主義的流通様式、および資本家が占有する剰余価値について科学的分析を加えた。かれは、階級と階級闘争に関する科学的理論を創造し、ブルジョアジーを打倒して資本主義制度を破壊し、プロレタリアート独裁を打ち立て社会主義社会を建設するプロレタリアートの闘争方法を明らかにした。

世界のすべての国の雑多な反動的理論家は、あらゆる方法でマルクスの理論を汚し、泥を投げつけ、それを歪曲し、それとたたかうことに血道を上げてきた。しかし、真の科学であるこの理論は、ついに進歩的な人人の思想を支配するようになり、敵とたたかううえでプロレタリアートと各国人民の手に握られた強力な武器となった。

レーニンは、マルクス主義の理論を適用しそれをさらに発展させることによって、プロレタリアートとその前衛、マルクス・レーニン主義党に、帝国主義とプロレタリア革命の諸条件に関する科学的理論をあたえた。レーニンはマルクス主義を、理論においてだけでなく実践においても発展させた。かれは、カール・マルクスの学説を適用してボリシェビキ革命を指導し、それを勝利に導いた。レーニンの業績はスターリンによってさらに発展させられた。

大十月社会主義革命は、帝国主義と世界資本主義体制全体に最初の壊滅的打撃をあたえた。それは、しだいに深化する資本主義の全般的危機のはじまりを告げた。

ソビエト国家の樹立と強大化は巨大な勝利であり、それはプロレタリアートと各国人民に、目前の敵すなわち、資本主義と帝国主義に打ち勝ち、それを破壊することは可能であるということを示した。ソ連はその生きた証拠であった。

ロシア十月革命によってこうむった打撃に激怒した帝国主義・資本主義連合世界は、プロレタリアの新国家に反対し、マルクス・レーニン主義イデオロギーの全世界への広まりに反対して、政治的、経済的、軍事的闘争をおこなうための道具を強化した。帝国主義者と反動的ブルジョアジー、

ヨーロッパと世界の社会民主主義は、資本家階級のその他の政党と結託して、ソ連にたいする戦争を準備した。かれらはまた、ヒットラー一味やイタリア、日本のファシストとぐるになって、第二次世界大戦を準備した。

しかしながら、この戦争において、社会主義とマルクス・レーニン主義の生命力はよりいっそう明白に確証された。それは勝利したのである。

ファシズムにたいする勝利ののち、世界には社会主義に有利な大変化が起こった。新たな社会主義国家がヨーロッパとアジアに成立した。ソ連を先頭とする社会主義陣営がつくり出された。それは、社会主義とマルクス・レーニン主義にとっては新しい偉大な勝利であり、資本主義と帝国主義にとっては新たな敗北であった。

第二次世界大戦から抜け出た資本主義体制は根底から揺らぎ、その均衡はすっかり覆えっていた。ドイツ、日本、イタリア三国は敗戦国となり、その経済は壊滅状態にあった。それらは、かつて占めていた政治的、軍事的地位を失った。大英帝国やフランスなどその他の帝国主義国は、戦争に勝利はしたものの、経済的、軍事的にきわめて弱体化し、その大国としての役割は急激に低下した。

植民地体制の崩壊にともなって、資本主義の全般的危機はさらに深まった。この崩壊の結果、一連の新しい民族国家が生まれ、依然として植民地、半植民地にとどまった国国でも、帝国主義のくびきに反対する解放運動が成長した。

これらの変化は、世界的範囲における社会主義の勝利にもっとも有利な諸条件をつくり出した。

深刻な経済的、政治的危機と大衆の増大する不満のために、多くの資本主義国家は革命の勃発の瀬戸際にあった。こうしたきわめて重大な危機的情勢のもとでこれらの国国を救ったのは、アメリカ帝国主義であった。

アメリカ合衆国はその他の帝国主義諸国と異なり、戦争を経てより強大になった。それはまったく損害をこうむらなかったばかりか、巨大な富を蓄積し、その経済力、軍事力と科学技術の基盤ははかり知れないほど増大した。各国人民の流した血によって肥え太ったこの帝国主義は、資本主義世界全体の唯一の「リーダーシップ」を握るようになった。

アメリカ帝国主義は、古い資本主義制度を救い、それを脅かしていたあらゆる革命運動と民族解放運動を圧殺するために、また、社会主義陣営を破壊し、ソ連と人民民主主義諸国に資本主義を復活させ、自己の覇権を全世界に確立するために、資本主義世界のあらゆる反動勢力を動員した。

アメリカ帝国主義は世界資本とともに自らの目標を達成するために、巨大な官僚・軍事国家機構、強大な経済的、技術的、金融的潜在力と人的力のすべてを活用した。アメリカ帝国主義は、疲弊したヨーロッパと日本の帝国主義の政治的、経済的、軍事的復興を援助し、崩壊した植民地体制のかわりに搾取と収奪の新たな制度――新植民地主義を打ち立てた。

アメリカ帝国主義は、幾多の宣伝手段や哲学者、経済学者、社会学者、作家等等を起用して、マルクス・レーニン主義と共産主義に敵対し、ソ連およびヨーロッパとアジアのその他の社会主義諸国に敵対する気違いじみたキャンペーンをはじめた。

同時にアメリカ帝国主義は、公然たる侵略政策を実行した。アメリカ国内では、経済、政治、イデオロギー、軍事、科学など生活の全分野で戦争熱と軍事化、反共主義が吹き荒れた。社会主義を征服し、革命的解放運動を鎮圧し、マルクス・レーニン主義理論の大きな影響とたたかい、さらに自己の覇権を世界に打ち立てるために、アメリカ帝国主義は二つの方法で活動に着手した。

第一の方法は、侵略と武力干渉であった。アメリカ帝国主義者は、NATOやSEATOなどの侵略的軍事ブロックを設立し、多くの外国の領土に多数の軍隊を駐留させ、すべての大陸に軍事基地を設置するとともに、強力な艦隊を建設し、それをあらゆる海洋に展開した。革命を粉砕し圧殺するために、かれらはギリシャや朝鮮、ベトナムなどいたるところで軍事干渉をおこなった。

いま一つの方法は、社会主義諸国と共産党・労働者党にたいするイデオロギー攻撃と破壊活動であり、これら諸国家と諸党にブルジョア的変質を引き起こそうとする策動であった。アメリカ帝国主義と世界資本全体は、この方面で強力な宣伝手段とイデオロギー的牽制手段を用いた。

しかしながら、アメリカ帝国主義と、戦後復興をとげつつあった世界資本主義が直面していたのは、ソ連を先頭とする社会主義陣営と世界プロレタリアート、自由を愛する各国人民という強力な敵対者であった。したがってかれらは、この巨大な勢力をきわめて注意深く評価することを余儀なくされた。というのは、この勢力が正しい明確な政策を指針とし、不敗のイデオロギー――それは労働者と革命家、進歩的分子の精神と魂をとらえていたし、また、ますます深くとらえつつあった

――に導かれていたからである。

プロレタリアートの革命運動と各国人民の解放闘争を粉砕し、破壊しようとするアメリカ帝国主義と世界反動の努力にもかかわらず、これらの運動は発展し、なおいっそう強大になりつつあった。スターリンの指導のもとで、ソ連は戦争の痛手をきわめて早期に回復し、経済、科学技術、その他すべての分野で急速に前進しつつあった。各国共産党と反帝民主運動は大衆のあいだでその影響力を拡大しつつあった。人民民主主義諸国では、社会主義の陣地が強化されつつあった。

こうした情勢のもとで、世界帝国主義・資本主義は、社会主義および各国人民の解放運動とたたかううえで、現代修正主義者、なかでもユーゴスラビア修正主義者を真先に起用した。

人民民主主義国と言われたユーゴスラビアがソ連と対立するようになり、公然たるイデオロギー的、政治的衝突にはいったことは、世界資本主義にとっては思いもかけぬ幸運な出来事であった。なぜならそれは、社会主義陣営の内部で一構成国が反乱を起こしたということだからである。この事件は社会主義および革命とたたかううえで世界資本主義を助けるものとなり、かれらはそれを大いに宣伝した。

チトー一味の裏切りは革命と社会主義の事業に重大な損害をあたえはしたが、しかしそれは、ブルジョアジーと反動の願望どおり社会主義陣営と共産主義運動を分裂させることはできなかった。全世界の共産主義者と革命家はこの裏切りを厳しく糾弾し、共産主義に敵対する帝国主義の代理人であるチトー主義がもたらす危険について指摘した。

社会主義と革命、マルクス・レーニン主義に敵対する世界資本主義の戦闘に最大の援助をあたえたのは、スターリンの死後ソ連の権力を握ったフルシチョフ修正主義者であった。フルシチョフ修正主義集団の出現は、帝国主義の戦略にとって、第二次世界大戦後最大の政治的、イデオロギー的勝利であった。

ソ連における反革命の権力奪取は、アメリカ帝国主義者とその他のあらゆる資本主義国を心の底から喜ばせた。それというのも、革命と各国人民の解放の砦であった最強の社会主義国家が、社会主義とマルクス・レーニン主義の道を放棄しつつあり、いずれは、理論上でも実践上でも反革命と資本主義の根拠地に転化するにちがいなかったからである。

ソ連に発生した逆流は、社会主義陣営と国際共産主義運動に分裂を引き起こすに至った。それは、多くの共産党の内部に現代修正主義の蔓延を促し、そのための有利な諸条件をつくり出した主な要因の一つであった。フルシチョフ修正主義の潮流は、全世界における革命と社会主義の事業にゆゆしい損害をもたらした。

真のマルクス・レーニン主義者と革命勢力を一方とし、フルシチョフ修正主義を他方とする苛酷な闘争がはじまった。アルバニア労働党はその当初から、ソ連修正主義とその追随者にたいする非和解的な原則的闘争の旗印を高く掲げ、マルクス・レーニン主義、および社会主義と各国人民の解放の事業を果敢に擁護した。それは、わが党がそれまでユーゴスラビア修正主義と闘争をつづけ、引き続き断固としてたたかっていたのと同様であった。全世界の真のマルクス・レーニン主義者と

革命家も、フルシチョフ一味の裏切りに反対して立ち上がった。各国の革命的プロレタリアートの隊列から新しいマルクス・レーニン主義党が生まれ、ブルジョアジーと帝国主義、現代修正主義に反対する労働者階級と各国人民の闘争を指導する重責を担った。

社会主義を決定的に破壊し、真の国際共産主義運動を絶滅し、各国人民の闘争を粉砕しようとする帝国主義と修正主義の願望は達成されなかった。フルシチョフ修正主義者ははやばやと、自らの反マルクス主義、反革命の本性を露呈した。各国人民は、ソ連が帝国主義超大国に変質してアメリカと世界支配を争奪するようになり、ソ連がアメリカ帝国主義と並んで、革命と社会主義、世界各国人民のいま一つの大敵になったことを目の当りにした。

他方で、資本主義・修正主義世界全体を襲った深刻な経済的、金融的、イデオロギー的、政治的危機は、資本主義体制のいっそうの腐朽、その抑圧と搾取の不変的本質を明白に示したばかりでなく、資本主義制度を美化するあらゆる現代修正主義者のデマゴギーと偽善とを暴露した。

ところが、革命運動が全世界で成長し強固になり、資本主義がますます深く危機のなかにのめり込み、そしてフルシチョフ修正主義やその他の現代修正主義潮流が、プロレタリアートと各国人民の眼前で暴かれつつあったこの時期に、中国修正主義が公然と世界の舞台に登場したのである。中国修正主義は、プロレタリアートと各国人民の革命闘争を圧殺し破壊するうえで、アメリカ帝国主義と国際大ブルジョアジーの親密な同盟者となった。

現在の世界には、きわめて複雑な情勢が生み出されている。今日の国際的舞台では、さまざまな

帝国主義・社会帝国主義勢力が活動しており、それらは、一方では一致して革命と各国人民の自由に反対してたたかい、他方では市場と勢力圏、覇権をめぐって互いに争奪し衝突している。現在では、ソ米間の世界支配のための争奪に加えて、中国社会帝国主義の拡張主義的要求、日本軍国主義の略奪の野望、活動圏を求める西ドイツ帝国主義の策動、そして、かっての植民地に目を転じたヨーロッパ共同市場の激烈な競争が存在している。

これらの要素はすべて、資本主義・修正主義世界の多くの矛盾をさらに激化させている。同時に、革命と各国人民の解放の展望は、チトー修正主義、ソ連修正主義、中国やその他の修正主義の裏切りの結果消滅したりはしなかった。それどころか、一時的な後退ののち、革命はいままさに新たな飛躍をとげようとしている。革命は必ず、歴史が指し示した進路にそって前進し、世界的規模で勝利するであろう。

いかなる者も、帝国主義と資本主義、修正主義をプロレタリアートと各国人民の容赦ない反撃から救うことはできず、それらを深刻な敵対的諸矛盾、果てしない危機と革命から、またその不可避的な没落から救うことはできない。

まさにこうした情勢のために、帝国主義は、自己を待ち受ける破滅から逃れるために、新たな道と針路を見出し、新たな戦略・戦術を築き上げることを余儀なくされているのである。

世界帝国主義の戦略

アメリカ帝国主義とその他の資本主義諸国家は、世界における自己の覇権を維持し、資本主義制度と新植民地主義制度を守り、自らを襲った重大な危機から最小限の損害で抜け出そうと躍起になってきたし、いまもそうしている。かれらは、各国人民とプロレタリアートが解放への革命的願望を実現するのを妨げようと努めてきたし、いまも努めている。こうした狙いを達成するうえで主要な役割を担っているのは、自らの同盟国を政治、経済、軍事の各面で支配しているアメリカ帝国主義である。

革命と各国人民の敵は、世界に起こった変化と社会主義がこうむった敗北のために、過去とはまったく異なった状況が生まれている、という印象をつくり出そうとしている。そこで、アメリカ帝国主義と世界資本主義ブルジョアジー、ソ連社会帝国主義と中国社会帝国主義、現代修正主義と社会民主主義は、互いに鋭い矛盾をもちつつも、ブルジョア・資本主義制度を支え、革命の矛先をそらせ、各国人民にたいする自己の抑圧と搾取を新たな形態と新たな手口で維持するために、混合的「新社会」という生存様式をつくり出そうとしている。

帝国主義と資本主義は、現在ではもはや従来の方法で世界各国人民を搾取することはできず、したがってかれらの制度が脅かされないかぎり、大衆を奴隷の身分につなぎとめるうえで何らかの譲

歩――それはいかなる損害をもたらさないであろう――もやむをえないと認識するに至った。それを実行するためにかれらは、自分たちが確固とした影響力をもつ国家や支配集団にたいして、投資や借款をばらまいたり、武力すなわち局地戦争――かれらが直接参戦するものであれ、一国家をあおり立てて他国とたたかわせるものであれ――に訴えたりしている。局地戦争は、世界資本の罠に陥った国国がいっそう深くその支配下に組み込まれるのを促している。

世界資本に仕える東西のあらゆる「理論家」は、この「新社会」のきまった呼び名を見つけ出そうと努めている。現在かれらは、この「新しい」形態を、退廃した社会にほかならないソ連の資本主義・修正主義社会に見出しており、また、ユーゴスラビアの「自主管理」という資本主義制度や、「第三世界」にある一部のいわゆる社会主義志向型制度のなかに見出している。かれらはまた、この種の資本主義的「新社会」を、現在具体化しつつある中国式変種のなかに求めようとしている。

カーター大統領は、一九七七年五月二二日におこなった綱領的演説（ノートルダム大学でおこなった外交演説）のなかで、アメリカの新政策なるものの概要を提起したが、この演説から明らかなように、現情勢におけるこの「新政策」の全般的、基本的特徴は、プロレタリア革命と各国人民――かれらは巨大世界資本のくびきから、とりわけアメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義からの解放を熱望している――の民族解放戦争にたいして超大国アメリカが戦闘を挑んでいることである。

すでに指摘したように、資本主義世界はたとえ束の間であれ、底なしの泥沼からの活路を求めている。もちろん、アメリカ帝国主義もこの活路を見出そうとあがいており、そのために可能なかぎ

り、ソ連社会帝国主義、NATOの同盟国や中国、またその他の資本主義工業国と共同歩調をとろうと必死になっている。カーターは、西側諸国、東側諸国およびOPEC加盟諸国に呼びかけ、「貧しい国国に効果的な援助をあたえる」ために協力するよう要求している。アメリカ帝国主義はこの協力を、戦争にかわるべき唯一のもの、戦争を阻止する唯一の方法として描き出そうとしている。

アメリカ大統領はその演説のなかで、今日では「われわれは共産主義への過度の恐怖――そのためにわれわれは、同じ恐怖にとらわれた者であればいかなる独裁者をも受け入れた――を抱いてはいない」とのべている。

もちろん、このカーターという、現代でもっとも血なまぐさい帝国主義の忠実な代理人が、「共産主義への恐怖を抱いてはいない」というのは、ユーゴスラビアやフルシチョフ、中国の――ただ共産主義の仮面をつけただけの――共産主義を意味しているのであって、資本主義ブルジョアジーはけっして真の共産主義の恐怖からは解放されておらず、今後もそうなることはないだろう。反対に帝国主義と社会帝国主義は、つねに真の共産主義を恐れてきたし、ますます恐れるようになるであろう。帝国主義や修正主義者が互いに手を組み、計画の調整をはかり、抑圧と搾取にもとづく自らの支配を延命するうえでもっともふさわしい形態を見出そうとしているのは、こうした恐怖と不安に駆られているからである。

こうした深刻な経済的、政治的、軍事的危機のもとで、アメリカの帝国主義者は、ソ連とかつての人民民主主義諸国、および中国における現代修正主義の裏切りによって得られた帝国主義の成果

を打ち固め、それらを、プロレタリアートおよび各国人民の革命と革命的解放闘争にたいする障害物として利用しようとしている。

アメリカ大統領はまた、過去において資本家と帝国主義者が共産主義への恐怖から、ムッソリーニやヒットラー、裕仁、フランコらのようなファッショ的独裁者を擁護し、かれらを支持したことを認めている。これら各国におけるファッショ的独裁は、レーニンとスターリンの時代のソ連に反対しプロレタリア世界革命に反対するための、資本主義ブルジョアジーと世界帝国主義のとってのきの武器であった。

アメリカ大統領は確信をもって、共産主義(修正主義と読め)諸国家はその様相をかえたと言明しているが、それは誤りではない。かれは、「この制度は永久に不変ではありえない」とのべている。かれが、修正主義的裏切りを真の社会主義制度や共産主義と混同しているのは言うまでもない。アメリカ帝国主義は、フルシチョフ式のソビエト制度を世界資本主義の成果と見なしており、そこから、ソ連との紛争の脅威は――両者の矛盾と覇権争奪は消え去りはしないが――薄れてきたという結論を引き出している。

カーターによれば、アメリカ政府は現状維持のために全力を挙げるということだが、それは言いかえれば、こういうことである。つまり、アメリカ帝国主義とその他の帝国主義諸国はいずれも、世界での自己の地位を保持強化しようと努めるであろうが、他方かれらは、友好国や同盟国とのあいだに存在しうる不一致――また事実、それは存在しているのだが――については、互いにこうし

た現状の枠内で、それを解決できるよう望んでいるのである。

結論としてカーターは、「アメリカの政策は、地球的、地域的、双務的な利害関係にもとづく新しいより広範なモザイクに立脚しなければならない」とのべている。かれは、この地球的、地域的、双務的な利害関係にもとづく新しいより広範な「モザイク」について分析したのち、次のように断言している。「アメリカ合衆国は、強力な機構たるべきNATOにたいするすべての誓約を遵守するであろう。なぜなら、アメリカ合衆国と大工業民主主義国との同盟は、われわれが共通の価値を擁護しているがゆえに不可欠だからである。したがって、われわれはみなよりよい生活を求めて努力しなければならない」。

ここから明らかなように、アメリカもまた、「新しい現実」、「新しい世界」をつくり出そうと努力するうえで、ソ連現代修正主義者と中国修正主義者、「大工業民主主義国」と結託している。つまりアメリカは、デマゴギーを通じて自らの政策を新たな情勢に適応させようとしているのである。アメリカは、現状を維持し、ソ連覇権主義の勢いをおしとどめ、ソ連社会帝国主義を弱体化させ、中国を自己の側に獲得しますます深く帝国主義陣営に組み込むために、また、プロレタリアートと各国人民の革命闘争を鎮圧するために、やむなくいくらかの欺瞞的な政治的譲歩をおこなっている。しかしアメリカは、軍事問題に関して譲歩をおこなっているわけではなく、諸国と人民を束縛と支配のもとに置き、また、他の諸国の有する富を自分自身と工業諸国の利益のために搾取する政策に関しても、譲歩をおこなっているわけではない。

これが、アメリカの「新政策」である。われわれにとって明らかなように、この政策は何ら新しい政策ではなく、各国人民とその富を過酷に搾取し、革命と民族解放運動を弾圧する帝国主義、新植民地主義の古手の略奪的奴隷化政策である。いまアメリカ帝国主義は、あいもかわらぬこの古くさい政策にさも目新しそうなペンキの上塗りを施しているが、それは、反革命分子を――権力を握っている者であれ、そうでない者であれ――武装させ、かれらを共産主義とたたかわせるためである。というのは、共産主義こそ、各国人民とプロレタリアートを解放戦争と革命に立ち上がらせるからである。

欺瞞的な資本主義的・修正主義的理論である中国の「三つの世界」論の主張とは逆に、アメリカ帝国主義は依然として攻勢にある。アメリカ帝国主義は、自分にとって有利に、また自分自身の力を脅かすソ連社会帝国主義あるいはそうした恐れのあるいかなる者にとっても不利なように、旧来の同盟関係を保持し新しい同盟関係をつくり出そうと躍起になっている。かれらはとりわけ、侵略的政治・軍事機構であったしいまなおそうであるNATOを強化しようと努めている。

アメリカはその戦略的策動のすべてにおいて、ソ連との関係を一定程度以上には悪化させておらず、ソ連とのSALT（戦略兵器制限交渉）を継続している。もっとも、カーターは核爆弾の製造をつづけると宣言してはいるが、それでもなお、アメリカとソ連のあいだには明白な現状維持の傾向が存在しているのである。

もちろん、アメリカとNATOはソ連とのあいだでこの現状を維持しようと懸命になってはいる

が、同時にソ連との矛盾をもっている。しかしこの矛盾は、ヨーロッパにおける戦争がさし迫っているという中国の決まり文句を正当化するほどには未だ達していない。

　現在アメリカ帝国主義は、中国が軍事的、経済的に強大になるよう支援している。中国にはアメリカ資本が流入し、アメリカの主要銀行だけでなくアメリカの国家までもが、借款によって莫大な投資をおこなっている。

　アメリカは自分の持ち札として中国を大いに利用しているが、賭けには慎重を期している。同時にアメリカは、日本の札をも引き続いて用いている。アメリカは日本とのあいだで波風が立たないよう望み、両国間の援助が相互的なものとなり、日本がアメリカの狙いにそって強大化し、極東と太平洋、東南アジアにおけるイスラエルのようになることを願望しており、さらには、もし必要が生じその時機が到来すれば、日本が結局中国とも対決する——なぜそうならないと言えようか——よう願望しているのである。

　中国が日本との友好協力条約に調印したのは、こうした状況においてであった。しかしこの条約は多くの角度からみて、世界の命運にとってきわめて危険で悪らつなものになっており、それは必ず将来現実化するであろう。なぜならば、日中間には今後密接な経済的、軍事的結託が確立され、それは、とりわけアジア、オーストラリアおよび全太平洋地域でそれぞれ独自の、あるいは共同の勢力圏をつくり出すのを目標とするようになるからである。もちろんこの結託は、アメリカとの同盟に守られて、またソ連社会帝国主義との戦争の宣伝のもとに築きはじめられるであろう。中日同

盟の主な目的は、ソ連を封じ込め弱体化させることであり、シベリアやモンゴルなどいたるところからソ連を追放し、アジアとオセアニア全域、すべてのASEAN加盟国からソ連の影響力を排除することである。

これはアメリカ帝国主義の戦略であるが、同時に中国帝国主義と日本軍国主義の戦略でもある。アメリカは、中国と日本を援助し自己の指揮下に置き、日中両国との同盟を強め、両者をあおり立ててソ連とたたかわせようと努めるであろう。しかしまた、中国と日本の追求する悪らつで偽善的、無節操な、帝国建設を夢見る政策、帝国主義的、軍国主義的精神に貫かれた政策がいつかはその向きをかえ、かれらの復興を援助した超大国に立ち向かうという可能性も存在している。それは、過去においてドイツが、ヒットラーの時代に恐るべきファッショ強国になったとき、アメリカの同盟諸国を攻撃し、ついにはアメリカ自身との戦争にまでいきついたのと同様である。

アメリカは、中国の力と、台頭しつつある日本の力との均衡を保つよう努めるであろう。しかし、いつかはこの均衡はアメリカの手を離れ、帝国主義的、軍国主義的中日同盟は、ソ連にたいしてのみならずアメリカ自身にとっても脅威となることだろう。なぜなら、中国と日本というアジアの二大帝国主義国の関心は、アジアとその他いたるところを支配し、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義を弱めるという目的に集約されるからである。

アメリカはNATOの中で支配的な地位を占め、大きな軍事的、政治的、経済的影響力を有している。しかしながらNATO内部では、その統一性にもかかわらず、加盟諸国はそれぞれ自国の勢

力を追求し、そのために分岐がはじまっており、一部の国が他国より優勢に立つという事態が起こっている。

この機構のなかで年年強大になっているのは、ドイツ連邦共和国である。その経済力と政治力、およびその武器輸出は、ヨーロッパ共同市場の枠をこえて広がっている。今日では、西ドイツの政策は、自分自身の勢力圏をつくり出そうとする全体主義的、ファッショ的報復主義の特徴を備えつつあると言える。当然にもこのことは、NATOにおけるアメリカの本来の主要な同盟国である英仏両国にとって愉快なことではない。

西ドイツは、大軍事力をもった強力な単一国家をつくり出すために、二つのドイツ国家の再統一を追求している。それは、将来ソ連社会帝国主義を脅かし、全面的な戦火が発生した場合には日本、中国と同盟し、全世界にとっての危険となるであろう。西ドイツは、とくに中国ときわめて密接な関係を発展させている。西ドイツは、中国との貿易取引額において、ヨーロッパ諸国のなかで首位を占めている。西ドイツは、中国にたいする借款、技術、近代兵器のヨーロッパ最大最強の供給国である。

イギリスとフランスも中国にきわめて大きな関心を抱いており、中国との関係を発展させている。しかし中国は、ボンにより大きな関心をよせている。イギリスとフランスがこのことを憂慮しているのは、ドイツ連邦共和国がさらに強大になり、NATOとヨーロッパ共同市場の他の同盟諸国にたいするよりいっそうの優位を占めるかも知れないからである。このことからわれわれが見て

とることができるのは、英仏両国政府は中国との友好関係について語りはするが、同時にソ連との経済関係と友好関係のいっそうの発展を望んでいることも忘れずに強調しているということである。ボンもソ連との関係の発展についてのべてはいるが、ソ連の主要な敵を自称する中国との関係を急速に発展させているのである。シュトラウスを中心とするファッショ集団とヒットラー張りの将軍連中、ボンの報復主義の実力者たちは、自らを中国のもっとも親密な同盟者として宣伝している。そのために中国は、連邦ドイツとフランス、イギリス両国とを同列には見ていないのである。

ソ連社会帝国主義の戦略

ソ連の国家権力を握ったフルシチョフ一味は、プロレタリアート独裁を破壊し、資本主義を復活させ、ソ連を帝国主義超大国に変質させることをかれらの主な目的とした。

フルシチョフとかれを取り巻く集団は、スターリンの死後、自らの地位を固めたのち、真先にマルクス・レーニン主義イデオロギーに攻撃をしかけるとともに、スターリンを攻撃し、世界資本主義ブルジョアジーのうす汚ない宣伝機関が長いあいだにでっち上げてきたありとあらゆる中傷をスターリンに浴びせることによって、レーニン主義の権威を汚す闘争を開始した。こうしてフルシチョフらは、マルクス・レーニン主義イデオロギーとソ連における革命に反対する資本の願望の代弁者、執行者となった。かれらはソ連の社会主義的構造全体を破壊する系統的活動に着手し、ソビエ

ト制度を自由主義化し、プロレタリアート独裁の国家をブルジョア国家にかえ、社会主義の経済と文化を資本主義の経済と文化に変質させるために策動した。

修正主義国に、さらには社会帝国主義国に変質したソ連は、自分自身の戦略・戦術を築き上げた。フルシチョフ一味は、レーニン主義の用語によって自己の活動を偽装することができるような政策をつくり上げた。かれらはその修正主義的イデオロギーを綿密に仕上げたが、それは、「新時代のマルクス・レーニン主義」と称してこのイデオロギーをプロレタリアートと各国人民におしつけるという方法によってであった。それは、かれらが国内外の共産主義者に「ソ連における革命は、世界発展の新たな政治的、イデオロギー的、経済的諸条件のもとで継続されている」と語るためであった。しかもかれらは、ソ連では革命が継続されているというばかりか、この国が党も国家も死滅する階級のない共産主義社会の建設の段階にはいっているなどと称したのである。

党は、労働者階級の前衛、国家と社会の唯一の政治的指導勢力としての特質を奪われ、党機関員とKGB(国家保安委員会)に支配される党に変質した。ソ連修正主義者は自分たちの党を「全人民の党」と呼び、それを、もはや労働者階級の党ではありえずソ連の新しいブルジョアジーの党にすぎないところにまで引き下げてしまった。

他方でソ連修正主義者は、国際共産主義運動の総路線としてフルシチョフ式の平和共存を説くとともに、「アメリカ帝国主義との平和競争」がソ連とその他の諸国における社会主義の勝利への道であると宣言した。かれらはまた、プロレタリア革命は新段階にはいっており、それは暴力による

プロレタリアートの国家権力奪取以外の方法によっても勝利しうるなどと主張した。かれらに従えば、平和的、議会的、かつ民主的な方法によって、また改良を通じて国家権力を握ることができるというわけである。

フルシチョフ修正主義者はレーニンとボリシェビキ党の名声に投機し、かれらのこうした反マルクス主義路線と全分野におけるマルクス・レーニン主義の修正を、世界のあらゆる共産党におしつけようと躍起になった。かれらは、世界各国の共産党・労働者党がこの修正主義路線を受け入れ、反革命の党、ブルジョア独裁の盲目の手先に変質し、資本主義に奉仕することを望んだ。

しかしながらこのことは、かれらの願望どおり完全には達成されなかった。それはまず第一に、アルバニア労働党が揺るぎなくマルクス・レーニン主義を一貫して堅持し、その純潔を守りつづけたからであった。この時期にはほかにも、自分自身の動機から、つまり純粋にマルクス・レーニン主義的な動機からではなく、しかも動揺しつつではあったが、フルシチョフの方向を完全には受け入れなかったいくつかの党も存在した。また、その他の党の一部ははじめはこの方向を受け入れるのに難色を示したが、のちにはそれに屈服した。この時期、中国共産党もフルシチョフ一味に反対したが、それは、事実が示しているように、アルバニア労働党がフルシチョフ修正主義との闘争に身を投げうったのとはまったく正反対の狙いと目的から出発したものであった。

また、フルシチョフ一味は権力の座につくと同時に、かれらの対外政策の綱領を準備した。アメリカ帝国主義と同様、ソ連社会帝国主義もその対外政策の基礎を、軍備拡張競争、圧迫と恐喝、そ

して軍事的、経済的、イデオロギー的侵略による拡張と覇権主義に置いている。この政策の狙いは、全世界に社会帝国主義の支配を打ち立てることにある。

ソ連は、コメコン諸国において典型的な新植民地主義政策を実行している。これら諸国の経済は、ソ連経済の付属物にかえられている。ワルシャワ条約機構は、ソ連がこれらの国国を自己のくびきにつなぎとめるのに奉仕し、ソ連がこれら諸国に大量の軍隊――それは占領軍と何らかわりはない――を駐留させるのを可能にしている。ワルシャワ条約は、ソ連社会帝国主義の圧迫と恐喝、武力干渉の政策に奉仕する侵略的軍事協定である。「社会主義共同体」や「社会主義的分業」、「制限主権」、「社会主義的経済統合」等等についての修正主義的、帝国主義的「理論」もまた、この新植民地主義政策に奉仕している。

しかしソ連社会帝国主義は、自らの衛星国にたいして行使している支配に満足しているわけではない。その他の帝国主義国と同様ソ連は、新たな市場と勢力圏を求め、各国に資本を投下し、原料資源を独占し、アフリカ、アジア、ラテンアメリカその他いたるところで自己の新植民地主義を拡大しようと躍起になっている。

ソ連社会帝国主義は、自己の拡張と覇権主義をおしすすめる目的にそった一連の経済的、政治的、イデオロギー的活動を包括するまとまった戦略計画をもっている。

それと同時にソ連修正主義者は、アメリカ帝国主義者が用いるのと寸分たがわぬ手段と手口で、各国人民の革命と解放戦争を破壊するために策動している。ソ連社会帝国主義者はその手先である

修正主義党を通じて働きかけるのが通例であるが、状況と必要によっては、低開発諸国の支配集団を買収し抱きこみ、これらの諸国に足場を得るために隷属のヒモのついた「援助」をあたえたり、さまざまな派閥のあいだで一方あるいは他方の側にくみして相互の紛争をあおり立てたり、あるいは親ソ政権を権力につけるために陰謀とクーデターを組織したりし、果てはかれらがキューバと共謀してアンゴラ、エチオピアなどあらゆるところでおこなったように、直接の軍事干渉にまでも訴えたりするのである。

ソ連社会帝国主義者は、革命勢力と革命、社会主義建設にたいする援助と支持を隠れ蓑にして、干渉と覇権主義的、新植民地主義的行為をおこなっている。現実には、かれらは反革命を助けているのである。

修正主義ソ連は、自らがレーニン主義の国際主義的政策をおしすすめている国であるかのように見せかけることによって、また、新しい民族国家や低開発国などの同盟者、友人、擁護者と自称することによって、自己の拡張主義的、新植民地主義的計画を達成する道を切り開こうとしている。ソ連修正主義者の説教によれば、これらの国国は、ソ連やいわゆる社会主義共同体——かれらはそれが「今日の世界発展の主な原動力」であると叫び立てている——と結びつくことによって、自由と独立の道、さらには社会主義の道をさえ成功裏に前進することができるというわけである。かれらが「非資本主義的発展の道」、「社会主義をめざす」国国などという理論をねつ造したのも、そのためである。

かれら自身の主張にもかかわらず、ソ連社会帝国主義者の戦略は、社会主義、レーニン主義とは縁もゆかりもないものである。それは、自己の覇権と支配をすべての国とすべての大陸に拡大しようとする強盗的帝国主義国家の戦略である。

修正主義ソ連が追求しているこうした覇権主義的、新植民地主義的政策は、アメリカが追求し、中国もまた遂行しはじめている政策と衝突しており、また衝突せざるをえない。それは、世界の再分割をめぐる闘争における帝国主義者間の利害の衝突である。まさにこうした利害と闘争のために、一方の超大国は他方の超大国と抗争し、双方のいずれもが自己の手中にあるあらゆる勢力と手段を用いて一国あるいは複数の敵手の弱体化をはかっているのである。とはいえこれらの衝突は、まだ武力紛争を引き起こすほどには激化していない。

中国社会帝国主義の戦略

諸事件と事実がかつてなく明白に示しているように、中国はますます修正主義と資本主義、帝国主義のなかへのめり込みつつある。この道にそって、中国は国内面および国際面で一連の戦略目標を達成するために活動している。

国内面では、中国社会帝国主義は、解放後とられてきたであろう社会主義的性格をもつ措置をすべて廃止し、国内の土台および上部構造において資本主義制度を打ち立てるとともに、工業、農

業、国防、科学のいわゆる「四つの近代化」を実行することによって今世紀末までに中国を資本主義大国にすることを、自らの課題としている。

中国社会帝国主義は、中国人民にたいする中国の新旧資本主義ブルジョアジーの支配を保証する国内機構をつくり出そうと必死になっている。中国修正主義はこの機構とこの支配を、ムチと弾圧によるファッショ的方法を用いて確立しようとしている。かれらはまた、軍隊と一般人民層の団結をつくり出し、後者がこの抑圧の軍隊に奉仕するように策動している。

中国指導部が最大の関心をよせ、また中国で実施されるかも知れない形態と手法は、チトー一味の形態と手法であり、とりわけユーゴスラビア「自主管理」の制度である。この制度を学び、ユーゴスラビアの資本主義的「社会主義」の経験全体を学びとるという任務をもって、中国のあらゆる部門・分野の多数の委員会や代表団が現地に派遣された。

この制度と経験を中国で実践に移す端緒はすでに開かれている。しかしながら他方で、中国修正主義指導部は、チトーの「自主管理」の挫折を無視するわけにはいかず、ユーゴスラビアとはまったく異なる自国の諸条件を考慮しないわけにはいかない。かれらはこのほかにも、幾多の資本主義的な形態と手法――かれらによれば、アメリカや西ドイツ、日本その他のブルジョア諸国でその「効率性」は実証ずみだというわけである――を借用する必要があると考えている。中国で築かれ発展しつつある資本主義制度は、雑多な修正主義的、資本主義的形態・手法と、中国の伝統的な形態・手法との混合物になるように思われる。

資本主義大国になり上がるうえで、中国は平和の時期を必要としている。中国共産党十一全大会で打ち出された「大治」というスローガンは、この必要性と結びついている。そうした「治」を保証するには、一方ではファッショ的独裁の型の資本主義的秩序が必要とされ、他方では抗争する諸派閥――それはつねに中国の党と国家の内部に存在してきた――のあいだの和睦と妥協が必ず維持されなければならない。この秩序と平和がどの程度まで確保されるかは、時が教えるであろう。

中国を超大国にかえる政策にそって、中国指導部は、アメリカ帝国主義ならびにアメリカの同盟国である発達した資本主義諸国から、経済的、軍事的利益を得ようと狙っている。

中国が追求しているこの政策は、資本主義世界、とりわけアメリカ帝国主義の強い関心を呼び起こした。アメリカ帝国主義は、資本主義と帝国主義を維持し新植民地主義を強化し、革命の弾圧と社会主義の圧殺をすすめ、自己の敵手ソ連を弱めるというかれらの戦略にとって、中国のこうした政策が大きな支えとなることを見てとっているのである。

カーターが言明しているように、アメリカ帝国主義は「中国と密接に協力する」ことを望んでいる。かれはまた、「われわれは米中関係をわれわれの世界政策の中心的要素の一つと見なしており、中国を平和のカギを握る勢力の一つと見なしている」とのべている。中国は、アメリカとの可能なかぎり密接な平和共存を望んでいる。

こうした見解と立場から、中国は、国家としての存立基盤をアメリカ帝国主義に置くブルジョア資本主義諸国家と関係を結んでいる。中国の帝国主義への転化は、それに先立つソ連や他の国国の

変質と同様、日一日と明白な現実となりつつある。このことは、帝国主義者自身によっても認められている。かれらはこの「新たな現実」に喜び、「一九五〇年代にアメリカとソ連、中国を隔てていたイデオロギー上の衝突は、今日では薄れているように思われる。そして、超大国間の協力の必要性はますます増大している。……」とのべている。

カーター大統領をはじめとするアメリカ帝国主義者は、中国の経済と軍隊を強化するために援助をあたえる用意をととのえているが、当然のことながら、それは自分自身の利益になる範囲においてである。かれらは、中国の戦略がアメリカ帝国主義の覇権主義的目的にとって重要な助けとなることから、中国修正主義指導部を激励しているのである。

中国は、修正主義ソ連に反対するアメリカの見解と行動を賞賛している。なぜなら中国は、この見解と行動がいわば革命に有利であり、世界でもっとも危険な大国であるソ連社会帝国主義を弱めるのに役立っていることを示したいからである。アメリカ帝国主義の側もまた、修正主義ソ連に反対する中国の見解と行動を賞賛しているが、それは、カーターのもっとも親密な協力者の一人がのべたように、「中ソ紛争はより多元的な世界構造を生み出す」からである。アメリカ帝国主義はそうした世界構造をむしろ好ましいものと考えており、しかも、「世界はいかに編成されるべきか」——すなわち言いかえれば、アメリカがもっと容易に世界を支配するには、いかにして他の国国をけしかけ、互いに争わせるべきか——についてのかれらの考えに合致するものと見なしている。

中国は、そのプラグマチックで打算的な政策によって、アメリカ帝国主義の同盟国となり、ソ連

社会帝国主義が主な敵、主な脅威であると断言するまでになった。しかし、中国が将来、ソ連社会帝国主義を弱体化させるという目標が達成されたと考え、また、アメリカ帝国主義のほうがより強大になりつつあると自らの論理で判断するとしたら、そのときには中国は——一方の帝国主義とたたかうために他方の帝国主義に頼るというわけだから——他方の側に立ってたたかいつづけるかも知れない。その場合には、アメリカ帝国主義のほうがより危険になりうるかも知れないし、またそうなれば、中国は自動的にそれまでの立場を転換するにちがいない。

それは現実に起こりうる可能性である。中国修正主義者は、一九五六年の八全大会ではアメリカ帝国主義が主な脅威であると考えた。その後、一九六九年四月の九全大会においてかれらは、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義という両超大国が主な危険であると宣言した。そしてその後、一九七三年八月に開かれた十全大会以降、および十一全大会において、かれらはソ連社会帝国主義のみが主要な敵であると宣言した。このような動揺、このようにプラグマチックな政策のもとでは、十二全大会あるいは十三全大会がソ連社会帝国主義を支持するようになり、アメリカ帝国主義を主要な敵と宣言することもありえないことではない。そしてこのようなことは、中国自身が資本主義世界大国になるという目標を達成するまではつづくであろう。それが達成されたならば、中国は国際的舞台でどのような役割を果たすだろうか。それはけっして革命的なものではなく、反動的かつ反革命的なものになるであろう。

中国の対外政策の重要な一面は、日本との同盟である。すでに指摘したように、最近中日条約で

打ち固められた両国のこの人種主義的同盟の意図は、アジアとＡＳＥＡＮ諸国、オセアニアを共同で支配するための中日両国の戦略計画を実現することにある。中国修正主義者が中日条約および日本との友好関係を必要としているのは、そのことによって日本軍国主義者と結託し、ソ連社会帝国主義を脅かすことができるからであり、あわよくばアジアにおけるソ連とその影響力を一掃することができるかも知れないからである。

中国はまた、自分自身の大国的野望を実現するうえで、日本から借款を受け、設備や科学技術、兵器を輸入するために日本との結びつきを利用しようとしている。中国は日本との全面的な経済協力に大きな重要性を付与しており、そのために対日貿易額は中国の対外貿易総額の半分以上を占めている。

自らの拡張主義的政策を実行するために、社会帝国主義中国は、アジアにおける勢力を可能なかぎり拡大しようと策動している。現在中国は、インドにたいしてはまったく影響力をもっていない。そこでは、米ソ両国がそれぞれ独自のあるいは共同の権益を――将来は状況の変化や新たな勢力配置が生まれるかも知れないという枠組のなかで――有している。いま、中国はインドとの外交関係の一定の改善を願っている。しかしながらインドは、チベットにたいして大きな要求をもっており、また、中国がパキスタンにたいしてもっているわずかな影響力をも一掃しようと努めるであろう。なぜならパキスタンは、イラン、アフガニスタンに隣接する戦略的要衝に位置しているからである。アメリカ帝国主義が優勢を占める中東の大産油地帯をめぐる争奪がはじまっている。中

国がこの地域に浸透するのはきわめて困難である。中国は自らが大きな勢力をもつようになるまでは、アラブ諸国人民の利益に敵対し、アメリカの権益を擁護する政策をとりつづけるであろう。同時に中国は、アメリカとヨーロッパの帝国主義にとって枢要なこの地域におけるソ連の政治的、経済的、軍事的浸透を防ぐために、アメリカがイランやサウジアラビアなどの国国と共謀し、強固な防壁を築き上げようとするのを助けるであろう。

中国社会帝国主義は、自己の目的を達成するうえで、西ヨーロッパに特別の注意をよせている。かれらの目標は、西ヨーロッパをソ連社会帝国主義に対抗させることである。そのためにかれらは、NATOや、欧米諸国の同盟関係、ならびにヨーロッパ共同市場と「統合ヨーロッパ」をあらゆる手段で支持しているのである。

社会帝国主義中国は、その戦略計画の一環として、かれらが「第三世界」と名づけた国国にたいする影響力と覇権の拡大を狙っている。「第三世界」論は中国にとって大きな重要性をもつものである。毛沢東がこの「理論」を唱えたのは、かれが空想家であったからではなく、中国こそが世界を支配すべきだとする明確な覇権主義的目的をもっていたからである。毛沢東の後継者たちは、かれ自身や周恩来と同じこの戦略に従っているのである。

中国の戦略的野望はまた、チトー主義が提唱するいわゆる「非同盟世界」なるものにもおよんでいる。これら二つの「世界」には何のちがいもなく、両者は互いに重なりあっている。どの国家が「第三世界」に属し、それは何によって「非同盟諸国」と区別されるのか、また、どの国家が「非

同盟」に属し、それは何によって「第三世界」諸国と区別されるのかを見分けることは困難である。つまり、その名称が何であれ、それらは同じ国家群のことなのである。

このこともまた、イデオロギー、政治、経済、軍事などあらゆる分野において、中国指導部がチトーおよびユーゴスラビアとのあいだで、非常に緊密な国家関係や党関係を維持することをことさら重視する理由の一つとなっている。

中国修正主義者とユーゴスラビア修正主義者の見解の共通性は、かれらがこの親密な友好関係をそれぞれ独自の目的に利用することを妨げるものではない。

チトーは、かれ自身が、あるいはユーゴスラビアの党がマルクス・レーニン主義に忠実であるとか、「自主管理」が社会主義的性格のものであるとか、あるいは、チトー一味のすすめている内外政策が「マルクス・レーニン主義」であるなどといった華国鋒の言明を利用しようと努めている。それは、チトーの反マルクス主義への逸脱やその排外主義、親帝国主義の反動的政策、またかれの修正主義にたいしてなされてきた暴露が、スターリン主義者による中傷にほかならないということを示すためである。さらにかれは、これを足がかりにして、自分自身の国際的な名声を高めようとしている。

華国鋒の側は、ユーゴスラビアとの関係を、中国のヨーロッパへのいわば通路に利用している。中国修正主義者はまた、「非同盟」の旗手を自称するチトー一味との友好関係を、「非同盟諸国」に浸透し、そこに自己の支配を確立するための重要な媒介手段として利用しようとしている。ユーゴ

スラビア訪問中に華国鋒が「非同盟」運動を天までもち上げ、「帝国主義、植民地主義、覇権主義に反対する世界各国人民の斗争のきわめて重要な勢力」であると賞賛したのは、陰険な動機からであった。かれが「非同盟」運動とチトーをほめそやしたのは、この運動の支配権を握り、北京をその中心にすえようと夢想しているからなのである。

中国社会帝国主義の政策は、あらゆる面において帝国主義大国の政策であり、反革命的、戦争挑発的政策である。したがって、各国人民は必ずそれを憎み、それに反対し、ますます激烈にそれとたたかうであろう。

※　※　※

以上にのべてきたそれぞれの帝国主義超大国は、今後も帝国主義、戦争挑発者でありつづけるであろう。そしてかれらは、たとえきょうにではなくともあすには、世界を大規模な核戦争に引きずり込むであろう。

アメリカ帝国主義は他国人民の経済にますます深く食い込もうと策動しており、他方、触手を伸ばしはじめたばかりのソ連社会帝国主義は、自国の新植民地主義的、帝国主義的地位を築き上げ強固にするため、世界各国にその毒牙を立てようと努めている。さらにまた「統合ヨーロッパ」のように、NATOを通じてアメリカと結びつきつつ、一つに集約されない各国独自の帝国主義的傾向

を内包しているものもある。また一方では、中国も超大国になり上がろうと懸命になって舞台に加わっており、さらに日本軍国主義も台頭している。これら両帝国主義は、他の帝国主義勢力に対抗する帝国主義的一大勢力を形成するために互いに同盟を結んでいる。このような情勢のもとで、世界戦争の重大な脅威が高まっている。現存する諸同盟関係は将来は再編へ向かうであろうが、それはその方向がかわるという意味においてであり、その内容がかわるということではない。

国連や、帝国主義者が組織したさまざまな国際会議において、軍縮についての美辞麗句が乱発されているが、それはデマゴギーである。かれらは、戦略兵器の独占状態をつくり出しそれを保持するとともに、大がかりな武器取引をおこなっているが、それは、諸民族の平和と安全を保障するためではなく、超過利潤をしぼり出し、革命と各国人民を弾圧し、侵略戦争の火ぶたを切るためである。スターリンは、次のようにのべている。

「ブルジョア国家はきちがいのように軍備をととのえ、装備替えしている。なんのために。もちろん会談するためではなく、戦争するためである。そして戦争が帝国主義国には必要なのである。なぜなら、それは世界の再分割のための、すなわち販売市場、原料産地、資本の投下範囲の再分割のための、唯一の手段だからである」*。

＊『ソ同盟共産党(ボ)第十六回大会にたいする中央委員会の政治報告』――邦訳『スターリン全集』第一

二巻二七三ページ

超大国は、かれらを戦争へと駆り立てている争奪のなかで、「第三世界」や「非同盟諸国」、「発展途上国」のさまざまな国家同士をあおり立て、必ず多くの局地戦争を引き起こすであろう。

カーター大統領は、戦争は世界のただ二つの地点、すなわち中東とアフリカでのみ起こりうるという見解をのべたことがある。その理由は明らかである。というのは、現在アメリカが世界で最大の利害をもっているのが、まさにこの両地域にほかならないからである。中東には石油があり、豊かなアフリカ大陸では、超大国間での市場と勢力圏の分割をめぐって、新植民地主義の重要な経済的、戦略的利害が衝突を引き起こしている。超大国は、自己の陣地を維持強化し、新たな陣地を獲得しようとしている。

しかしながら、中東とアフリカ以外にも、たとえば東南アジアのように、超大国の利害が衝突している地域が存在する。アメリカとソ連、それに中国を加えた三者は、それぞれの勢力圏を確立し市場を分割しようと争っている。このこともまた紛争を引き起こしており、それはしばしば局地戦争に転化している。この紛争はけっして各国人民の解放を意図したものではなく、現地国の資本を代表する支配集団——それらはあるときには一方の超大国につき、別のときには他方の超大国につく——を権力の座につけるかあるいは交替させることを目的としたものである。ソ連社会帝国主義とアメリカ帝国主義は二匹の怪物であり、各国人民はそれぞれに信頼をよせてはいない。同様に各国人

民は、中国をも信頼してはいない。

超大国が経済的、イデオロギー的、外交的手段によって自己の略奪的関心を達成できなかったときには、また、諸矛盾が激化して極度に先鋭なものとなり、協定や「改良」によってはこれらの矛盾を解決することができないことが明らかになったときには、超大国間の戦争がはじまる。したがって、この戦争のなかで血を流すことになる各国人民は、けっして油断することなく、強盗的帝国主義間戦争を阻止し、それが全世界的規模に拡大するのを阻止するために全力を挙げて奮闘しなければならず、また、もしそうすることができなかった場合には、この戦争を解放戦争に転化し、勝利をたたかいとらねばならない。

帝国主義、社会帝国主義の世界戦略におけるチトー主義とその他の修正主義潮流の役割

帝国主義と社会帝国主義、世界資本主義と反動は、革命と社会主義、各国人民に敵対する苛酷な闘争をすすめるうえで、現代修正主義のあらゆる潮流の支持を受けている。これらの背教者、裏切り者は、社会的・民族的束縛を打ち破るプロレタリアートの奮闘と各国人民の闘争を内部から掘り崩し、分裂させ、破壊することによって、帝国主義がその世界戦略を実行するのを助けている。現代修正主義者は、マルクス・レーニン主義を汚し、歪曲し、人民の精神を混乱させてかれらを革命

闘争から遠ざけるとともに、資本を助け、その抑圧と搾取の制度を維持・永久化することを自らの務めとしている。

すでにのべたソ連や中国の修正主義者と並んで、**ユーゴスラビアのチトー修正主義者は、この大がかりで危険な反革命的たくらみにおいて、第一級の重要性をもつ役割を演じている。**

チトー主義は資本の古株の代理人であり、帝国主義ブルジョアジーが社会主義、解放運動とのたたかいをすすめるための格好の武器である。

ユーゴスラビアの諸民族人民は、ナチス、ファシスト占領者に反対し、自由と民主主義、社会主義を求めて献身的にたたかった。かれらは祖国の解放に成功したが、引き続き社会主義への道にそって革命を継続するのを妨げられた。長年にわたってイギリス情報部から秘密工作を受けていたチトーを頭とするユーゴスラビア修正主義指導部は、戦争中は第三インタナショナルの党の特質を保持しているかのようにふるまっていたが、実際には異なった目的をもっていた。その目的は、マルクス・レーニン主義に反し、ユーゴスラビアにおける真の社会主義社会の建設を求めるユーゴスラビア人民の熱望に反するものであった。

権力を握ったユーゴスラビア共産党には、逸脱者的性格の幾多の誤りが内在していた。その民族排外主義的特徴は早くも第二次世界大戦中にあらわれていたが、それは戦後顕著なものとなった。その特徴は、マルクス・レーニン主義イデオロギーからの逸脱、ソ連とスターリンにたいする態

度、ならびにアルバニアにたいするその排外主義的立場と行動、等等において明白にあらわれた。

ユーゴスラビアに打ち立てられた人民民主主義制度は、一時的なものであった。権力についた一味は依然として「マルクス主義者」を自称してはいたものの、人民民主主義制度を不満としていた。チトー一味は社会主義建設にも、ユーゴスラビア共産党がマルクス・レーニン主義理論を指針とすることにも同意しなかったし、またプロレタリアート独裁をも承認しなかった。これが、共産党・労働者党情報局とユーゴスラビア共産党のあいだで発生した紛争の根源である。それは、マルクス・レーニン主義と修正主義のあいだのイデオロギー闘争であり、けっして修正主義者が主張するような「支配権」をめぐる個個の人物間の紛争ではなかった。スターリンはマルクス・レーニン主義理論の純潔を守ったが、チトーは、第二次世界大戦の前夜、およびそのさなかに出現したブラウダーやその他の日和見主義者の衣鉢を受け継ぎ、逸脱者的な修正主義、反マルクス主義の現代修正主義潮流を守ったのである。

解放後の初期に、ユーゴスラビア指導部は、自分たちはソ連の社会主義建設を模範としていると称し、ユーゴスラビアで社会主義を建設しているのだなどと公言していた。かれらがそうしたのは、自らの血を流し真の社会主義を熱望していたユーゴスラビア人民を欺瞞するためであった。

実際には、チトー一味は社会主義社会制度やソビエト国家の組織形態を望んでいなかったし、望むはずもなかった。なぜなら、チトーが賛成していたのは資本主義制度であり、チトー一味が権力を握る本質的にはブルジョア民主主義的な国家だったからである。そうした国家は、ユーゴスラビ

アでは社会主義が、すなわち「より人間的な型の」、「独自の」社会主義——それはまさに、他の社会主義諸国のあいだで第五列の働きをする類の「社会主義」である——が建設されつつあるという印象をつくり出すのに役立つはずのものであった。こうしてユーゴスラビア修正主義者は、英米帝国主義者とチトー集団のあいだで、万事が計算しつくされ、調整されていた。こうしてユーゴスラビア修正主義者は、帝国主義と世界資本主義の利をはかりそれらと親睦を結ぶことによって、ソ連と対立するようになったのである。

反ファッショ民族解放戦争の当時から、年来の計画を追求するイギリス帝国主義とそのあとにつづくアメリカ帝国主義は、チトーがソ連から離れるのを援助してきただけでなく、かれがソ連にたいする破壊活動をおこない、またとりわけ、他の人民民主主義諸国を社会主義陣営から切り離すために活動するのを援助してきた。それは、ソ連をこれらの国国から孤立させるとともに、人民民主主義諸国を西側と結びつける目的からであった。これが、世界資本主義とその代理人チトー主義の政策であった。

熱狂的な反共主義者チャーチルは、チトー集団を確実に資本主義に仕えさせるうえで、自ら直接に一役買って出た。かれは戦時中、「自分のもっとも信頼する友人たち」——イギリスの指導者としてのかれ自身の言によれば——を、またのちには自分自身の息子を、チトーの参謀本部に送り込んだ。そしてついに一九四四年五月、イタリアのナポリでかれ自身もチトーと会談し、チトーはけっして策略を用いないことをすっかり確信するようになった。チャーチルはその回想録の中で、チトーがかれとの会談の席上、「ユーゴスラビアでは戦後、共産主義が打ち立てられることはない」と

の公式声明を今後おこなう用意があると表明した、とのべている。
チトーがその主人に仕えるためにいかに大きな精力を注いだかは、チャーチルがかれの多大な労に敬意をあらわして「貴方が正しかったことがいまわかった。だから貴方に同意する。わたしはいままで以上に貴方が好きになった」とのべたほどであった。恋する人がもっとも熱烈な告白をするのは、自分の恋人にたいしてである。
ユーゴスラビアがソ連や人民民主主義諸国と完全に決裂する以前でさえ、帝国主義者、とりわけアメリカ帝国主義者は、ユーゴスラビアに大量の経済的、政治的、イデオロギー的、軍事的援助をあたえてきた。それはのちになるほど、ますます頻繁に安定してあたえられるようになった。
この援助供与の唯一の条件は、国の発展が資本主義の道にそっておこなわれることであった。帝国主義ブルジョアジーは、ユーゴスラビアが外見上社会主義的形態を維持するのに反対ではなかった。それどころか、ユーゴスラビアが外見上社会主義の色合いを保つことは、かれらにとって大いに利益になることであった。なぜなら、そうすることでユーゴスラビアは、社会主義と解放運動に敵対する闘争のなかでよりいっそう効果的な武器として役立つからである。こうした類の「社会主義」は、レーニンとスターリンが予見し実現した社会主義とは根本的に異なるものであるばかりか、それに敵対するものでさえあった。
比較的短期間に、ユーゴスラビアはアメリカ帝国主義の「社会主義的」代弁者、世界資本主義を援護する攪乱者的代理人となった。一九四八年以降今日に至るまでチトー主義を特徴づけてきたの

は、マルクス・レーニン主義に敵対し、ユーゴスラビアの制度を「真の社会主義」制度の形態、「新しい社会」、「非同盟社会主義」として描き出す宣伝を全世界でくり広げる狂気のような活動であった。しかもこの制度は、もはやレーニンとスターリンがソ連に建設した社会主義とは異なり、世界で最初に試みられ、「輝かしい成果」を収めつつある「人間の顔をした」社会主義制度であるというものであった。この宣伝の狙いはつねに、全世界で自由と独立のためにたたかっている各国人民と進歩勢力を、袋小路に導くことであった。

ユーゴスラビア修正主義者が国政に採用した形態は、資本主義ブルジョアジーに励まされたトロツキストやその他の無政府主義分子が、レーニンの時代のソ連で、社会主義建設を破壊するために取り入れようと策動したものであった。チトーは社会主義建設について語る一方、こうした形態を採用することによって、工業、農業等の建設をすすめるうえでのマルクス・レーニン主義的原則を完全に歪曲した。

ユーゴスラビアの各共和国の政府および組織的、政治的指導部が備えていた特徴は、民主主義的中央集権制が破壊され、ユーゴスラビア共産党の役割が色あせ、とるに足らないものになってしまっていたことであった。ユーゴスラビア共産党は名称を変更し、「ユーゴスラビア共産主義者同盟」に改組された。それは名称のうえではいかにもマルクス主義的であったが、その内容、準則、権限、目的は反マルクス主義的なものであった。同盟は背骨のない戦線になり、マルクス・レーニン主義党のきわ立った特質を失った。それはかつての形態をとどめてはいたが、もはや労働者階級の

前衛の役割を果たすものでも、ユーゴスラビア連邦共和国を指導する政治勢力でもなく、チトー修正主義者によれば、いわば単に一般的な「教育的」機能を果たすにすぎないものであった。

チトー指導部は党をUDB(秘密警察)に従属させその統制下に置くとともに、党をファッショ的組織にかえ、国家をファッショ的独裁の国にかえた。われわれは、これらの活動の重大な危険性を熟知しているが、それは、チトー一味に雇われた代理人、コチ・ゾゼがアルバニアで同様のことを実行しようと試みたからである。

チトー、ランコビッチ、およびその代理人は、真の社会主義の色合いをもっていたものは何であれ、完全に破壊しつくした。

こうした代理人と資本主義的、修正主義的組織を粉砕しようとした国内分子の試みに反対して、また、社会主義を自称するこの制度の仮面をはぎとるために国外でくり広げられたあらゆるマルクス・レーニン主義的宣伝に反対して、チトー主義は激しい闘争をおこなった。

チトー指導部は、初期に着手されていた農業の集団化をはやばやと放棄し、資本主義的国営農場を設立するとともに、農村における私的所有の発展を促し、土地の自由な売買を許可し、また、クラーク(富農)を復活させ、都市と農村で自由市場がはびこる余地をあたえた。そしてかれらは、経済の資本主義的志向を強める最初の改革を実施した。

他方、チトー一味というブルジョアジーは、ユーゴスラビアの資本主義制度を偽装するための「新しい」形態を探し求めた。そしてこの形態は見出された。かれらはそれをユーゴスラビア「自主管

理」と名づけたのである。かれらはそれを「マルクス・レーニン主義」の装いで飾り立て、この制度がもっとも真正な社会主義であると主張した。

当初、「自主管理」は経済制度として登場し、その後、国家機構やユーゴスラビアの国内生活のその他のあらゆる分野に拡大された。

ユーゴスラビア「自主管理」の理論と実践は、マルクス・レーニン主義の教えと社会主義建設の普遍的法則の公然たる否定である。「自主管理」の経済・政治制度は、国際資本に従属したユーゴスラビアを支配するブルジョアジー独裁の、アナルコ・サンディカリズム的一形態である。

民主主義的中央集権制と一元的国家統治の役割の排除、無政府主義的連邦主義、反国家的イデオロギー一般など、あらゆる特徴を備えた「自主管理」制度がもたらしたものは、ユーゴスラビアの経済、政治、イデオロギーの恒常的な混乱と無秩序であり、各共和国と各地方の微弱なしかも不均等な発展と、大きな社会的、階級的分化、民族的不和と抑圧、精神生活の退廃であった。それはまた、労働者階級のなかにブルジョア的セクト主義、地方主義、個人主義の精神を培養し、一つの部隊を他の部隊と競合させることによって、労働者階級の大分裂をもたらした。こうして、ユーゴスラビアの労働者階級は、単に国家と社会において主導者（ヘゲモーン）としての役割を果たしていないというだけでなく、「自主管理」制度によって、自らの全般的利益を守り緊密に統一された階級として行動することさえできないような状況に置かれているのである。

ユーゴスラビアには、資本主義世界、とりわけアメリカ帝国主義から、巨額の資本が投資や信用

供与、借款の形態で流れ込んだ。ユーゴスラビアの資本主義的「自主管理社会主義」の「発展」の物質的基礎をなしているのは、ほかでもなくこうした資本なのである。それは負債額だけでも、一〇億ドル以上にのぼるものである。ユーゴスラビアがアメリカから受けた借款は、七〇億ドル以上にのぼっている。

チトー指導部が外国から導入しているおびただしい額の借款にもかかわらず、ユーゴスラビア人民は、この独自の「社会主義」の「輝かしい成果」を享受したことはなかったし、現在も享受してはいない。それどころか、ユーゴスラビアには政治的、イデオロギー的混乱が存在している。この国を支配しているのは、国内における大規模な失業と大量の国外移住労働を生み出している制度であり、この制度によって、ユーゴスラビアは帝国主義諸国に全面的に従属させられているのである。ユーゴスラビア人民は、支配階級と、この国に投資をおこなってきたあらゆる帝国主義国の利益のために、骨の髄まで搾取されている。

ユーゴスラビアの国家は、日ごとに物価が騰貴し、勤労大衆の貧困が不断に増大しようとも意に介さず、また国が債務に固く縛られ、それればかりか、資本主義世界の大危機に深く巻き込まれていようとも気にはかけていない。ユーゴスラビアが有しているのは、制限された独立と主権だけである。なぜなら、他のことはさておいても、ユーゴスラビアは完全に自分自身のものと言いうる経済力を保持してはいないからである。その大部分は、諸外国の資本主義的企業や国家との共同所有に属しており、そのためにこの経済は、恐慌と外国の搾取による破壊的影響をこうむらざるをえない

のである。
ところで、世界資本主義がユーゴスラビア「自主管理」にこのように大きな政治的、財政的支持をあたえ、しかも、この制度がすべての国にとって「社会主義建設の試験ずみの新たな形態」であると言い張るチトー一味の宣伝に同調しているのは、けっして偶然ではない。
かれらがそうするのは、ユーゴスラビア「自主管理」の形態が、プロレタリアートと各国人民の革命的解放運動にたいするイデオロギー的、政治的な転覆、破壊の方法を提供するからであり、世界各国に帝国主義が政治的、経済的に進出する道を切り開く方法を提供するからである。帝国主義とブルジョアジーは、資本主義——それは容易なことでは死滅せず、人民を犠牲にしたさまざまな統治形態を見出そうと懸命になっている——の延命をはかるために、「自主管理」を種種の状況とそれぞれの国に応じた予備的な制度にしようとしている。
「非同盟」というユーゴスラビアの理論と実践は、さまざまな帝国主義者が各国人民に目隠しをするのを助けており、かれらに多大の奉仕をおこなっている。このことは、帝国主義者と社会帝国主義者の双方にとって同様に利益となっている。なぜならそれは、かれらが「非同盟諸国」にたいする影響力を確立し強化するとともに、自由を愛する諸国人民を民族解放とプロレタリア革命の道から逸脱させるのを助けるからである。だからこそ、カーターもブレジネフも、また華国鋒も、チトーの「非同盟」政策をしきりとほめそやし、それを自分自身の目的のために利用しようとしているのである。

チトー主義はつねに帝国主義ブルジョアジーの武器であり、革命の炎を鎮める火消人であった。それは、現代修正主義全般、およびその雑多な変種と同一線上にあり、同じ目的をもっており、また、それらとイデオロギー的共通性を有している。それらがマルクス・レーニン主義と革命、社会主義との闘争のなかで用いる方法や形態、戦術はさまざまであるが、その反革命的目的は同一である。

ブルジョアジーと反動がプロレタリアートと各国人民の革命闘争を圧殺しようと躍起になっているなかで、**何よりもまずヨーロッパの修正主義諸党、そして他の諸大陸のあらゆる国国の修正主義諸党は、かれらに大いに奉仕している。**

西ヨーロッパ諸国の修正主義党は、いわゆる社会主義の「新しい社会」に関する理論をでっち上げようと努めている。それは「構造改革」を通じて、また社会民主主義政党と――さらには右翼政党とさえ――緊密に連合することによって達成されるというものである。かれらに従えば、この社会は「社会改良」や「社会平和」、「議会の道」、ブルジョア政党との「歴史的妥協」を通じて、新たな基礎の上に築かれるであろうと言うのである。

イタリアやフランス、スペインなどヨーロッパの修正主義党、およびそれに追随する他の西側の修正主義諸党は、レーニン主義と階級闘争、革命とプロレタリアート独裁を否定している。かれらはそろって、資本主義ブルジョアジーとの妥協の道を歩んでいる。かれらはこの反マルクス主義の

路線を、「ユーロコミュニズム」と名づけている。「ユーロコミュニズム」とは、ソ連修正主義ブロックに対立するときもあればそうでないときもある、新手のエセ共産主義的潮流である。こうした動揺的立場は、ヨーロッパの社会民主主義と、またヨーロッパで煮えたぎっている雑多な混乱した見解全体と思想上の共存をはかろうとするかれらの狙いに起因している。「ユーロコミュニスト」は、革命の勝利とマルクス・レーニン主義イデオロギーの純潔のためにたたかう者以外であれば、だれとでも団結することができるのである。

修正主義、日和見主義、社会民主主義のあらゆる潮流は、革命と各国人民を弾圧する超大国の悪らつな活動を支持するまでになっている。これらすべての潮流は、ブルジョアジーの新機構なるものを支持しているが、その狙いはただ一つ、すなわち、無数の物質的、政治的、イデオロギー的障害を立てることによって革命の息の根を止めることである。かれらは、プロレタリアートとその同盟者の方向を誤らせ分裂させるために活動しているが、それはかれらが、プロレタリアートとその同盟者は派閥抗争によって分断され分裂させせられるならば、国内においても国際的範囲においても、腐朽しつつある世界資本主義の攻撃に立ち向かえるだけの必要なイデオロギー上、政治上の戦闘的団結をつくり出すことはできない、ということを熟知しているからである。

連合した現代修正主義と社会民主主義はファシズムの到来を恐れており、それは極右からの脅威にさらされている一部の国国においてはなおさらである。修正主義者と社会民主主義者は、ファッショ的独裁を回避するために、矛盾を「緩和」し、人民大衆およびプロレタリアートと、資本主義

ブルジョアジーとのあいだの階級闘争を「低い調子」に抑えようと骨を折っている。こうして連合の当事者は、「社会平和」を確保するために、互いに譲歩し、さらには資本主義ブルジョアジーと妥協せざるをえず、ブルジョアジーとのあいだで双方にとって妥当なある種の政権協定を結ぶようになる。このように、資本主義ブルジョアジーとその政党が共産主義にたいする公然たる闘争をつづける一方、修正主義諸党は革命の指導的イデオロギーであるマルクス・レーニン主義を歪曲しようと努力しているのである。

労働組合は、ヨーロッパの修正主義諸党の主柱となっている。それは改良主義的であり、雇用主と妥協するための、また、政治的要求やプロレタリアートによる国家権力奪取の目的を掲げたストライキには賛成せず、ただ経済的要求のみを掲げるための特別の教育・訓練を受けている。当然にもかれらがおこなう交渉は、要求と回答の釣合いをとることを目的としている。つまり、一方が施しを請い、他方がその施しの大きさをきめるというわけである。改良主義的労働組合と修正主義諸党も、また、雇用主とその政党、国家権力、御用組合も、いずれもが革命とプロレタリアート、およびその真のマルクス・レーニン主義党を脅威としている。そのために、かれらは反動的妥協を求めているが、そうした打開策はすべての資本主義国において同一ではありえない。それは、資本の力量、危機の深刻さ、各国を内部からむしばむ諸矛盾の程度に差異があるためである。

革命は、プロレタリアートと各国人民の敵の戦略を打ち破る唯一の武器である

帝国主義者、社会帝国主義者、雑多な修正主義者などあらゆる敵は、結託してあるいはそれぞれで、進歩的人民を誤らせ、マルクス・レーニン主義の名を汚すために、また、とりわけレーニン主義の革命理論を歪曲し、革命とあらゆる種類の人民的抵抗闘争と民族解放闘争を圧殺するためにたたかっている。

マルクス・レーニン主義の敵の武器庫は大きなものであるが、革命の勢力もまた巨大である。これらの勢力は決起しつつあり、革命の敵と衝突したたたかっている。それは、資本主義世界と世界反動の平穏を打ち破ってきたし、その息の根を止めつつある。

「一つの怪物がヨーロッパを徘徊している——共産主義の怪物が。古いヨーロッパのすべての勢力は、この怪物の聖なる狩り出しのために同盟を結んでいる*」。

＊マルクス、エンゲルス『共産党宣言』、日本共産党(左派)中央委員会出版部、五二ページ

マルクスとエンゲルスのこの見解は今日においても依然として有効である。帝国主義と社会帝国

主義、現代修正主義は、共産主義からの脅威は取り除かれたと考えている。それはかれらが、修正主義の裏切りによって革命がこうむった重大な損害は取り返しのつかないものであると考え、マルクス・レーニン主義の力を過小評価し、かれらが有する物質的、軍事弾圧的、経済的力量を過大評価しているからである。これは、かれらの幻想にすぎない。

世界プロレタリアートはその力量を蓄積しつつある。プロレタリアートと自由を愛する諸国人民は、自らの経験から、チトー修正主義者、フルシチョフ修正主義者、中国修正主義者、「ユーロコミュニスト」、およびその他の現代修正主義者の裏切りにたいして、日ごとに鮮明な認識を獲得しつつある。時代は革命と社会主義に有利に、ブルジョアジーと帝国主義、現代修正主義と世界反動に不利に作用している。各国の被抑圧人民は、自らの真の自由と民主主義、主権を獲得し、自らの手に権力を握り、帝国主義とその手先を壊滅させて社会主義の道へと踏み出すことを望んでおり、革命はいたるところでこうした人民の心のなかに炎となって燃え上がっている。

第二インタナショナルからの訣別に引き続いて新たなマルクス・レーニン主義諸党が生み出されたレーニンの時代と同じ現象が、今日起こりつつある。修正主義の裏切りは、どこにおいても真の共産党の創立と強化をもたらしたし、また必然的にもたらすほかはない。そして、これら諸党は、修正主義者が拒絶し泥靴で踏みにじったマルクス・レーニン主義と革命の旗印を取り上げ、高高と掲げたのである。これらの党には、世界帝国主義と修正主義の世界戦略にたいして、輝かしいレーニン主義の革命戦略と偉大なマルクス・レーニン主義理論で対決するという重責がゆだねられてい

る。これらの党には、闘争の目標と正しい道筋、闘争が要求する犠牲について大衆を十分に自覚させ、大衆を団結させ、組織、指導して勝利に導くという重責がゆだねられている。

今日、プロレタリアートと自由を熱望する被抑圧人民を一方とし、野蛮で貪欲な帝国主義者を他方とする壮大な闘争がくり広げられており、その最前線に立つわれわれマルクス・レーニン主義者は、共同の敵ならびに各国の個個の敵が戦闘のなかで用いる戦術と方法、形態、およびかれらの狙いに精通しなければならない。われわれは、確固としてマルクス・レーニン主義の革命理論に立脚しなければ、また今日の情勢のもとで、資本主義世界の鎖のなかに一連の弱い環が存在している——それは将来も存在するであろう——ことを理解しなければ、この問題を正しく認識することはできない。そしてこの弱い環において、革命家と各国人民は絶えざる活動をくり広げ、これらの環を次次と突破するために容赦ない果敢な闘争を組織しなければならないのである。そのためにはもちろん、活動と闘争、犠牲と無私の精神が要求される。帝国主義と社会帝国主義、反動は互いに結託し、新たな同盟を結び、自らにたいしてつくり出された苦境からの活路を探し求めているが、勇敢な各国人民と勇気ある人人は、革命の利益に導かれるならば、こうした巨大な勢力に立ち向かうことができるし、また立ち向かうであろう。革命家とマルクス・レーニン主義者、すべての大陸とすべての国における人民の闘争こそが、反動勢力をこうした苦境に陥れるのである。

全世界の共義主義者は、一時期革命的思想を支配していた根拠のない神話を恐れる理由は何もない。共産主義者は、誤りを犯している人人が自己の道を改めるのを援助するために、かれらとたた

かい、かれらを獲得しなければならず、また当然のことながら、自分自身が日和見主義に陥ることなく、こうした目的のために大きな努力を払わねばならない。原則的な闘争の過程において、当初は若干の動揺が発生するかも知れない。しかし、動揺は優柔不断な人人のあいだに起こるのであって、断固とした人人、マルクス・レーニン主義理論を正しく適用し、自国のプロレタリアートと世界プロレタリアート、および革命の利益について正しい観点を保持している人人のあいだには、けっして動揺は起きないものである。しかしながらたとえ動揺している人人であっても、自分たちの同志が革命的なマルクス・レーニン主義の見解を確固として堅持しているのを見れば、闘争のなかでさらに強固にきたえられてゆくであろう。

マルクス・レーニン主義者は、もし現在の国際的諸条件と各国の国内的諸条件にもとづいてマルクス・レーニン主義の理論を正しく決然として適用するならば、また、もし帝国主義とあらゆる潮流の現代修正主義に反対する仮借ない闘争のなかで、プロレタリア国際主義的団結をたえず強固にするならば、いかに重大なものであれ、その途上でぶつかるあらゆる困難に必ず打ち勝つであろう。マルクス・レーニン主義とその不滅の諸原則は、もしも正しく適用されるならば、不可避的に世界資本主義の崩壊とプロレタリアート独裁の勝利をもたらすであろう。そしてそれを手段として、労働者階級は社会主義を建設し、共産主義に向かって前進するであろう。

第二章　レーニン主義の帝国主義理論は
その有効性を完全に保っている

今日、フルシチョフ修正主義者やチトー修正主義者、「ユーロコミュニスト」や中国修正主義者、およびその他の反マルクス主義の潮流が、情勢は変化したという口実で革命と人民解放の事業を攻撃している条件のもとで、帝国主義に関するレーニンの著作を掘り下げて研究することは第一級の重要性を帯びている。

われわれはそれらの著作に立ち返らなければならず、とりわけ、レーニンの天才的労作『資本主義の最高の段階としての帝国主義』を詳細に、突っ込んで研究しなければならない。われわれがこの著作を丹念に研究すれば、修正主義者、なかでも中国指導部が帝国主義についてのレーニン主義の思想をいかに歪曲しているか、また、かれらが帝国主義の狙いとその戦略・戦術をどのように認識しているかを理解できるであろう。中国指導部の文書や声明、その立場と行動が示しているように、帝国主義の性質についてのかれらの見方は完全に誤っており、かれらはそれを、反革命的、反マルクス主義的立場からとらえている。それは、レーニンが容赦なく暴露した第二インタナショナルのすべての党と、そのイデオローグであるカウツキーらの見方と同じものである。

われわれがこのレーニンの著作を注意深く研究し、彼の天才的な分析と結論に忠実に従うならば、次のことが分かる。すなわち、現代の帝国主義は、レーニンがのべたほかならぬあの諸特徴を完全に保っており、われわれの時代が帝国主義とプロレタリア革命の時代であるというレーニン主義の規定は、依然として揺るぎないものであるということ、そして、革命の勝利は不可避であるということである。

周知のように、レーニンはその帝国主義についての分析を、**生産と資本の集積、および独占体**からはじめている。今日においても、生産と資本の集積と集中という現象は、帝国主義についてのレーニン主義的分析を基礎としてのみ、科学的に正しく分析することができるのである。

今日の資本主義の一つの特徴は、生産と資本の集積がますます増大し、有力企業による小企業の合併あるいは吸収へと導いていることである。その結果、大型のトラストやコンツェルンには、労働力が大規模に集積されている。これらの企業はまた、巨大な生産力と、はかり知れないほどの原料とエネルギー資源を一手に集中している。今日、資本主義大企業は核エネルギーや最新の技術をも自ら占有して、それらを利用している。

そうした巨大な組織体は、一国的および国際的な性格をもっている。それらは、自国内では、小規模な経営者や産業家の大部分を零落させる一方、国際的な範囲では、多くの国の工業、農業、建設、運輸などすべての部門を網羅する巨大なコンツェルンへと成長転化する。これらのコンツェル

ンの触手が伸びるところでは、また、何億という資本を有するほんの一握りの資本家によって生産の集積がなしとげられているところでは、どこであれ、零細な所有者や産業家を駆逐する傾向がより普遍的で顕著なものになりつつある。このことは、独占体のいっそうの強大化をもたらしている。

「競争の独占へのこのような転化は、最新の資本主義経済におけるもっとも重要な現象の一つ——たとえもっとも重要な現象ではないとしても——である」*。

レーニンはさらに、帝国主義のこのような特質について次のようにのべている。

「……生産の集積による独占の発生は、総じて資本主義の現在の発展段階の一般的、根本的な法則なのである」**。

* 『資本主義の最高の段階としての帝国主義』——邦訳『レーニン全集』第二二巻二二七ページ

** 同前——邦訳全集第二二巻二三〇ページ

今日の条件のもとでの資本主義の発展は、右にのべたレーニンの結論を十分に確証している。今日、独占はもっとも典型的かつ一般的な現象になっており、それは帝国主義の本性とその経済的本

質を規定している。アメリカ、ドイツ連邦共和国、イギリス、日本、フランスなどの帝国主義諸国では、生産の集積はかつてないほど大規模なものになっている。

たとえば、一九七六年には、アメリカの大企業上位五〇〇社に属する労働者は約一七〇〇万人で、雇用労働力の二〇パーセント以上を占めていた。また、商品の総売り上げ高の六六パーセントがこれらの企業によるものであった。レーニンがその著『帝国主義論』を書いた当時には、資本主義世界で一〇億ドル以上の株式資本をもっていたのは、アメリカの大企業「USスチール」社だけであったが、一九七六年には、資本金一〇億ドル以上の企業数はおよそ三五〇社になった。超巨大独占である自動車トラスト「ゼネラル・モータース」社の総資本金は、一九七五年には二二〇億ドルをこえ、八〇万にもおよぶ労働者群を搾取していた。それにつづく独占資本である「スタンダード・オイル・オブ・ニュージャージー」社は、アメリカおよび他の国国の石油産業を支配し、七〇万人以上の労働者を搾取している。自動車産業には三つの大独占資本があり、それらがこの部門の生産高の九〇パーセント以上を占めている。航空産業および鉄鋼業では、いずれも、四つのとくに大きな企業が生産高のそれぞれ六五パーセントと四七パーセントを占めている。

他の帝国主義諸国においても、同様の過程が進行してきたし、進行しつつある。ドイツ連邦共和国では、企業総数のうちの一三パーセントの企業が、国内の生産の約五〇パーセントと労働力の約四〇パーセントを集中している。イギリスでは、五〇の大独占資本がすべてを支配している。英国鉄鋼公社は国内の鉄鋼生産量の九〇パーセント以上を占めている。フランスでは、二つの企業が鉄

鋼生産量の四分の三を一手に集中し、四つの独占資本が自動車生産全体を掌握し、さらに、別の四つの独占資本が石油製品の全生産高を支配している。日本では、大手製鉄企業一〇社が粗鋼全体および鉄鋼の四分の三以上を生産しており、他方、非鉄製錬業で操業をおこなっているのは八社である。その他の分野と部門についても同じことが言える。(注)

(注)　〔資料〕国連統計月報(一九七七年)、世界統計年鑑(一九七六年)、アメリカの雑誌『フォーチュン』(一九七六年)、その他

これらの国国に依然として存在する中小企業は、独占体に直接従属している。それらは独占体からの受注を請け負い、独占体のために生産し、また、独占体から信用貸しを受け、原料や技術などを手に入れている。事実上、これらの中小企業は独占体の付属物になっている。

生産と資本の集積と集中——それは、技術上では互いに統一性のない巨大な独占体を生み出す——は、今日では普遍的なものになっている。工業生産、建設、運輸、商業、サービス、その他基幹産業のすべての分野と企業が、これらの「コングロマリット(複合)」巨大独占体のもとで活動をおこなっているのである。これらの独占体は、子どもの玩具から大陸間弾道ミサイルに至るまで、あらゆるものを生産している。

独占体の経済的支配力と資本の集積——それらは不断に増大してきたし、また、増大しつつある

——は、次のような状況をつくり出す。すなわち、競争の犠牲になるのは、単に「幼い赤子」、つまり過去において典型的だった非独占企業だけではなく、大金融企業・グループでさえもその犠牲になるという状況である。独占高利潤にたいする独占体のあくなき欲求と、競争の極度の激化とによって、こうした過程は最近の二〇年間に巨大な規模に達した。資本主義世界での企業の合併や乗取りは今日、第二次世界大戦前の時期より七倍から一〇倍も大規模なものになっている。

製造企業、商事会社、農業企業、および銀行業の合併や結合は、新たな形態の独占、すなわち、商・工業企業あるいは工・農業企業の形成をもたらした。これらの形態は、単に西側資本主義諸国のみならず、ソ連、チェコスロバキア、ユーゴスラビアや他の修正主義諸国でも取り入れられている。以前は、独占団体は他の独立した企業の助けを借りて商品の輸送と販売をおこなっていたが、今日では、独占体が生産から輸送、販路に至るまで掌握している。

独占体は自らの支配のもとに、企業間の競争を排除しようと努めるだけでなく、すべての原料資源を独占するために、鉄、石炭、銅、ウランなど重要な鉱石に恵まれたあらゆる地域に魔の手を伸ばしている。この過程は一国的および国際的な範囲で進行している。

生産と資本の集積は、とくに第二次世界大戦後、国家独占資本主義部門の拡大と発展によって巨大な規模に達した。

国家独占資本主義とは、国家機構の独占への従属であり、国内の経済的、政治的、社会的生活における独占の完全な支配の確立である。このようにして、国家は金融寡頭制の利益のために、すな

わち、全勤労人民にたいする搾取を通じて最大限利潤を支配階級のために確保するとともに、革命と人民の解放闘争を圧殺するために、経済に直接介入するのである。

国家独占資本主義にもっとも特有の基本的要素である国家独占所有は、個個の資本家または資本家グループの所有をなすものではなく、資本主義国家の所有、すなわち権力を握るブルジョア階級の所有をなすものである。それぞれの帝国主義国では、国家独占資本主義部門は総生産額の二〇パーセントから三〇パーセントを占めている。

生産と資本の集積の最高の段階をなす国家独占資本主義は、今日、ソ連やその他の修正主義諸国に普遍的な、主要な所有形態である。このような国家独占資本主義は、権力を握った新たなブルジョア階級に奉仕するものである。

同様に中国においても、企業活動の主要な目的としての利潤の制度化、組織、経営、報酬の面での資本主義的慣行の適用、ソ連やユーゴスラビアや日本のそれとよく似た経済区、トラストおよびコンビナートの設立、外国資本への門戸開放、さらには、外国独占資本との直接の企業提携等等を通じて、経済は国家独占資本主義の典型的な形態を取りつつある。

今日、資本主義世界および修正主義世界では、生産と資本の集積・集中度は諸国家間にまたがるほどに達している。さまざまな帝国主義諸国の独占体の連合を形成しているヨーロッパ共同市場やコメコンなども、こうした傾向を助長し、また、自らもそれを実際に体現している。

レーニンは当時、国際独占体の諸形態を分析したさいに、カルテルとシンジケートについて論じ

た。今日、生産と資本の集積がきわめて大きな規模に達したという条件のもとで、独占ブルジョアジーは、勤労人民を搾取するためのさらに別の形態を見つけ出している。多国籍企業がそれである。

外見上では、多国籍企業は、多くの国の資本家の共同所有下にあると自らを印象づけようとしている。実際に、多国籍企業は多くの国国で活動をおこなっているが、その資本と管理についての権限はもっぱら一国にある。多国籍企業は、猛烈な競争に太刀打ちできない大小の現地企業や会社の吸収を通じて、ますます膨張しつつある。

多国籍企業は、最大限利潤がもっとも確実に見込めそうな国国に子会社を開設し、事業を拡張している。たとえば、アメリカの多国籍企業「フォード」社は、国外に二〇の大工場を設立し、さまざまな国籍の労働者一〇万人をそこで雇っている。

多国籍企業とブルジョア国家とのあいだには、搾取階級としての性格にもとづく緊密な結びつきと相互依存性がある。資本主義国家は、一国の範囲でも国際的な範囲でも、多国籍企業の支配と拡張の狙いに役立つ道具として利用されている。

国の全生活に占める多国籍企業の重要な経済的役割と比重の大きさについて言えば、一部の多国籍企業は、それぞれ単独でも、発達した資本主義国数カ国の予算または生産額の総和に匹敵するか、あるいはそれをしのぐほどの強大な経済力となっている場合が多い。アメリカの強力な多国籍企業の一つである「ゼネラル・モータース」社の生産額は、オランダ、ベルギー、スイスの工業生

産額の合計を上回っている。多国籍企業は特殊な便宜や利権を自ら確保するために、自分たちが活動している国国で干渉をおこなっている。たとえば、一九七五年、アメリカのエレクトロニクス産業資本家はメキシコ政府にたいし、安全対策を規定しているこの国の労働法を修正するように要求し、さもなければ自分たちの工場をコスタリカに移転させると通告した。しかもかれらは、圧力をかけるために、約一万二〇〇〇人のメキシコ人労働者を雇っていた多くの工場を閉鎖したのである。

多国籍企業は帝国主義のてこであり、帝国主義による拡張の主要な形態の一つである。多国籍企業は新植民地主義の支柱であり、それが活動している国国で、その国の主権と独立を損なっている。この多国籍企業は、自己の支配に道を開くために、陰謀を組織したり、経済を混乱させたり、果ては高級官僚や政治的指導者、労働組合指導部を公然と買収するなど、どんな犯罪を働くことも辞さない。ロッキード賄賂（わいろ）事件はこのことを余すところなく証明した。

また、修正主義諸国にも多くの多国籍企業が設立され、活動している。(注) それらは中国にも進出しはじめている。

(注) ソ連には、アメリカ系一七社、日本系一八社、西ドイツ系一三社、フランス系二〇社、イタリア系七社、およびその他の多国籍企業が設立され、あるいはそれらの事務所が開設されている。ポーランドには、三〇社以上の多国籍企業が設立されており、そのうちアメリカ系は一〇社、西ドイツ系六社、イギ

リス系六社、日本系三社、その他となっている。ルーマニアでは三二社、ハンガリーでは三一社、チェコスロバキアでは三〇社の多国籍企業が活動している。他の修正主義諸国でも事情は同じである。

〔資料〕カール・レビンソン『ウォッカとコーラ』、一九七七年、七九―八二ページ

今日の資本主義世界を特徴づける生産と資本の集積と集中は、生産の広範な社会化をもたらしはしたが、それは帝国主義の搾取の本質をいささかもかえるものではなかった。逆にそれは、勤労人民にたいする抑圧を強め、かれらの貧困化を増大させたのである。これらの現象は、レーニンの次の命題を完璧に立証している。

帝国主義における生産と資本の集積という条件のもとでは、「その結果、生産の社会化が著しく前進する」が、それにもかかわらず、「……取得は依然として私的である。社会的生産手段は、依然として少数の人々の私的所有である＊」。

＊『帝国主義論』――邦訳『レーニン全集』第二二巻二三五―二三六ページ

独占体と多国籍企業は、依然としてプロレタリアートと各国人民の大敵である。

現在進行しつつある生産と資本の集積過程の強まりは、他のあらゆる矛盾と並んで、資本主義の

根本的矛盾、すなわち生産の社会的性格と取得の私的性格との矛盾をいっそう激化させた。今日でも過去とまったく同様に、労働者にたいする野蛮な搾取を通じて得られた莫大な収益と超過利潤は、一握りの大資本家によって取得されている。一つに結合した工業部門が備える生産手段もまた、資本家の私的所有であるが、他方、労働者階級は生産手段の所有者に依然として隷属させられており、かれらの労働力も依然として市場商品になっている。いまでは資本主義大企業が搾取する労働者の数は、もはや一〇人や一〇〇人ではなく、数十万人にもおよんでいる。こうした大量の労働者群にたいする無慈悲な資本主義的搾取の結果として、アメリカの企業が獲得した剰余価値は、一九六〇年の四四〇億ドルに比べ、一九七六年にはその年だけで一〇〇〇億ドルを上回ったと推定されている。

レーニンは、独占の発生と発展によって資本主義の敵対的諸矛盾が解消するという可能性を説いた第二インタナショナルの日和見主義者を暴露した。レーニンは、労働の抑圧と搾取、労働の結果の私的取得の体現者である独占が、資本主義の諸矛盾をなおいっそう激烈なものにすることを、科学的論拠によって証明した。資本主義制度の上部構造は、独占の支配という基礎のうえに築かれている。この上部構造は一国および国際的な範囲で、独占の略奪的利益を代表し、それを擁護している。独占は、内外政策、経済、社会、軍事その他の政策について指図をおこなっている。

社会民主主義の反動的頭目たちや、あらゆる色合いの現代修正主義者と日和見主義者の説教——すなわち、トラストや国家独占資本主義所有等が、平和的な方法で社会主義経済に転化しうると

か、現代の独占資本主義は徐徐に社会主義に一体化されるだろうなどといった説教――は、生産と資本の集積という今日の実際によっても暴露されている。

レーニンがわれわれに教えているように、生産と資本の集積は、貨幣資本の集積が増大し、大銀行の手にそれが集中し、そして、金融資本が発生し発展するための基礎としても役立っている。独占と並んで銀行もまた、資本主義の発展過程で、独占体やコンツェルン、および小生産者や小額投資者の貨幣資本を吸収して大きな発展をとげる。このように、資本家の手中にあってかれらに奉仕する銀行は、主要な金融手段の所有者となる。

大企業が、またカルテルや独占体が小企業を排除するために推進したその同じ過程が、小銀行を次次に駆逐するさいにも生じた。こうして、大企業が独占体を形成したのとまさに同様に、大銀行も銀行コンツェルンを形成したのである。この現象は最近の二〇年間に巨大な規模に達しており、それは今日もなお、きわめて急速に進行している。今日おこなわれている銀行の合併や乗取りのいちじるしい特徴は、それが小銀行だけでなく、中堅銀行や比較的大きな銀行まで巻き込んでいることである。こうした現象は、資本主義的再生産の矛盾がますます激化し、競争戦を拡大していること、また、資本主義世界の金融通貨体制が深刻な危機にあることをその原因としている。

アメリカでは二六の大金融グループが支配している。そのうちの最大のグループは、二〇の大銀行や保険会社などを有する、株式資本九〇〇億ドルのモルガン・グループである。

銀行資本の集積と集中は、他の主要資本主義諸国でもきわめて高い水準にある。西ドイツでは、七〇の大銀行のうち三行が銀行資産総額の五八パーセント以上を所有している。イギリスでは、いっさいの銀行業務は「ビッグ・フォー(四強)」として知られる四つの銀行によって統制されている。また日本やフランスにおいても、銀行資本の集積度はきわめて高い。

レーニンは、銀行資本が産業資本と融合することを立証した。最初のうち銀行は、自分たちが産業資本家に供与する信用の結果の良し悪しに関心をもつ。銀行は、信用を受ける産業資本家たちが互いに競争することを避けるために、取り決めを結ぶよう仲介にはいる。というのも、そうなれば、銀行自身も損害を受けるからである。これが、銀行と産業資本とが融合していく第一歩であった。生産と貨幣資本の集積が進展するにつれて、銀行は株式会社を設立し、生産企業への直接の投資者となる。このようにして、銀行資本は工業、建設、農業、運輸、流通部門、および他のあらゆる分野に浸透していく。一方、企業も多額の株式を買い占め、銀行の参与者になる。今日、銀行と独占企業の重役たちは、互いに相手方の取締役会の役員となり、こうして、レーニンが名づけた「人的結合」をつくり出している。このような過程から発生してくる金融資本は、産業資本、貨幣資本、商品資本というあらゆる形態の資本を含んでいる。レーニンはこの過程を特徴づけて、次のようにのべている。

「生産の集積、そこから成長してくる独占体、銀行と産業との融合あるいは癒着、——これが

金融資本の発生史であり、金融資本の概念の内容である」[*]。

＊『帝国主義論』——邦訳『レーニン全集』第二二巻二六〇ページ

第二次世界大戦後、金融資本は増大し、構成上の変化をとげたが、しかし、それは依然として従来とまったく同じ目的をもっている。すなわちそれは、国内外の広範な勤労人民大衆を搾取することによって、最大限利潤を揚げることである。近年、主要資本主義国で大きく成長し、銀行の競争相手にのし上がった保険会社も、同様の役割をもっている。たとえば、アメリカにおける銀行資産は、一九五〇年に比べて一九七〇年は三・五倍増であったが、他方、保険会社の資産は同期間中に六・五倍増となった。

保険会社は、人民からの収奪によって蓄積した資本を使って、何億ドルもの巨額の資金を独占に提供しうるまでになった。このように、保険会社は産業独占体および銀行独占体と融合し結合して、金融資本の有機的構成部分の一つとなった。

独占ブルジョアジーは利潤へのあくなき欲望に駆られ、労働者の年金基金や人民の預金など、当座に利用できるあらゆる貨幣手段源を資本に転化する。

集積された金融資本は、大企業、小産業資本家等等から吸い上げた貨幣によって生じる利潤だけでなく、有価証券や債券の発行によっても、桁はずれに大きな収益を引き出す。この場合も、貯蓄

預金の場合と同様に、債権者が手に入れる利得はごくわずかな部分であるのにたいして、銀行自身はこれらの業務で巨額の利潤をかせぎ出し、またそれを通じて自己の資本と投資を増大させる。そして、このことは当然にも、金融資本の付加的な利潤源をたえずつくり出す。金融資本は主として工業に投資するが、それ以外にも、土地や鉄道などの資産、および他の分野と部門に投機の網の目を広げている。

銀行は、生産の高度な集積にとって、また独占の支配にとって必要な、相当額の信用を実際に供与することができる。このようにして、大独占団体が国内外の勤労大衆にたいする過酷な搾取を強め、最大限利潤を確保するうえでの有利な条件がつくり出されている。

ソ連と他の修正主義諸国では、資本主義の復活にともなって、銀行は独占に固有のすべての特徴を備えるようになった。これらの国国では、他のあらゆる資本主義国と同様に、銀行は国内および国外の広範な勤労人民大衆を搾取することに奉仕している。

近年、資本主義・修正主義諸国では、消費財とりわけ耐久消費財の分割払いによる売買が急速にふえている。こうした信用貸付は、ブルジョアジーに商品販売市場を保証しており、資本家は高率の利子をつけて莫大な利潤をかせいでいる。ところが借り手は、貸主や資本主義企業によって手足を縛られるのである。

今日、銀行や貸付機関にたいする勤労人民の借金やその他の負債はいちじるしくふえている。アメリカ国内だけでも、そうした貸付による人民の負債は、一九四五年の六〇億ドルにたいして一九

七六年には一六七〇億ドルにも達した。一方、ドイツ連邦共和国では、この負債額は四六〇億マルク余りにのぼっている。

銀行資本の集積と集中の増大は、金融寡頭制による経済的、政治的支配の強化をもたらすとともに、広範な勤労人民大衆の経済的隷属状態、かれらの貧困化と窮乏を強めさせる一連の形態・方法の利用をもたらした。

金融資本の発展は、一握りの有力な産業資本家と銀行家が巨万の富を蓄積するだけでなく、国の全生活に影響をおよぼす経済的、政治的実権をかれらがその手に集中することを可能にした。この全能者たちは、独占体と銀行を統率し、いわゆる金融寡頭制を構成する人人である。資本主義の弁護者たちは、現在では大企業は株式会社にかわり、一介の労働者でさえわずかばかりの株をもてるようになったという事実を根拠にして、資本は——マルクスが『資本論』を書いた当時の、あるいは、レーニンが帝国主義を分析した当時の——私的性格をもはや失ったとか、資本は人民的資本になったなどということを証明するのに骨折っている。しかし、これはつくり話である。以前と同様今日においても、帝国主義諸国を支配しているのは、強大な私的産業・金融グループ——アメリカのロックフェラー、モルガン、デュポン、メロン、フォード、シカゴ、テキサス、カリフォルニアおよびその他のグループ、イギリスのロスチャイルド、ベアリング、サミュエルその他の金融グループ、西ドイツのクルップ、ジーメンス、マンネスマン、ティッセン、ゲルリングその他、イタリアのフィアット、アルファ・ロメオ、モンテジソン、オリベッティその他、フランスの大財閥、等

等である。

金融寡頭制は、産業資本および金融資本の占有者として、国の全生活にたいする経済的、政治的支配を確立してきた。それは国家機構さえも自己の利益に従属させ、金融的金権支配の自在の道具にそれをかえてしまった。金融寡頭制は政府を任免し、内政・外交について采配をふっている。国内面では、金融寡頭制は反動勢力と結びつき、また、自己の政治的、経済的権力を支えているすべての政治・イデオロギー・教育・文化機関と結びついている。他方の外交面では、金融寡頭制は、独占資本の拡張を支持してそれに道を開き、資本主義の維持と強化のためにたたかうすべての保守的反動勢力を擁護し、支持している。

金融寡頭制は、自己の支配を保証するためにはどんな手段に訴えることも辞さず、すべての分野に政治的反動を打ち立てている。レーニンは次のようにのべている。

「……金融資本は支配をめざすものであって、自由をめざすものではない」[*]。

＊『帝国主義と社会主義の分裂』——邦訳『レーニン全集』第二三巻一一三ページ

今日の情勢は、独占ブルジョアジーによる抑圧がいたるところで強化されていることを証明している。これを根底として、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの矛盾が深まっている。

同時に、政治的、軍事的拡張をともなった経済的、金融的拡張も、各国人民と帝国主義との矛盾、および帝国主義国相互の矛盾をいっそう激化させてきた。現在、中国修正主義者がおこなっている宣伝は、この否定しがたい客観的現実を無視するものである。

銀行資本の集積と集中は、いまや一国の枠内だけでなく、数個の資本主義国または資本主義・修正主義国の枠内でもすすんでいる。こうした性格をもつのが、ヨーロッパ共同市場の共同銀行であり、あるいはまた、コメコンの「国際経済協力銀行」および「投資銀行」である。それらと同様に、西ドイツ＝ポーランド銀行、イギリス＝ルーマニア銀行、フランス＝ルーマニア銀行、イギリス＝ハンガリー銀行といった合弁銀行、さらに、アメリカ＝ユーゴスラビア銀行団（バンキング・コーポレーション）、イギリス＝ユーゴスラビア銀行団その他も、資本主義型の銀行連合である。ソ連は一連の資本主義国に多数の銀行を開設しており、これらの銀行は、チューリッヒ、ロンドン、パリ、アフリカ、ラテンアメリカその他どの所在地でも、資本主義国の銀行の競争者となり、かつ協力者となっている。

中国もまた、銀行の資本主義的統合という、こうした過程の真ただなかにますます深く巻き込まれている。中国は香港、マカオ、シンガポールに銀行を置いているが、それらとは別に今後、日本、アメリカその他の国国にも銀行を設立するであろう。それと同時に中国は、帝国主義諸国の銀行が国内に進出してくるのを認めようとしている。

レーニンが強調したように、最新の資本主義を特徴づけているのは資本の輸出である。現在、帝国主義のこの経済的特徴はさらに発展し、強まっている。今日における世界最大級の資本輸出国は、アメリカ、日本、ソ連、ドイツ連邦共和国、イギリス、およびフランスである。

資本の輸出は、ある時期までは、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツによって——すなわち、発達した工業を有し、植民地の地上・地下資源を搾取していた国国によって——おこなわれていた。その後、戦争と恐慌の結果、イギリス、フランス、ドイツなどいくつかの帝国主義国は経済的に弱体化したが、他方アメリカ帝国主義は肥え太り、超大国にのし上がった。第二次世界大戦後に生まれた情勢のもとで、アメリカはすさまじい勢いで資本を輸出し、他の資本主義諸国にひどい打撃をあたえた。

今日、アメリカは、資本投下や信用・借款の供与、合弁企業による協力という形で、あるいは大型の工業企業の設立を通じて、工業国も含めあらゆる国に資本を輸出している。アメリカの帝国主義および独占資本は、貧困な低開発国に資本を投下しているが、それは、これらの国では生産費は低く、一方、労働者の搾取率は高いからである。かれらが資本投下をするのは、原料を確保し、市場を独占し、工業製品を売り込むためである。

周知のように、資本主義諸国の発展には不均等が生じる。したがって、アメリカおよびその他の諸国の大独占体や大企業が資本を輸出する先は、ほかでもなく、自国の経済発展のために資本投下と技術を必要とする国国なのである。

投下された資本は、金融コンツェルンおよび金融独占資本に莫大な利潤をもたらす。なぜなら、貧困な低開発国では地価はきわめて低く、広大な面積の土地を資源もろとも安く買いたたくことができるからである。また、人民は飢餓に瀕し、極端な低賃金労働を強いられているため、労働力も安価である。計算によると、帝国主義諸国はこれらの国における投資で、一ドルにつき五ドルの収益を揚げていることになる。

アメリカの公式資料によれば、新興諸国にたいするアメリカの直接投資額は、一九七一年から一九七五年までの時期だけで、六五億ドルにのぼったが、アメリカが同じ時期にこれらの国国で揚げた収益は約三〇〇億ドルにも達している。(注)

(注) アメリカの雑誌『サーベイ・オブ・ビジネス』、一九七六年八月号、四四ページ

帝国主義諸国はまた、資本輸出に偽装をこらすために、借款供与という常とう手段を用いる。このような借款や援助なるものを通じて、大コンツェルンとその国籍地である資本主義国は、相手国とその人民に大きな圧力をかけ、かれらを支配下に置いている。低開発国にたいする「援助」や借款は、その国における富の略奪と、発達国における勤労大衆の搾取を元手にしたものであり、しかも、それらは低開発国の富裕層にあたえられているのである。つまり、アメリカの大独占体を例にとって言いかえるならば、かれらはアメリカ人民と他の諸国人民の汗で肥え太っているのであり、

かれらが資本を輸出し借款を供与するとき、そこには、ほかならぬこれらの国国の人民の血と汗がにじんでいるのである。他方で、大独占体がいわゆる第三世界諸国に供与するこうした借款は、実際のところ、これらの諸国を支配する封建・ブルジョア階級に役立っている。

新興諸国が受け入れている借款は、自国人民の首にかけられた帝国主義の鎖の環である。統計資料が示すところでは、これらの国国の債務は五年ごとに倍増している。帝国主義国にたいする低開発諸国の債務額は、一九五五年の約八五億ドルから、一九七七年には一五〇〇億ドル余りに増加した。

世界資本主義は、自らの利益のために、すなわち、地下資源の発見や農業の集約化などによって利潤を何倍にもふやすために、技術を開発してきた。こうしたあらゆる技術や科学技術革命それ自体も、経済的搾取の新たな手口とともに、帝国主義と資本主義的独占体に奉仕するものであって、人民に奉仕するものではない。資本主義は、自らが実現する利潤を前もって計算に入れることなしには、けっして資本投下や借款供与、あるいは資本輸出をすることはない。資本主義・修正主義世界全体にくもの巣のごとく手を広げている大独占体や大銀行は、鉱山や土地の開発、砂漠での石油や水の採掘等等から得られる収益について、具体的資料が示されないかぎり、けっして借款を供与することはない。

また、借款供与の別の形態としては、エセ社会主義諸国――すなわち、自らが歩んでいる資本主義の道を隠蔽しようとしている諸国――にたいしてつねに用いられる形態もある。それは、貿易信

用の形で供与される多額の借款であり、当然にも、短期のうちに返済すべきものである。それは多数の資本主義国によって共同で供与されるが、これらの国は相手国の経済力と支払い能力を考慮に入れたうえで、そこから引き出される経済的利益、さらに政治的利益を前もって計算しているのである。いかなる場合にも、資本家が社会主義建設のために借款を供与するということはありえない。したがって真の社会主義国は、いかなる形態であれ、ブルジョア資本主義国や修正主義国からの借款を受け入れることはけっしてしない。

ソ連のフルシチョフ修正主義者と同じく、中国修正主義者も、「レーニン主義的」で「革命的」に聞こえる多くのスローガンや引用句を費やし、多くの言い回しを用いているが、かれらの実際行動は反動的であり、反革命的である。中国指導部は、帝国主義諸国にたいする自己の日和見主義的立場、さらにはこれらの国国との結託でさえも、あたかも社会主義の利益に一致しているかのように描き出そうと努めている。中国修正主義者がこうした偽装をこらしているのは、プロレタリアートと人民大衆の不満が革命を遂行する強力なてこになりえないように、かれらの目をくらませておくためである。

一例として、国の経済建設、すなわち、自力に依拠した社会主義経済の発展の問題を取り上げてみよう。この原則はそれとして正しいものである。独立と主権を有するそれぞれの社会主義国は、全人民を奮起させ、経済政策を正しく策定し、自国のあらゆる富を適切にかつもっとも合理的に利用するため万全の措置をとらなければならず、また、これらの富を経済的に管理し、自国人民の利

益に従って富をふやさなければならず、他国がそれを略奪するのを許してはならない。これはあらゆる社会主義国における主要な基本方針であり、これにたいして、外国からの援助、すなわち、他の社会主義諸国からの援助は補足的なものである。

社会主義国同士が相互にあたえあう借款は、まったく異なる性格をもっている。このような借款は無償の国際主義的援助をなすものである。国際主義的援助は、けっして資本主義を生み出す恐れはなく、またけっして人民大衆を貧困に陥れるものでもなく、反対にそれは、工業と農業の発展を促し、両者の調和に役立ち、勤労大衆の福利の向上と社会主義の強化をもたらすものである。

経済的に発達した社会主義国は、まず第一に、他の社会主義国を援助する義務がある。このことは、社会主義国が他の非社会主義国とも関係を発展させたりすべきではないということを意味しない。とはいえ、非社会主義国との関係は、互恵を基礎とする経済関係でなければならず、社会主義国または他のある非社会主義国の経済を、より大きな強国に従属させるものであってはけっしてならない。もしも、このような国家間の関係が、強大国による経済的弱小国の搾取を基礎としたものであるならば、その場合には、そうした「援助」は屈従的なものであり、したがってそれは拒否しなければならない。

レーニンがのべているように、金融資本はその網を、世界のすべての国国の上に文字どおり張りめぐらしている。資本家の独占体、すなわちカルテルやシンジケートは、系統的に機能するが、それらはまず自国において国内市場を占取し、工業と農業を支配下に置き、労働者階級と他の勤労人

民を隷属させ、超過利潤をかせぎ出し、こうして世界中の市場を独占する大きな可能性をつくり出す。そのさい金融資本は直接の役割を演じる。

今日われわれが目にしていること——それは、帝国主義が資本主義の最後の段階であるというレーニンの教えと完全に一致している——は、二つの超大国、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義が、市場獲得のために世界の分割をめぐる争奪をおこなっているということである。たとえば、全世界で先鋭化している石油問題は、アメリカの大独占企業によって牛耳られているが、イギリス、オランダその他の石油企業もそれに関与している。アメリカは石油の完全な独占権を得ようと、石油問題で策動をおこなっている。かれらは、サウジアラビアやイランなどの産油国に多額の資本を投下し、大規模な設備を建設するとともに、国王や回教国の指導者、元首たちを大枚のドルで買収することによって、これらの国の支配集団をその支配下に陥れている。産油国の支配者たちは、自国での金融的金権支配を通じて、アメリカやイギリス、その他の国国に投資をおこない、さらには、さまざまな独占企業の株式や豪華なホテル、工場などを買い取ったりする余裕さえできている。

たとえば、サウジアラビアは年間四億二〇〇〇万トンの石油を産出しているが、にもかかわらず、この国は貧困と蒙昧のはびこる半封建国である。勤労大衆が貧困な生活をしているのに、国王や大地主階級は、ウォール街の銀行だけでも四〇〇億ドル以上を預金している。クウェートやアラブ首長国連邦、その他の国国でも事情は同じである。これらの国の支配集団は、自らも利潤の分け前にあずかるために、帝国主義諸国が自国人民の財貨を略奪するのにあらゆる便宜をはかってい

る。

産油国によって投下された資本は支配集団の所有に属するものであるが、それは、これら支配集団の資本とアメリカやイギリスの資本との一つの結合——もちろん、ごく小規模なものではあるが——をなしている。一見したところ、産油国の支配集団はアメリカ、イギリスあるいはフランスの帝国主義と一種の共同出資関係をもち、これらの帝国主義の経済をいかにも左右しているかのようである。ところが実際には、事情はまったく逆なのである。アメリカ帝国主義者や他の帝国主義者の利潤は、産油国の支配集団に分けあたえられる利潤に比べて桁はずれに大きい。これは現代の新植民地主義に固有のことである。現代の新植民地主義は、一部の国国の富を最大限に搾取できるようにするため、ブルジョア資本家支配集団、あるいは封建的支配集団にとって有利な——もちろん、自分自身にも不利にならぬような——一定の周到な譲歩をおこなっている。このような事例は、レーニンの命題、すなわち、私的独占の利益は国家的独占の利益と結合するが、それとまさしく同様に、異なった国国のブルジョアジーの利益はきわめて容易に結合しあうという命題の正しさを実証している。また大独占体は、自分たちほど強力ではないが、多くの資源とりわけ鉄、クロム、銅、ウランその他の鉱山など、地下資源を握る独占体と結合することもある。

政府による借款、信用、援助の供与は、今日、資本輸出のもっとも普及した形態の一つになっている。この種の資本輸出を実行しているのは、とくにソ連やその他の修正主義国である。

こうした信用供与、「援助」や借款は、資本主義的利潤を引き出すことのほかに、政治的目的も

あわせもっている。借款を供与する国は、特定の派閥集団——すなわち、債権国の政治的、経済的、軍事的権益を擁護する派閥集団——の政治的、経済的支配を支持し、それを強化することを狙っているのである。そうした借款は政府間の協定で結ばれるため、それは債権国にたいする債務国の経済的、政治的従属をよりいっそう強めさせる。こうした資本輸出形態の典型的な例が「マーシャル・プラン」であり、それは第二次世界大戦後、西ヨーロッパ諸国へのアメリカの政治的、軍事的拡張の経済的基盤となった。ソ連修正主義者はインドやイラク、およびその他の国国に、経済の発展と国営工業部門設立のためと称していわゆる援助を提供しているが、これも同じ性質のものである。

現在、アメリカ帝国主義、ソ連社会帝国主義、および資本主義工業国は、資本蓄積から得る利潤が極度に増大するほどの発展段階に到達している。資本の蓄積は多大な利潤を生み出し、それは独占者、すなわち金融寡頭制の懐にはいるが、かれらはこの収益を貧困にさいなまれた勤労人民のために役立てるのではなく、別のより大きな利潤が得られそうな国国にそれを輸出している。中国が「第三世界」と呼んでいるのは、そういった国国のことである。しかしながら、独占者たちはこの種の資本投下を、発達した資本主義諸国にたいしても同様におこなっている。

ヨーロッパへのアメリカ資本の進出過程とその政治的、経済的狙いについては、多くの著書が書かれている。これについての明確な叙述は、アメリカの著述家ジェフリー・オーエンの著書に記されている。彼は、『国際企業』という章の冒頭でこうのべている。アメリカの対外投資の発展は、

一つの概念、すなわち、アメリカの企業は海外に利益を有する企業ではなく国際的企業を代表している、という概念に従ってなされてきた、と。だが、これらの企業の本社がアメリカにあるということ、このことは、アメリカの個個の大企業が自国内を網羅し、アメリカ国内の産業や需要者の要求を満たすだけにとどまらず、諸外国にもその網の目を広げようと志向していることを意味するものである。これらの企業はより大きな利潤をかせぐために、「過剰資本」を他の諸国に投下している。「ソコニー・モービル」社、「スタンダード・オイル・オブ・ニュージャージー」社などの巨大企業は、その利潤の半分近くを、外国での収奪と搾取からかせぎ出している。およそ五〇〇の企業が、毎年約一〇〇億ドルの利潤を国外で確保している。このように、外国に資本を投下している企業は三〇〇〇社以上にのぼる。「多国籍企業」、「国際資本主義」などといった慣用語や名称が、ジャーナリズムや銀行業務で日常的に使用されるようになったのは、このようにしてである。

オーエンは、一九二九年には、ヨーロッパの企業のうち一三〇〇社以上はアメリカ企業の所有または統制下にあった、とのべている。それは、ヨーロッパにたいするアメリカの産業攻勢の第一段階であった。第二次世界大戦に備えて規制がおこなわれたため、アメリカ資本の浸透は一時的に中断した。世界におけるアメリカ企業の対外直接投資額は、一九二九年から一九四六年にかけて、七五億ドルから七二億ドルへと減少した。しかし、第二次世界大戦後の一九五〇年には、アメリカの対外投資額は一一二億ドルに増加し、そのうちの半分がラテンアメリカ諸国とカナダとに集中した。ラテンアメリカへの資本投下がおこなわれたのは、バナナや他の農産物と並んで、石油、銅、

鉄鉱石、ボーキサイトなどの原料を搾取するためであった。カナダへの資本投下は鉱業と石油を中心におこなわれたが、カナダが隣接国であることやその他の有利な進出条件によって、資本投下は大規模に進展した。

一九五〇年代には、ヨーロッパも同様に、アメリカの資本投下にとっていま一つの重要な対象となった。この大陸への資本投下は、通信、大量商品生産、総合設備の面で急速に拡大した。資本投下とあわせて、アメリカの製品や物資もどっと流れこんだ。

第二次世界大戦後の資本主義市場に生じた状況は、アメリカの資本投下にいっそう大きな推進力をあたえたと、この同じ著者は指摘している。アメリカの対外投資の伸びを数字で見てみると、一九四六年には総額で七二億ドルであったが、その後増加しはじめ、一九五〇年には一一二億ドル、一九六四年には四四三億ドル、さらに一九七七年には六〇〇億ドル以上に達した。

アメリカの企業は、その活動を不断に世界的規模で拡大することによって、現地企業との競争をよりいっそう激烈なものにし、アメリカの巨人に支配されるという不安感を募らせた。この問題は、低開発諸国では、すなわちアメリカの企業がそこの基幹産業部門を支配し、国民経済に支配的影響力をおよぼしている国国では、なおさら先鋭である。言いかえれば、これらのアメリカ巨大企業は、現地国の政府とそこの経済を自己の統制下に置き、しかも事実上、それらを自らの手で運営しているのである。

アメリカ石油企業とメキシコ政府とのあいだで、長期にわたって闘争がつづけられたことは有名

だが、それは一九三八年、メキシコ政府側の対抗策が破綻したことによって決着がついた。同じような結末を見たのが、イギリス石油独占とイラン政府との闘争であり、これはモサデクの失脚をもって終わった。そうした破滅的結果に至るような闘争はたえず起こり、しかもそれらは、アメリカ大トラストの勝利に終わっている。

巨大石油企業は世界的範囲で活動している。投資先の国国で、石油部門のすべての資本と生産を完全に支配し、政府を自分の言いなりにするなどのことは、巨大石油企業にとってはあたりまえで、しかも必要なこととなっている。というのは、もしもこれらの企業にとってそれが不可能であるとしたら、世界的規模でのかれらの活動を調整するのに困難が生じるだろうからである。だからこそ外国の大企業は、現地の資本家が、アメリカやその他の帝国主義諸国の出資者からあたえられる以上に利潤の分け前を得ようとすると、それに反対するのである。

ヨーロッパ、カナダ、アジア、アフリカなどにあるアメリカの企業は、多くの国国の経済を事実上自分たちが支配するという状況をつくり出した。これらの国国の政府は、アメリカが軍事問題でちょうどそうであったように、ヨーロッパ経済においても、「リーダーシップ」を握るようになったことに非常な恐れを抱いている。そのために、ヨーロッパの資本主義工業国は、たえず、しかもますます大量に国内へ流入してくるアメリカ資本の浸透を阻止しようと努めている。

中国指導部は、一九世紀以来工業化をとげてきたヨーロッパ諸国は、より多くの資本をアメリカに投下しつつあると主張している。だが周知のように、アメリカにたいするヨーロッパの資本投下

が主として有価証券、株式、債券、預金などの形でおこなわれているのにたいして、ヨーロッパへのアメリカの資本投下は、ヨーロッパ経済のもっとも重要な分野で支配的地位を占めているのである。

オーエンはアメリカの資本投下の増大を正当化しようとして、次のように主張している。ヨーロッパ諸国は、たとえばエレクトロニクス産業やコンピューター産業など、科学的基盤をもつ自国の工業を発展させることを望み、そのために努力を払っている、と。これらの産業はある程度まで、ヨーロッパ諸国における技術上の進歩、輸出の増加、そして経済全般の成長に寄与するものである。しかしこの分野では、アメリカの企業はヨーロッパの対抗企業に先んじており、自らの利益にそってこうした技術進歩を統制している。

たとえばコンピューター産業では、ヨーロッパの当該企業は、アメリカのＩＢＭ（インタナショナル・ビジネス・マシンズ）社との競争から自らを守るために、互いに密接な連携を築いている。というのも、同社はアメリカ市場の七〇パーセントを占有しており、世界市場での占有率はなおいっそう大きいからである。

それと同時に、アメリカの大企業が志向しているのは、現地企業との合弁企業を開設することである。搾取をごまかすために、多くの企業は出資率一〇〇パーセントの子会社をもつことを避け、四九対五一パーセント、ないしは五〇対五〇パーセントの出資比率で合弁企業を設立している。アメリカの日本でのやり方がそうであったし、またユーゴスラビアでのやり方もそうであった。ユー

ゴスラビアは、自力に依拠して社会主義を建設しているという印象をつくり出そうとしているが、実際にはチトー一味は、アメリカや発達した工業国の大企業にたいしてユーゴスラビアを経済的に割譲してしまったのである。そうすることによって、チトー一味はユーゴスラビアの自由と独立をも切り縮めてしまった。

「ゼネラル・モータース」、「フォード」、「クライスラー」、「ゼネラル・エレクトリック」など、アメリカの多くの大企業には、事実上、出資率一〇〇パーセントの自社の子会社を外国にもとうとする傾向が見られる。しかしこのような子会社は、オーエンに言わせれば、国有化の問題をけっして無視したものではなく、この点については、「問題なのは、現地の出資者とともに企業を設立することではなく、親企業の株式所有制度の国際性を促すことである」との回答があたえられているというのである。これが、資本主義の「国際性」という概念であり、とりわけ、「ゼネラル・モータース」が熱心に擁護しているものである。

このように、アメリカ帝国主義資本およびアメリカ産業界は、自己の植民地や帝国を築き上げるために対外投資をおこなうという方針をとっている。この事実一つをとってみても、アメリカ帝国主義の力が――中国修正主義者の主張とはちがって――いささかも衰えていないという命題は、はっきりと例証されている。それどころか、アメリカ帝国主義はいっそう強大になり、外国で多大な利権を獲得するとともに、それらの国の重要経済部門の多くを自ら運営している。かれらはまた、他国政府に無数の困難をもたらし、しばしばこれらの国で意のままにふるまい、しかも多くの国国

の政府をその指揮と統制のもとに置いている。もちろん、こうした過程には起伏があるが、しかし、全般的なすう勢が示すところでは、アメリカ帝国主義の力は衰えていない。

現在、われわれが生きているこの時期において、ソ連社会帝国主義というもう一つの超大国も資本を輸出し、各国人民を搾取することに専念している。この超大国が輸出する資本は、資本主義国に変質したソ連の国内で実現される剰余価値から生まれたものである。

資本主義の復活は、今日のソ連において、少数者が圧倒的多数の人民を支配し、搾取するという社会の両極分化へと導いている。現在では、官僚、テクノクラート、および上層の創作的インテリゲンチャからなる階層が形成され、それは、労働者階級と広範な勤労大衆の過酷な搾取から引き出される剰余価値を取得し、分けあう一個のブルジョア的搾取階級の形態をなしている。剰余価値がそれぞれの資本家の資本の大きさに応じて取得される典型的な資本主義国とは異なって、ソ連や他の修正主義諸国では、この剰余価値は、国家、経済、科学、文化等等の序列制度のなかでブルジョア上層部の個個の人物が占める地位に応じて分配される。勤労人民の汗と苦役からしぼり出された剰余価値を取得するために、高額の給与、日常的または特別の報酬、賞与や刺激、特権などが体系的な制度に仕上げられている。「集団的資本家」をなす階層は、資本主義的抑圧・搾取を保証する一群の法律と規定によって、こうした収奪を保持している。

ソ連経済はいまや、世界資本主義体制の中に組み込まれている。アメリカ、ドイツ、日本、およびその他の国国の資本はソ連に深く浸透しているが、他方では、ソ連の資本も他の国国に輸出さ

れ、多様な形態で現地の資本と融合しつつある。

ソ連がまず第一に、衛星国を経済的に搾取していることは、一般に知られているところである。だが現在ソ連は、市場や資本投下のための領域、原料の略奪、世界貿易における新植民地主義的慣習の維持等等のために、他の資本主義諸国と競いあい、争奪しあっている。

ソ連の新しいブルジョアジーは、自己の覇権をおし広げようとして資本を輸出しているが、そうすることでかれらは、非常に強大なアメリカ帝国主義との競争だけでなく、日本、イギリス、西ドイツ、フランスなど他の発達した資本主義諸国との競争にも直面しているのである。これらの諸国は超過利潤を追求しつつ、アフリカ、アジア、ラテンアメリカばかりでなく、修正主義ソ連の庇護下にある東ヨーロッパ諸国にも資本を輸出し、さらには、直接ソ連にも資本を輸出している。

ソ連、チェコスロバキア、ポーランドなどの——そして、いまや中国をも含めた——いわゆる社会主義諸国の支配集団は、外国資本が自国内に流入してくるのを許容している。というのも、外国資本は人民にとっては重い負担になるが、支配集団にとっては役立つからである。コメコン諸国は債務で首が回らなくなっている。これらの国国は、西側諸国に五〇〇億ドルもの債務を負っているのである。

ユーゴスラビアは、修正主義諸国のなかでは、最初に外国資本の自国経済への浸透を認めた国の一つであった。ユーゴスラビアはまずはじめに借款を受け入れ、次に特許を買いとり、その後は合弁企業を設立するようになった。ユーゴスラビアでは、合弁企業の設立に関する法律が一九六七年

に制定され、合弁企業の資本の四九パーセントを外国企業の所有とすることが認められた。一九七七年には、ユーゴスラビアにおける合弁企業は一七〇を数えた。ユーゴスラビアは、資本主義的企業が活動をおこない、最大限利潤を確保するうえで、このうえもなく有利な条件を保証してきたのである。ユーゴスラビアでの現象が証明しているように、ユーゴスラビアに投下された外国資本は、この国を資本主義国に転化させた決定的な要因の一つであった。アメリカやその他の富裕な資本主義国家は、こうした資本投下で何一つ失うものはなかった。それどころか、これらの国は膨大な利潤をかせぐとともに、他方では、ユーゴスラビアの労働者階級と農民の窮状をいっそうひどいものにしたのである。資本の輸出は、世界の大多数の民族と国とにたいする搾取の、また、一握りのもっとも富裕な国家の資本主義的寄生性の、強固な基礎である、とレーニンはのべている。

資本主義諸国は、同様に中国でも莫大な利潤を上げている。われわれは、アメリカ、日本、西ドイツ、その他の国国の資本が、現在、何十億ドルという規模で中国になだれ込んでいるのを目にしている。日本とのあいだでは、油田や揚子江水力資源の共同開発に関する協定が調印された。またドイツとは、炭鉱建設についての協定が結ばれた、といった具合である。中国にたいしておこなわれている、また今後おこなわれる資本投下は、必ずや外国の資本家たちにぼろいもうけをもたらすであろうが、同時にまた、それは中国での資本主義の基盤を強化するであろう。

ある資本主義国から別の資本主義国あるいは修正主義国への資本輸出は、輸出国または相手国の大小にかかわりなく、つねに資本による人民の搾取の一形態をなしている。このような搾取は、相

手国の経済的、政治的従属をともなうものである。

レーニンが指摘しているように、**独占体は国内市場をその手に収めたのち、工業製品と原料のための世界市場を再分割し、経済的にそれを占取するために闘争をおこなう。**各国の独占者たちは、競争とかれら自身の利潤への欲望のために、いやおうなしに一時的な協定を結び、また、製品販売と原料購入のための国際市場を分割するために、相互のあいだで同盟や連合を結ぶ。発達した資本主義諸国は、たとえ自分たちが原料やエネルギーの備蓄を有している場合でも、他の国国に攻撃をしかける。というのも、これらの国国では、生産費は自国よりも低く、ことに労働者の賃金は数倍も低いからである。

周知のように、石油資源と市場を獲得するためにおこなわれてきた闘争は、いまもなおつづいている。この闘争の結果、何十何百という私企業が破産したが、七大独占体(悪名高いエッソ、テキサコ、シェルなどを含む、アメリカ系五社、イギリス系一社、イギリス＝オランダ系一社)からなる国際石油カルテルは、西側世界の資本主義諸国において、採油高と石油売上げ高の六〇パーセント以上、また石油精製高の約五四パーセントを占めることができたのである。

今日、銅鉱石や錫、ウラン、その他の貴重な戦略的鉱物についても、同じように資源と市場の分割がおこなわれている。

イギリスやフランスのような旧植民地領有国の多くは、かつての植民地国とのあいだで特別の、

いわば優先的な協力協定を結び、ほとんど排他的な経済上、通商上の特権を保証されている。いわゆるドル圏、スターリング(ポンド)圏、フラン圏、あるいはルーブル圏とは、独占体や個個の帝国主義国家のあいだでの世界の経済的分割を指しているのである。

アメリカ帝国主義、ソ連社会帝国主義、およびその他の帝国主義諸国は、旧植民地国とおこなっている不平等な差別貿易を通じて、さまざまな手口で最大限利潤を確保している。今日、ＯＰＥＣ諸国を除く「発展途上」国だけでも、貿易収支赤字は約三四〇億ドルにものぼっている。

今日の条件のもとで、とりわけ現在の経済的危機という状況のもとで、独占体は生産割当、価格、販路等等について、資本主義諸国の政府とも直接に協定を結んでいる。また、ヨーロッパ共同市場やコメコンなどのような機構が存在していることも、世界の経済的分割が今日もなおつづいていることの明白な証拠である。

世界のこのような経済的分割、独占体の支配、そして他国の国内生活と経済発展にたいするかれらの統制は、労働と資本との矛盾、各国人民と帝国主義との矛盾、および帝国主義間矛盾をよりいっそう激化させている。

「第三世界」を「第二世界」およびアメリカ帝国主義と和解させようとする中国の「三つの世界」論は、こうした現実に合致しない。「三つの世界」論は、いわゆる「第三世界」にたいする、アメリカ、イギリス、ドイツ、日本、フランスその他の国の独占体によるすさまじい攻撃が、覇権を追求するすべての帝国主義国にたいする各国人民の反抗を増大させていること、またそれが、この

両者のあいだの非妥協的な斗争の客観的条件を拡大していることを見ようとしない。さらに他方では、資本主義の客観的発展法則である帝国主義諸国の不均等発展によって、これらの国国は世界中で経済的拡張を追求するために競いあい、相互の軋れきを深めている。

　これらの矛盾を和解させようと努め、しかも、社会民主主義やあらゆる色合いの修正主義者が久しく唱えてきたのと寸分たがわぬことを唱える中国の「三つの世界」論は、レーニン主義の戦略に真向から対立するものである。レーニン主義の戦略が目的としているのは、革命のためにプロレタリアートを、そして解放のために各国人民を準備させるために、それらの矛盾を否定することなく、逆に深めることである。

　レーニンが帝国主義の分析のなかで指摘しているように、前独占的資本主義から、資本主義の最高の、そして最後の段階、すなわち**帝国主義の段階**への移行にともなって、**帝国主義列強のあいだでの世界の領土的分割が完了する。**

> 「……この時期の特徴は地球の最後的分割である……。もっともここに最後的というのは、再分割が不可能だという意味ではなく――それどころか、再分割は可能であり、不可避である――、資本主義諸国の植民政策が、地球上の未占取の土地の占拠を完了したという意味である。世界ははじめて分割されつくしたのである。だから、今後にきたるべきものは、再分割、すなわ

ち、ある『所有者』から他の所有者への移転だけ、であって……*」。

＊『帝国主義論』——邦訳『レーニン全集』第二二巻二九四ページ

世界の大多数の人民を物理的、経済的に、また政治的、イデオロギー的に搾取していた旧来の古典的植民地主義は、第二次世界大戦後、新植民地主義に転化した。この新植民地主義は、経済的、政治的、軍事的、イデオロギー的諸方策の一つのまとまった体系をなすものであるが、この体系を帝国主義が打ち立てたのは、自己の支配を維持し、旧植民地および他の多くの諸国にたいする政治的支配と経済的搾取を確保するためであり、また他方では、戦後に生み出された新たな条件に自らを適応させるためであった。

この新たな条件とは何か。

戦後において、帝国主義諸国——フランス、イギリス、イタリア、ドイツ、日本、アメリカは、戦前に存在していた状況を力ずくで維持しうる状態にはなかった。たとえばフランスは、モロッコやアルジェリア、チュニジア、および他のアフリカ諸国を、もはや以前のような植民地状態につなぎとめておくことはできなかった。イギリス、イタリアやその他の帝国主義についても同じことが言えた。

第二次世界大戦は、世界の力関係に根本的な変化を引き起こした。それはファシスト列強の敗北

へ導くと同時に、旧植民地領有国をいちじるしく弱体化させ、それらを根底から揺るがした。反ファッショ戦争は、いたるところに――この戦争の嵐に巻き込まれなかった国国にさえ――民族解放の課題を呼び起こした。ファシストのくびきから脱するために反ファッショ連合国とともに参戦した旧植民地国の人民は、植民地的隷属に逆もどりすることはできなかったし、またそれに耐えることももはやできなかった。ナチズムにたいするソ連の勝利、社会主義陣営の形成、そして中国の解放は、各国人民の民族的意識の覚醒とかれらの解放闘争にきわめて大きな衝撃をあたえた。植民地の広範な人民大衆は、かつての状態を変革しなければならないことを自覚するようになった。インドシナ、北アフリカ、その他の地域で解放戦争がまき起こった。

こうした状況に迫られて、多くの植民地領有国は、植民地に一片の自由や独立もあたえずに搾取し統治するという従来の方法が、時代遅れになっていることを悟ったのである。植民地を領有する帝国主義諸国がこうした結論に到達したのは、かれらが民主主義的感情をもち、人民に自由をあたえることを望んだからではなく、植民地人民によって圧力をかけられたからであり、またかれら自身が軍事的、経済的、政治的、イデオロギー的に旧植民地主義を維持しえないほど弱体化していたからである。しかし、フランス、イギリス、イタリア、アメリカやその他の帝国主義は、これらの諸国と人民にたいする搾取をあきらめようとはしなかった。当時の事情のもとで、それぞれの帝国主義国はこれらの人民に自治を認めたり、あるいは、一定の期間を経てかれらに自由と独立をあたえると約束したりせざるをえなかった。かれらが、民族自治の自覚を養うため、また、そのための

幹部を現地で育成するためと称して、このような猶予期間をあたえた真の狙いは、帝国主義的搾取の別の新たな形態、すなわち新植民地主義を準備するとともに、これらの諸国と人民が自らの自由をかちとったかのような錯覚をつくり出すためであった。

以上が、世界帝国主義が重大な敗北を喫し、帝国主義の植民地体制がその危機の度をよりいっそう深めた戦後の局面であった。第二次世界大戦によって帝国主義が弱体化し、その結果、資本主義が腐朽しつつあったこのような時期に、アメリカはその隙に乗じて、いわゆる自由と独立を得た植民地人民に、新たな、よりいっそう過酷な搾取をおしつけたのであった。すでに多少とも力を弱めていた他の帝国主義諸国の旧植民地にたいして、アメリカはその帝国主義的支配を拡張していった。

多くの旧植民地国人民は、旧宗主国の承認を得たかぎりにおいて「独立」と「自由」を認められてはいたものの、帝国主義がこの承認ずみの「独立」と「自由」をただちにあたえようとはしなかったために、かれらは武器を取ってたたかわなければならなかった。とりわけフランス帝国主義者は、戦後においてもなお、フランスの強大さ、すなわちその「威光」を保とうと努めていた。こうして、アルジェリア、ベトナム、および他の多くの人民は長期にわたる解放闘争を開始し、ついに解放をかちとったのである。かれらがそれをどのようにして達成したのか、また、どんな社会勢力がたたかったのかといった点については、ここでは立ち入らないでおこう。ただ、フランスやイギリスという古い帝国主義の力が衰えていたのは事実である。こうして、帝国主義は腐朽しつつある

というレーニンの命題、すなわち、資本主義・帝国主義の古い社会は革命運動によって、また、それまで抑圧され隷属させられていた各国人民の自由への願望と志向とによって、掘り崩されつつあることが実証された。

アメリカ帝国主義はこの時期に肥え太り、ドル圏を拡大し、フラン圏やスターリング(ポンド)圏にあった地域を支配下に置くとともに、各国人民への最大限の搾取に基盤を置く覇権的帝国主義としての自己の支配力を保持するために、いわゆる自由と独立を獲得した世界の多くの国国におびただしい数の軍事基地を設置し、親米派の政治的支配集団を打ち立てた。もちろん、こうした搾取にともなって、下部構造と上部構造にも一連の変化が起こった。

金融資本はまた、それ自身に固有のイデオロギーを生み出し、このイデオロギーに従ってプロレタリアートを搾取し、世界を征服する。金融資本は、さまざまな形態のにせの自由と独立を糖衣でくるむことによって、またいくつかの民主主義政党や他の諸政党を成立させることによって、各国人民にたいする支配を完成し、これを正当化する。

アメリカの資本投下にともなって、また銀行や多国籍企業の設立にともなって、アメリカ的生活様式もその特有の腐敗性といっしょに輸出される。

帝国主義大国による資本輸出は植民地をつくり出すが、この植民地とは、今日では、新植民地主義の支配する国国のことである。これらの国国はいわゆる独立を有してはいるものの、それは形式的なものにすぎない。言いかえれば、資本輸出の過程それ自体は以前と同じようにすすめられてい

るが、ただし現在では、それは異なった形態で、「甘ったるい」解釈と宣伝のもとにすすめられているのである。これらの国の人民にたいする無慈悲な搾取は依然としてかわらず、むしろいっそう狂暴なものになっており、天然資源の略奪も同様につづけられている。

現代における最大の新植民地主義勢力はアメリカである。一九七三年から七五年までの三年間について見ると、従属または半従属状態にある旧植民地にたいするアメリカの政府投資と民間投資は、もっとも発達した資本主義・修正主義諸国の同地域向け投資総額のなかで、約三六パーセントを占めた。(注)

(注) ドイツ連邦共和国統計年鑑、一九七七年

帝国主義国と旧植民地国のあいだの経済上、政治上、軍事上の条約や協定は隷属化のためのものであり、旧植民地国を奴隷状態につなぎとめるための帝国主義の手頃な武器である。次のように指摘したレーニンの言葉は、以前と同様今日もなおまったく有効である。

「……政治的に完全な独立国家をつくると見せかけて、その実は、経済、金融、軍事の点で完全に自分に従属する国家をつくっている帝国主義列強が、系統的におこなっている欺瞞を、すべての、とくにおくれた国のもっとも広範な勤労大衆にたゆむことなく解明し、暴露して見せな

ければならない*」。

*『民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案』——邦訳『レーニン全集』第三一巻一四一ページ

アメリカ帝国主義、ソ連社会帝国主義、その他新旧の帝国主義諸国は、各国人民を自分たちの支配下につなぎとめるために、近隣諸国間であれ、一国の内部のさまざまな社会集団のあいだであれ、隙あらばどこででも内紛をあおり、そののちには、仲裁者もしくは一方か他方の支持者という役割で他国の内政に干渉し、自分たちが経済的、政治的、軍事的に他国に居坐ることを正当化しているのである。事実が示しているように、超大国が他国人民の内政に干渉するときには必ず、問題は未解決のままになるか、あるいは、帝国主義と社会帝国主義の地位が強化されるという結果に終わる。中東での事態、ソマリアとエチオピアとの紛争、カンボジアとベトナムとの戦争などは、このことを物語っている。

アメリカ、ソ連、および他のあらゆる資本主義国は、資本を投下すると同時に、この資本を受け入れる国国で、自分たちの地位をも強固にし、市場と勢力圏をめぐって闘争している。このことは、個個の資本主義国のあいだの、また、巨大コンツェルンのあいだの——相互に結びつきのないものも、あるいは相互に依存しているものも——軋れきをもたらしている。こうした軋れきは局地戦争の火種となり、全面戦争につながることさえありうる。レーニン主義がわれわれに教えている

ように、これらの原因で勃発する戦争は、それが局地戦争であるか全面戦争であるかを問わず、略奪的性格をもつものであって、解放的性格をもつものではない。人民が外国侵略者に抗して決起するとき、また、かれらが帝国主義、社会帝国主義、世界資本と緊密に結びついた国内の資本主義ブルジョアジーに反対して決起するときこそ、はじめて、それは正義の解放戦争となるのである。

巨大世界資本の代表者たちは、現在の国際経済関係を是正する必要性なるものについて、また「新しい世界経済秩序」――中国指導部もこれを支持している――の確立について、大騒ぎを演じている。かれらに言わせれば、この「新しい経済秩序」とは、「世界的安定のための基礎」として役立つものになるというわけである。一方、ソ連修正主義者の側は、国際経済関係のいわゆる新機構の創設について語っている。

帝国主義国や新植民地主義国がこれらの策動と計画をすすめているのは、新植民地主義に生命力を保たせ、それを延命させて、各国人民にたいする抑圧と収奪を維持するためである。しかし、資本主義と帝国主義の発展法則は、ブルジョアジーや修正主義者の意志に左右されるものでもなければ、かれらの理論的考案に左右されるものでもない。レーニンがのべたように、植民地主義と新植民地主義とにたいする一貫した闘争、すなわち革命こそが、これらの矛盾から抜け出す道である。

レーニンはまた、帝国主義の基本的な経済的諸特徴を分析したさいに、帝国主義の歴史的地位を規定した。レーニンが強調したように、**帝国主義は資本主義の最高の段階であるばかりでなく、その最後の段階であり**、プロレタリア革命の前夜である。かれは次のように指摘している。

「帝国主義とは、資本主義の特殊な歴史的段階である。……㈠独占資本主義、㈡寄生的な、または腐敗しつつある資本主義、㈢死滅しつつある資本主義、である」*。

＊『帝国主義と社会主義の分裂』——邦訳『レーニン全集』第二三巻一一二ページ

現代の資本主義世界における現実は、このような結論を余すところなく立証している。レーニンが証明したように、帝国主義におけるあらゆる社会的・経済的病弊の経済的基礎は独占である。独占は、資本主義経済の諸矛盾を克服するには無力である。レーニンは帝国主義の寄生性と腐朽を、独占のもつ次のような傾向と有機的に結びつけた。すなわちそれは、生産力一般の発展を阻害し、各部門間および国民経済全体の不均等な発展を強め、人的、物的な生産能力を遊休化するという傾向であり、また、科学技術の新たな進歩を大衆の利益と社会全体の発展に役立てるのを妨げようとする傾向である。

独占体は利潤への欲望と競争とに駆られて、生産過程に先進的技術を導入する。しかし、帝国主義の歴史的発展過程全体における支配的傾向は、発展の不均等性とその抑制である。

工業の分野、とりわけ軍需産業における科学研究開発費は、アメリカを例にとってみると、一九五〇年の二〇億ドルから、一九六五年にはおよそ一一〇億ドルに、さらに一九七二年には約三〇〇

億ドルに増大した。大企業はしばしば科学研究上で困難に出くわすが、なにか目新しいものが発見されるやたちまち、特許を買い占め、技術者を雇い入れる。けれども、かれらが研究をおこなうのは、それがかれら自身の利益にとって必要な場合だけである。

もちろん、技術開発と技術革命の分野で優先的に資本が投下されるのは、資本投下にとって何よりもうま味のあるもっとも重要な部門である。なぜなら、これらの部門ではいっそう大きな利潤が見込めるからである。軍需産業はその中でも首位を占めているが、それは、この部門での利潤率がもっとも高いからである。たとえばアメリカは、一九六四年には、航空・ミサイル部門での科学研究に三五億六五〇〇万ドルの費用を投じた。また同年、電気産業と電気通信産業に一〇億五三万七〇〇〇ドル、化学工業に一億九六〇〇万ドル、機械工業に一億三六〇〇万ドル、自動車工業に一億七四〇〇万ドル、科学機器産業に一億七二〇〇万ドル、ゴム工業に三八〇〇万ドル、石油工業に八〇〇〇万ドル、メタン工業に九〇〇〇万ドル、等等の科学研究費が投じられた。

帝国主義の腐朽のあらわれである経済の軍事化は、今日の諸条件のもとで、すべての資本主義国と修正主義国に固有の特徴となっている。だがその中でも、とくにアメリカとソ連では、経済軍事化の過程は未曾有の規模に達している。この両国の直接軍事支出は、合計すると、年間二四〇〇億ドルという天文学的な額になるほどの増大ぶりである。

またアメリカとソ連は、覇権と世界支配をめざすその政策において、武器取引を大いに利用しているが、これもまた帝国主義の腐朽の明確なあらわれである。この両国は毎年二〇〇億ドル以上に

相当する武器を売却している。その他、イギリス、西ドイツ、フランス、イタリアなどの帝国主義諸国も武器を売り込んでいる。帝国主義者がおこなうこの武器取引の得意先は、チリ、ブラジル、アルゼンチン、イスラエル、スペイン、南朝鮮、ローデシア、南アフリカ連邦などにおけるファッショ的反動一味である。同様に、戦略的原料や石油に富む国国もこれらの得意先のなかに数えられており、帝国主義者はこれらの国にたいして、自国の富の略奪を認めさせるための餌として兵器を供与している。

過剰生産恐慌がますます頻繁に引き起こされていることは、現代における独占資本主義の腐朽と寄生性の明白な証拠である。いまやきわめて深刻化している恐慌の爆発は、生産と消費の無政府性、自然発生性、および不均等性についてのマルクス主義理論の正しさを立証するものであり、またそれは、「恐慌のない」資本主義の発展とか、資本主義の「統制された資本主義」への転化という、ブルジョア「理論」を論駁するものである。

マルクスが発見した資本主義的蓄積の一般法則、すなわち、一方では勤労人民の貧困化がすすみ、他方では資本家の利潤が増大するという法則は、今日の資本主義社会においてますます強力に作用している。一方のプロレタリアと、他方の一握りの少数者からなるブルジョアへの社会的分化の過程は深まりつつある。

プロレタリアートの上層、すなわち労働貴族を買収するうえで、いっそう大きな経済的可能性をもった現代の帝国主義体制は、この労働貴族をいちじるしく大規模に成長させている。

今日、金融寡頭制は、プロレタリアートを欺き、混乱させ、かれらの革命的気概をくじくために、労働貴族を大いに利用している。レーニンが、口先では社会主義者でありながら実際には帝国主義者と名づけた人物は、通常こうした労働貴族から生まれてくる。社会民主主義、「ブルジョア的労働者党」、労働組合の日和見主義的指導部、現代修正主義者などはみな、レーニンが言ったことの表現にあてはまる。レーニンが指摘したように、帝国主義は日和見主義と結びつき、また、日和見主義者は帝国主義を維持し強めるために手を貸している。レーニンは次のようにのべている。

「帝国主義との闘争は、それが日和見主義にたいする闘争と不可分に結合されないなら、一つの空虚な虚偽の空文句にすぎない、ということを理解したがらない人々ほど危険なものはない*」。

＊『帝国主義論』――邦訳『レーニン全集』第二二巻三四九ページ

帝国主義の腐朽は、すべての分野、とりわけ政治的、社会的分野における反動の増大と強化にもはっきり見受けられる。実践が確証しているように、独占ブルジョアジーは、階級闘争が激化しつつあるのを見てとったときには、あらゆる仮面を投げ捨て、勤労大衆が自らの血を流してたたかいとったわずかな権利さえも奪い去る。世界の多くの国国で打ち立てられたファッショ的政権とファッショ的独裁は、その証明である。

混乱状態にあるこうした腐敗した制度は、巨大な近衛軍と、動員され、完全武装したきわめて多人数の警察によってまるごと支えられている。これらの軍隊や警察力はみな、いかなる種類の抵抗であれ、支配するブルジョアジーが張りめぐらす法律の網に規定された限界をこえる者を、すべて阻止し鎮圧するために発動されている。軍隊やその他の弾圧装置の幹部は、高給を受け富裕な生活を送っている。たとえばイタリアで軍隊や警察、騎銃兵について聞く話は、勲章を受けたことと、暗殺されたということばかりである。

ブルジョア国家をおおうこうしたきわめて混乱した状況のもとで、ギャング行為がはびこり、広がっている。それは、資本主義制度そのものによって培養されたものである。それは退廃のあらわれであり、抑圧と搾取のブルジョア制度が引き起こしている絶望と混迷の反映である。こうしたギャング事件はブルジョア国家に問題を引き起こし、その悩みの種となっており、ブルジョアジーはそれを防止しようと試みている。しかし同時にかれらは、貧困な生活を送っている広範な勤労大衆をテロルで威嚇するためにギャング行為をあおり立て、利用している。多くの資本主義国でギャングは一つの産業となっており、銀行・商店の強盗から、誘拐や巨額の身代金のための人質の監禁にまでおよんでいる。一部の国国では、ギャング行為はさまざまな異なる集団によっておこなわれている。これらの集団はしばしば、「革命的」あるいは「共産主義的」に聞こえる名称をもっている。ブルジョアジーは、ファッショ的クーデターに有利な状況を準備し、その決行を正当化するために、これらの集団が自由に行動するのを容認している。こうしたギャング行為は、あたかもブルジ

ョア制度に反対して活動している「共産主義グループ」によって遂行されたものであるかのように宣伝されているが、それは革命と社会主義の威信を失墜させるためである。

われわれは、結論として次のように言うことができる。今日の情勢のもとで、アメリカ帝国主義やソ連社会帝国主義であれ、あるいはその他のいかなる色合いの帝国主義であれ、帝国主義は全体として衰退と腐朽の段階にあり、古い社会は革命によって根底から覆えされ、新しい社会、社会主義社会に置きかえられるであろう。この新しい社会主義社会は現存しており、今後拡大されるであろう。ソ連においてソ連修正主義者が社会主義を裏切ったという事実にもかかわらず、また、中国では日和見主義が支配し、新手の社会帝国主義が台頭しつつあるという事実、さらにはかつての人民民主主義諸国で資本主義が復活したという事実にもかかわらず、社会主義社会は発展し陣地を拡大するであろう。社会主義はそれ自身の進路をたどり、全世界で帝国主義と資本主義に勝利するであろう。それは、闘争と奮闘を通じてであって、フルシチョフがかつて説教しいまもあらゆる修正主義者が説教しているように、改良や平和的な議会の道を通じてではけっしてない。社会主義が勝利するのは、帝国主義とプロレタリア革命に関するレーニン主義の理論を堅持することによってであって、けっして、国家独占資本主義が資本主義の新しい特殊な段階であり、「資本主義の胎内における社会主義的要素の芽ばえ」であるなどと主張する今日の修正主義理論に従うことによってではない。

帝国主義の本質とその歴史的地位についてのレーニンの論断のとおり、社会体制としての世界帝

国主義全体は、自らを内部からむしばむ諸矛盾と人民の解放闘争・革命闘争の結果、かつては有していた一元的な支配力をもはやもっていない。それは歴史の弁証法であり、帝国主義が衰退し、退廃し、腐朽しつつあるというマルクス・レーニン主義の命題を確証するものである。

資本主義と帝国主義の弱体化の傾向は、今日の世界史の主要なすう勢である。マルクスとレーニンは、具体的事実と歴史的諸事件、唯物弁証法にもとづいて、このことを立証した。帝国主義に反対する諸国家が連合して奮闘するという傾向もまた、帝国主義の弱化を引き起こしている。しかしこの傾向——中国はそれを、必要な区別もせず、個別的状況の研究もせずに絶対化している——は、正しい道にゆきつきはしない。中国指導部は、アメリカ帝国主義は衰退しつつあり、ソ連社会帝国主義よりも弱体であると主張し、「第三世界」は時代の主な原動力であると叫び立てつつ、実際にはブルジョアジーへの降伏と従属を鼓吹しているのである。

各国人民が解放を求めているというのは事実であるが、かれらはただ闘争と努力を通じて、また戦闘的指導部に導かれてのみ、この解放をかちとることができるのである。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンは、こうした指導部は各国のプロレタリアートであると教えている。しかし、プロレタリアートとそのマルクス・レーニン主義党は、つねに革命を準備し遂行することを心にとどめつつ、徹底した政治的、経済的、軍事的分析をおこなわなければならず、あらゆる要素を熟慮検討し、適切な戦略・戦術を決定し明らかにしなければならない。もしも中国のように革命を忘れ去るならば、その分析も、行動も、戦略・戦術も、けっしてマルクス・レーニン主義的には

なりえず、革命的なものにはなりえない。

強大なものであれそうでないものであれ、われわれはいかなる類の帝国主義にも幻想を抱くことはできない。帝国主義はその本性から、経済的、政治的拡張と戦争の勃発への諸条件を生み出す。なぜなら帝国主義の性格は、本質的に搾取と侵略をこととするものだからである。したがって、解放を求める各国の広範な人民大衆に向かって、かれらは「三つの世界」論のような修正主義理論を指針として解放を達成することができるなどと欺瞞することは、各国人民と革命にたいして罪を犯すことである。

レーニンが教えているように、現代は帝国主義とプロレタリア革命の時代である。このことからわれわれマルクス・レーニン主義者は、世界帝国主義およびプロレタリアートと各国人民を搾取するあらゆる帝国主義、あらゆる資本主義強国と、最大の激烈さをもってたたかうべきであるということを認識しなければならない。われわれは、革命がいまや日程にのぼっているというレーニン主義の命題を強調する。世界は新しい社会——それは社会主義社会になるであろう——に向かって前進しつづけている。世界資本主義と帝国主義、社会帝国主義は、なおいっそう腐朽し、革命によって終えんを迎えるであろう。

レーニンが教えているように、**われわれは帝国主義と最後までたたかわなければならず、広い意味においてそれを批判し、帝国主義の政策とブルジョアジーに反対して被抑圧諸階級を立ち上がらせなければならない。**現代の帝国主義の発展に関するマルクス・レーニン主義的分析が明確に示し

ているように、帝国主義および革命の本質と特徴についてのレーニンの分析と結論は、いささかも修正の余地はありえない。レーニン主義の帝国主義理論を歪曲しようとする、社会民主主義者からフルシチョフ修正主義者、中国修正主義者に至るあらゆる日和見主義者の企みは反革命的なものである。その狙いは、革命を否定し、帝国主義を美化し、資本主義を延命させることにある。

レーニンは、帝国主義、およびベルンシュタインやカウツキー、ヒルファーディング、第二インタナショナルのその他のあらゆる日和見主義者を暴露したとき、次のように指摘している。

「帝国主義的イデオロギーは、労働者階級のなかへもしみこみつつある。万里の長城が労働者階級を他の階級からへだてているわけではない*」。

* 『帝国主義論』――邦訳『レーニン全集』第二二巻三三〇ページ

しかしながら不幸にも、いまでは「万里の長城」にさえひび割れが生じ、帝国主義的宣伝やイデオロギーが中国へ浸透してしまった。中国の日和見主義者は、けっして独特のものではない。かれらもまた、カウツキーらの道を歩み、一般的には帝国主義を、特殊的にはアメリカ帝国主義を美化しているのであり、アメリカ帝国主義を退却しつつある帝国主義として描き出し、各国人民はソ連社会帝国主義者から自らを守るためにこの帝国主義に頼らなければならないと主張しているのであ

る。

中国修正主義者の「理論」とカウツキーの理論の類似性は、あまりにも明白である。カウツキーは当時、資本主義の発展に関するマルクス主義理論を歪曲することによって帝国主義の植民地政策を擁護し、その搾取と拡張をおおい隠そうとした。アメリカ帝国主義とその新植民地主義的政策を支持しようと躍起になり、マルクスとレーニンを基礎にすると称した途方もない理論をでっち上げている中国指導部も、今日同じことをおこなっているのである。しかし、レーニンの表現で言えば、中国の「理論」は修正主義と日和見主義のぬかるみのなかにはまり込んでいるのである。

カウツキーの理論は、独占資本主義の条件のもとでは、非併合主義的政策という別の可能性が存在しているかのような幻想をふりまいた。レーニンは、このことに関して次のように強調した。

「事の本質は、カウツキーが帝国主義の政策をその経済から切りはなし、併合を金融資本の『このんでもちいる』政策と説明し、この政策に、彼によれば同じ金融資本を基礎として可能であるという他のブルジョア的政策を対置している点にある。こうして、経済における独占が政治における非独占的・非暴力的・非侵略的な行動様式と両立できるということになる。また、まさに金融資本の時代に完了し、最大の資本主義国家のあいだの競争の現在の形態の特異性の基礎をなしている世界の領土的分割が、非帝国主義的政策と両立できるということになる。その結果は、資本主義の最新の段階のもっとも根本的な矛盾の根底を暴露するかわりに、それらの矛盾を

塗りつぶし、鈍くみせることとなり、マルクス主義のかわりにブルジョア改良主義をもってくることとなる*」。

＊『帝国主義論』――邦訳『レーニン全集』第二二巻三一二ページ

中国修正主義者は、独占体と金融資本がアメリカの経済分野を支配しており、その内外政策を左右しているのはほかならぬこれらの資本であるという事実を無視して、もはや拡張を求めず現実に退却しつつある平和的な帝国主義について語っている。中国指導部は、スターリンの次のような言葉を「忘却」している。スターリンは、現代資本主義の基本的経済法則の主要な諸特徴と諸要求は、

「その国の住民の大部分を搾取し、零落させ、貧困にすることによって、他の国々とくに後進諸国の人民を隷属させ、系統的に強奪することによって、最後に、最高の利潤を確保するために利用される戦争と国民経済の軍事化とによって、最大限の資本主義的利潤を確保することである*」

とのべている。このように、中国指導部の「新」理論は、かれらがカウツキーの古い歌を新たな調べでうたい直していることを示している。

＊『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』――『スターリン戦後著作集』二四八ページ

第二インタナショナルの頭目連中は、どの帝国主義がより侵略的でありどの帝国主義がそれほど侵略的でないのかということにもとづいて、帝国主義列強のあいだに区別を設けようとした。レーニンはかれらを暴露して、こうした立場は反マルクス主義的であると強調した。この態度は、第二インタナショナルの諸党を排外主義の立場へ追いやり、プロレタリアートと革命の事業にたいする公然たる裏切りへと追いやった。レーニンは、現代においては、第一次世界大戦に参戦した帝国主義諸国家のいずれの側が「主要な悪」であるかという問題はありえない、とのべている。

「現代民主主義派は、どちらの帝国主義ブルジョアジーにも加担しないで、『両方とも悪い』と言い、またそれぞれの国で帝国主義ブルジョアジーの敗北をのぞむばあいにはじめて、自分自身に忠実でありうるであろう。そのほかのあらゆる解決策は、真の国際精神とは縁もゆかりもない国権的自由主義的な解決策となるであろう」＊。

＊『よその旗をかかげて』――邦訳『レーニン全集』第二一巻一三六－一三七ページ

中国によれば、ソ連社会帝国主義のほうがアメリカ帝国主義よりもいっそう侵略的であるとのこ

とであるが、今日の情勢のもとでもしこの中国の命題を承認するならば、それは革命と労働者階級の使命にたいする露骨な裏切り、第二インタナショナルの立場への転向へと導くであろう。二つの帝国主義超大国は同じ程度に、社会主義、各国人民の自由と独立、諸民族の主権の主な敵、主な危険である。それらは、世界資本主義の主な守り手である。

中国指導部は、各国人民にたいする自らの裏切りを隠蔽するために、大独占体と豊かな富を有する一部の諸国のあいだの関係は、独占支配勢力と各国人民の衝突さえ避けうるような状況を生み出しているとのべている。これは途方もなくばかげた考えであり、凶暴な帝国主義を温和に見せかけ、資本投下が投資を受ける国の人民の福利をつくり出し、したがってもはや帝国主義者とこれらの国国の人民のあいだには敵対的矛盾は存在しなくなる、などという誤った根拠のない幸福感を生み出そうとする試みである。現在中国指導部が吹聴しているこの謬論は、帝国主義者が、自己の支配を全世界に広げ、各国の反動的支配集団が自国人民を抑圧し外国に国を売り渡すのを手助けするためにねつ造したものである。

これらの「理論」は、第二インタナショナルの日和見主義者の反動的理論を、新たな手のこんだ形態でくり返したものである。レーニンは第一次世界大戦当時、反マルクス主義的なカウツキーの「超帝国主義」理論を暴露した。カウツキーは、戦争は帝国主義のもとでも、各国の資本家間の協定を通じて回避しうると主張した。

レーニンは、カウツキーとの論戦のなかで次のようにのべている。

「……『国際帝国主義的』あるいは『超帝国主義的』同盟は、イギリスの坊主どもやドイツの『マルクス主義者』カウツキーの月なみの小市民的幻想のなかではなく、資本主義の現実のなかでは——そういう同盟がどのような形態でむすばれようとも、すなわち、ある帝国主義的連合にたいする他の帝国主義的連合という形態であろうと、あるいはすべての帝国主義列強の全般的同盟という形態であろうと——、不可避的に、戦争と戦争とのあいだの『息ぬき』にすぎないのである*」。

* 『帝国主義論』——邦訳『レーニン全集』第二二巻三四二ページ

今日中国修正主義者は、ソ連社会帝国主義に反対するすべてのファッショ的、封建的、資本主義的、帝国主義的な国家・政権——アメリカを含めて——による同盟と大世界戦線について語り、その結成に血道を上げているが、こうした状況のもとで、レーニンのこれらの指摘はきわめて当を得たものである。

レーニンが強調しているように、帝国主義諸国間の同盟は可能であるが、それはただ、革命と社会主義を共同でおしつぶし、植民地や従属・半従属諸国を共同で収奪するという唯一の目的のために結成されるのである。

第二インタナショナルの頭目と同様、中国修正主義者は、ソ連社会帝国主義に反対して「団結できるすべての者と団結しよう」というプラグマチックなスローガンをもって、「万国のプロレタリア、団結せよ！」という『共産党宣言』のスローガンにとってかえた。

中国指導部の考案による「三つの世界」論は、帝国主義の歴史的発展をマルクス・レーニン主義の階級的見地から分析するのでなく、それに屈折した光を当て、マルクスとレーニンがきわめて鮮明に規定した現代の諸矛盾を無視している。この「理論」にもとづいて、「社会主義」の中国はアメリカ帝国主義および「第二世界」――すなわち、各国人民を搾取しているその他の帝国主義者――と団結するとともに、世界帝国主義と資本主義――アメリカ帝国主義であれソ連社会帝国主義であれ――に反対する闘争を熱望する「第三世界」と各国人民に、ただソ連社会帝国主義にだけ反対して団結するよう呼びかけているのである。

チトーの「非同盟」諸国の理論もまた、「三つの世界」論とまったく同様に反マルクス主義的である。

これら二つの「理論」は、一本の鉄道の二つのレールであり、その上をアメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義の列車、世界各国人民から強奪した財産を満載した列車が走っている。チトー一味と中国修正主義者は、帝国主義、社会帝国主義のこの列車の貨車にいくつかの穴をあけ、そこからわずかばかりの石油や砂糖、ドルやポンド、フランあるいはルーブルがもれるのを狙っているのである。被抑圧人民の頭上にのしかかり、各国人民を永遠に奴隷状態にとどめることを意図するこれら

のレール――二つの理論はこうしたものであり、それらは、トロツキストや無政府主義者、ブハーリン主義者、フルシチョフ主義者、あるいはトリアッチやカリリョ、マルシェの追随者等等の反マルクス主義的理論とまったく同様に反動的なしろものである。

実生活は、帝国主義に関するレーニンの天才的命題をたえず確証しつつある。資本主義は腐朽の段階にはいっている。こうした情勢は、各国人民の反抗を呼び起こし、かれらを革命へと駆り立てている。帝国主義とブルジョア資本家集団に反対する各国人民の闘争は、さまざまな形態、さまざまな強さで発展している。量は不可避的に質に転化する。それはまず、資本主義の鎖のもっとも弱い環をなす国国、労働者階級の自覚と組織性が高い水準に達し、問題にたいする深い政治的、イデオロギー的認識が存在している国国において起こるであろう。

帝国主義は、各国人民にたいするその野蛮な抑圧と搾取をいちだんと強めている。しかし同時に世界各国人民は、資本主義社会においては生活をつづけていくことが不可能であり、この社会では勤労大衆が戦前に劣らない抑圧と搾取を受けているということを、ますます自覚しつつある。

帝国主義とその寄生分子たちは、かれらのあらゆる努力にもかかわらず、現在も将来も、各国人民のうえに自らの覇権を打ち立てる闘争において安定した地歩を得ることはできない。かれらが安定性を得ることができないのは、労働者階級と解放を求める被抑圧勤労人民大衆の覚醒しつつある自覚のためであり、また避けることのできない帝国主義間矛盾のためである。

各国の人民は、世界帝国主義と資本主義が単に二超大国の経済的、軍事的、政治的、イデオロギ

ー的力量に基盤を置いているだけでなく、各国の富裕階級にも基盤を置いているということを目の当りにしており、今後、このことをなおいっそう鮮明に認識するであろう。これらの富裕階級は、自国人民が決起し、自らの真の自由と独立を獲得することがないよう、かれらをくびきにつなぎ、搾取下におき、恐怖のなかに閉じ込めているのである。

また、世界各国の広範な人民大衆は、現在のブルジョア資本主義社会と世界帝国主義の搾取体制は打倒されるべきものであることを理解しはじめている。各国人民にとってそれは単なる願望ではない。かれらは多くの国国ですでに武器を手にしているのである。

したがって、世界を三つや四つに区分したり、「同盟」と「非同盟」に分類したりする理論をつくり出す必要はなく、マルクス・レーニン主義の教えに従って、大きな客観的歴史的過程を注視し、正しく解釈しなければならないのである。世界は二つに分裂しているが、それは資本主義の世界と社会主義の新しい世界とにである。それらは互いに無慈悲な闘争をくり広げている。この戦闘のなかで、新しい世界、社会主義の世界が勝利し、古びた資本主義社会、帝国主義的ブルジョア社会は打ち倒されるであろう。

第三章　革命と各国人民

マルクスは、科学的論拠にもとづいて、資本主義社会の崩壊と、よりすすんだ社会、すなわち社会主義およびその後の共産主義の建設の必然性を示した。レーニンはその著書『資本主義の最高の段階としての帝国主義』のなかで、マルクスの思想を発展させ、現代が帝国主義とプロレタリア革命の時代であることを明らかにした。この時代は、古い資本主義制度と植民地主義、帝国主義の崩壊の時代、プロレタリアートによる国家権力の奪取と被抑圧人民の解放の時代であり、世界的範囲における社会主義の勝利の時代である。

それはつまり、今日われわれが生きている時代は、人間による人間の搾取を永遠に廃絶する新しい社会が、古い搾取の社会——それは人類の大多数を占める被抑圧者、被搾取者にとっては耐えがたいものである——にとってかわる時代だということである。わが党はその第七回大会において、ほかでもなくこうした基本的な教えと、今日の世界の発展過程にたいするマルクス・レーニン主義的分析から出発して、世界は、革命と各国人民の問題が解決されるべき課題となっている段階にあるとの命題を提起したのである。

ブルジョアジーに反対するプロレタリアートの闘争は、不断にくり広げられる苛酷で無慈悲な闘争である。二大社会勢力が、互いに対峙している。一方の側に立っているのは、歴史上もっとも残

虐で狡猾な、血に飢えた階級である資本主義・帝国主義ブルジョアジーである。そして他方の側には、生産手段を完全に奪われ、ブルジョアジーによって過酷に抑圧され搾取されている階級、すなわちプロレタリアートが立っている。このプロレタリアートは同時に、社会でもっともすすんだ階級である。それは、思考し、創造し、労働し、生産をおこなうが、その労苦の果実を享受することはない。

この二つの階級はそれぞれ、自己の回りに諸勢力を結集し、それらを自己の目的のために備えさせようと努めている。すなわち、プロレタリアートは、社会的・民族的解放を達成し革命を遂行するという目的のために、そしてブルジョアジーは、自己の支配を維持し革命を弾圧するという目的のために、である。ブルジョアジーは、自己の周囲に、もっとも陰険で反動的な、もっとも犯罪的な諸勢力を糾合しており、他方プロレタリアートは、すべての革命的、進歩的諸勢力を自己の側に獲得しようと奮闘している。

マルクス・レーニン主義がわれわれに教えているように、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争はたえず発展しており、それは必ずプロレタリアートとその同盟者の勝利に終わるであろう。しかし、この闘争に勝利を収めるためには、プロレタリアートは自らを組織し、自分自身の前衛党をもたなければならず、また、広範な人民大衆に革命の必然性を認識させるとともに、国家権力を奪取してプロレタリアート独裁を打ち立て、社会主義および階級のない社会である共産主義を建設する闘争のなかで、かれらを指導しなければならない。

世界には、善意からであれ悪意からであれ、革命はいかなる時期、いかなる瞬間にも、またいかなる場所でも遂行しうると考える性急な人人が数多くいる。しかし、そうした人人は誤っている。革命とは、あるだれかの願望に従って、いついかなる場所でも遂行されうるというものではない。革命は、資本主義の鎖のもっとも弱い環において勃発し、なしとげられる。革命が勃発し勝利を収めるためには、それに適した客観的、主体的諸条件が存在しなければならず、革命を起こすのに有利な時機を見出さなければならない。主要なことは、プロレタリアートを先頭とする広範な人民大衆が、革命に立ち上がるさいに、革命を最後までやりぬく決意をもち、その準備をととのえていなければならないということである。

レーニンが強調しているように、革命は各国の人民によって遂行されるものであり、輸出されるものではない。このことは、各国のマルクス・レーニン主義者が――たとえどこでたたかっている者であれ――連帯の感情を抱いてはならないとか、もっとも純粋なプロレタリア国際主義の精神で結びついていてはならないとかいうことを意味しないし、他国のプロレタリアートと人民の解放闘争を支援してはならないということを意味しない。それどころか、それぞれの国の共産主義者とプロレタリア、革命勢力はすべて、宣伝や扇動、物質的援助によって、自らの決意と無私の精神の実例によって、またマルクス・レーニン主義を忠実に堅持することによって、個個の国の革命と全世界の革命を支援する義務を負っているのである。もちろん、こうした援助を首尾よく利用しうるかどうかは、何よりもまず、それぞれの国におけるプロレタリアートとその党の準備の如何にかかってお

り、その国における革命闘争の発展の如何にかかっている。
マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』のなかで、一国のプロレタリアートと人民の利益は、全世界のプロレタリアートと人民の利益から切り離しえないことを示した。
レーニンが教えたように、また実生活が確証しているように、革命は個個の国で勝利する。したがってこの勝利が達成されるかどうかは、まず第一に、個個の国の労働者階級とその革命政党にかかっており、それらが具体的条件に応じて革命についてのマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの教えを実行する能力にかかっている。
しかしながら、この教えに関して、またとりわけレーニン主義の革命理論に関して、多くの混乱が生み出されており、チトー修正主義者やソ連修正主義者、「ユーロコミュニスト」、中国修正主義者、およびその他の現代修正主義者によって多くの落し穴がしかけられている。かれらは、革命の問題について人民を誤らせ、革命の勃発を妨げることを自らの務めとしている。
革命の課題が解決されるべきものとして提起されている今日、革命について修正主義者がまき散らした霧を晴らし、この問題をめぐるかれらの策略と手のこんだ謬論を暴露するとともに、かれらの反革命的、排外主義的、覇権主義的意図を暴き、革命に関するマルクス・レーニン主義の教えを正しく理解し適用することは、マルクス・レーニン主義者のゆるがせにできない責務である。

われわれは革命に関するマルクス・レーニン主義の教えを擁護し実行しなければならない

マルクス・レーニン主義が教えているように、またあらゆる革命の経験が実証しているように、革命が勃発し勝利するためには、客観的要素と主体的要素の双方が存在しなければならない。

レーニンはこの教えを、その著『第二インタナショナルの崩壊』のなかで定式化し、さらに『共産主義内の〃左翼主義〃小児病』やその他の著書においてそれをいっそう発展させた。

レーニンは、革命の客観的要素としての革命的情勢について詳説し、それは次のようなものであるとのべている。

支配階級を巻き込んだ深刻な危機、被抑圧階級の不満と激昂を引き起こした危機のために「㈠支配階級にとっては、いままでどおりの形で、その支配を維持することが不可能なこと」、「革命が到来するには、通常、『下層』がこれまでどおり生活することを『のぞまない』だけではたりない。さらに、『上層』が、これまでどおりに生活していくことが『できない』ことが必要である。㈡被抑圧階級の欠乏と困窮が……激化すること。㈢右の諸原因によって、大衆の活動性がいちじるしくたかまること。大衆は……自主的な歴史的行動に引きいれられる*」。

「言いかえれば、この真理は、全国的な(搾取されるものにも搾取するものにもかかわる)危機がなければ、革命は不可能であるという言葉によって言い表わされる」**。

さらにレーニンは、次のように強調している。

「個個のグループや党の意志ばかりでなく、個個の階級の意志とも無関係な、これらの客観的な変化がなければ、革命は——通例——不可能である」***。

*　『第二インタナショナルの崩壊』——邦訳『レーニン全集』第二一巻二〇八ページ

**　『共産主義内の〝左翼主義〟小児病』——邦訳全集三一巻七三ページ

***　『第二インタナショナルの崩壊』——邦訳全集第二一巻二〇八ページ

しかし、すべての革命的情勢が革命をもたらすとはかぎらない、とレーニンはのべている。かれによれば、一八六〇―一八七〇年のドイツ、一八五九―一八六一年および一八七九―一八八〇年のロシアにおけるような革命的情勢は、多くの場合革命に転化しなかった。それは、革命にたいする大衆の自覚と準備が高い水準に達するという主体的要素が欠如していたためであり、レーニンが指摘したように、

「『たおさない』かぎり、たとえ危機の時代であろうと、けっしてひとりでに『たおれる』ものではない」、そうした「旧来の政府をうちくだく(またはゆるがす)にたりるほど強力な革命的大衆行動をおこなう革命的階級の能力*」が存在していなかったためである。

＊　『第二インタナショナルの崩壊』――邦訳『レーニン全集』第二一巻二〇九ページ

レーニンがその初期の著作のなかでのべているように、主体的要素を準備するうえで決定的役割を果たすのは、労働者階級の革命政党、および革命的大衆にたいするこの党の指導と教育、動員である。党は、次のことによってこの課題を達成する。すなわち、具体的条件に適合し、大衆の革命的願望と要求に対応した正しい政治路線を打ち立てることによって、さらにまた、政治的に考えぬかれた集中的な革命的行動を含む巨大な活動によって、である。こうした革命的行動は、生活を取り巻く情勢、抑圧と搾取、ブルジョアジーの野蛮な法律について、また奴隷的制度を打ち倒す手段としての革命の絶対的必要性について、プロレタリアートと勤労大衆を自覚させる。

こうして、貧困層の反発は、権力の座にある富裕層すなわちブルジョアジー――かれらは内外の

その他の諸矛盾によっても揺るがされている――さえもがもはやこれまでのように支配をつづけていくのが困難になるほどにまで強まっていく。こうした諸条件が満たされ、互いに結びあった客観的要素と主体的要素とが存在するならば、そのときには、革命は勃発するばかりでなく、勝利を収めることができる。

革命家はつねに、レーニンのこうした天才的命題を深く研究するが、それだけでなくさらに、情勢にたいして具体的で全面的な分析を加える。革命家が活動するのは、けっして革命的情勢に不意を襲われることがないように、またこうした決定的瞬間に武装解除の状態に陥ることなく、それを革命の準備と開始のために利用することができるようにするためである。

現在の世界情勢にたいする分析は、何を示しているだろうか。アルバニア労働党はレーニン主義の革命理論から出発して、今日の世界情勢は全般的に革命的なものであり、そうした情勢は多くの国国ではすでに成熟しているか、あるいは急速に成熟しつつあり、その他の国国でもこの過程が進行しているとの結論を導き出している。

われわれが今日の情勢は革命的であるというのは、現代の世界が大爆発に向かってすすみつつあるということを意味している。全般的にいって、今日の情勢は活火山のようなものであり、抑圧し搾取する上層支配階級そのものを焼きつくす烈火のようなものである。

資本主義世界と修正主義世界は、深刻な経済的、政治的、金融的、軍事的、イデオロギー的、精神的危機に襲われている。ブルジョア・修正主義制度の構造と上部構造の全体を揺るがしている現在

の危機は、資本主義体制の全般的危機をいっそう深刻で鋭いものにしている。
明らかに、危機の結果はきわめて重大で破滅的なものであり、それはとくに経済の分野で顕著である。第二次世界大戦後もっとも深刻な経済危機は、一九七四年以来深化しつづけている。この危機は工業生産のいちじるしい低下をもたらした。その低下率は、日本で二〇パーセント、イギリスで一五パーセント、アメリカで一四パーセント、フランスおよびイタリアで一八パーセント、ドイツ連邦共和国で一〇パーセント、等等に達している。またこの危機は、きわめて深刻な不況を引き起こした。多くの資本主義国では、一部の基幹経済部門の生産能力の遊休化率は二五パーセントから四〇パーセントに達しており、この状況は数年間つづいている。これが、依然としてつづく工業生産停滞の原因となっている。売れ残った「余剰」商品在庫は莫大な額にのぼっている。
しかしながら、こうした商品在庫にもかかわらず、また多くの生産設備能力が遊休化しているにもかかわらず、独占体の利潤は価格引き上げによって増加しつづけている。物価は日に日に騰貴しつづけており、インフレーションは一部の国では非常な高率に達している。
独占体および資本主義・修正主義国家は、危機の重大な犠牲を労働者階級とその他の勤労人民に転嫁しようとしているが、物価騰貴と、とくにインフレーションは、そのためのきわめて手頃な手段となっている。
インフレーション抑制という口実のもとで、ブルジョア資本主義国家と修正主義国家は勤労大衆にたいする所得税を増税し、かれらの賃金を凍結するとともに、独占体の利潤にたいする課税を減

免し、通貨の平価を切り下げるなどの措置をとっている。これらの措置は、労働者階級とすべての勤労人民に矛先を向けたものであり、かれらにたいする搾取を強化し、その生活水準を切り下げるものである。

長期にわたる経済危機は、労働者階級と農民大衆の生活状態を劣悪化させ、かれらの生活をきわめて困難な状況に陥れた。失業はかつて見られなかったほどの高水準に達し、慢性的なものになり、ブルジョア・修正主義社会の重大な病弊となっている。資本主義・修正主義世界全体では一億一〇〇〇万人もの人人が街頭に投げ出されている。アメリカだけでも、失業者は七〇〇万人から八〇〇万人を下らない。今日、数億もの人人が飢餓線上に生活しており、あるいは実際に飢えにさいなまれている。また数億もの人人が不確かな明日への不安に苦しめられている。

広範な勤労人民大衆の貧困と不安定、および、ブルジョア資本主義政権と修正主義政権による反動、反人民の内外政策は、広範な各層住民の不満を増大させてきたし、いまも不断に増大させている。こうしたゆゆしい事態は、かれらの抑制しがたい憤激を呼び起こしている。それは、ストライキや抗議行動、デモンストレーション、あるいはブルジョア・修正主義体制の弾圧機構との激突にあらわれており、しかも多くの場合、現実の暴動にまで発展している。人民大衆は、かれらを支配する制度にたいする敵意をなおいっそう強めている。

帝国主義国や資本主義国、あるいは修正主義国の政府は、こうした危機的情勢のもとにあってさえ、自己の最大限利潤を確保しようと躍起になっており、大衆の不満と憤激をなだめ、かれらの意

識を革命からそらすために、あらゆる類の欺瞞的な約束や提案を乱発している。
一方、貧困層はますます貧困化し、富裕層はますます富をふやしており、これら両社会層の格差、ならびに発達した資本主義国と低開発国の格差は、さらにいっそう拡大しつつある。
現在の危機は政治生活の領域にまで広がっており、資本主義・修正主義国家の支配層内部の軋れきを深めている。その明白な証拠は、政府危機の急速な深化と、政権担当集団の頻繁な交替である。
ブルジョアジーと支配集団は、ますます頻繁に政府という一組の馬車馬を取り替えざるをえなくなっているが、それは勤労人民を欺き、旧政府よりは新政府のほうがましになるだろうという願望を助長する目的のためであり、危機とその打開策の失敗に責任を負うべきなのは旧政府であり、新政府はその状況を改善するのだなどということを勤労人民に納得させるためである。たえず大がかりにでっち上げられているこうした欺瞞は、すべて、自由と民主主義等等のにせのスローガンによって、またとりわけ選挙戦によって偽装を施されている。それと同時に、資本主義・修正主義国のブルジョアジーは、かれらの野蛮な暴力的武器――すなわち軍隊や警察、諜報機関、裁判所――を強化するとともに、プロレタリアートのあらゆる運動と努力にたいするブルジョアジー独裁の統制を強めている。資本主義・修正主義諸国では今日、ブルジョア的暴力が増大し民主的諸権利が制限されるという傾向が、歴然と存在している。ブルジョアジーは、「民主的」な手口・手段で統治するのが不可能であると考えたときには、国内生活においてファシズムを台頭させ、ファシズムを打

ち立てるための準備をすすめるが、そうした傾向はますます明らかなものになりつつある。

経済的・金融的危機および政治的危機は、個個の国の独占体や政府、政党、政治勢力を襲っているばかりでなく、ヨーロッパ共同市場やコメコン、ヨーロッパ共同体、NATO、ワルシャワ条約機構のような国際的同盟、あるいは経済的、政治的、軍事的ブロックをも襲っている。こうした同盟やブロックの構成国相互の矛盾と軋れき、反目と争奪は、よりいっそう先鋭な公然たるものになっている。

危機とその打開策のいま一つのあらわれとして見ることができるのは、軍備拡張競争と全面的戦争準備であり、あるいは中東やアフリカの角、西サハラ、インドシナ、その他いたるところでおこなわれているような、超大国とその他の帝国主義諸国による局地戦争の扇動である。この方向は、一方あるいは他方の帝国主義国の覇権主義的、拡張主義的計画に役立つものである。これらの帝国主義国は軍需産業と武器取引に活気をあたえ、それらを発展させており、それらは今日未曾有の規模に達している。

しかし、こうした政治的、軍事的手段はすべて姑息な緩和策であり、資本主義・修正主義制度をむしばんでいる重病をいやしはしないし、いやすこともできない。

資本主義・修正主義世界における現在の経済的、政治的危機に加えて、さらに指摘しなければならないのは、かつてないイデオロギー的、精神的危機である。これまでのどの時代にも、今日見られるほどのイデオロギー的混乱と道徳的退廃が存在したことはなかった。またいつの時代にも、右

翼的なものであれ、あるいは中間的、「左翼的」なものであれ、これほど雑多なブルジョア理論が存在したことはなかった。それらは、世俗的あるいは宗教的な、古典的あるいは現代的な装いにおおわれ、また公然たる反共主義、あるいは自称共産主義・マルクス主義といったあらゆる類の装いで飾りたてられている。かつていつの時代にも、このような道徳的退廃、このように腐敗した生活様式、このように深刻な精神的堕落が見られたことはなかった。「資本主義の最終的安定」、「人民的資本主義」、「消費社会」、「脱工業化社会」、「危機の回避」、「科学技術革命」、あるいはフルシチョフ式の「平和共存」、「軍隊も武器も戦争もない世界」、「人間の顔をした社会主義」等等のさまざまな理論が、苦肉の策としてつくり上げられ、「旧社会の諸悪からの救済の指針」として鳴り物入りで宣伝されたが、これらの理論はいま根底から揺らいでいる。

全般的危機のこれらの側面がすべて見出されるのはユーゴスラビアであり、そこでは危機の結果はほかよりも明白にあらわれているが、それ以外に、社会帝国主義ソ連やその他の修正主義諸国でも、危機の諸側面はすべて見受けられる。これらの国国ではどこにおいても抑圧と搾取が強化されており、資本主義の病苦と、権力や特権をめぐる指導部および上層部内部の反目と紛争がこれら諸国をさいなんでいる。いたるところで人民大衆は煮えたぎるような不満と怒りを抱いている。このように、これらの国国においても革命の大きな可能性が存在している。革命の法則はこれらの国国でも、他のあらゆるブルジョア諸国と同様に作用しているのである。

今日の資本主義の全般的危機はたえず深化してゆくすう勢にあるが、まさにこうした現状から、

われわれは次のような結論を引き出している。すなわち、革命的情勢が大多数の資本主義・修正主義諸国をすでにおおいつくしているか、あるいはおおいつくす過程にあり、また、こうした情勢によって革命が現実の日程にのぼせられているという結論である。

危機の圧力はたえず増大しており、革命を圧殺するというブルジョアジーや修正主義者の予言と策動はすでに打ち砕かれている。そうした状況のもとで、かれらは、新たな方便を見出し、別の欺瞞的な理論をねつ造しようと努めている。

今日、現代修正主義者が掲げているのは、資本主義制度擁護の旗であり、各国人民の抑圧と搾取、革命運動と解放運動の分裂の旗、総じて言えば大衆にたいする欺瞞の旗である。しかしかれらもまた、過去の社会民主主義者やその他の日和見主義者——それは、純然たるブルジョアジーの手先になり下がっている——と同じ運命をたどるであろう。

ブルジョアジーは、今日の深刻な経済的、政治的、イデオロギー的危機という情勢のもとで、その従僕である修正主義者がいっそう公然とブルジョアジーを支持するよう要求している。そのために、修正主義者の偽装はますますはげ落ちており、かれらの信用もすっかり失墜してしまっている。レーニンは次のようにのべている。

「日和見主義者は、プロレタリア革命のブルジョア的な敵であって、平和な時代には労働者党の内部に巣くい、そのブルジョア的な活動をこっそりやっているが、危機の時代には、たちまち、

保守的なブルジョアジーからもっとも急進的および民主主義的なブルジョアジーにいたる、自由思想をもったブルジョアジーから宗教的および教権主義的なブルジョアジーにいたる、統合されたブルジョアジー全体の公然の同盟者になる」。*

＊『これからどうなる？』――邦訳『レーニン全集』第二一巻一〇一ページ

現代修正主義者は、危機に襲われた今日の資本主義制度に奉仕しているが、このことは、レーニンの科学的論断を余すところなく立証している。

たとえば、イタリアを例にとろう。この国は、資本主義の土台と上部構造における腐朽が典型的に反映している国である。第二次世界大戦終結後から現在に至るまでイタリアの政権を握ってきたのは、キリスト教民主党、すなわち大ブルジョアジーの党、あらゆる宗教的、反動的ブルジョアジーと右翼分子を自己の回りに糾合してきたバチカンの党であった。かれらの政府はいまも、破産状態にある国を支配している。一九四五年から今日に至るまでずっと、ブルジョアジーの最上層部は深刻な危機のなかにあった。それは、この期間の歴代政府の数が約四〇にも達するほどの危機であった。これらの政府は、キリスト教民主党「単独」政府、社会党・キリスト教民主党連立政府、キリスト教民主党・社会党・社会民主党三党連立政府、「中道左派」政府、「中道右派」政府などさまざまである。

イタリアにおける深刻な政府危機は、国内の全面的危機からの活路が見出されないという情勢を反映したものである。この危機の結果として、レオネ大統領の辞任やキリスト教民主党モロ党首の殺害など、反目と紛争、政治的暗殺と汚職事件がますます頻繁に発生している。

イタリアは、アメリカの橋頭堡となっている。アメリカ帝国主義の手中に陥った破産したイタリア経済は、ヨーロッパ共同市場とも結びついており、イタリアはそのなかでもっとも比重の小さい加盟国となっている。

こうした事情のために、イタリアの広範な勤労大衆は貧困化しており、それはますます深刻なものとなりつつある。イタリアの失業率は、ヨーロッパ共同市場加盟国のなかで最高の水準に達している。イタリアは最大の労働力移住をおこなっており、イタリアの輸入は輸出を上回っている。ヨーロッパ共同市場加盟諸国、とりわけ西ドイツとフランスは、イタリアからの食糧輸入を制限することによって、イタリア農業を苦境に追い込んでいる。イタリアのバターやミルク、果実の輸出価格は急落し、他方、イタリアでの生活費はきわめて高いものになっている。イタリアは大ストライキ国になっており、重工業、軽工業、交通・運輸から郵便にいたる各部門の労働者、航空機乗務員、さらには警官までもが、ストライキに参加している。

このように、プロレタリアートと全人民の不満はうず巻いており、この大きな不満を、反動的ブルジョアジーとの闘争に、またかれらがしかけようと準備しているファッショ的攻撃との闘争に転化することは、大衆と革命の利益の要求するところとなっている。そうした情勢のもとで、イタリ

アの修正主義者と改良主義的労働組合、すべての労働貴族、さらに中国の「三つの世界」論の擁護者は、革命の炎の火消人、あるいはブルジョア制度の弁護人の役割を演じている。

ファシスト政党からベルリンゲルの修正主義党に至るすべての党は、腐敗したブルジョア制度を擁護している。イタリア修正主義党がブルジョアジーと連合しているのは、ほかでもなく、権力をふるってはいるが、根底から揺らいでいるこのブルジョア制度を維持するためである。イタリア修正主義党は、自国の諸条件に合致したマルクス主義を追求し適用しているのだなどという偽りをふりまくことによって、イタリア・プロレタリアートの革命的志気をくじき、それを圧殺しようとしている。

ベルリンゲルがキリスト教民主党との取引にはいったのはかなり以前のことであるが、それにとどまらずかれは、キリスト教民主党との協定さえ結ぶに至っている。なるほどベルリンゲルは、形のうえでは政府に参加してはいないが、多くの問題についてかれはキリスト教民主党と結託し、統治をおこなっているのである。政府はこの政党を支持しているが、同時に外見上は、この党とのあいだに不一致が存在するかのように見せかけている。イタリア修正主義党の側も、同様にふるまっている。

イタリア修正主義者は、イタリアの議会与党五党間で締結された政府綱領について大騒ぎを演じ、それを「重要な勝利」、イタリアにおける「新たな政治局面」として吹聴している。しかし、ベルリンゲルが語っているこの政治局面とは、イタリア資本の計画に修正主義党が包括されてしま

ったということなのである。ベルリンゲルはそれを、現実主義的で非教条的な、真剣な協定として描き出している。かれの主張によれば、この協定は各政党間の政治的関係だけでなく、国の経済、社会、国家の全分野にも、現実的変化をもたらすものなのである。

レーニンは、大衆の革命的高揚を妨げるために資本との協調を求めたさまざまな日和見主義者のたどる道を予言したが、イタリア修正主義者はまさにこの同じ道をころげ落ちている。かれらは、この協調によって、複数政党制を通じて社会主義へ向かうという目的の達成に、いくらかでも近づいたと考えているのである。これが夢想にすぎないことは明白である。イタリアの上院議長アミントーレ・ファンファーニは、この五党間協定を寄せ集めの夢と呼んだが、それはけっして誤りではない。この協定はイタリア修正主義者にとっては寄せ集めの夢である。ところが資本の勢力にとっては、それはけっして夢ではなく、イタリアの共産主義思想を一掃し、イタリアのプロレタリアートと人民の要求を封じ込めるために、また新社会の建設をめざすかれらの革命闘争を圧殺するために企んだ深謀なのである。イタリア修正主義者はいまのところ一片のパン屑にありついているにすぎないが、しかしかれらは、政府は修正主義党の参加を必要としていると叫び立てつつ、党を完全に——水を得た魚のように——政府に合流させようと努めている。言いかえれば、イタリア修正主義党は、イタリア独占資本の反動の泥沼のなかに首までつかろうとしているのである。

ベルリンゲルの党はイデオロギー上でもすっかり変節した党であり、その綱領は徹頭徹尾改良主義的で議会主義的な、社会民主主義的なものである。かれらは、エセ民主主義的憲法——その起草

には、トリアッチをはじめとするイタリアの「共産主義者」も自ら参画した——によって確立された体制を擁護している。反動的、教権主義的ブルジョアジーが過去三〇年間イタリアで勢力をふるい、プロレタリアートと広範な人民大衆を抑圧してきたのは、まさにこの憲法下においてであった。イタリアのいわゆる共産主義者は、この抑圧を正しいもの、憲法に合致したものと見なしているのである。

イタリア修正主義党は、キリスト教民主党をはじめとする他のブルジョア政党といっしょになって、イタリア議会の内外で、また新聞やテレビ、ラジオを通じて、見境のないデマゴギーを含んだ政策を遂行している。それは、イタリア国民を麻痺させ、かれらを日一日と混乱と無秩序に追い込み、プロレタリアートの革命的意志と勤労大衆の政治的自覚を低下させるためである。

イタリアの反動とバチカンは、こうした活動のすべてを大いに必要としている。イタリア修正主義党は、革命を阻止し、ブルジョアジーを窮地から救い出すために、また現体制の打倒を妨げるために、プロレタリアートを先頭とする人民大衆の革命運動を抑圧しようと努めているのである。

次に、スペインを例にとろう。スペインではフランコの死後、ファン・カルロス国王が権力の座についた。かれは、スペインの大ブルジョアジーの代理人である。スペイン大ブルジョアジーは、長期にわたるファッショ政権の支配のもとで国が深刻な危機にのめり込んできたのを目の当りにして、もはやスペインをフランコ時代のように統治することはできないという結論に達した。そのために、統治形態に一定の変更を加えなければならなくなり、権威を失ったフランコのファランへ党

はもはや権力の座を保つことができなくなった。政府首脳が次次と更迭されたのち、もっとも新国王の信頼の厚い人物、すなわち形を変えたフランコ主義の継承者が政権を握った。

スペインにおけるデモンストレーションとストライキは、かつてない規模で爆発した。それらを通じて人民が要求した変革は、もちろん、すでに着手されていたこのような「変革」ではなく、徹底的で根本的な変革であった。ストライキとデモンストレーション、衝突は止むことなくくり広げられてきたし、いまもなおつづいている。大衆は自由と権利を要求しており、国内の諸民族は自治を要求している。こうした情勢のもとで、ファン・カルロスの政府がイバルリ＝カリリョの修正主義党を合法化したのも、大衆の反抗をそらすためであった。この党の指導部はすでに、スペイン君主政権の忠実な手先になっており、現情勢のもとで巻き起こっている革命的大高揚を鎮め、スペイン内戦の革命的思想を受け継ぐあらゆる分子と共和国の共感者を、ブルジョアジーと結託して弾圧する破壊者になり果てている。

ここにもわれわれは、スペイン修正主義党の消防夫としての役割を見てとることができる。かれらの力量はイタリア修正主義党より小さいが、それが演じている役割は同じものである。

フランスや日本、アメリカ、イギリス、ポルトガル、およびその他すべての資本主義国の修正主義党も、同様の役割を果たしている。それらは、ブルジョア制度を擁護しており、また、この制度が危機を克服し革命的情勢を乗りきるとともに、プロレタリアートとその他の被抑圧・被搾取大衆──かれらは、「消費社会」やその他の搾取社会ではもはや生きていくことができないことをいっ

そう鮮明に認識しつつあり、資本主義の政治・経済制度にたいする反抗へと立ち上がりつつある——を混迷させ麻痺させることを可能にしている。

修正主義党がとくに敵意を抱いているのは、レーニン主義である。このことはつまり、かれらが革命にたいして敵意を抱いているということを意味している。なぜなら、プロレタリア革命の理論を完璧に練り上げ、それをロシアで実践にうつしたのは、レーニンだからである。アルバニアやその他の国国の社会主義革命は、この理論にもとづいて勝利した。レーニン主義の理論は、あらゆる国における革命の勝利の道を指し示すとともに、修正主義者の反革命的理論の化けの皮をはぎとっている。この修正主義者の理論は、ブルジョア国家機構を破壊することなく、議会的道を通じて平和的に社会主義へ移行することを唱えており、しかもそれによれば、平和的な社会主義的変革のためにはブルジョア国家機構さえも利用しなければならず、そのさいには、プロレタリアートとその前衛党の指導や、プロレタリアート独裁は必要がないというのである。

現在、資本主義の鎖のもっとも弱い環において革命が勃発する可能性は大きく存在しており、プロレタリアートの階級的自覚を高め、主体的要素を準備し、マルクス・レーニン主義理論——それは、プロレタリアートとその他の被抑圧大衆による国家権力奪取のための真の道を指し示している——の正しさとその普遍的性格にたいする確信を築き上げる必要性は、極度に増大している。まさにこうしたきわめて革命的な瞬間に、修正主義者は、革命に立ち向かいその矛先をそらそうと策動するブルジョアジーにたいして、はかり知れない奉仕をおこなっているのである。ブルジョアジー

が、革命と共産主義に反対してたたかうために、修正主義党と労働組合を自己の勢力下に引き入れようと狂奔しているのはこのためである。これこそが、アメリカ帝国主義と世界資本主義、各国ブルジョアジーのすべてが達成しようとしている目標である。ブルジョアジーが修正主義諸党に望んでいるのは、「共産主義的」色合いのもとで活動することによって、また、いわゆる状況の変革と新たな混合的社会の形成のためにたたかうことによって、かれらが公然としかも全面的に資本に奉仕するようになることである。この混合的新社会とは、雇用主階級や富裕階級だけでなく、いわゆる貧困階級もが発言権をもち、修正主義の「共産党」や社会党がその代表者、擁護者としてふるまう、そうした社会のことである。

権力を握っている修正主義者、なかでもユーゴスラビアやソ連、中国の修正主義者は、革命をおしとどめもみ消すための闘争において、世界資本主義に非常に大きく貢献している。

ユーゴスラビア修正主義者は、レーニン主義の公然の敵である。かれらは、十月革命によって体現され、レーニン主義の革命理論のなかに反映されている社会主義革命の法則の普遍的性格を否定する、もっとも熱狂的な宣伝者である。かれらは、今日の世界は自然成長的に社会主義に向かってすすんでおり、したがって革命や階級闘争の必要はない、などと説いている。ユーゴスラビア修正主義者は、かれらの「自主管理」なる資本主義制度を、真の社会主義の手本として描き出しており、それは「スターリン主義的」社会主義と資本主義の双方の「病」にたいする万能薬であるなどと主張している。かれらに従えば、この制度を打ち立てるには、暴力革命もプロレタリアート独裁

も、社会主義的国家所有も民主主義的中央集権制も必要とはしない、というのである。支配集団相互の、また雇用主と労働者、政府と資産家のあいだの合意と協力によって、「自主管理」は平穏に確立される。

国際資本主義、とりわけアメリカ帝国主義が、チトーのユーゴスラビアにあれほど「気前よく」、財政的、物質的、政治的、イデオロギー的援助をあたえているのは、ユーゴスラビア修正主義がレーニン主義の敵であり、革命を破壊しているからにほかならない。

ソ連修正主義者は、口先ではレーニン主義とその革命理論を否認してはいないが、しかし実際には、反革命的な立場と行動によってそれに敵対している。アメリカ帝国主義者や他のいかなる国のブルジョアジーにも劣らず、かれらはプロレタリア革命を恐れている。なぜなら、かれらにとって革命とは、国内ではかれら自身を玉座から引きずりおろし、かれらの権力と階級的特権を奪い去るものであり、他国においては世界支配をめざすかれらの戦略計画を破綻させるものだからである。

かれらは、ソ連および他国のプロレタリアートと勤労大衆を欺くために、自らを十月革命の継承者、レーニン主義の信奉者であるかのように見せかけている。かれらは「発達した社会主義」や「共産主義への移行」について語っているが、それは、かれらの修正主義的支配に反対する国内勤労大衆のあらゆる不満や反抗、革命運動を鎮め、「反革命」、「反社会主義」の行為としてそれらを弾圧するためである。かれらは国外では、自らの反マルクス主義、反レーニン主義の理論と実践を隠蔽するための、また社会帝国主義の拡張主義的、覇権主義的計画の道を切り開くための仮面とし

て、「レーニン主義」を用いている。

ソ連修正主義者は、発達した資本主義国における暴力革命を、現代においては非常に危険なものであるかのように描き出している。それというのも、かれらによれば、現代においてはいかなる革命的爆発も、人類を絶滅する熱核世界戦争に転化するかも知れないからだというのである。したがってかれらは、現代にもっとも適した道として、平和的な道による革命、すなわち議会を「ブルジョア民主主義の機構から、勤労人民の民主主義の機構に」転化することを推奨している。また、「デタント」――いわゆる緊張緩和――はソ連の対外政策の狙いに奉仕するものであるが、かれらはそれを「今日の世界発展の一般的傾向」であるかのように見せかけ、それは世界的範囲における革命の平和的勝利をもたらすなどと称している。

かれらはデマゴギー的な目的から、プロレタリアート独裁を否定はしていない。たしかにかれらは、特殊な場合には暴力革命も必要になるかも知れないと言って、理論上はプロレタリアート独裁を擁護している。しかし、かれらがそうした言明を必要としているのは、何よりも、かれらがあれこれの国で組織している陰謀や武力クーデターを正当化するためであり、これらの国に反動的親ソ政権や親ソ集団を確立するとともに、民族解放運動を正しい道から逸脱させ、それを自らの支配権の下に置くためである。

修正主義中国もいまでは、革命の熱狂的な火消人となっている。

中国修正主義者の内外政策は全体として、革命にその矛先を向けている。なぜなら、帝国主義超

大国になり上がるという中国の戦略を覆えすのは、革命だからである。

中国国内では、修正主義指導部が、そのブルジョア的、反革命的な立場と行動に反対する労働者階級とその他の勤労大衆のいかなる革命的高揚にも、過酷な弾圧を加えている。かれらは、現代の諸矛盾、とりわけ労働と資本、プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの矛盾をおおい隠そうと躍起になっている。中国修正主義者は、今日の世界にはたった一つの矛盾、すなわち二超大国間の矛盾しか存在しないと主張し、しかもこの矛盾を、アメリカおよび世界のあらゆる国国を一方とし、ソ連社会帝国主義を他方とする矛盾として提起している。かれらは、こうしたでっち上げの命題にもとづいて、あらゆる国のプロレタリアートと人民に、ソ連社会帝国主義のみがもたらす危険に対抗し、「祖国と民族独立を擁護するため」に自国のブルジョアジーと団結するよう要求している。このように、中国修正主義者は大衆に向かって、革命と解放闘争を放棄するという思想を説いているのである。

中国修正主義者にとってプロレタリア革命と民族解放革命がまったく当面の課題とならないのは——かれらに従えば——世界にはいまのところ革命的情勢が存在しないからでもある。したがってかれらは、プロレタリアートにたいして、革命的行動の時はまだおとずれていないのだから、書斎にとじこもって「理論」を研究するよう助言している。こうした関連から見るならば、マルクス・レーニン主義運動を分裂させ、資本との闘争のなかで労働者階級が団結することを阻害する中国修正主義者の政策が、いかに敵対的で反革命的なものであるかは歴然としている。

中国の新聞や宣伝機関、あるいは中国の指導者自身の発言は、プロレタリアート全体がさまざまな資本主義国で今日くり広げている大規模なデモンストレーションやストライキには、まったくふれていない。それは、かれらが大衆の反抗を励ますことを望まず、プロレタリアートがこうした情勢を利用して抑圧・搾取とたたかうことを望んでいないからである。「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求める」というかれらの大げさで空虚なスローガンは、何と偽善的にひびくことだろう！

中国修正主義者は、現実に反して、今日の世界には革命的情勢は存在していないと主張するばかりでなく、さらに、プロレタリアートとそのマルクス・レーニン主義党は、いかなる革命的行動を起こすことも、また革命を準備する活動をおこなうことも自制して、ただ手をこまねいて待たねばならないと要求している。かつてレーニンは、共産主義インタナショナル第二回大会において、イタリアのセラティ――かれによれば、革命的情勢が存在していないときにはいかなる革命的行動もとるべきではないというのである――に代表されるそうした降伏主義的観点を批判して次のようにのべた。

「どんな情勢のもとでも、われわれが行動しているように行動すること、すなわち革命的活動をすることを、社会主義者が拒否しているところに、社会主義者と共産主義者の違いがある*」。

レーニンのこの批判は、社会民主主義者と同様、プロレタリアートとその他の勤労大衆の革命的行動に反対する中国現代修正主義者、および他のすべての修正主義者にたいする痛撃である。

＊『共産主義インタナショナル第二回大会—共産主義インタナショナルへの加入条件についての演説』
——邦訳『レーニン全集』第三一巻二四五ページ

レーニンは、カウツキーを背教者と呼んだが、それは、

「……彼がマルクスの学説をまったくゆがめ、これを日和見主義に偽造し、『口さきでは革命を承認しながら実際にはそれを否認した』＊」

からであった。中国修正主義指導部は、カウツキーよりもさらに一歩先をいっている。かれらは、口先でも、革命の必要性を認めてはいないのである。

＊『プロレタリア革命と背教者カウツキー』——邦訳『レーニン全集』第二八巻二四三ページ

中国修正主義指導部は、アメリカ帝国主義やその他の発達した資本主義諸国と協力し同盟を結ぼうと必死になり、ヨーロッパ共同市場やNATOを支持しているが、こうした徹頭徹尾反革命的な

政策と態度は、以上のような反動的路線によって明白に説明される。

中国修正主義者は、アメリカ帝国主義者――それはソ連社会帝国主義者と並んで、もっとも狂暴な抑圧者、搾取者であり、プロレタリアートと各国人民の最大の敵である――および、その他の帝国主義支配者やもっとも腹黒い世界反動との団結を求め、かれらと同盟を結ぶとともに、他方では、ヨーロッパ諸国と他の発達した資本主義諸国のプロレタリアートにたいして、ブルジョアジーに拝跪し、その抑圧に服従するよう要求している。そうすることによって、中国修正主義者自身もまた、この抑圧に加担しているのであり、世界資本主義と結託して、革命と社会主義、各国人民の解放に敵対してたたかっているのである。

現に見られるように、世界資本主義は、現代修正主義やその他すべての手先を使って、革命の勃発を阻止するために、あらゆる戦線で激しい多面的な闘争をおこなっている。

かれらは、危機を克服し、また、革命的情勢が革命に転化するのを妨げるためにこうした情勢を鎮静化し、かき消そうと躍起になっている。しかしながら、危機と革命的情勢は客観的な現象であって、資本家や修正主義者、その他いかなる者の意志や願望にも左右されるものではない。危機と革命的情勢は、不可避的にそれらを引き起こす抑圧と搾取の資本主義制度が消滅されたときにのみ、はじめて回避することができるのである。

帝国主義者とその他の資本家、修正主義者は、危機と革命的情勢の時期においても、革命は自然発生的に勃発するものではないことを熟知している。したがってかれらは、その注意と主要な打撃

を、主体的要素に向けるのである。かれらは一方では、プロレタリアートとその他の勤労大衆、各国人民を欺瞞し麻痺させるとともに、かれらが革命の必要性について自覚を高め、団結し自らを組織するのを妨害しようと必死になっている。そして他方では、かれらは、国際マルクス・レーニン主義運動を破壊し、その成長と強大化を阻止しようとたたかっている。それは、この運動が革命を指導する一大政治勢力になるのを阻むためであり、各国の真のマルクス・レーニン主義党が、大衆を団結させ、組織・動員し、かれらを率いて革命をなしとげ、勝利をたたかいとるという能力を獲得するのを妨げるためである。

しかし、帝国主義者や資本家、修正主義者、反動派が、いかに必死になって策動し闘争しようとも、かれらは歴史の歯車の回転を止めることはできない。かれらの策動と闘争は、プロレタリアートおよび自由を愛する各国人民の革命的な奮闘と闘争に直面するであろうし、現代修正主義者もまた、過去の社会民主主義者とあらゆる日和見主義者、ブルジョアジー・帝国主義のあらゆる手先と同じ運命をたどるであろう。

各国人民の解放闘争は世界革命の一構成部分である

われわれが革命について語るとき、それは社会主義革命のみを意味しているのではない。資本主義から社会主義への革命的移行の時代である現代においては、各国人民の解放闘争、すなわち反帝

民族民主革命と民族解放運動もまた、プロレタリア世界革命という単一の革命的過程の一構成部分をなしている。それは、レーニンとスターリンが明らかにしたとおりである。スターリンは、次のようにのべている。

「民族問題はプロレタリア革命と結びついてしか、また、それを土台としてしか解決されないこと、西欧における革命の勝利の道は帝国主義にたいする植民地・従属国の解放運動との革命的同盟をとおっていること、レーニン主義はこのことを証明し、……民族問題は、プロレタリア革命の一般的問題の一部分であり、プロレタリアートの独裁の問題の一部分である*」。

＊『レーニン主義の基礎について』——邦訳『スターリン全集』第六巻一五五ページ

今日、旧植民地体制の崩壊にともなって、ほとんどの国の人民が自らの民族国家の形成を通じて独立への巨歩をすすめ、こうした成果に引き続いてさらに前進することを熱望しているが、そうした状況のもとで、この結びつきはなおいっそう明白で当然なものとなっている。かれらは、新植民地主義体制の一掃と、帝国主義へのあらゆる隷属、外国資本によるあらゆる搾取の根絶を求めている。かれらは、自己の完全な主権と、経済的、政治的独立を求めている。そうした願望が実現可能なこと、そうした目標はただ、あらゆる外国の支配と外国への従属を排除し、国内のブルジョア支

配層と大地主層による抑圧と搾取を根絶することによってのみ達成しうるということは、今日実証されているとおりである。

このように、反帝民族民主革命、民族解放革命は、社会主義革命と互いに結びつき、からみあっている。なぜならば、これらの革命も、プロレタリアートと各国人民の共同の敵である帝国主義と反動に打撃を加えることによって、巨大な社会的変革への道を掃き清めるとともに、社会主義革命の勝利を促すからである。そしてまた逆に、社会主義革命は、帝国主義ブルジョアジーに打撃を加えその経済的、政治的地盤を破壊することによって、解放運動の勝利に有利な条件をつくり出し、それを促すのである。

アルバニア労働党は、革命の問題をこのように見なしている。アルバニア労働党は、この問題をマルクス・レーニン主義的立場から考察しており、だからこそ、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義、その他の帝国主義諸国に反対し、新植民地主義に反対して自由を愛する人民がくり広げている正義の闘争に、全面的な支持と援助をあたえているのである。それは、これらの闘争が、帝国主義と資本主義制度を打倒し、個個の国および世界的範囲において社会主義を勝利させるという共同の事業を支えるものだからである。

したがって、革命が解決するために提起された問題となっているという結論、すなわち革命が日程にのぼっているという結論をわれわれが引き出すとき、われわれは、単に社会主義革命だけではなく、反帝民主革命をも念頭に置いているのである。

革命的情勢の成熟の度合、革命の発展の性格は、すべての国にとって同一ではありえない。それらは、個個の国の具体的な歴史的条件、経済的・社会的発展段階、諸階級の関係、プロレタリアートおよび被抑圧大衆の置かれている状態とかれらの組織水準、それぞれの国における外国勢力の干渉の程度、等等によって異なってくる。それぞれの国と人民は、多くの個別的な革命の課題を抱えており、それらはきわめて入り組んだものである。

今日、アフリカ、アジア、ラテンアメリカの情勢と、それらの地域における革命の進行について多くのことが語られている。これら諸国における革命と独立、民族解放の問題を、中国指導部は大ざっぱな方法で、すなわち、個個の国あるいは地域の具体的な状況や課題を無視して、あたかもこうした問題が「第三世界」全体の――つまり、諸国家、諸階級、諸政府の――団結によって解決されうるものであるかのように見なしている。こうした形而上学的な見解が示しているように、中国指導部は実際には、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国人民の革命と解放に反対しているのであり、現状の維持、すなわちこれら諸国にたいする帝国主義的、新植民地主義的支配に賛成しているのである。

われわれもまた、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、アラブ諸国人民とその他の諸国人民の解放の問題について語る。これら諸国人民は、解決すべき多くの共通の課題を抱えているが、同時にそれぞれが、きわめて複雑な個別的課題を抱えている。

これら諸国人民に共通した普遍的課題は、帝国主義、植民地主義、新植民地主義によるあらゆる

外国のくびきを断ち、自国ブルジョアジーによる抑圧を根絶することである。アフリカ、ラテンアメリカ、アジア諸国人民も、またそのほかのいかなる人民も、外国の束縛にたいして、また、アメリカ帝国主義者やソ連社会帝国主義者、その他の帝国主義者に身を売り渡した自国のブルジョア支配集団、あるいは地主＝ブルジョア支配集団の圧制にたいして、煮えたぎるような怒りと憎悪を抱いている。これらの人民はいまや覚醒しており、自分自身の富、自分自身の血と汗にたいする収奪をもはや許すことはできず、自らの生活を取り巻く経済的、社会的、文化的後進性にもはや甘んじることはできない。

各国人民は、革命と各国人民の民族的・社会的解放の主要な敵、アメリカ帝国主義およびソ連社会帝国主義との闘争のなかで、また、ブルジョアジー、反動との闘争のなかで、幾多の共通の利益、共通の課題を見出している。それを基盤として、かれらは互いに団結しなければならない。

アメリカ帝国主義のもっとも血に飢えた手先、イスラエル――それは、アラブ諸国人民の前進の重大な障害物となっている――に反対する闘争は、アラブ諸国人民すべてにとって共通の課題である。しかしながら実際には、かれらがイスラエルに反対して共同でくり広げるべき闘争について、あるいは、共通の敵にたいするこの闘争がもつべき性格について、すべてのアラブ国家の意見が一致しているわけではない。一部のアラブ諸国はしばしば、狭い民族主義的角度からこの闘争を見ている。われわれは、そうした態度に同意することはできない。われわれは、イスラエルは自らの古

巣に引き揚げるべきであり、アラブ国家に敵対する排外主義的、挑発的、攻撃的、侵略的な態度と行動をやめるべきだという立場を堅持する。われわれは、イスラエルがアラブ側の領土を放棄し、パレスチナ人がそのすべての民族的権利を獲得するよう要求する。しかしわれわれは、イスラエル人が絶滅されるべきだという見解を受け入れることはできない。

同様に、アラブ諸国人民すべてにとって共通の課題となっているのは、帝国主義、社会帝国主義の魔手からの完全な解放と、自らの自由と主権の強化のために、これら人民自身が奮闘することである。

しかしながら、アラブ諸国人民はそれぞれ、互いに異なる独自の特徴と個別的な課題をもっており、それらは個個の国の社会的・経済的発展の度合、文化水準、国家組織のちがい、自由と主権の達成度、あるいは、アラブ諸国の多くに存在する部族や種族の統合の程度、等等から生じている。こうした個別的な要素を十把一からげにして、自由と独立、民主主義と社会主義の課題はこれら諸国において同じやり方で同時に解決されなければならないと要求するのは、不可能なことである。

ブルジョアジーがもっとも大きな権益を有していた一部のアラブ諸国では、天然資源と人民を搾取するために、各国の帝国主義者が多額の資本投下をおこなってきた。この目的を達成するためには、植民地領有国と植民地の双方にとって、一定の活動条件がつくり出されなければならなかった。どこであれ天然資源にもっとも恵まれ、植民地領有国の権益が最大であったところでは、人民とその富にたいする搾取もより激烈なものとなった。もちろん、資源の開発は一定の発展をもたら

しはしたが、しかしそれは、当事国経済の均衡のとれた全面的発展とは見なしえないものであった。植民地領有国は、支配的な部族の首領に資金援助をおこなった。そしてこれらの首領たちは、自己の魂と人民の財産とを帝国主義占領者に売り渡し、それと引きかえに、植民地領有国が手にした巨額の利潤のおこぼれにあずかってきたのである。

自分たちを隷属下に置く宗主国の国力と周囲の状況によっては、部族長たちは、このような利潤と外国からの援助を用いて、また宗主国の支持と統制のもとに、ある種のいわゆる独立国家を形成した。こうして、宗主国の援助を得た部族長たちは、シェイク(族長)からなる富裕なブルジョア階層にかわり、自国領土と自国人民をただ同然に売り渡し、ついには、人民を二重の隷属のもとに、すなわち外国の植民地領有者と部族長自身への隷属のもとに陥れた。このように、アラブ諸国では、一方の大ブルジョアジー、大地主および中世的諸侯と、他方の奴隷および外国の租借地で働くプロレタリアートとからなる二つの階層が生まれ、互いに対峙してきたのである。上層部は、外国の搾取者から資金と利益を受け取るとともに、欧米ブルジョアジーの生活様式を取り入れた。かれらの子弟たちは、宗主国の学校に通うまでになり、そこで多少の西欧文化を習得した。かれらは自国の国民文化の代表者であるかのようにふるまっていたが、実際には、かれらは勤労大衆を奴隷の身分に置き、植民地領有国が勤労大衆の過酷な搾取をつづけるのを許容するよう訓練されていたのであった。

比較的豊かな資源をもったアラブ国家はより急速に発展し、それほど豊かでないところの発展は

緩慢であった。そして、資源に乏しい国国は、依然としてきわめて低い発展水準にとめおかれた。

植民地主義、および封建君主と土地所有大ブルジョアジーの国家権力は、徹底的弾圧を加えるのに好都合な機構をもち、軍隊を手中にしていたので、いかなる反抗の試みも、いかなる要求も——政治的要求を掲げたものや革命は言うまでもなく、きわめて限られたわずかな経済的権利を要求するものさえも——芽のうちに摘みとった。

今日アラブ諸国は、その発展の途上で、同一の問題を解決するよう迫られているわけではない。たとえば、サウジアラビア国王は経済上、政治上、機構上、軍事上の諸問題について、ペルシャ湾岸の首長国連邦の首長たちとは異なる見解をもち、異なる問題を抱えており、後者は別の角度からちがった範囲にわたってこれらの問題をとらえている。同様に、イラク、シリア、エジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、モーリタニア等等もすべて、それぞれが抱えている問題を異なった観点で見ているのである。

したがってわれわれは、アラブ諸国人民について語るとき、次の結論に達する。それは、アラブ諸国は多くの共通の利害を有してはいるものの、それらが抱えている問題は同一ではなく、一国における解決方法が他国における解決方法と同じだということはありえない、ということである。同様に、共通の問題の解決についても、これら諸国に連携と統一見解が存在しているとは言えない。問題がそれぞれのアラブ国家によって異なっているのは、個個の国の政府の立場の相違のためだけではなく、これら諸国の大多数で依然として釆配をふっている植民地・新植民地支配国の態度のた

めでもある。

アラブ諸国人民についてのべたことは、アフリカ大陸諸国人民についてもあてはまる。アフリカには、古い文化をもった諸民族人民がモザイクのように集まっている。どのアフリカ人民も、自らの文化と風俗、生活様式を有している。それらは若干の相違こそあれ、周知の理由のためにきわめて遅れた段階にある。これら人民の大部分の覚醒は、やっとはじまったばかりである。法的には、アフリカ諸国人民は全体として、自己の自由と独立をすでに獲得している。しかし真の自由と独立については語ることができない。というのも、その大多数は未だに植民地、あるいは新植民地の状態にあるからである。これら諸国の多くを統治しているのは、権力を握ったかつての部族長たちであり、かれらは旧宗主国、あるいはアメリカ帝国主義者やソ連社会帝国主義者に従属している。これら諸国における現段階の統治方法は、植民地主義の根強い遺物であり、それ以外ではありえない。帝国主義者はかれらのコンツェルン、あるいは工業に投下された資本や銀行などを通じて、アフリカ諸国の大多数をふたたび支配している。これらの国国の富の圧倒的部分は、依然として帝国主義宗主国へと流出しつづけている。

一部のアフリカ諸国は、今日享受している自由と独立をたたかいを通じてかちとったが、他の国国は闘争することなしにそれらをあたえられた。イギリスやフランス、その他の植民地領有国は、アフリカにおける植民地支配の時期を通じて諸国人民を抑圧してきたが、かれらはまた、多少なり

とも西洋式の教育を受けた現地国ブルジョアジーを生み出した。今日の指導的人物もこうしたブルジョアジーのなかから出現した。かれらのなかには多くの反帝国主義的分子、自国の独立をめざす戦士が含まれているが、その他の大部分はいまも旧宗主国に忠実である。それは、植民地支配の形式的廃止後もなおこれらの宗主国と緊密な関係を保つためであり、あるいは、アメリカ帝国主義者やソ連社会帝国主義者にたいする経済的、政治的従属関係をもつためである。

過去において、植民地領有国がおこなった資本投下はそれほど多額なものではなかった。たとえば、リビアやチュニジア、エジプトなどにおいても、事実そうであった。しかしながら、植民地領有国は、これらの国国の富を収奪し、広大な土地を占取し、そしてプロレタリアートを生み出した。これらのプロレタリアートは、原料の採掘・加工など一部の特殊な工業部門では、けっして少人数のものではなかった。植民地領有国はまた、多数の労働者を本国に——たとえばフランスや、あるいはイギリスにも——連行し、かれらの鉱山や工場で低廉な労働力として働かせた。

アフリカのその他の部分、とりわけブラック・アフリカでは、工業の発展はさらに遅れたものにとどまった。この地域の国国はすべて、とくにフランスやイギリス、ベルギー、ポルトガルのあいだで分割された。ダイヤモンドや鉄鉱、銅、金、錫等等の豊富な地下資源はかなり以前に発見されており、鉱石の採掘・加工業が設立されてきた。

多くのアフリカ諸国では、典型的な植民地的大都会が建設され、植民地支配者たちはそこで途方もなくぜい沢な生活を送った。現在では、一方で現地国大ブルジョアジーの成長とその富の増大が

あり、他方では広範な勤労人民大衆の貧困化がますますすすんでいる。これらの国国ではある程度の文化的発展が達成されているが、それはどちらかといえばヨーロッパ的性格のものである。これらの諸国に固有の文化は、発達をとげていない。一般的にそれは諸部族が到達した段階にとどまっており、これらの部族から一歩外に出て、超高層ビルの立ち並ぶ大都会にはいれば、その文化はどこにも見ることはできない。こうした状況が生まれたのは、植民地支配者たちが生活する大都会を離れると、そこにはいちじるしい窮乏と極度の貧困が存在し、文字どおりの飢餓と病、無知、人民の無慈悲な搾取がおおいつくしていたからである。

文化的、経済的に立ち遅れていたアフリカ住民の人口は、植民地戦争や野蛮な人種的迫害、あるいは黒人奴隷の売買によって、減少の一途をたどってきた。かれらはアメリカやその他の帝国主義宗主国に送られ、綿花やその他の作物の大農場で家畜のようにこき使われ、工業や建設でもっとも過酷な労働にたずさわった。

こうしたさまざまな理由のために、アフリカ諸国人民の前途にはなお、大きな闘争が待ち受けている。それは、国によって異なった、きわめて複雑な闘争であるし、今後もそうでありつづけるだろう。それは、かれらの経済的、文化的、教育的発展の現状、その政治的覚醒の度合によるものであり、また、キリスト教や回教、あるいは古くからの原始信仰などさまざまな宗教がこれら諸国の人民大衆におよぼしている大きな影響によるものである。この闘争は、アフリカ諸国の多くが現実には、現地の資本家的ブルジョア支配集団と結びついた新植民地主義の支配下にあるだけに、なお

いっそう困難なものになっている。そこで采配をふっているのは、支配集団を買収し自己の統制下に置いた資本主義・帝国主義強国であり、かれらはこの支配集団を、新植民地主義者の利益が要求するとき、あるいはこうした利害関係の均衡が崩れたときには、いつでもかつぎ出したり引きずりおろしたりするのである。

大地主と反動的ブルジョアジー、帝国主義者と新植民地主義者が追求している政策の狙いは、アフリカ諸国人民を永遠の束縛と無知につなぎとめ、かれらの社会的、政治的、イデオロギー的発展を阻害し、自らの権利を獲得しようとするかれらの闘争を妨げることである。現在われわれが目にしているのは、かつてこれら諸国人民の頭上に君臨していたほかならぬその帝国主義者が、あるいはその他の新参の帝国主義者が、あらゆる手段で諸国人民の内政に干渉し、アフリカ大陸に進出しようと努めているという状況である。その結果、帝国主義者相互の矛盾、各国人民と多数の国の資本家的ブルジョア指導部のあいだの矛盾、および各国人民と新たな植民地支配国のあいだの矛盾は、日に日にますます鋭いものになっている。

人民は、これらの諸矛盾を利用し、それらを深化させ、有利に活用しなければならない。しかしこのことは、プロレタリアートと貧農、およびすべての被抑圧者と奴隷が、帝国主義と新植民地主義に反対し、国内の大ブルジョアジーと大地主、およびその全機構に反対して断固たる闘争をくり広げることによってのみ、なしうることである。この闘争において特別の役割を担っているのは、進歩的で民主的な人人、ならびに革命的青年、愛国的知識人である。かれらは自らの祖国が、発展

と進歩の道にそって、自由と独立のうちに前進をつづけるよう熱望しているのである。こうした人人によるたえざる組織的闘争によってのみ、内外の抑圧者、搾取者を困難に陥れ、その統治を不可能にすることができる。こうした情勢は、個個のアフリカ諸国の固有の事情に応じて準備されるであろう。

イギリス帝国主義とアメリカ帝国主義は、アフリカ諸国人民にいかなる自由をもあたえてはいない。たとえば南アフリカで起こっている出来事は、だれが見ても明らかである。そこでは、白人人種主義者と搾取者であるイギリスの資本家が支配し、自国の黒人を野蛮な圧制のもとに置いており、弱肉強食の法則が貫かれている。そのほかの多数のアフリカ諸国も、アメリカやイギリス、フランス、ベルギー、あるいはその他の旧植民地領有者、帝国主義者に支配されている。これらの勢力は幾分かは弱体化しているが、依然としてこれらの国国の経済の骨幹を握っている。

アジア諸国人民も、帝国主義の過酷な抑圧と搾取という苦難と辛苦とに満ちた道をたどってきた。第二次世界大戦の前夜、ソビエト・アジアを除くこの大陸の人口の九〇パーセントは、ヨーロッパと日本、アメリカの帝国主義列強による植民地・半植民地的抑圧と搾取のもとに置かれていた。大英帝国だけでも、あわせて四億二〇〇〇万人以上の住民を抱える五六三万五〇〇〇平方キロメートルの植民地をアジアに領有していた。圧倒的多数のアジア諸国にたいする植民地的抑圧・搾取は、これらの国国を、社会的・経済的あるいは文化的にいちじるしく立ち遅れた、きわめて貧困

な状態につなぎとめた。アジア諸国は、もっぱら帝国主義宗主国にたいする原料——石油、石炭、クロム、マンガン、マグネシウム、錫、ゴム等等——の供給源として役立てられた。

戦後、アジアにおいても植民地体制は崩壊した。植民地国では、独立した民族国家が打ち立てられた。これらの国国の大半は、植民地主義者と日本侵略者に抗して人民大衆がくり広げた流血の戦争を通じて、この勝利をかちとった。

中国人民の解放戦争は、日本帝国主義の支配からの中国の解放、および蔣介石反動勢力の壊滅と民主主義革命の勝利をもたらした。それは、アジアにおける植民地主義の崩壊にとって特別の重要性をもつものであった。中国のような大国で収められたこの勝利は、アジア諸国人民の解放闘争、および、帝国主義諸国に支配され従属しているその他の諸国人民の解放闘争に、一時期広範な影響をあたえた。しかしこの影響は、次第に衰えていった。それは、中華人民共和国建国後中国指導部が歩んだ路線のためであった。

中国指導部は、中国が社会主義的発展の道を歩んでいると声明した。中国が社会主義と世界革命の強大な砦になることを望み、期待をかけていた世界の革命家と自由を愛する諸国人民は、この声明を熱烈に歓迎した。しかし、かれらの願望と期待はかなえられなかった。信じ難いことではあったが、中国をおおっていた非常に複雑で混迷した状況と諸事実は、中国が社会主義の道を歩んではいなかったことを示していたのである。

他方、アジア諸国人民の闘争は、植民地主義の崩壊とともに終わりはしなかった。旧植民地国の

独立の承認を余儀なくされたイギリスやフランス、オランダ、その他の植民地主義者は、別の形態、すなわち新植民地主義の形態でその支配と搾取をつづけるために、これらの国国において自己の経済的、政治的地位を保持しようと望んだ。アメリカのアジア進出、とりわけ極東と東南アジア、太平洋諸島にたいする進出は、きわだって重大な状況を生み出した。アメリカ帝国主義にとって、この地域は大きな経済的、軍事戦略的重要性を有していたし、いまもなお有している。アメリカ帝国主義はこの地域に、大軍事基地を設置し、強力な艦隊を配備した。それと並んでアメリカ資本は、この地域の国国の経済を、血に汚れた自己の手中にがっちりと組み込んだ。その一方でアメリカ帝国主義者は、アジア諸国の民族解放運動を鎮圧するために、大規模な軍事作戦と転覆・スパイ活動に着手した。かれらは首尾よく朝鮮とベトナムを二つに分断し、これら両国の南部に反動かいらい政権をでっちあげた。さらにまた、アジアの旧植民地・半植民地国の多くに、親帝国主義的地主＝ブルジョア政権が成立した。このようにこれらの国国では、中世的奴隷制度と、土侯や諸王、族長、土豪による野蛮な支配、そして「近代的」資本家がともに温存された。これらの政権は、自国をふたたび帝国主義者——とりわけアメリカ帝国主義——に売り渡し、それによってこれら諸国の社会的・経済的、あるいは文化的な発展をいちじるしく阻害した。

こうした事情のもとで、帝国主義および地主＝ブルジョア的圧制のもとにふたたびあえいでいたアジア諸国人民は、武器を捨て去ることができず、このくびきから脱するために解放闘争をつづけなければならなかった。この闘争は通例、各国の共産党によって指導された。これらの党が大衆と

の緊密な結びつきを打ち立てることに成功し、かれらに戦争の解放目的を認識させ、かれらを組織し革命的武装闘争に立ち上がらせたところでは、積極的な成果がかちとられた。インドシナ人民、とりわけベトナム人民がアメリカ帝国主義者とその地主＝ブルジョア的かいらいにたいして収めた歴史的勝利は、全世界に次のことを示した。それは、帝国主義、すなわち強大な経済力と軍事力を有し、あらゆる近代的戦争手段——かれらは、解放運動を圧殺するためにそれらを用いるのである——を駆使しうるアメリカのような超大国でさえ、諸国と人民が——大国であれ小国であれ——自らの自由と独立のためにはいかなる犠牲をも払う決意を固め、そのために最後までひたむきにたたかいぬくならば、けっしてその人民を屈服させることはできないということであった。

そのほか、ビルマやマレーシア、フィリピン、インドネシアなど多くのアジア諸国でも、武装解放闘争がくり広げられてきたし、いまもくり広げられている。中国指導部の反マルクス主義、排外主義の干渉と態度は、革命勢力とそれを指導する各国共産党のなかに分裂と混乱をつくり出したが、もしもそうした干渉と態度がなかったならば、これらの闘争は間違いなくさらに大きな成果と勝利を収めていたであろう。中国指導部は、一方ではこれら諸国における解放戦争にたいする支持を宣言したが、他方でかれらは各国の反動政権を支持し、これらの政権の頭目連中に賛辞をささげ、その訪中のさいには送迎にあたって最大限の礼をつくしたのである。かれらがつねに追求してきた戦略・戦術は、アジア諸国の解放運動を、自己のプラグマチックな政策と覇権主義的利害に従属させることであった。かれらはこの政策をおしつけるために、つねに革命勢力とその指導部に圧

力をかけてきた。実際にかれらが関心をよせていたのは、けっしてアジア諸国における人民解放と革命の問題ではなく、もっぱら自己の排外主義的野望を達成することであった。かれらはアジア諸国人民を援助してきたのではなく、むしろ阻害してきたのである。

アジアにおける革命と解放闘争の問題が、今日ほど強くかつ緊急に解決を要求されたことはかつてなかったし、今日ほど複雑で解決困難になったこともなかった。

こうした複雑性と困難性は、主としてアメリカ帝国主義者の目的と活動によって引き起こされたものであるが、さらにまた、ソ連と中国の修正主義者・社会帝国主義者による反マルクス主義、反人民の覇権主義的、拡張主義的な狙いと活動によって引き起こされたものでもある。

アメリカは、アジアにおける自己の戦略的、経済的、軍事的地位を維持強化することをめざしており、そのためになりふりかまわぬ策動をおこなっている。というのは、かれらはこの地位が、その帝国主義的利害にとって死活の重要性をもつものであると考えているからである。

ソ連もまた、すでにアジアで占めている地位をあらゆる手口で拡大しようともくろみ、そのために懸命になっている。

中国の側は、アジア諸国の支配者になるという自己の主張を露骨にあらわしており、その目的のために、アメリカと、そしてとくに日本と同盟を結び、ソ連と真向から対立している。

そして日本も、アジアを支配する野心に燃えている。それは、日本帝国主義の年来の野望である。

ソ連が中日同盟をあれほど恐れ、あれほど強硬に反対しているのは、こうした理由からである。

アメリカ帝国主義は、中日条約がソ連の拡張――それはアメリカの支配を損なうものである――を封じ込めることになるという立場から、この条約の調印を促しそれに「祝福」を送った。とはいえかれらも、中日同盟がその枠をこえ、アメリカの利益を侵害するほどまでに強固になることを望んではいない。

大国の一つであるインドも、原子爆弾を保有しアジアで大きな比重を占める強国にのし上がろうという野望をもっており、米ソ両帝国主義超大国の拡張主義的利害の結節点をなすインド洋やペルシャ湾、および北部・東部インド国境においてインドが占めている戦略的地位をとくに利用して、独自の役割を演じようとしている。

またイギリス帝国主義も、アジア諸国を支配するもくろみを捨てていない。その他一部の資本主義・帝国主義国も、同様の目的をもっている。

このような理由のために、アジアは、今日において帝国主義間争奪のもっとも激烈な地域の一つとなっており、その結果、世界的な戦火――その代価を払うのは各国人民である――の危険な火種が数多くつくり出されている。

互いに気違いじみた争奪をくり広げているソ連修正主義者と中国修正主義者は、アジア諸国の革命と解放闘争を圧殺し、かれらの覇権主義的、拡張主義的計画を達成する道を切り開くために、これらの国の革命的、進歩的勢力の隊伍を分裂させ破壊する卑劣きわまる活動をおこなってきたし、いまもおこなっている。インドネシア共産党をおそった破局、インド共産党の分裂と瓦解の主因の

一つは、こうした活動であった。かれらは、プロレタリアートおよび広範な人民大衆と、国内反動ブルジョアジーとの同盟と連合を提唱する一方、それぞれが自分自身の目的のために、この支配的ブルジョアジーと親交を結ぼうと努めている。

ソ連社会帝国主義者と中国社会帝国主義者が、自己の覇権主義的、拡張主義的な立場と野望からアジア諸国でおこなってきた干渉は、アジア諸国人民の解放運動を重大な危険に直面させ、さらには、ベトナム、カンボジア、ラオスにおける解放戦争の勝利をも、直接脅威にさらすまでになった。

マルクス・レーニン主義的共産党に導かれるアジア諸国の革命勢力と自由愛好勢力は、帝国主義に武器をあたえられた自国の反動がもたらす危険とも、また、ソ連修正主義者と中国修正主義者の分裂・破壊活動、覇権主義的、拡張主義的計画がもたらす危険とも対決しなければならず、これら双方を根絶しなければならない。かれらはまた、解放運動の妨げとなっている一連の古い反動的、神秘主義的な思想・概念、仏教やバラモン教、その他の宗教の宗教的思想・概念から、自らを解放しなければならない。またかれらは、「新しい」反動的な思想・概念——たとえば、フルシチョフ主義、毛沢東主義といった修正主義思想、あるいはその他のまったく反動的な諸理論——が根をおろすのを阻まなければならない。それらは、大衆を誤らせ欺瞞し、その階級的戦闘精神を奪い去るとともに、かれらを誤った展望のない道に引きずり込むものである。

アジア諸国人民の前途にある解放闘争は、実に困難であり、多くの障害に満ちている。しかし、克服すべき困難も障害もなく、最終的勝利をかちとるために流血や幾多の犠牲が要求されないよう

な、たやすい解放闘争や革命はけっして存在したことはなかったし、今後も存在しないであろう。

ラテンアメリカ諸国は一般的に、アフリカ、アジア諸国よりも高い資本主義的発展水準にある。しかし、外国資本にたいするラテンアメリカ諸国の従属度は、大多数のアフリカ、アジア諸国のそれよりも低いというわけではない。

アフリカ、アジア諸国と異なって、ラテンアメリカ諸国のほとんどはかなり以前に、つまり一九世紀の前半以降から、独立国家として宣言していた。それは、この大陸の人民が、スペイン、ポルトガルという植民地占領者に反対してくり広げた解放闘争の結果であった。スペインとポルトガルによる植民地のくびきを断ち切った直後から、これらの諸国は新たなくびき、すなわちイギリスやフランス、ドイツ、アメリカ、およびその他の外国資本による半植民地的圧制のもとに陥れられた。もしそうしたことがなかったならば、これらの国国はもっと大きな進歩をとげていたであろう。二〇世紀の初頭に至るまでこの大陸の情勢を左右してきたのは、イギリス植民地主義者であった。かれらは莫大な原料をこれらの国国から収奪し、もっぱら特権的な自国企業のみに有用な港湾や鉄道、発電所を建設するとともに、イギリスで生産された工業製品を売り込んだ。

帝国主義的発展段階に達したアメリカ合衆国のラテンアメリカ進出にともなって、状況はかわったが、それはラテンアメリカ諸国人民にとっては不利なものであった。アメリカ合衆国の帝国主義は、西半球全体にたいする一元的支配を確立するために、「モンロー主義」に具体化される「アメ

リカ人のためのアメリカ」というスローガンを掲げた。西半球にたいするアメリカ合衆国の経済進出は、軍事力と政治的恐喝、およびドル外交という二つの手口、すなわちアメとムチの手口でおしすすめられた。こうして、一九三〇年には米英両国の対ラテンアメリカ投資額は同等であったのにたいし、第二次世界大戦後には、アメリカ合衆国が世界のこの地域における経済の真の支配者となった。アメリカの大独占体は、ラテンアメリカ経済の基幹部門の支配権を握った。この大陸の諸国は、アメリカ帝国主義の「見えざる」帝国の一部分となった。アメリカ帝国主義は、これらの国国に君臨し、国家元首や政府を任免し、その経済的、軍事的内外政策を牛耳るようになった。

アメリカの独占企業は、豊富な天然資源とラテンアメリカ諸国人民の労苦と血と汗を搾取し、そこから法外な利潤を引き出した。かれらは、この大陸の諸国にたいする投資一ドルにあたり、四一五ドルの利潤を揚げた。こうした状況は、今日でもなお一般的である。

帝国主義諸国がラテンアメリカに投下した資本は、一部の近代工業――とくに鉱業や軽工業、食品加工業――の設立につながりはしたが、これらの投資はラテンアメリカ諸国の全面的経済発展にとっては、きわめて重大な障害となった。外国独占体および帝国主義諸国の新植民地主義政策によって、ラテンアメリカ諸国の経済発展にはゆがんだ一面的形態とモノカルチャー(訳注)的性格が付与され、これらの国国はもっぱら個個の特殊な原料の供給国にかえられてしまった。ベネズエラは石油、ボリビアは錫、チリは銅、ブラジルとコロンビアはコーヒー、キューバとハイチ、ドミニカ共和国は砂糖、ウルグァイとアルゼンチンは畜産品、エクアドルはバナナなどといった具合にである。

（訳注）　もともと農業における単作のことをいうが、ここでは特殊な品目の原料資源のみを産する植民地・従属国経済の特徴を指している。

こうした一面的性格のために、ラテンアメリカ諸国の経済はまったく不安定なものとなり、急速で全面的な発展能力を失い、資本主義世界市場での価格変動に翻弄されるようになってしまった。アメリカやその他の資本主義国におけるいかなる生産減退も、またいかなる経済危機のあらわれも、必然的に否定的な形で、しかもより激しくなって、ラテンアメリカ諸国経済にまで反映するようになった。

第二次世界大戦後、帝国主義本国は、さまざまな工業部門や鉱業、農業に大規模な直接投資をはじめるとともに、国営企業などの買収に乗り出した。かれらは自己の支配を全生産部門に拡大し、ラテンアメリカ諸国にたいする収奪を最大限に強めた。それと同時にかれらは、借款供与や高利の融資に拍車をかけ、これらの国国をますます緊密に外国の支配に、まず第一にアメリカによる支配に結びつけた。ブラジル一国だけでも、外国銀行にたいする債務はおよそ四〇〇億ドルにものぼり、メキシコは約三〇〇億ドルの債務を抱えている。

ラテンアメリカにおける資本主義の発展が全般的に立ち遅れているのは、ラティフンディウム（大農園制度）の残滓が未だに多く存在しているためでもある。それはまだ封建的性格を完全に失ってはおらず、そのために一部のラテンアメリカ諸国では、アジア、アフリカ諸国と同様、いちじるし

い後進性が存在しているのである。ラテンアメリカ諸国には、帝国主義の経済政策と直接の帝国主義的干渉に依存するきわめて強力な大独占ブルジョアジー、すなわち寡頭支配集団が生み出されている。この寡頭支配集団は大地主と結びついて国家権力を掌握しており、つねにアメリカ帝国主義の支持のもとに、またそれと結託して、労働者階級と農民、および赤貧にあえぐ他の勤労人民層を無慈悲に抑圧し搾取している。

こうした発展過程は同時に、きわめて多数の工業プロレタリアートを生み出した。かれらは、農業プロレタリアートや建設労働者、サービス従事者とあわせれば、人口の約半分を占めている。この点は、ほとんどの国で労働者階級がきわめて少数であるアフリカ、アジアとは異なっている。

さらに、ラテンアメリカの農民と、その隊列から生まれた労働者階級とは、自由と土地、仕事とパンを要求する不断の闘争のなかでたたかいとられた豊富な戦闘的、革命的伝統を有している。この伝統は、自国内の寡頭支配と外国独占体、およびアメリカ帝国主義に反対する戦闘のなかで、さらに発展させられた。ラテンアメリカ諸国人民は、内外の抑圧者、搾取者に反対してもっとも激しくたたかい、もっとも多くの流血の犠牲を払った諸国人民のなかに属している。これらの戦闘のなかで、かれらは少なからぬ勝利——しかもそれらは、けっして小さなものではない——を収めたが、しかし、民主的自由をかちとり、搾取を根絶し、民族の独立と主権を確固たるものにする完全な勝利は、ラテンアメリカのどの国においても未だ達成されてはいない。ラテンアメリカ人民は、キューバ人民の勝利に多くの希望をよせ、多くの幻想を抱いた。それは、現地の資本家・地主支配

層とアメリカ帝国主義者のくびきを断ち切る闘争において、ラテンアメリカ諸国人民を鼓舞し激励した。しかしながらこうした希望は、カストロのキューバが社会主義の道にそって発展しているのではなく、修正主義型資本主義の道を歩んでいるのをこれら人民が目にするや否やたちまち色あせ、さらに、キューバがソ連社会帝国主義の属国となり傭兵となったとき、いっそう急速に色あせてしまった。

すべての大陸と同様、今日のラテンアメリカの情勢は複雑である。

大多数のラテンアメリカ諸国では、情勢は革命的であり、ブルジョア＝地主体制を打倒し、帝国主義的従属を断ち切る革命が日程にのぼっている。もちろんこの革命は、どの国においても同じ性格、同じ発展過程、同じ解決方法をもっているわけではない。それは、個個の国あるいは国家群がそれぞれ独自の条件と課題を有しており、それぞれの社会的・経済的発展水準、あるいは帝国主義、社会帝国主義への従属の度合が異なっているという周知の理由からであり、また、個個のブルジョア政権によって、より温和であったり、よりファッショ的であったりする、などといった理由からである。しかしただ一つきわめて重要なことは、革命の反帝国主義的・民主主義的課題と社会主義的課題とを、アフリカ、アジアの多数の国国よりもいっそう緊密に結びつけなければならないということである。

またラテンアメリカは、革命の主体的要素を準備するうえでも、多くの利点を有している。なぜなら、内外の抑圧と搾取に反対し、自由と民主主義、社会主義をめざしてたたかううえで、広範な

人民大衆の自覚と準備が比較的高い水準に到達しているからである。しかしながら、現地国の反動と結んだ帝国主義者――とりわけアメリカ帝国主義者――だけでなく、国内の修正主義者とその他の資本主義の日和見主義的手先、さらには、ソ連修正主義者と中国修正主義者までもが、主体的要素が完全にととのうのを妨害し、それを混乱させようと全力を上げてたたかっている。

ラテンアメリカを自己の独占的支配圏につなぎとめ、そこから巨大な超過利潤をしぼりとるという政策を堅持するアメリカ帝国主義は、軍隊や諜報機関、デマゴギー、あるいは欺瞞などあらゆる手段を用いて、他の帝国主義がこの地域で優勢に立つのを阻止するために、またいかなる国においても、革命が勃発し勝利するのを阻むために策動している。このようにかれらは、アメリカ合衆国にたいするラテンアメリカ諸国の全面的従属と、これらの国国におけるブルジョア＝地主体制のいずれをも維持しようとしているのである。

この目的のためにアメリカが保持している重要な武器は、いわゆるＯＡＳ(米州機構)である。それは、アメリカ大統領とペンタゴン、アメリカ国務省の指揮下にある。この機構の憲章は、アメリカ合衆国に、ラテンアメリカ諸国の内外の現状を維持するためにはどのような方法、どのような手段を――軍事的手段でさえ――用いても干渉することができる権利をあたえている。

他方、アメリカの大独占体は、アメリカに本社をもちアメリカの統制下にある多国籍独占企業を設立するとともに、国家資本主義を大いに活用し、さらにそれを媒介にして現地国の政府や国家機構全般にたいする支配権を確保した。そうすることによってかれらは、ラテンアメリカ諸国におけ

る搾取の手法を完全なものにしたのである。

しかしながら、アメリカが用いているこれらの手段、あるいはその他の多数の手段は、ラテンアメリカ諸国をも襲った深刻な経済的・政治的危機から発生する諸問題を解決するものではない。

今日、現地国の資本家・地主がアメリカ帝国主義に従属しその支持を受けてしか存在しえなくなっている状況のもとで、民族的・社会的解放を達成するための唯一の不可欠な手段である革命の思想は、ラテンアメリカ諸国のプロレタリアートと勤労農民、進歩的インテリゲンチャ、青年大衆の意識のなかに、ますます深く広範に根をおろしつつある。

アメリカ帝国主義者と現地国資本家は、革命を回避するために二つの主要な手口に訴えている。その一つは、自己の地位がいっそう直接に脅かされつつあるのを見てとったときに、「プロヌンシアミエント・ミリタール」（軍事クーデター）によってファッショ的軍事政権を樹立するという手口である。かれらがブラジルやチリ、ウルグァイ、ボリビア、およびその他の国国でやったことは、これであった。いま一つの手口は、ベネズエラやメキシコでやり、いままたブラジルでおこなっているように、基本的諸自由のいちじるしい制限と欠如をともなうブルジョア民主主義政権を組織することである。そうすることによってかれらは、革命的緊張を緩和するとともに、これら諸国のブルジョアジーが「人権」に関心をもっており、さらにそれ以上に「人権」に関心をよせているのはアメリカの政府と大統領である、などという印象をあたえようと努めているのである。

しかしながら、そうした手段と策動は、危機の諸問題を解決することもできないし、革命的情勢

を回避することも、革命を現実の日程から消し去ることもできない。

ラテンアメリカ諸国のプロレタリアートとすべての革命勢力は、きわめて重大な革命的任務に直面している。そうした任務を完遂するためには、つまり、革命を遂行し、完全な民族独立をかちとり、民主主義的自由と社会主義を確立するためには、かれらは多くの方面でたたかわなければならない。すなわち、自国のブルジョア＝ラティフンディスト（大農園所有者）寡頭支配集団に反対し、アメリカ帝国主義に反対し、さらに、カストロ派の親ソ修正主義者、中国派修正主義者、トロツキスト等等といった、資本と帝国主義、社会帝国主義のさまざまな手先に反対して闘争をおこなわなければならないのである。ラテンアメリカ諸国のプロレタリアートと革命勢力は、雑多な色合いの日和見主義者と修正主義者による分裂と逸脱のための活動に対処しなければならないだけでなく、一連の一揆主義、暴動主義、冒険主義の思想と実践――それらは一種の伝統になっているが、真の革命とは縁もゆかりもなく、むしろそれに大きな害をあたえるものである――にあらわれている小ブルジョア的影響から自己を解放しなければならない。しかしながらこの問題には、慎重な取扱いが要求される。

ラテンアメリカ諸国人民の戦闘的伝統に関して言えば、積極的、革命的な面が優位を占めている。それは、革命を準備し発展させるうえで、また、一発屋的暴動主義の否定的要素から解放された新たな内容をこれまでの伝統に加えるうえで、最大限に、またもっとも広範に利用すべききわめて重要な要素である。

こうした重大な課題をなしとげるうえで、労働者階級のマルクス・レーニン主義党は決定的な役割を演じるであろう。いまでは、そのような党がラテンアメリカのほとんどすべての国に結成されているというだけでなく、これら諸党の大多数は、プロレタリアートと人民大衆を革命に備えさせる活動において重要な前進をかちとっている。修正主義者とその他の日和見主義者に反対し、ブルジョアジーと帝国主義のあらゆる手先に反対し、カストロ主義やフルシチョフ主義、トロツキズム、「三つの世界」、あるいはその他の見解と実践に反対する非妥協的な闘争のなかで、これら諸党は正しい政治路線を築き上げてきたし、この路線を実践に移すための闘争に必要な経験を十分に蓄積してきた。こうしてマルクス・レーニン主義諸党は、過去のあらゆる革命的伝統の担い手となって、労働運動と解放運動の利益のために、また大衆を革命に備えさせ革命に立ち上がらせるために、この革命的伝統を利用し、それをさらに発展させようとしている。

今日存在している革命的情勢は、マルクス・レーニン主義諸党が最大限に緊密な関係を保持し、互いに可能な限り頻繁な協議をもつことを不可欠にしている。それは、これらの諸党が互いに他の党の経験から最大の利益を得ることを可能にするとともに、反動的ブルジョアジーと帝国主義、およびソ連修正主義や中国修正主義、その他の類の現代修正主義に反対する共通の闘争課題について、また、革命のすべての諸問題について、諸党のあいだで立場と行動の一致をはかることを可能にするためである。

今日、各国人民は覚醒し、帝国主義の植民地的圧制のもとでこれ以上生活することを拒否してお

り、自由と独立、発展と進歩を求め、内外の抑圧者にたいする憤激をわき立たせている。アフリカ、ラテンアメリカ、アジアはしゃく熱のるつぼと化している。こうした情勢のもとで、新旧植民地主義者は、これらの国国の人民を従来の手法と形態によって支配し搾取するのは困難である――たとえまったく不可能ではないにしても――ことを悟りつつある。しかしかれらは、これら諸国人民の富と労苦と血を収奪し搾取しないではいられないのである。

こうした理由から、欺瞞と収奪と搾取の新たな手法と形態を見出すためにあらゆる策動がなされ、いくらかの施しがあたえられた。しかしこの施し物はまたもや、大衆の利益とはならずに、ブルジョア＝地主支配階級の利益となったのである。

一方、ソ連社会帝国主義もかなり以前から、かつての植民地、半植民地に浸透し、ますます深く食い込みはじめていたし、社会帝国主義中国もこれらの国国に入り込もうとなりふりかまわぬ策動をはじめている。そのために、問題はなおいっそう複雑なものになった。

修正主義ソ連は、各国人民の解放闘争を支援するレーニン主義的政策と称するものを隠れ簑にして、またいかにもこれらの国国と人民の本来の盟友であるかのようにふるまいながら、自己の拡張主義的干渉をおしすすめている。ソ連修正主義者は、アフリカやその他の地域に浸透するための手段として、社会主義的な色合いをもつスローガンを掲げ、はびこらせているが、それは、自己の解放と抑圧・搾取の根絶を熱望し、完全な民族的・社会的解放へ至る道は社会主義以外にはないことを認識している各国人民を欺くためである。

ソ連はまた、その同盟国――より正確には衛星国――を、自らがおこなう干渉に加担させている。われわれは、アフリカでこのことを具体的に目撃している。そこでは、ソ連社会帝国主義者とそのキューバ人傭兵が、革命を支援するという口実のもとに干渉をおこなっている。この口実はうそである。かれらの干渉は、市場を占取し諸国人民を隷属させることを狙いとした植民地主義的行動にほかならない。

ソ連とそのキューバ人傭兵によるアンゴラ介入は、そうした性質のものである。かれらにアンゴラ革命を支援する意図は少しもなく、かれらが狙いとしてきたのは、ポルトガル植民地主義者の追放後一定の独立を達成していたアフリカのこの国に、自らの毒牙を食い込ませることであった。ソ連は、ブラック・アフリカ諸国において市場を占取し、戦略的地位を獲得しようとしており、また、アンゴラを足場にして他の諸国に進出し、ソ連社会帝国主義者自身による近代的植民地帝国の創設に可能性を開こうとしているが、キューバ人傭兵はそのためにソ連が派遣した植民地軍なのである。

ソ連とその傭兵であるキューバは、各国人民の解放を支援するという装いのもとに、大砲と機関銃を装備した軍隊を用いて他国に干渉しており、しかも、実際にはソ連やキューバにさえ存在していない社会主義を建設するのだなどと称している。これら二つのブルジョア・修正主義国家がアンゴラに介入したのは、ポルトガル植民地主義者から自らの自由をたたかいとったアンゴラ人民の目的に反して、資本家的支配集団が権力を握るのを手助けするためであった。アゴスティニョ・ネト

は、ソ連の持ち駒となっている。他派との抗争のなかでかれは、自分自身が権力を握るために、ソ連の援助を要請した。アンゴラにおける対立する両派の闘争は、けっして人民革命の性格をもつものではなかった。かれらのあいだの闘争は、派閥間の権力抗争であった。双方はそれぞれ、ちがった帝国主義の支持を受けていた。アゴスティニョ・ネトはこの抗争の勝利者となったが、社会主義はアンゴラで勝利しなかった。それとは反対に、海外からの干渉ののちには、ソ連の新植民地主義がアンゴラで確立されたのである。

社会帝国主義中国も、かつての植民地・半植民地国に浸透しようと懸命になっている。中国の介入がどのようなものであるかを示す一例は、アフリカ大陸でもっとも富裕でもっとも血に飢えた集団であるモブツ一味の支配する国、ザイールに見ることができる。最近ザイールで燃え上がった戦闘において、モロッコ王国のモロッコ兵、フランス空軍、および中国はそろって、パトリス・ルムンバの殺害者、モブツの援助にはせ参じた。フランスによる支援は、まだしも理解できる。というのは、かれらはこの介入によって、カタンガにある権益と企業を守るとともに、自国人とモブツ一味を保護したからである。しかし、中国修正主義者はカタンガで何をしようとしているのか。かれらはだれを援助しているのか。果たしてかれらは、モブツ一味やフランス、ベルギー、アメリカその他の利権保有国の抑圧下にあるザイール人民を援助しているのだろうか。それとも、やはりかれら自身も、血に飢えたモブツ一味を支援しているのではないだろうか。事実は、中国修正主義指導部がこの一味を、間接的にではなく、まったく公然と支援しているということである。

この援助をさらに具体化し、より明白に誇示するために、かれらは黄華外相をザイールに派遣し、さらに軍事顧問団を送り、軍事・経済援助を供与した。このように、中国指導部の行為は、反マルクス主義、反革命であった。中国の干渉は、モロッコのハッサン国王やフランスによる干渉と、寸分たがわぬ特徴をもっているのである。

中国社会帝国主義者はアンゴラの内政に干渉しているだけでなく、それ以外にもアフリカおよび他の大陸の諸国と人民の内政に干渉している。それはとりわけ、経済的、政治的、戦略的基盤を築くために、かれらがあらゆる方法で浸透しようとしている国国において顕著である。

アメリカでさえ、中国ほど露骨にチリのファッショ的死刑執行人、ピノチェットを支援する勇気はもっていない。それどころかアメリカは、他国に大きな権益を有するときでさえ、その国の反動的支配者をそうしたやり方で支持しようとはしない。もっともこのことは、アメリカ帝国主義者が自己の権益を放棄しているということではない。かれらはこれらの権益を守っており、しかもそのためにきわめて力を入れているが、よりいっそう巧妙な手口を用いているのである。

社会主義を自称する中国は、こうした立場をとることによって、各国の人民と共産主義者、革命的分子の利益と願望に敵対し、ラテンアメリカの進歩的人民すべての願望に敵対している。

中国がその庇護のもとに置いているのは、各国人民を支配し、テロルやその他のあらゆる手段を用いて、民族的・社会的解放のためにたたかう革命家とプロレタリアート、およびマルクス・レーニン主義諸党の努力を弾圧しているさまざまな独裁者たちである。そうした立場に立つ中国は、反革

命の道を歩んでいる。中国は、マルクス・レーニン主義の偽装のもとで、いかにも革命の理念を諸外国に輸出しているかのように見せかけようと努めているが、実際にかれらが輸出しているのは、反革命の理念である。中国はこうして、アメリカ帝国主義とファッショ的権力集団に手を貸しているのである。

帝国主義諸国と社会帝国主義諸国は、それぞれ同じ程度に、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国人民が自国指導部および帝国主義者——それは、この現地国指導部と相呼応して人民を支配し、その血をしぼりとっている——による抑圧と野蛮な搾取に反対して、革命闘争を一歩一歩発展させるのを妨げている。

社会的・経済的発展水準が低く、帝国主義国、社会帝国主義国に従属している国国の革命家と進歩的な人人、愛国者の任務は、こうした抑圧と搾取にたいする人民の自覚を促し、かれらを教育・動員し組織して、解放闘争に引き入れることである。そのさい、つねに心に留めなければならないのは、革命を遂行するのは広範な大衆であり、人民であるということである。この目的のためには、個個の国における内外情勢と社会的・経済的発展、諸階級の力関係、諸階級のあいだの矛盾、人民と反動的権力集団のあいだの矛盾、あるいは、人民と帝国主義諸国のあいだの矛盾について、徹底的な分析をおこなうことが必要である。そのうえに立脚してこそ、歩むべき方向ととるべき戦術についての正しい結論を引き出すことができる。革命勢力に要求されているのは、強力な活動、決意と英知であり、そして何よりもまず、自国における解放闘争は、この闘争をプロレタリアート

の事業、社会主義の事業と結びつけることによってのみ勝利を得ることができるという事実を、かれら自身が深く認識することである。

したがって、各国のプロレタリアートは自分自身の革命政党をつくり出さなければならず、しかもその党は、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの教えを忠実に適用し、それを自国の諸条件と、また個個の国の人民の実情と密接に結びつけることができるものでなければならない。何よりも不可欠なことは、これらの党のそれぞれが、大衆の心情、あるいは自国の経済的、政治的、イデオロギー的、文化的発展について深い認識をもち、けっしてきまぐれな冒険主義的、ブランキ主義的行動に出ず、プロレタリアートの同盟者である広範な人民大衆を自己の回りに結集させるために粘り強くたたかうことである。

革命家と人民大衆は、権力の座にある反動的ブルジョアジーと大地主、外国の抑圧者の活動、ならびに新植民地主義者の陰謀を念頭に置きつつ、たゆまず自らの準備をととのえることが必要である。こうしたかれらの活動と陰謀は、革命的分子と人民が、高い成熟度と強じんな組織性、革命的戦術をもって対決すべき重大な要素となっている。

当然のことながらその場合、各国の革命勢力と革命的分子の相互の協力・連係ならびに経験の交換は、排除されるどころか、むしろそれらを確立することは不可欠でさえある。それをなしとげるのは、比較的容易である。なぜならかれらは、新植民地主義と反動的ブルジョアジーによる抑圧と搾取といった同様の条件、共通の文化を有しており、この抑圧と搾取からの解放という共通の目標

をもっているからである。かれらが共通して有している条件と利害関係のために、これらすべての国の革命的、進歩的分子は、協議の場をもち、自らを抑圧する敵の行為に立ち向かう活動における協力と一致を発展させることを迫られているのである。

新植民地主義の支配に苦しむ各国人民の状況をマルクス・レーニン主義の立場から見るならば、すべての真の革命家が直面している任務は、これらの人民の革命闘争と解放闘争に全幅の支持と援助をあたえ、これらの闘争をたえず前進させ、革命を不断に強化し、完全な勝利に導くことなのである。

真の革命家は各国のプロレタリアと人民に新たな世界、社会主義の世界をめざして立ち上がるよう呼びかける

すでにこれまでのべてきたように、資本主義の全般的危機はますます深化しつつある。その結果、プロレタリアートおよび各国の被抑圧階級と人民は、もはやこれ以上搾取を耐え忍ぶことはできず、生活の変革を要求し、ブルジョア制度の打倒と新植民地主義、帝国主義の廃絶を要求している。しかしこれらの願望は、ただ革命を通じてのみ実現しうるものである。いかなる勝利も、内外の階級敵と衝突し、それとたたかうことなしにかちとることはできない。

労働者階級の真のマルクス・レーニン主義党は、革命の指導者として、これらの戦闘にたいする勤労大衆と人民の自覚を高め、その政治的、イデオロギー的、軍事的準備を促す。

マルクス・レーニン主義諸党とすべての革命家は、いかに自分たちが少数であろうとも、人民のなかに身を置き、大衆を系統的に組織しており、また、注意深く、忍耐強く、これらの党こそが資本を打倒し、国家権力を奪取し、プロレタリアートと人民の利益のためにそれを用いることのできる一大勢力であるという確信を大衆にあたえようとしている。これらの党はたとえ小さくとも、連合したブルジョアジーの諸政党およびそれらが形成した論調に太刀打ちできないとは考えていない。革命家の責務は、ブルジョアジーがつくり出した論調は誤っており、それは粉砕しなければならないこと、また、変革をめざす一大勢力を代表する真の革命的世論を形成しなければならないことを、広範な人民大衆に立証することである。

マルクス・レーニン主義諸党は、自己の使命を首尾よく遂行するうえで、まず第一に、革命的な戦略・戦術と正しい政治路線――それは広範な人民大衆の利益と願望に合致したものでなければならない――をもたなければならず、また、ブルジョア制度と外国帝国主義の支配を打破するうえで提起される闘争の課題と任務を革命的に解決する方策をもたなければならない、と考えている。

マルクス・レーニン主義だけが、革命政党と労働者階級が正しい政治路線をつくり上げ、戦略目標と戦略課題を明確に規定し、それらの実現のために革命的な戦術と方法を適用するという可能性

をもたらす唯一の科学である。

マルクス・レーニン主義に照らされ、自国の具体的な社会的・経済的、政治的条件、および国際情勢に自己を適合させているマルクス・レーニン主義党は、自らの方向を明らかにし、いかなるときにも、また革命のいかなる段階——民族解放民主革命であれ、社会主義革命であれ——においても、大衆の先頭に立つすべを知っている。マルクス・レーニン主義にもとづく革命戦略と正しい政治路線、および世界プロレタリアートの革命的実践と自国内の階級闘争こそが、それぞれの段階における戦略目標を明確に定め、内外の主要な敵はだれか、だれに主要な打撃を浴びせるべきか、だれが内外におけるプロレタリアートの同盟者なのか、等等を決定することを可能にするのである。

マルクス・レーニン主義党が目標としているのは、資本主義制度の打倒と社会主義の勝利であるが、他方、自国の革命が民主主義的・反帝国主義的性格をもつ課題に当面している場合には、革命を連続的に発展させ、それを社会主義革命に転化して、可能な限り急速に社会主義的課題の達成へと移行することを目標とする。

マルクス・レーニン主義党の戦略目標とそれを達成するための道筋は、いずれも、にせの共産党・労働者党のものとはまったく異なっている。前者は、資本主義的生産関係を転覆し、古い国家機構とブルジョア的上部構造全体とを根底から破壊することによってしか、この目的を達成することはできないと考える。マルクス・レーニン主義党は、レーニンの次の教えを堅持する。

「革命はプロレタリアートが『行政機関』と全国家機関とを**破壊して、**それを武装した労働者からなる新しい機関に代えることにある」*。

後者は、言葉のうえでは社会主義に賛成しているかのように主張しはするが、かれらが説いているのは古い国家機構を維持することである。かれらに従えば、社会主義は改良と議会的道を通じて、しかも古い国家機構を使ってさえ樹立しうるというのである。

* 『国家と革命』――邦訳『レーニン全集』第二五巻五二六ページ

今日、いわゆる共産党の多くは、現存の資本主義制度を擁護するうえで、公認のブルジョア諸政党よりもいっそう熱心であることを、自ら立証している。一例を上げれば、イバルリ＝カリリョの修正主義党は、スペインの一部のブルジョア政党でさえフアン・カルロスの君主政体を共和政体に置きかえることを要求している状況のもとで、厚顔にもこの君主政体を擁護しているのである。同様にベルリンゲルの修正主義党は、民主主義的自由に矛先を向けたイタリアの資本主義国家の抑圧的諸法律の熱烈な擁護者となっている。しかも、さまざまなブルジョア政党がそれを露骨にはやりきれないでいるときに、である。中国修正主義者のほうは、中国の路線に追随する資本主義諸国の党にたいして、もっとも軍国主義的な集団といっしょに、軍隊とブルジョア暴力装置を強化するためたたかうよう指図している。かれらは、それが祖国擁護のためであると称しているが、実際に

は、革命が勃発したときにそれを弾圧するためなのである。

革命運動と解放運動を掘り崩し、資本主義と帝国主義的支配を永久化させる目的のために、ブルジョアジーとその追随者、とりわけ現代修正主義者は、革命の友と敵のあいだの区別を消し去って、革命勢力を混乱させ分裂させようとあらゆる手口を弄している。その典型的な一例は、大独占ブルジョアジーや反動的ファッショ政権、NATOおよびヨーロッパ共同市場、あるいはアメリカ帝国主義さえをも、プロレタリアートと被抑圧人民の同盟者として描き出している中国修正主義者の説教である。

マルクス・レーニン主義党はどうかといえば、これらの党は、真の革命戦略を打ち立てるために必要不可欠な条件は、革命の原動力と革命の敵のあいだに鮮明な境界線を引くことであり、さらに、内外の主要な敵――それにたいしては、スターリンも指摘したように、他の敵にたいする闘争を過小評価したりないがしろにしたりすることなく、主要な打撃を向けなければならない――を明確に規定することであると考えている。

現代において、すなわち帝国主義の条件のもとでは、発達した資本主義国においてだけでなく、被抑圧従属国においても、国内における革命の主要な敵は自国の大ブルジョアジーである。かれらは資本主義制度の頂点に立っており、自己の支配と特権を維持するために、また、自己の国家権力と階級的利益をほんのわずかでも脅かす労働者の運動はすべて圧殺し絶滅するために、暴力と抑圧、デマゴギーと欺瞞などあらゆる手段をつくしてたたかっている。一方、今日の条件のもとで、

革命と各国人民の主要な外部の敵は、世界帝国主義、とりわけ帝国主義超大国である。中国修正主義者が唱えているように、一方の超大国とたたかうために他方の超大国に頼るよう、あるいは、民族の自由と独立を守るためと称して帝国主義諸国との同盟を結ぶようプロレタリアートと被抑圧人民に助言し要求することは、革命の事業にたいする裏切り以外の何ものでもない。

修正主義者がとくにその矛先を向けているのは、**革命における労働者階級の主導者(ヘゲモーン)としての役割である。それは革命の戦略の根本問題の一つをなすものである。**レーニンは次のようにのべている。

「マルクスの学説における主要なものは、社会主義社会の創設者となるプロレタリアートの世界史的役割を解明したことである*」。

レーニンは、革命運動におけるプロレタリアートのヘゲモニーという思想の否定を、改良主義のもっとも俗物的なあらわれとして描き出した。

* 『カール・マルクスの学説の歴史的運命』——邦訳『レーニン全集』第一八巻六二七ページ

一部の現代修正主義者は、労働者階級はいわば非プロレタリア化し、企業の「共同経営者」に変化しており、したがってもはやプロレタリア革命の余地はなく、現存の社会制度と異なる社会制度

をつくり出す必要もない、などということを証明しようと努めている。また他の者は、労働者のみならずあらゆる人人が労働や文化活動に従事しており、すべての賃金・給与生活者はいまではプロレタリアになっていると主張し、労働者階級だけでなく、社会のその他の階級・階層もまた社会主義に関心をよせていると主張している。したがってかれらの結論によれば、革命運動における労働者階級の主導者としての役割は今日その意義を失っているというわけである。ソ連修正主義者は、口先では労働者階級の指導的役割を否定してはいないが、実際にはそれを抹殺している。なぜなら、かれらはこの階級から指導的役割を果たす可能性を奪ってしまったからである。しかしかれらは、悪名高い「全人民の党と国家」なる理論を擁護するにつれて、理論上でさえこの役割を抹殺するようになった。プラグマチストである中国修正主義者は、その場しのぎに、あるときは農民、あるときは軍隊、あるときは生徒や学生等等を、「革命」の先頭にすえている。

アルバニア労働党は、社会発展の決定的勢力、世界の革命的変革と社会主義社会・共産主義社会の建設の指導勢力をなすのは労働者階級であるというマルクス・レーニン主義の命題を、断固として擁護する。

労働者階級は依然として、社会の主な生産力であり、もっとも先進的な階級、民族的・社会的解放と社会主義に他のいかなる階級よりも強い関心をよせている階級であり、革命的な組織と闘争の最良の伝統の継承者である。労働者階級は、社会の革命的変革のための唯一の科学的理論を有しており、この目標に向かって労働者階級を導く自らの戦闘的マルクス・レーニン主義党をもってい

る。歴史は、資本主義から共産主義への移行をめざす闘争全体を指導する使命を、客観的に労働者階級に課しているのである。

革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーは、革命の根本問題、すなわち政治権力の問題を、プロレタリアートと人民大衆に有利に解決するうえで、決定的なことがらである。

革命を遂行する具体的諸条件と革命が経るさまざまな段階に照応して、新たな権力はそれぞれ異なった局面を経過し、さまざまな名称で呼ばれるであろうが、しかし、プロレタリアート独裁を打ち立てることなしに革命が社会主義の勝利に向かって発展することはありえない。マルクス・レーニン主義はこのことをわれわれに教えており、勝利を収めたすべての社会主義革命の経験もこのことを示している。したがって、どのような状況のもとで革命が遂行されるにせよ、マルクス・レーニン主義党はプロレタリアート独裁の樹立という自己の目標をけっして放棄しはしない。

雑多な色合いと潮流の修正主義者はすべて例外なく、プロレタリアート独裁を樹立する必要性をなんとかして否認しようとしているが、それはかれらが革命に反対しており、資本主義制度の維持と永久化に賛成しているからである。

プロレタリアートとそのマルクス・レーニン主義党は、その同盟者と団結して戦闘に加わる。このことも、革命の戦略のもっとも重要な問題の一つである。

プロレタリアートの本来の緊密な同盟者は、貧農である。かれらは、単に当面の戦略目標によっ

てだけでなく、長期的あるいは最終的な戦略目標によってても、プロレタリアートと結びつけられている。都市勤労人民の貧困層も、そのような同盟者である。プロレタリアートは、貧農およびその他の被抑圧・被搾取勤労人民とともに、革命の主な原動力を構成している。

たえず大資本の支配のもとに置かれ、徹底的な収奪に脅かされている都市小ブルジョアジーも、同盟者になりうるし、同盟者に獲得しなければならない。

またプロレタリアートは、内外の資本の搾取を受けているインテリゲンチャの進歩的部分など、その他の住民諸階層を同盟者とするために努力し奮闘する。資本主義・修正主義国におけるインテリゲンチャの比重は増大している。しかし、インテリゲンチャの地位と性格、活動の役割があらゆる変化をとげてきたにもかかわらず、かれらはそれ自体で階級を構成してはおらず、けっしてそうすることはできないし、また雑多な修正主義者が主張するように、それは労働者階級と融合してはおらず、そうなることもありえないのである。したがって、レーニンが明らかにし歴史が証明したように、インテリゲンチャは独立した社会的・政治的勢力にはなりえない。社会におけるかれらの役割と立場は、その社会的・経済的地位とイデオロギー的・政治的信念によって規定される。こうした地位と信念がいかに大きな変化をとげようとも、インテリゲンチャは労働者階級にかわって革命を指導する役割を担うことはできない。インテリゲンチャの進歩的部分を自己の側に獲得し、資本主義制度の崩壊と社会主義の勝利の不可避性についての確信をあたえ、かれらを革命における同盟者とすることは、プロレタリアートの責務である。

社会的・経済的発展水準が低く、外国資本への従属度の高いアフリカ、ラテンアメリカ、アジア等等の国国——そこでは、革命の民主主義的、反帝国主義的課題が特別の重要性を有している——では、中農、および、外国資本との結びつきがなく自国の独立した発展を願望する一部のブルジョアジーも、プロレタリアートの同盟者となりうる。

ブルジョアジーのこの部分を反帝民主革命に結びつけうるか否かは、プロレタリアートの正しい戦略・戦術、ならびに労働者階級の革命政党の巧みで聡明な政策にかかっている。このようにして、プロレタリアートとその党は、小ブルジョアジーだけでなく、これらのブルジョアジーにたいしても、プロレタリアートの指導に服するよう説得するとともに、外国による支配を廃絶し、帝国主義の道具である野蛮な資本主義大ブルジョアジー——それらは人民を抑圧・搾取し、その士気を奪い、人民の汚れのない感情と古い歴史をもつ文化とを腐敗させている——を一掃するために立ち上がらせることができるのである。

革命のある一定の段階において、その戦略目標の達成に関心をよせる他の階級・階層を自己の同盟者に獲得するためには、プロレタリアートはそのほかにもあらゆる問題をめぐって、大ブルジョアジーやその他の反動派とたたかわなければならない。

自らの敗北を予見した反動的ブルジョアジーと大地主は、小ブルジョアジーと農民、進歩的インテリゲンチャを自己の側に引き込み、それらがプロレタリアートの同盟者となるのを妨げようとして、無数の企てや策謀に訴える。かれらは、革命が起こらないように、また、たとえ起こったとして

も最後まで遂行されずに、泥沼にはまり込むか誤った方向にすすむように、労働者階級そのものを欺くことさえ試みる。

一方、プロレタリアートとそのマルクス・レーニン主義党の側は、大ブルジョアジーや大地主、帝国主義者、社会帝国主義者といった共同の敵に反対して自己の回りに同盟者を結集するとともに、農民層や小ブルジョアジーが大資本およびファシスト独裁の予備軍となる――それは、ドイツにおけるヒットラー、イタリアにおけるムッソリーニ、スペイン内戦におけるフランコの時代に起こったことである――のを阻止するために活動し、そのためにあらゆる可能性を利用する。

ブルジョアジーのさまざまな中間層は、各種の利害、因習や偏見など無数の糸によって資本・帝国主義の世界と結びついているが、これらを含む可能な、一時的でぐらついた同盟者にたいして、マルクス・レーニン主義党はとくに、注意深く柔軟性に富んだ態度を保持する。プロレタリアートとその前衛、マルクス・レーニン主義党は、つねに自己の原則的立場を離れることなく、こうした勢力をも、その動揺性と不安定性にもかかわらず革命と解放闘争の側に引きつけること、あるいは少なくとも、これらの勢力が敵の予備軍とならないよう中立化させることに関心を注ぐ。

革命の法則は、修正主義者が権力を握っている国国においても、他のあらゆる国と同様に作用している。ヨーロッパの修正主義諸国で成長しつつある新たなブルジョアジーの立場は、どのようなものであろうか。かれらは、ソ連のブルジョアジーによる過酷な全面的抑圧から、つまりソ連社会帝国主義から解放されることを願望してはいるが、しかしこれら双方の側の根本的利益は共通して

いるのである。これら諸国のブルジョアジーは、ソ連のブルジョアジーから離れては存立しえない。かりにもし、かれらがこの野蛮な社会帝国主義大ブルジョアジーから離れるようなことがあれば、かれらがたちまち、西ヨーロッパの発達した資本主義諸国のブルジョアジーや、あるいはアメリカ帝国主義の支配下にはいることは間違いないであろう。

さらにまた、経済的、政治的、軍事的に大ソ連社会帝国主義国家のなかに統合されつつある修正主義諸国では、プロレタリアートだけでなくその他の住民諸階層も、新たなブルジョアジーによっておしつけられている搾取とソ連社会帝国主義の支配のために、不満を抱いている。こうした理由からかれらは、自国の支配的ブルジョアジーと、ロシアの覇権主義、新植民地主義のいずれにも、憎悪を燃やしている。これらの国国のプロレタリアートにとって必要なのは、ふたたびプロレタリア革命を遂行しプロレタリアート独裁を再樹立するために、いま一度戦場におもむき、裏切り者を打倒し絶滅する闘争に身を投じるという歴史的必然性にめざめ、そのことを自覚することである。かれらは、新たなマルクス・レーニン主義党を生み出し、すべての人民大衆を自己の回りに結集しなければならない。

マルクス・レーニン主義党は、革命の勝利にとって決定的な要素は内的な要因、すなわち自国のプロレタリアートと人民の革命闘争であり、外的な要因は補助的で二義的な性質のものであるという原則を一貫して堅持するが、しかし、けっして革命の外部の同盟者を無視したり過小評価したりはしない。同時に、マルクス・レーニン主義党は、国内の同盟者にたいするのと同様、外部の同盟

者にたいしても原則的かつ柔軟な態度をとる。

マルクス・レーニン主義党は、レーニンとスターリンの教えに従い、また現存する諸条件に立脚しつつ、他国のプロレタリアートとその革命運動、世界の被抑圧人民の反帝革命運動、および真の社会主義諸国を、各国における革命運動の信頼に足る本来の外部的同盟者と見なす。

特殊な場合には、第二次世界大戦の時期に起こったように、ある社会主義国、あるいは帝国主義・社会帝国主義の侵略とたたかっている一国の人民が、やはり同じ敵とたたかっている資本主義世界のさまざまな国とも共同の戦線に立つという状況も生み出されうる。

そうした場合に第一級の重要性をもつのは、革命の利益をつねに心にとめ、こうした一時的同盟者との共同戦線や同盟関係のためにそれを忘れたり、曖昧にしたり、犠牲にしたりしないということであり、この戦線や同盟をけっして自己目的化しないということである。また、このような同盟者が革命を破壊し、その勝利を奪い取るために干渉するのを許さないということも、きわめて重要である。反ファッショ民族解放戦争の時期に、アルバニア共産党が米英連合国にたいしてとった立場は、重要な経験である。それは、アルバニア革命の命運を有利に導いたのである。

革命戦略は、マルクス・レーニン主義党が革命の目的と任務を実現するために用いる革命的戦術と不可分のものである。 戦略の一部であり、戦略に奉仕する戦術は、革命の満潮または干潮、あるいは具体的な状況や条件につれて変化しうるが、それはあくまで、革命の戦略とマルクス・レーニ

ン主義の諸原則の枠内にかぎられる。スターリンは、こうのべている。

「戦術的指導の任務は、そのときの勢力関係のもとで、戦略的成功を準備するのに必要な最大限の成果をおさめるために、プロレタリアートの闘争と組織のすべての形態に精通し、それらの形態の正しい利用を保障する点にある*」。

* 『レーニン主義の基礎について』――邦訳『スターリン全集』第六巻一七四ページ

真のマルクス・レーニン主義党は、革命事業の推進のために巧みな戦術と闘争形態を駆使しつつ、つねに革命的諸原則を堅持する。これらの党は、戦術のために原則を放棄するいかなる傾向をも拒否し、これとたたかう。マルクス・レーニン主義党は、移りかわる情勢にその場しのぎで対応する非原則的でプラグマチックなあらゆる政策にたいする、もっとも断固とした反対者である。そうした政策は、あらゆる潮流の修正主義者の活動全体の特徴となっている。

革命とはつねに、革命的前衛に指導された大衆の行為である。したがって、マルクス・レーニン主義党は、それぞれの国に存在する具体的な条件や状況、伝統などに応じた適切な形態によって革命的大衆を組織することに、必ず大きな注意を払わなければならない。党と大衆の組織的な結びつきなしには、大衆を革命闘争に立ち上がらせ、その準備をととのえさせ、動員することについて語

ることさえ無益である。

まさにこうした理由のために、マルクス・レーニン主義党は、それ自身の指導下にある大衆諸組織を生み出すことに大きな重要性をあたえている。もちろん、それは容易に解決しうる問題ではなく、しかも、すべての資本主義・修正主義国に多種多様な労働組合、協同組合、あるいは文化、科学、青年、婦人その他の諸組織が存在している今日においてはとりわけそうである。これらの諸組織の大部分は、ブルジョアジーや修正主義者、教会の指導と影響のもとにある。

しかしながら、レーニンが教えているように、共産主義者は大衆のいるところであればどこにでもはいり込み、そこで活動しなければならない。したがって共産主義者は、ブルジョアジーや社会民主主義者、修正主義者等等の指導と影響のもとにある大衆組織のなかにおいても、必ず活動しなければならない。マルクス・レーニン主義者がそれらの内部で活動するのは、ブルジョア政党や改良主義政党の影響と指導を掘り崩し、大衆のあいだで労働者階級の革命政党の影響力を広めるためであり、また、これら諸組織の指導者の綱領と活動の欺瞞性を暴露し、大衆の活動に、反資本主義、反帝国主義、反修正主義の政治的性格をあたえるためである。大衆の隊列のなかで革命的活動をやりとげることによって、これら諸組織の内部に革命派を形成することもできるし、さらには、これらの諸組織の指導権を握り、それを正しい針路に乗せるという可能性さえ生まれるのである。

しかしいかなる場合でも、マルクス・レーニン主義党は自己の指導する革命的大衆組織を築き上

げるという目標を放棄しない。

もっとも重要な大衆組織は、労働組合である。一般的に言って、今日の資本主義・修正主義諸国におけるこの組織は、ブルジョアジーと修正主義が、プロレタリアートとすべての勤労大衆を隷属のもとにつなぎとめるのに奉仕するものとなっている。エンゲルスは当時、イギリスの労働組合はブルジョアジーを恐れさせる組織から、資本に奉仕する組織にかわったとのべた。労働組合組織は、労働者を無数の糸、隷属の無数の鉄鎖でしばりつけ、孤立した労働者が反抗してもそれを容易に抑圧できるようにしている。日和見主義的労働組合指導部は、一カ所あるいは数カ所の企業における労働者の反抗——かれらはストライキを決行し、デモンストレーションをおこなう——を統制下に置き、それに単なる経済的性格しかあたえないために活動している。労働貴族は、この方面で躍起になって策動している。労働貴族は資本主義諸国において、大衆の反抗を侵食し、抑圧し、その方向を誤らせるうえで主要な役割を演じており、長年来、革命の炎を鎮める火消人となっている。

今日すべての資本主義国で、主要なブルジョア・修正主義政党は、お抱えの労働組合をもっている。これらの労働組合は今日、プロレタリアートの革命運動をおしとどめ、政治的、精神的に労働者階級を腐敗させるために、互いに共同行動をとっており、緊密な協力関係を確立している。

一例を上げれば、フランスとイタリアの修正主義党の労働組合は強大な組合である。しかし、か

れらがおこなっていることは何であろうか。それらは、プロレタリアートを奴隷の地位につなぎとめ、眠り込ませようと努めているのであり、また、プロレタリアートが怒りに燃え反抗に立ち上がっているときに、それを雇用主との交渉の軌道にのせ、資本主義的超過利潤のほんのわずかのおこぼれで労働者の口にふたをしようとしているのである。しかも、これらの労働組合が労働者にあたえるものは、すぐに物価騰貴によって帳消しにされてしまうのである。

したがって、各国のプロレタリアートが自己を資本主義から解放するうえで不可欠なのは、ブルジョアジーと日和見主義者の支配下にある労働組合による束縛、ならびに、社会民主主義、修正主義のあらゆる類の組織・政党の束縛を断ち切ることである。これらの組織体はすべて、さまざまなやり方で雇用主を支持しており、自らが「一大勢力」、「歯どめ」であり、プロレタリアートに有利なように「自己の意志を大ブルジョアジーにのませる」ことができるなどという幻想をつくり出そうと努めている。それは、まっかなうそである。プロレタリアートは、これらの組織体を粉砕しなければならない。では、どのようにしてか。プロレタリアートがそれらを破壊するのは、労働組合の指導部と闘争することによってであり、これらの労働組合とブルジョアジーとの裏切り的結託に反対して立ち上がり、それらが確立しようとしている「静穏」と「社会平和」を打ち破ることによってである。そうした「平和」は、労働組合が時おりおこなう雇用主にたいする反抗なるものによって偽装されている。

このような労働組合を破壊するために、それらに浸透する活動をおこない、それらとたたかい、

内部から侵食し、その不当な決定と行動に反対することは可能である。この活動は、工場内でできるだけ多人数で強力な労働者群を巻き込まなければならない。いずれにせよめざさなければならないのは、雇用主にたいしてだけでなく、その代理人である労働組合指導部ともたたかうなかで、プロレタリアートの鋼鉄の団結を達成することである。労働組合首脳部のすべての裏切り分子を、また労働組合指導部と改良主義的労働組合一般のブルジョア的変質を強力に暴露することは、労働者を、かれらがこれらの指導部や労働組合にたいして未だに抱いている多くの幻想から解放する。

マルクス・レーニン主義者は既存の労働組合に浸透するにあたって、これらの労働組合指導部の特徴となっている労働組合主義、アナルコ・サンディカリズム、修正主義の立場にけっして陥らない。マルクス・レーニン主義者は、労働組合指導部に巣くう修正主義者や、その他のブルジョア・日和見主義派の同類にはけっしてならない。マルクス・レーニン主義者が目標とするのは、資本主義・修正主義国において、今日労働組合が一般に有しているブルジョア的性格と反動的役割を暴露するとともに、真のプロレタリア的労働組合を築き上げる道を切り開くために、これらの組織を掘り崩すことである。

青年大衆を組織することは、マルクス・レーニン主義党にとって特別の重要性をもっている。革命運動における青年の役割は、つねに大きなものであった。まさにその本質から、青年は新しいものを求め、古いものに反対し、すべての進歩的、革命的事物の勝利のためのたたかいに備えてい

る。しかしながら青年は、自分たち自身では正しい道を見出すことができない。労働者階級の党だけが、その道を指し示すことができるのである。青年の無尽蔵の革命的エネルギーが、抑圧と搾取を根絶し、民族的・社会的解放をかちとろうとする労働者階級とその他の勤労人民のエネルギーと結びつくならば、いかなる勢力も革命の勝利を阻むことはできない。

しかしながら、今日の資本主義国や修正主義国において、青年の大多数は誤った方向にエネルギーを浪費している。ブルジョアジーと修正主義がこれらの青年を誤らせており、かれらはしばしば冒険主義や無政府主義にはしったり、あるいはユートピアを求めたり絶望に陥ったりする。それはかれらが方向を誤り混迷に陥っているからであり、未来にたいする、すなわち自己の政治的、物質的、精神的要求の達成にたいする暗い展望しかもてないからである。

マルクス・レーニン主義者はつねに、青年にきわめて大きな注意を払い、かれらを啓発するとともに、青年の願望と欲求は、マルクス・レーニン主義が指し示す道にそってのみ、また、労働者階級とその党の指導のもとにおいてのみ達成しうるとの確信をかれらにあたえる。マルクス・レーニン主義者は、ブルジョアジーと修正主義者の影響から、また、「左翼主義」、トロツキズム、無政府主義の運動から青年を解放するために、さらに、青年を革命的組織に動員し、革命の道にかれらを引き入れるために活動する。

真のマルクス・レーニン主義党と革命的共産主義者は、労働者のストライキやデモンストレーションのなかで積極的な役割を果たすとともに、それらを政治的なストライキ、デモンストレーショ

ンに転化し、資本主義、すなわち雇用主とカルテル、独占体および労働組合指導部の息の根を止めるためにたたかう。このような幅広い活動の過程で、プロレタリアートはますます頻繁に、ますます公然とブルジョア体制側の武装力と対決するようになるであろうが、同時にこれらの衝突のなかでよりよくたたかうことに長じるであろう。また、プロレタリアートは闘争の過程で、可能で当を得た、適切な組織形態と革命的闘争形態を見出す。それは、「水の中で泳ぎをおぼえる」ということわざのとおりである。ストライキやデモンストレーションでたたかうことなしには、資本主義全般に反対する行動に積極的に参加することなしには、最終的勝利をかちとる闘争を組織し強化することも、ブルジョア体制を打倒することもできない。

革命は、さまざまな修正主義者のように単なるおしゃべりで、あるいは中国修正主義者のように、「三つの世界」に関する理論をでっち上げることによって、準備されるものではない。革命は平和的な道によって勝利することはできない。レーニンは、特殊な場合としてその可能性について語りはしたが、つねに革命的暴力に主な強調点を置いた。なぜなら、ブルジョアジーはけっして自らすすんでその権力を放棄しはしないからである。**国際労働運動と国際共産主義運動の歴史、一連のかつての社会主義国、および社会主義のわが国における革命の発展と労働者階級の勝利の歴史が示しているように、革命は今日に至るまで、ただ武装蜂起を通じてのみ勝利をかちとってきた。**

革命的武装蜂起は、軍事的暴動とは無縁のものである。前者が目標としているのは、旧体制を根本的、政治的に打倒し、それを土台そのものから粉砕することである。ところが後者は、抑圧・搾

取制度の打倒、あるいは帝国主義的支配の根絶につながらず、またつながるはずもない。武装蜂起は広範な人民大衆の支持を基盤としているが、他方、暴動は大衆にたいする不信、大衆からの孤立のあらわれである。労働者階級の党と自称する政党の政策や活動に暴動主義的傾向が含まれているとすれば、それはマルクス・レーニン主義からの逸脱である。

一国の具体的諸条件と全般的情勢に応じて、武装蜂起は急速に爆発することもあれば、比較的長期の革命的過程となることもある。しかしそれは、毛沢東が「持久的な人民戦争」論として提唱しているような、展望を欠いた果てしないものではない。毛沢東の「人民戦争」論を、革命的武装蜂起に関するマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの教えと比較して見るならば、この理論の反マルクス主義、反レーニン主義、反科学の性格は一目瞭然である。武装蜂起に関するマルクス・レーニン主義の教えがその基礎としているのは、労働者階級とその革命政党の指導のもとにおける、都市の闘争と農村の闘争の緊密な結合である。

革命におけるプロレタリアートの指導的役割に反対する毛沢東理論は、農村のみを武装蜂起の唯一の根拠地と見なし、都市における勤労大衆の武装闘争を無視する。またこの理論は、都市を反革命的ブルジョアジーの根拠地と見なし、農村で都市を包囲しなければならないと説いている。それは、労働者階級にたいする不信のあらわれであり、その主導者（ヘゲモーン）としての役割の否定である。

労働者階級の革命政党は、暴力革命を普遍的法則とするマルクス・レーニン主義の教えを揺るぎなく堅持するが、冒険主義には断固として反対し、けっして武装蜂起をもてあそばない。この党

は、革命における決定的戦闘に向けて、すなわち革命的暴力によるブルジョアジーの支配の打倒に向けて自己と大衆の準備をととのえるために、あらゆる条件と状況のもとで、さまざまな形態を駆使して不断に革命的な闘争と活動をくり広げる。しかし、武装蜂起が直接に日程にのぼり、それを勝利させるためにあらゆる政治的、イデオロギー的、組織的、軍事的段取りがとられるのは、ただ革命的情勢が十分に成熟したときだけである。

宣伝は、大衆を革命に備えさせるうえでマルクス・レーニン主義党の手に握られた強力な手段である。それは、火のように激しく、明快で説得力に富むものでなければならない。革命的宣伝がもしも単に言葉のみをもてあそぶものになるなら、それは無用の長物である。実生活の諸問題、全局的課題あるいは局部的問題と密接に結びついた痛烈な宣伝だけが、すなわち、広範な大衆の進取の精神を生み育てる宣伝だけが、プロレタリアートと他の勤労大衆を政治的、イデオロギー的に教育し、かれらを行動に引き入れ、革命に備えさせることができるのである。

あらゆる国の資本主義ブルジョアジーは、軍隊や警察など、意のままになる強力な暴力的手段をもっているが、それ以外にも、プロレタリアートとその活動に反対する豊富な闘争経験をつんでいる。さらにかれらは、新聞、ラジオ、テレビ、映画、演劇、音楽等等を含む一そろいの宣伝網を自分のものとしている。こうした宣伝手段はすべて強い腐敗力をもっているので、プロレタリアートの努力とその解放闘争を一時的に誤った方向に導き、変質させ、弱体化させることができる。

一定の「民主的自由」が存在しているいわゆるブルジョア民主主義国家では、新聞・雑誌によって資本主義全般に反対する通常の宣伝をおこなうだけでは不十分である。さまざまなブルジョア政党や修正主義党の新聞は、連日大騒ぎを演じているが、それはもちろんブルジョア体制に反対するためではなく、大テーブル――かれらはみな、人民を犠牲にしてむさぼり食うためにその席に着いている――で自分の分け前以上のものをかすめ取ろうとした個個の人物に反対するためである。

新しいマルクス・レーニン主義党の宣伝機関とりわけ新聞は、きわめて重要な任務に当面している。それは、ブルジョア「民主主義」の欺瞞性を暴露し、そうした策動のすべてから、また、修正主義者および資本のその他の手先のデマゴギーから仮面をはぎ取ることである。マルクス・レーニン主義の宣伝機関と新聞が赤裸裸な真実を告げ、革命を通じて社会的・民族的解放へと至る道を指し示すのにたいして、ブルジョア・修正主義の宣伝機関と新聞は、人民を欺き、眠り込ませ、誤った方向へと導く。それは、大衆を革命からそらせ、袋小路へと追い込み、かれらを隷属のもとにつなぎとめるためである。

しかし、大衆を啓蒙し、労働者階級の党の政治路線の正しさについてかれらを説得し、革命に備えさせるためには、宣伝だけでは不十分である。レーニンは、次のようにのべている。

革命を準備するためには「……これらの大衆がみずから政治的経験をすることが必要である*」。

＊『共産主義内の〝左翼主義〟小児病』――邦訳『レーニン全集』第三一巻八二ページ

宣伝は、革命的行動とあわせて遂行されたときにのみ、効果的な、的を射たものとなる。行動がなければ、思想は輝きを失う。こうした活動は冒険ではなく、また冒険であってはならない。それは、階級敵との仮借のない闘争であり、激烈な衝突である。それは単純な形態からより高度な形態へと変化発展するものであり、無数の困難に打ち勝つとともに、革命が要求するあらゆる犠牲を甘受する。

真のマルクス・レーニン主義党は、革命的行動の尻尾についていくのではなく、その前衛に立つ。たとえ闘争と努力の可能性――これらの党はそれを利用して、強大な資本主義反動勢力と対決するし、また対決しなければならない――が限られた一時的なものであったとしても、それはこれらの党の勇気を失わせはしない。真のマルクス・レーニン主義党はその党員に、果敢であるよう、また、かれらの正しく分別のある、熟達した決然たる行動こそが、それを目の当りに見聞した大衆のあいだに深い反響を呼び起こすものだということを念頭に置くよう、教えている。共産主義者がそのように行動するときに、大衆はあれこれの革命的行動の目的がプロレタリアートと被搾取者の利益に合致したものであることを実感するのである。行動における大胆さと高い成熟度はきわめて重要である。なぜならばそうした行動をとることによって、一歩一歩地盤が固められ、革命の怒濤を呼び起こすうえで前進がかちとられるからである。革命的行動は、労働者階級の党を大衆と結び

つけ、党を大衆の先頭に立たせ、これらの党が改良主義、修正主義の党にたいする勝利を収めることを可能にする。マルクスは、こう言っている。

「現実の運動の一歩一歩は、一ダースの綱領よりも重要です*」。

＊『ゴータ綱領批判―ヴィルヘルム・ブラッケへの手紙』―邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』第一九巻一三ページ

マルクス・レーニン主義党の指導下にある革命勢力以外にも、資本主義国には、警察や憲兵隊等等とたたかい、衝突している他の諸勢力が存在する。これらの勢力による行動や攻撃の多くは、テロリズム、冒険主義、無政府主義の性格をもっている。それらはあらゆる類の色合いと看板のもとにあらわれ、雑多なイデオロギーを指針としている。そうした行動はしばしば、資本主義諸国の諜報機関によってそそのかされ、その資金援助を受けて組織されている。それは何よりもまず、そうした行動をマルクス・レーニン主義党の仕業に帰することによって、これらの党の信用を失墜させることを狙いとしている。しばしばこれらの行動を組織しその先頭に立つファシスト分子やブルジョアジーのスパイは、プロレタリアートや生徒・学生、あるいは青年全体の不満と憤激、勇気を利用して、これらの大衆が生み出したさまざまなグループや運動を自分達の行動に巻き込もうと努め

ている。かれらの行動は、真の革命運動とは縁もゆかりもなく、それどころかそれを重大な危険にさらすものであり、プロレタリアートが堕落し、ルンペン・プロレタリアートになってしまったかのような印象をつくり出している。

マルクス・レーニン主義党はこの問題に適切な注意を払いつつ、一方では、大衆が自分自身の経験を踏まえて、革命的行動とはテロリズムや無政府主義の行動とまったくちがった性格のものであるということを確信するよう、かれらを説得しなければならない。また他方では、マルクス・レーニン主義党は、欺かれている革命的分子を、テロリストや無政府主義者の集団から、あるいはそれらの集団のなかで暗躍しているファシスト分子やブルジョアジーのスパイから切り離して獲得しなければならない。

マルクス・レーニン主義党は革命の党である。ブルジョア的合法性と「議会主義的クレティン病」にどっぷりと浸っている修正主義諸党の理論と実践とは対照的に、マルクス・レーニン主義党はその闘争を合法活動のみに切り縮めてはおらず、合法活動を主要な活動であると見なしてもいない。あらゆる闘争形態に熟達する問題に関して言えば、マルクス・レーニン主義党は、**合法活動と非合法活動の結合**に特別の重要性をあたえるとともに、ブルジョアジーを打倒し勝利を現実に保証するうえで決定的なものとして、**非合法活動を優先させる。**これらの党は、自党の幹部と党員、支持者を教育し陶冶して、合法、非合法いずれの条件のもとでも、賢明で巧みに、かつ大胆に活動するすべを学ばせる。しかし、厳しい非公然の条件のもとで活動し、自らの部隊を敵にさらさず、革命的

組織を敵の打撃から自衛することに努めなければならないときであっても、マルクス・レーニン主義党は自己を大衆から遮断したり、大衆との結びつきを弱めたり断ち切ったりせず、大衆のあいだでの活発な活動を一瞬たりともたやさず、また機を逸せず、条件と状況が許すあらゆる合法的可能性を革命事業の利益のために利用するのである。

マルクス・レーニン主義党は、議会的道を通じて権力を奪取する可能性についてけっして幻想を抱かないが、適切でとくに有利であると判断した場合には、地方議会や国会等等の選挙のような合法的活動に参加することもある。それはもっぱら、大衆のなかで自己の路線を普及し、ブルジョア政治制度を暴露する目的のためである。しかしながら党は、修正主義者のように、これらに参加することを自己の闘争の総路線に引き上げたりはせず、それを主な――あるいはもっと悪い場合には唯一の――闘争形態にしたりはしない。

党は、合法的可能性を利用する場合にも、たとえ犠牲を払っても革命的な形態と方法――もっとも単純なものからもっとも複雑なものに至るまで――を追求し、見出し、それを実地に適用する。それとともに党は、これらの形態と方法を広め、それをできる限り大衆に受け入れられるものにする。

マルクス・レーニン主義者は活動のなかで、ブルジョア的な憲法や法律、規則、規範、秩序を、自らの革命的行動によって侵犯することを恐れない。マルクス・レーニン主義者は、この体制を掘り崩し、革命を準備するためにたたかっている。だからこそマルクス・レーニン主義党は、プロレ

タリアートと人民大衆の革命的行動への報復としてブルジョアジーが加える反撃に対処しうるよう、党と大衆を備えさせるのである。

今日、革命運動と解放運動は、多数の階級的・政治的勢力を巻き込み、広範な社会的基盤をもった複雑な過程として発展しているが、こうした条件のもとでプロレタリアートの革命政党が、革命のあれこれの段階で、また共通の利益となる個個の課題で、他の政党や政治組織と協力し、共同戦線を張るという問題に直面することもまれではない。この問題にたいする正しく原則的な、かつ柔軟な態度、しかもいかなる日和見主義やセクト主義とも無縁な態度は、大衆を革命闘争と解放闘争に引き入れ、動員し、準備をととのえさせるうえで、大きな重要性をもっている。マルクス・レーニン主義党は、革命の事業の利益が要求し情勢がそれを必要とするならば、他の政党、政治勢力との協力や共同戦線に反対しないし、原則からしてもそれに反対することはありえない。しかしながら、マルクス・レーニン主義党は、けっしてそれを指導部間の連合と見なしたり、自己目的化したりするのではなく、大衆を団結させ、闘争に立ち上がらせるための手段と見なすのである。重要なのは、こうした共同戦線においても、プロレタリア政党が一瞬たりともプロレタリアートの階級的利益とその最終的闘争目標を見失ってはならないということであり、戦線のなかに埋没してはならないということである。党は共同戦線のなかで、自己のイデオロギー的独自性と、政治的、組織的、軍事的独立性を維持しなければならず、戦線における指導的役割をしっかりと担い、そのなかで革命的政策を実行するためにたたかわなければならない。

マルクス・レーニン主義党が革命的戦略・戦術と正しい政治路線を築き上げ、適用することができるようになるためには、また、困難な状況のなかで自己の方向を見出し、敵に対処し障害を乗りこえる能力を備えるためには、**マルクス・レーニン主義理論を学習し摂取する幅広い強力な活動をくり広げることが必要不可欠である。**

資本主義諸国のかつての共産党が修正主義の党に変質した原因の一つは、ほかでもなく、これらの党がマルクス・レーニン主義の学習と習得をまったく無視していた点にある。マルクス・レーニン主義の学説は単なる虚飾として用いられ、空虚なおしゃべりやスローガンにかわってしまい、党員の意識のなかに深く根をおろすこともなければ、党員の血肉の一部にも、行動のための武器にもならなかった。マルクス・レーニン主義の学習のためにおこなわれたわずかばかりの活動が目標としたのは、党員が自ら共産主義者と名乗り、共産主義を情緒的に愛好するのに間に合うだけの、若干の月並みな公式を教え込むことだけであった。ところがかれらは、共産主義がいかにしてどのような方法で達成されるのかという点に関しては、何も教えられなかったために、まったく無知であった。

口先だけでまともな行動は何もしないこれらの党の指導部は、ブルジョア的環境のなかで生活し、自国のプロレタリアートを自由主義、改良主義の思想で染まらせた。

このように、修正主義党のブルジョアジーへの急傾斜は、一つの社会民主主義的、日和見主義的変質過程であって、それは、これらのいわゆる共産党を指導する指導者――かれらは実際には社会

民主主義者である——と労働貴族によって、長期にわたって準備されてきたものである。
マルクス・レーニン主義党は絶対にこの反面の教訓を忘れてはならず、そこから、マルクス・レーニン主義の学習・習得活動を堅固な基礎の上に組織しなければならず、つねにこの学習を革命的行動と結びつけるべきだという教訓を引き出さなければならない。

プロレタリア国際主義の諸原則にもとづく各国のマルクス・レーニン主義諸党の統一と協力は、革命を準備するうえで特別の重要性を帯びている。

この統一と協力は、帝国主義と社会帝国主義、ブルジョアジー、およびフルシチョフ修正主義、チトー修正主義、「ユーロコミュニズム」、中国修正主義などあらゆる色合いの現代修正主義に反対する闘争のなかで、強化され拡大されるであろう。

革命の敵である修正主義者は、なりふりかまわずプロレタリア国際主義に反対しているが、それは、ブルジョアジーと帝国主義に反対する闘争のこの強力な武器を、世界プロレタリアートと各国のプロレタリアートの手から奪い取るためである。

プロレタリア国際主義は今日陳腐な時代遅れのものとなっていると称するチトー修正主義者や、「ユーロコミュニスト」の策動を暴露し、さらにまた、プロレタリア国際主義を歪曲し、それを自己の覇権主義的、社会帝国主義的意図を達成する武器に利用しようとしているソ連修正主義者や中国修正主義者の策動を暴露することは、マルクス・レーニン主義党の責務である。

プロレタリア国際主義の諸原則に従わず、各国人民の革命闘争と解放闘争を支持しない中国共産党は、社会民主主義政党、および極右政党や反動政党を含むブルジョア政党との関係修復と親交の道を歩んでいる。同時にかれらは、かれら自身に従属しその指揮に従う雑多な集団をつくり出そうと努めている。かれらがそうした集団を必要とするのは、ほかでもなく、真のマルクス・レーニン主義党と進歩的分子――かれらは人民をめざめさせ、超大国と結びついた支配集団に反対する革命に立ち上がらせる活動に着手している――を妨害するためである。

党を名乗り、中国の路線に盲従する小集団は、日和見主義者の集まりであって、華国鋒＝鄧小平集団の修正主義理論とその反革命的行動を擁護、宣伝する以外には能がない。これらの集団には、自分自身の独自性、あるいはマルクス・レーニン主義理論に従ってたたかう決意がまったく欠けている。

これらの党派の主なスローガンは、中国の政策の基本スローガンそのもの、すなわち、今日の情勢のもとでは、ただソ連社会帝国主義によってのみ民族の独立が脅かされており、プロレタリアートの唯一の基本的任務はこの民族独立を擁護することにあるというものである。かれらは革命の大義を放棄し、それを資本主義祖国擁護の命題に置きかえた第二インタナショナルの頭目たちのスローガンを、ほとんど一言一句繰り返しているのである。レーニンは、この反マルクス主義の誤ったスローガンを暴露した。それは、真の独立の擁護に役立つものではなく、帝国主義間戦争をあおり立てるものであった。レーニンは、帝国主義諸グループのあいだの衝突にたいして真の革命家がと

るべき態度を明確に規定した。かれは次のように書いている。

「もし戦争が反動的な帝国主義戦争であるならば、すなわちそれが帝国主義的・暴圧的・略奪的・反動的なブルジョアジーの二つの世界的グループのおこなう戦争であるならば、あらゆるブルジョアジー(小国のブルジョアジーでさえ)は略奪の参加者へ転化する。そして、私の任務、すなわち革命的プロレタリアートの代表者の任務は、世界的屠殺の惨禍からの**唯一の**救いの道としての世界プロレタリア革命を準備することである。……

これこそ国際主義であり、これこそ、国際主義者の、革命的労働者の、真の社会主義者の任務である*」。

* 『プロレタリア革命と背教者カウツキー』——邦訳『レーニン全集』第二八巻三〇六ページ

中国の路線に追随する諸党派は、ブルジョア軍隊の増強の弁護人となっている。かれらはそのために、独立を守るためには軍隊の増強が必要であると想定し、それを方便に用いているのである。かれらが勤労人民に要求しているのは、忠実な兵士になることであり、資本主義的支配・搾取のこの主要な武力を弱めるためにたたかうすべての者にたいして、ブルジョアジーと共同で襲いかかることである。要するにかれらは、プロレタリアートと勤労大衆が、帝国主義と社会帝国主義によっ

て準備されている略奪戦争の肉弾として役立つよう望んでいるのである。

これら中国の取り巻き連中は同時にまた、資本主義的ブルジョア国家の諸機構、とりわけNATOやヨーロッパ共同市場の熱心な擁護者となっており、それらを「独立の擁護」の主な要素と見なしている。かれらは中国指導部と同様、こうした資本主義的支配・拡張の支柱に粉飾を施し、それらを美化している。かれらは、現実に自国の独立と主権をひどく侵犯しているほかならぬそうした諸機構を手助けしているのである。

これらのエセマルクス主義者にとって、大ブルジョアジーとの同盟、ブルジョア軍隊の擁護、あるいはNATOやヨーロッパ共同市場等にたいする支持は、苦労のない道である。なぜならそれは、ブルジョアジーとの衝突を回避するばかりでなく、それによってかれらは、反対にブルジョアジーの寵愛を得ることができるからである。

前途のないこれら小集団主義分子のこうした立場は、「ユーロコミュニズム」やブルジョアジーの諸政党との連合へかれら自身を導いている。そうならざるをえないのは、中国自身がプロレタリアートに、ブルジョアジーと団結するよう呼びかけているからである。これらのエセマルクス・レーニン主義者とマルシェのあいだには、すでに何の相違も存在してはいない。

現代修正主義者や社会民主主義者、エセマルクス・レーニン主義者は、プロレタリア国際主義や平和を守るための各国プロレタリアの団結等等について、空疎な決まり文句を並べ立てているが、マルクス・レーニン主義者はそれらに厳しい警戒心を払わなければならない。真のプロレタリア国際

主義は、何よりもまず自国内で、革命的行動を援助し遂行するために、また現実に革命闘争の状況をつくり出すために献身的に活動するときに、実際のものとなる。同時にまた、レーニンがのべているように、例外なくすべての国でこれと同じ闘争、これと同じ方針を、宣伝や共感、物質的援助によって支持しなければならない。これ以外のものはすべて欺瞞であり、マニーロフ気質(訳注)である、とレーニンは教えている。

(訳注) マニーロフは、ゴーゴリの小説『死せる魂』に出てくる地主の名。無益な感傷や空虚な夢想にふけり、現実にたいしてはきわめて消極的な態度しかとれない人物の典型。

それだからこそわれわれは、個人であれ、小集団や党派であれ、マルクス・レーニン主義者と自称するが実際には社会排外主義者、中央派、小ブルジョアジーにほかならない、そうしたエセマルクス主義的、エセ革命的、エセ国際主義的分子を大いに警戒しなければならない。自分自身のプロレタリア国際主義について、平和の擁護や諸改良等について、自慢げに熱弁をふるっているこれら諸党派はすべて、資本に奉仕しているのである。

中国修正主義者も時おりは、プロレタリア国際主義について語りはするが、かれらが立脚しているのは民族主義、排外主義の立場である。中国指導部も、自分たちがプロレタリア国際主義と平和を擁護し、プロレタリアートの闘争と要求を支持していると「天にかけて」誓い、大言壮語してい

るが、実際にはかれらは腕をこまねいて傍観し、もっぱら革命勢力を分裂させるために欺瞞的な言辞をはくのをこととしている。

マルクス・レーニン主義諸党が当面している重要な課題は、プロレタリア国際主義を強化することである。プロレタリア国際主義は、大小、新旧を問わずすべての党のあいだで発展させられるべきものである。これらの党はみな、互いに団結を強化し、その政治、イデオロギー、戦闘の各面における行動の歩調をあわせなければならない。

この方向は、世界資本主義とその奴隷化政策にたいして、また、世界資本主義がソ連やチトー一味、中国、イタリア、フランス、スペインその他の現代修正主義と組んでめぐらしている陰謀術策、およびかれらの結託にたいして、真向からの攻撃をしかける能力を備えるうえで、マルクス・レーニン主義諸党に課せられた第一義的な課題である。マルクス・レーニン主義諸党は、この方向の重要性を強調しつつ、日ごとにますます不敗のものになる強力な戦線を形成するであろう。もしもこれらの諸党が団結し、反動の勢力にたいしてともに一致して打撃を加えるならば、また、もしもこれらの諸党が、革命の圧殺と階級闘争の鎮圧のために資本主義と現代修正主義があらゆる方法で仕組んでいる陰謀を暴露しつくすならば、その勝利は確実である。

われわれマルクス・レーニン主義者は、どこにいる労働者であれ、かれらにたいして、年来の敵に反対して立ち上がり、その鉄鎖を断ち切って革命をおこなうよう、また、現代修正主義者が唱えるように独占や資本家に屈服したりしないよう呼びかけ、そのために奮闘しなければならない。マ

ルクス・レーニン主義者と真の革命家の任務は、各国のプロレタリアと人民に、新たな世界、自分自身の世界、すなわち社会主義の世界をめざして立ち上がるよう呼びかけることである。

第二部

第一章 「三つの世界」論は反革命の排外主義理論である

今日では、中国修正主義者もまた、革命と各国人民の解放闘争に関するレーニン主義の理論と戦略に公然と敵対するようになり、広範な戦線でそれらとたたかっている。かれらは、この輝かしい科学的な理論と戦略に、反革命的、排外主義的謬論であるかれら自身の「三つの世界」論を対置しようと努めている。

「三つの世界」論は、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの理論に対立するものであり、さらにもっと正確に言えば、それを否定するものである。だれが最初に「第三世界」という用語を考案したのか、まただれが最初に世界を三つの部分に区分したのかということは、何ら重要なことではないが、ただ、レーニンがそうした区分をしなかったことは確かである。ところが、中国共産党は自らその生みの親を名乗り、「三つの世界」論を考案したのは毛沢東であると主張している。もしも毛沢東が、この理論なるものを最初に定式化したその本人だとするならば、それは、かれがマルクス主義者ではなかったことをいっそう明白に証明するものである。しかしながら、かりに毛沢東がこの理論を他人から取り入れたにすぎないとしても、かれがマルクス主義者でなかった

ことは、それだけでも十分に明らかである。

「三つの世界」の概念はマルクス・レーニン主義の否定である

三つの世界が存在する、あるいは世界が三つに区分されるという概念は、世界資本主義と反動の所産である人種主義的な形而上学的世界観を根底としている。

しかし、各国を三つの方面または三つの「世界」に配置するこの人種主義的命題は、単純に皮膚の色を基準とするものではない。それは経済的発展水準にもとづいて各国を分類するとともに、各人種を一方の「大支配人種」と他方の「賤民と平民からなる人種」とに区別して規定し、資本主義ブルジョアジーの利益に合致した固定的な形而上学的区分を設けようと意図しているのである。それはまた、世界の各民族・人民を羊の群れのような雑多な寄せ集めと見なしている。

中国修正主義者が容認し、また自ら説くところによれば、「支配人種」は存続されなければならず、「賤民と平民からなる人種」は、従順にただひたすらかれらに奉仕しなければならないのである。

マルクス・レーニン主義の弁証法がわれわれに教えているように、事物の発展には限りがなく、いかなる事物も変化を止めることはない。未来に向かって事物が不断に発展していくこのような過程の、量的・質的な変化が生じる。他のあらゆる時代と同様、われわれの時代も、マルクス、エン

ゲルス、レーニン、スターリンがきわめて明確に規定した深刻な諸矛盾によって特徴づけられている。現代は帝国主義とプロレタリア革命の時代、したがって巨大な量的・質的変化の時代であり、労働者階級が権力を奪取し、新しい社会主義社会を建設するための革命を到来させる時代である。

マルクスの理論全体の基礎をなしているのは階級闘争であり、弁証法的唯物論と史的唯物論である。マルクスは、資本主義社会が搾取階級と被搾取階級とに分裂した社会であること、また、階級のない社会、すなわち共産主義が実現されたときにのみ階級が消滅することを論証した。

われわれが生きている現代は、帝国主義が崩壊しプロレタリア革命が勝利する段階にある。このことはつまり、現代の資本主義社会にはプロレタリアートとブルジョアジーという二つの**主要な**階級が存在し、それらが死活をかけて非和解的に闘争しあっているということである。この両者のうち一体どちらが勝利するのか。マルクスとレーニン、マルクス・レーニン主義の科学、そして革命の理論と実践が確かな論拠をもって証明しているように、最終的にはプロレタリアートこそが、ブルジョアジーと帝国主義、およびあらゆる搾取者の権力を打倒し粉砕することによって勝利し、新しい社会、社会主義の社会を建設していくのである。またそれらが教えているように、この新しい社会においても、互いに緊密な同盟を結ぶ労働者階級と勤労農民という二つの階級がずっと長期に存在するし、しかも、打倒され収奪された諸階級の残存勢力も存在しつづける。この時期全体を通じてこれらの残存勢力は、社会主義建設に反対する腐敗分子とともに、自らの失った権力を奪回しようと企てるであろう。したがって、社会主義のもとでも激烈な階級闘争が存在するのである。

マルクス・レーニン主義者は、次の事実をたえず念頭に置いている。すなわち、革命が勝利し社会主義制度が打ち立てられた国国を除くすべての国には、プロレタリアートをはじめとする貧困な諸階級と、ブルジョアジーをはじめとする富裕な諸階級が存在しているということである。

どの国であれ、またそれがいかに民主的あるいは進歩的な国であれ、あらゆる資本主義国には抑圧者と被抑圧者、搾取者と被搾取者が存在し、対立があり、無慈悲な階級闘争が存在している。この階級闘争の鋭さはさまざまであるが、それはこうした現実をかえるものではない。階級闘争にば起伏があるが、しかしこの闘争は存在しつづけるし、圧殺することはできない。階級闘争はいたるところに存在している。それは、アメリカのプロレタリアートと帝国主義ブルジョアジーとのあいだに存在しており、同様にソ連――そこでは、マルクス・レーニン主義が裏切られ、自国の勤労人民を抑圧する新しいブルジョア資本家階級が形成されている――にも存在している。階級と階級闘争は、フランス、イギリス、イタリア、西ドイツ、日本などの「第二世界」にも存在し、さらには、インド、ザイール、ブルンジ、パキスタン、フィリピンなどの「第三世界」にも存在している。

ところがただ、毛沢東の「三つの世界」論に従うならば、階級と階級闘争はいかなる国にも存在しないことになるのである。この理論が階級と階級闘争を見ようとしないのは、各国と各国人民を、ブルジョア的な地政学的概念とそれぞれの経済的発展水準に従って判断しているからである。

世界を階級的角度から見るのではなく、中国修正主義者のように、世界が「第一世界」、「第二世界」、「第三世界」の三つに区分されていると見なすことは、階級闘争に関するマルクス・レーニン

主義理論から逸脱することを意味している。それはまた、プロレタリアートがブルジョアジーと闘争し、遅れた社会から新しい社会、社会主義社会への移行を、さらに階級のない社会、共産主義社会への移行をかちとるのを否定することを意味している。世界を三つに区分することは、つまるところ、時代の特徴を認識せず、プロレタリアートと各国人民が革命と民族解放をめざして前進するのを阻止することであり、かれらがあらゆる国で、また世界の津津浦浦でアメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義、資本と反動に反対して闘争するのを妨害することである。「三つの世界」論は社会平和や階級協調を唱え、プロレタリアートとブルジョアジー、被抑圧者と抑圧者、各国人民と帝国主義という あいいれない敵同士のあいだで同盟を結ばせようと努めている。それは、ほかでもなく階級闘争の消滅をはかることによって、古い世界、すなわち資本主義世界を延命させ、その屋台骨を支えようとする策動である。

しかしながら、階級闘争——権力獲得のためのプロレタリアートとその同盟者の闘争、また自己の権力を維持するためのブルジョアジーの闘争——が消滅することはけっしてありえない。これは反駁の余地のない事実であり、たとえ「第一世界」、「第二世界」、「第三世界」であれ、「非同盟世界」であれ、あるいは「第何世界」であれ、「世界」についての空論をいくらひねり出そうとも、こうした事実をかえることはできない。このような区分を認めることは、階級と階級闘争に関するマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの理論を放棄し捨て去ってしまうことに等しい。

十月革命が勝利したのちにレーニンとスターリンがのべたように、われわれの時代には二つの世

界がある。すなわち、社会主義の世界——もっとも当時は、社会主義が勝利したのは一国だけであったが——と資本主義の世界がそれである。レーニンは一九二一年にこう書いている。

「……いまこの世界には二つの世界がある。すなわち、古い世界——難関に陥って、絶対にあともどりできない資本主義と、成長中の新しい世界である。この新しい世界は、まだきわめて弱いが、不敗であるから、成長していくであろう*」。

＊『第九回全ロシア・ソヴェト大会』——邦訳『レーニン全集』第三巻一四四ページ

世界を区分するこうした階級的基準は、社会主義が未だ多数の国国で勝利してはおらず、新しい社会が古いブルジョア資本主義社会にとってかわってはいないという事実にもかかわらず、今日もなお有効である。そして将来、このことは必ず実現するにちがいない。

社会主義がソ連と他のかつての社会主義諸国で裏切られたという事実は、世界を区分するレーニン主義的基準を少しもかえるものではない。従来と同様いまも、この世界には二つの世界しか存在しない。そしてこの二つの世界、二つの敵対的階級、すなわち社会主義と資本主義のあいだの闘争は、一国のみならず国際的な規模で存在しているのである。

中国修正主義者は、ソ連と他のかつての社会主義諸国の裏切りによって社会主義陣営がもはや存

在しなくなったという口実のもとに、社会主義世界の存在を認めていないが、そのさいかれらは、一つの事実を意図的に無視している。それはすなわち、資本主義が依然として存在するもとでも革命と帝国主義の崩壊が進行するという歴史の全般的すう勢は、現代修正主義が発生しようといささかもかわりはしないということである。それと同時にかれらは、マルクス・レーニン主義の不滅の思想が存在し、発展し、勝利しているという事実を無視し、マルクス・レーニン主義諸党と社会主義アルバニアの存在、そして自由・独立・民族主権を求めてたたかう諸国人民の存在を無視し、さらには、世界プロレタリアートの存在とかれらの闘争をも無視している。

パリ・コミューンは鎮圧され勝利しなかったが、それは世界プロレタリアートに偉大な模範を示した。コミューンの経験は、フランス・プロレタリアートが一時的にはまだ非力であることを明らかにしたが、にもかかわらずそれは、すべての国のプロレタリアートを世界革命に向けて準備させるとともに、勝利を得るにはどんな条件が必要なのかという重大な教訓をもたらしたのであると、マルクスはのべている。かれは、「天をもおそう」コミューン戦士のこの偉大な経験を理論化し、プロレタリアートはブルジョア国家機構とその独裁を革命的暴力によって粉砕しなければならないと教えたのである。

現代修正主義者は憶病者である。かれらは、反革命勢力が今日きわめて強大であると考えている。だが、これは事実にまったく反している。これらの勢力は人民よりも弱小である。強大なのは、プロレタリアートを先頭とする人民のほうである。人民は、反革命勢力と反動勢力、帝国主義

と社会帝国主義を圧倒するであろう。この見方は世界の階級的分析にもとづくものであり、修正主義者が自らの行動や恐怖心をいかに革命的な言辞でおおい隠そうとも、それ以外の見方はいずれも誤っているのである。

われわれマルクス・レーニン主義者が、この世界には――三つの世界とか五つの世界ではなく――二つの世界があると言う場合、われわれがすすんでいる道は正しく、さらにわれわれは、マルクス・レーニン主義の基礎の上に、資本主義ブルジョアジーに反対し、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義、その他の帝国主義に反対する自らの闘争を築き上げていかねばならない。このような闘争こそが、古いブルジョア資本主義世界の崩壊と新しい社会主義制度の樹立をもたらすにちがいないのである。

プロレタリアートは、われわれの時代における社会的原動力である。レーニンが強調したように、歴史を前進させる原動力となるのは、次のような階級、すなわち、

「……あれこれの時代の中心に立ち、その時代の主要な内容、その時代の発展の主要な方向、その時代の歴史的情勢の主要な特殊性、等々を規定する」階級である。*

＊『よその旗をかかげて』――邦訳『レーニン全集』第二一巻一三八ページ

ところが中国修正主義者は、レーニンのこのような命題に反して、「第三世界」を「歴史の歯車を前進させる偉大な原動力」として描き出そうと努めている。こういったことを主張するならば、それは、原動力について理論上でも実践上でも誤った規定をあたえることになる。社会発展史における今日の時代には、プロレタリアートというもっとも革命的な階級がその中心に立っているが、このような時代に一群の国家――そのうちの圧倒的多数はブルジョアジーと封建領主の支配下にある――や、さらには露骨な反動派やファシストをどうして原動力などと呼ぶことができようか。そうすることは、マルクスの理論にたいする重大な歪曲である。

中国指導部は、「第三世界」にも抑圧者と被抑圧者が存在し、一方には奴隷と化し、飢えと貧困にさいなまれたプロレタリアートと農民が、他方には人民を搾取・収奪する資本家と地主が存在していることを考慮に入れてはいない。いわゆる第三世界におけるこうした諸階級の状態とそれらのあいだに存在する対立を無視することは、マルクス・レーニン主義を修正し資本主義を擁護することを意味する。一般にいわゆる第三世界諸国では、資本主義ブルジョアジーが権力を握っている。このブルジョアジーは、自己の階級的利益のために国全体を搾取し、貧困な人民を搾取・抑圧しているが、それは、自らのために最大限の利潤をしぼり出し、人民を永久に隷属と貧窮のもとにつなぎとめるためである。

「第三世界」の多くの国国で政権の座にあるのは、ブルジョアジーと資本家の政府であり、それ

は当然にも、さまざまに異なった政治的色彩を帯びている。それらは、プロレタリアートとしいたげられた貧農に敵対し、革命と解放戦争に敵対する階級の政府である。これらの国国において、国家権力を握るブルジョアジーが維持しようとしている社会は、ほかでもなく、プロレタリアートが都市と農村の貧困諸階層と同盟して打倒しようとしている資本主義社会そのものなのである。このブルジョアジーからなる上層階級は、自己の狭い利益を第一としており、事と次第ではいつでも、自国の地上・地下資源や祖国の自由と独立、主権を外国資本主義にすすんで売り渡そうとする。この階級は、それが権力を握っている国ではどこででも、プロレタリアートとその同盟者である被抑圧諸階級・諸階層の闘争と熱望に敵対している。

中国指導部が「第三世界」に含めている諸国家の多くは、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義に反対してはいない。このような諸国家を、毛沢東が唱えているように、「革命と反帝闘争の主要な原動力」と呼ぶことがいかに誤りであるかは、いわばヒマラヤ山脈を見るがごとく歴然としている。エセマルクス主義者はほかにもいるが、かれらは少なくとも、自己のブルジョア理論を隠れ蓑にして自らを偽装するぐらいのことは心得ている。

中国修正主義者は、「第三世界」という見方だけにとどまらず、それと同様に反マルクス主義的な、いわゆる「第二世界」という見方をしているが、この「世界」を支配しているのは資本主義大ブルジョアジーであり、依然として帝国主義者としての本質をかえていない旧来の大帝国主義者である。いわゆる第二世界諸国には強大なプロレタリアートが存在しており、かれらは骨の髄まで搾

取され、弾圧法や軍隊、警察、労働組合などブルジョアジー独裁のあらゆる武器によって抑圧されている。「第三世界」諸国と同様「第二世界」諸国でも、プロレタリアートと人民を支配しているのは同一の社会勢力、すなわちブルジョア資本家階級であり、かれらは打倒すべき対象である。これらの諸国においても、プロレタリアートは主要な原動力となっている。

「第三世界」や「第二世界」の場合と同様に、アメリカとソ連についても、中国修正主義者は革命の巨大な部隊をなすプロレタリアートを無視し、ほかならぬ社会の主要な原動力——自らの階級敵であり、世界革命全体の敵である独占ブルジョアジーに攻撃を加える勢力——そのものを否定し去っている。

毛沢東の「三つの世界」論は、こうした厳然たる実際を否認し、ヨーロッパやその他の発達した諸国のプロレタリアートを度外視している。なるほど、いわゆる第三世界、第二世界、第一世界を問わず、プロレタリアートの隊列内にも腐敗現象が幾分か存在しはするが、それは、ブルジョアジーが自らの敵にたいして無為無策ではなく、しかも武器で弾圧を加えるだけにとどまらず、政治的・イデオロギー的に、また、かれら自身がつくり出す生活様式等等をも通じて攻撃をかけているからである。しかし、労働貴族のようなプロレタリアートのなかの一部の層が堕落してしまうとしても、そのことによってマルクス・レーニン主義を放棄すべきだとか、世界革命の過程における労働者階級の役割を否定すべきだとか言うことはできない。正しいマルクス・レーニン主義的教育と日日の革命的活動を通じて、真の共産主義者は、あらゆる国、あらゆる「世界」において——イギリ

スやフランス、イタリア、ドイツにおいてであれ、ポルトガルやスペイン、アメリカ、日本、またその他の国国においてであれ――プロレタリアートの堕落を防ぎ、かれらを抑圧者にたいする闘争へと立ち上がらせるのである。

世界帝国主義の元凶であるアメリカにおいても、強大なプロレタリアートが存在している。アメリカは世界最大の工業国の一つであると同時にもっとも富裕な国であり、したがって、プロレタリアートを欺瞞するために資本家があてがう施しも、他のブルジョア諸国におけるよりも幾分かは大きい。アメリカの場合、生活様式がプロレタリアートにおよぼす影響もより大きなものであるが、だからといってわれわれは、アメリカ革命におけるこの国のプロレタリアートの役割と貢献を否定することはいささかもできない。また事実アメリカには、帝国主義と略奪戦争に反対し、資本家やトラスト、銀行などによる抑圧に反対する世論が一部に存在している。さらにこの国では、小ブルジョアジーの諸階層のなかにも、大資本の抑圧にたいする反抗が存在している。

中国の「三つの世界」論は階級闘争を否定するとともに、外国による支配から自らを解放し、民主主義的権利と自由をかちとるための各国人民の闘争を否定し、社会主義をめざすかれらの闘争を否定している。この反革命の反科学的理論は、帝国主義と社会帝国主義、国際大ブルジョアジー全体という敵にたいする、各国人民の闘争を排除しているのである。

各国人民を「三つの仕切り部屋」のなかにおし込めること、また、「第三世界」だけが帝国主義

からの解放を願望し、それだけが「帝国主義に反対する主要な原動力」であるなどと説くことは、欺瞞であり、マルクス・レーニン主義からの露骨な逸脱である。もしも、帝国主義者と資本家を「第一世界」や「第二世界」に含めるべきだとするなら、その場合次のような疑問が生じてくる。すなわち、「第三世界」を抑圧しているほかならぬその抑圧者に反対し、自らの解放を求めてたたかっているこの「三つの世界」の人民は、一体どこに含めればよいのかという疑問である。世界の三つの区分の考案者やその擁護者は、こうした疑問にまったく答えることができないでいる。というのもかれらは、自己の反マルクス主義、反レーニン主義の概念に従って、帝国主義者と支配者、そして各国人民をいっしょくたにしているからである。

マルクス・レーニン主義者は、ソ連人民を、かれらの支配者である反マルクス主義、社会帝国主義のペテン師や、新しい資本家と同一視することはできない。またマルクス・レーニン主義者は、アメリカ人民をアメリカ帝国主義と混同したり、とりちがえたりすることはできない。もしもマルクス・レーニン主義者が中国修正主義者と同様にふるまったとしたら、革命家は重大な理論的誤りを犯し革命に自ら敵対するようになり、さらには、帝国主義と社会帝国主義、および資本の勢力――プロレタリアートと人民は、敵の巣くつの内部でかれらとたたかっているのである――そのものさえ支持するようになるだろう。

世界の三つの区分は、人民を抑圧する寡頭支配に反対しそれとたたかっている各国人民の特殊性を曖昧にし、またかれらの熱望やその発展の度合いがそれぞれに異なっていることを曖昧にしてい

るが、それにもかかわらず中国が、「第三世界」は「第二世界」と連合して「第一世界」の半分とたたかわなければならない、と呼びかけているのは一体何を意味しているのだろうか。各国人民の反抗と革命闘争の水準もまた、さまざまに異なってはいるが、しかしかれらの終局目標はただ一つ、すなわち共産主義である。このような事情のもとで、われわれマルクス・レーニン主義者は、帝国主義、社会帝国主義、資本主義に反対しかれらの欺瞞的イデオロギーに反対する不断の闘争を通じて、この終局目標に到達できるよう宣伝活動をくり広げ、自らを奮い立たせなければならない。

中国修正主義者は、資本主義諸国における人民と支配者を混同しいっしょくたにするだけでなく、社会主義諸国も「第三世界」に含めうるなどと説いて、これら諸国の独自性をも解消しようとしている。

中国指導部が主張するように、社会主義国を、敵対的諸階級が存在し抑圧と搾取が存在する「第三世界」と同一視したり、「王公貴族」と同列に置くなどということが、一体どうしてできようか。社会主義国を標榜する中国修正主義者は、自分たちが「第三世界」に身を置くのは、この「世界」の人民を援助するためであるなどと言っている。これは、かれら自身の拡張主義的狙いをおし隠そうとする欺瞞の手口である。真の社会主義国ならば、各国人民の闘争を支援するために世界を三つに分けたり、「第三世界」に身を置いたりする必要はない。

階級的基準を指針とする自らの立場から、われわれマルクス・レーニン主義者は、各国人民とプロレタリアートが真の民主主義、主権と自由をかちとるよう援助するが、しかし、国王や反動的

一味が支配する国家を援助したりはしない。われわれは、超大国のくびきから自分自身を解放することを願う、そうした人民や民主的国家を援助しはするが、ただしわれわれは、次のことを強調する。すなわち、これらの人民や国家が、超大国と結びついた君主や国際独占体とも同時にたたかうのでなければ、こうした援助は、階級的基準にもとづく正しい方法での適切な援助とはなりえないということである。中国指導部はこうした複雑な階級的問題を、この「第三世界」という架空の世界に自ら「溶け込む」ことで解決できたと主張している。しかしながら、このような解決の仕方は反マルクス主義である。中国指導部が主張していることとは裏腹に、「第三世界」の大多数の諸国と政府は、「第一世界」すなわちアメリカ帝国主義やソ連社会帝国主義との闘争にも、また「第二世界」との闘争にも賛成してはいない。

世界の各国人民のすう勢は、解放と革命、社会主義をめざす闘争へと向かいつつあるが、中国自身も属する「第三世界」の王国や首長国の政府、またモブツやピノチェットの類の反動的支配集団は、こうしたすう勢に合流してはいない。

いわゆる第三世界の諸国家に関して言えば、中国指導部は、プロレタリア国際主義の諸原則と世界革命の利益にもとづく階級的区別を何らしてはいない。かれらは、これらの民族国家――その大多数はブルジョアジー上層部の指導下にある――がアメリカ帝国主義、およびソ連社会帝国主義の影響下にあり、それらと多数の糸で結びついているという事実を見落としている。

これらの諸国には、プロレタリアートとしいたげられた貧農を一方とし、かれらを隷属させるブ

ルジョアジーとすべての支配者を他方とする深刻な国内矛盾が存在している。社会主義国がこれら諸国の人民にあたえる援助は、かれらが真に民主的な国家の創設をめざして前進するのを大いに促すものでなければならず、プロレタリア革命の勝利の展望を曇らせたり、またプロレタリアートの権力獲得の事業に支障をきたすようなものであってはならない。革命は輸入することができない。それは、各国のプロレタリアートと人民によって遂行されるものである。もちろん、権力の獲得は一朝一夕にしてなせるものではないが、レーニンがわれわれに教えているように、プロレタリアートは、独裁者と反動的ブルジョアジーの腐敗した国家権力を打倒し人民による支配を打ち立てるための闘争において、どのような歴史的転機がこようともつねにその最先頭に立つことができるよう条件をととのえなければならない。

われわれ共産主義者が、レーニン主義の階級的基準にもとづいておこなう現代世界の区分は、われわれ自身が超大国とたたかい、また、この超大国と矛盾をもち解放を求めるすべての人民と国家をわれわれが支持するのを妨げるものではない。社会主義アルバニアはアジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国人民の闘争に誠心誠意強力な支持をあたえてきたが、それは、この闘争がかれら自身の利益に合致しており、帝国主義と外国による植民地的支配に矛先を向けているからである。しかし中国指導部のように、マルクス・レーニン主義の諸原則、およびプロレタリアートの党のイデオロギーと政策を歪曲しおおい隠すことは、反マルクス主義であり、欺瞞とペテンの行為である。アルバニア労働党はそういったことをしたことはなく、また今後もけっしてしはしないであろう。な

ぜならそれは、自国人民と他の諸国人民、そして国際プロレタリアートと世界革命にたいする許しがたい犯罪となるからである。

中国共産党は、世界を三つに区分することによって階級協調を唱えている。

真のマルクス・レーニン主義者は、レーニンが強調している次のような教えをけっして忘れはしない。すなわち、日和見主義者と修正主義者は階級闘争を緩和し、労働者階級と被抑圧者を「革命的」な決まり文句で欺くとともに、マルクス・レーニン主義学説の革命的内容を骨抜きにしようと躍起になっている、ということである。労働者階級とブルジョアジーとの協調や平和的共存を説く中国修正主義指導部の行為も、これと同じものである。

エンゲルスとレーニンがわれわれに教えているように、相対立する根本的利害を有する階級間、あるいは社会勢力間の矛盾は、和解しうるどころか逆にますます激化し、ついには社会的・政治的衝突へと転化する。国家の存在それ自体が、階級間の対立が和解できないものであることを証明している。したがって、無原則的な団結を説くことによって、「第三世界」、「第二世界」、あるいは「第一世界」の個個のブルジョア・修正主義国に見られるこうした階級対立を緩和しようとすることは、とどのつまり、存在する諸矛盾の客観的性格を否定し、この問題を反マルクス主義的に論じることになる。

中国の「理論家」たちは、けっして和解しえない諸階級を和解させようと試みているが、それ

は、かれらが修正主義的、日和見主義的立場に立っていることを意味するものである。中国修正主義者が、自ら「第三世界」に含めている国国を、階級平和が支配的な国国と呼び、またその国家を階級和解の機関と呼ぶとき、かれらがマルクスの理論を歪曲していることはまったく明白である。

中国指導部が宣伝するような「第三世界」の概念を受け入れることは、ブルジョアジーが労働者階級と人民大衆を抑圧するのに必要な国家機構そのものを擁護するために、それに有利な世論をつくり出すことを意味する。レーニンが修正主義者を攻撃して言ったように、階級闘争を緩和させる論点は、こうした抑圧を正当化し是認するものである。「第三世界」内部の団結をはかることとは、実際には被抑圧階級と抑圧階級との団結をはかること、すなわち勤労大衆とブルジョアジー、人民と外国の抑圧者との対立を緩和させようとすることに等しい。中国修正主義者のこのような説教は、各国人民の民族的・社会的解放の利益に、また自由と独立、社会正義を求めるかれらの願望に対立するものである。

「第三世界」あるいは「非同盟世界」を構成すると言われている諸国の大多数は、外国金融資本に従属しており、この金融資本は、それらの国国のあらゆる生活分野で決定的な比重を占めるほどに強力にその網の目を広げている。これらの諸国は完全な独立を有してはいない。逆にそれらは、この大金融資本——それは各国人民の搾取を正当化する政策をすすめ、またそういうイデオロギーを蔓延させている——に従属しているのである。

ブルジョアジーと帝国主義はこうした現実を隠蔽しようと非常に骨折っているが、それが露呈し

た場合には、諸国の独立と主権に敵対する種種さまざまな「理論」をでっち上げる。ブルジョア理論家や修正主義理論家は、自由と独立、主権を求める各国人民の願望を圧殺するために、それを「時代錯誤的」な願望として描き立てたり、雑多な形而上学的解釈を施したり、あるいはまたそれにたいして、人類社会発展の現すう勢を表現する「世界の相互依存」などというスローガンや、いわゆる社会主義共同体の至高の利益をあらわす「制限主権」なるスローガン、等等を対置している。

ブルジョアジーと修正主義者が、諸民族および諸国家の自由と独立、主権をあらゆる形態と分野において蹂躙（じゅうりん）しているという事実は、資本主義制度の腐朽を示すものである。われわれが生きている時代は、ブルジョアジーが支配階級としての基盤を失う一方、世界プロレタリアートが巨大な勢力となり、自分たちの搾取階級を撃退するための仮借ない不断の闘争を開始する時代である。各国人民およびプロレタリアートの階級闘争によって打撃を受けたブルジョアジーは、やむなく植民地主義を正式に放棄し、かれらが長期にわたって占領し徹底的に搾取してきた多くの国国に、自由と独立、主権を形式上承認した。

しかしながら多くの国国にとっては、資本主義諸国家がその旧植民地にたいして法的に承認した自由と独立と主権は、今日に至るもなお形式的なものにとどまっている。それは、資本家と帝国主義者が新たな形態でこれらの諸国を支配しつづけているからである。これら現代の反動的勢力は、人民の経済的、政治的、イデオロギー的後進性や革命勢力の未組織状態を利用して、旧植民地にたいする自己の支配を維持するために、分断支配の陰謀や策略――これらの国国にはいまなお、その

ための有利な土壌が残されている――を大がかりに実行している。

この問題を論じる場合、旧植民地諸国が未だに完全な独立と主権をかちとっていないからといって、これらの国国の闘争が無益であったと考えるべきではない。けっしてそうではない。帝国主義や社会帝国主義という強者の支配と庇護から自国を解放するための小国の人民の闘争は、過小評価されてはならない。それどころか、アルバニア労働党とアルバニア国家は、こうした正義の革命的解放闘争が各国人民の政治的独立を強固にし、植民地的、新植民地的支配を断ち切るうえでの一つの勝利であると見なして、それに惜しみない支持をあたえてきたし、今後も引き続きあたえるであろう。しかしながらわれわれは、いまやすべての革命闘争を民族独立のための闘争に、あるいは、帝国主義諸国の侵略を撃退しこの独立を守る闘争に引き下げるべきだと称して、社会的解放のための闘争を否定する修正主義理論家たちには反対する。この社会的解放の闘争に勝利することだけが、民族の真の自由と独立、主権を完全に保証するのである。これら搾取制度の擁護者たちは、次のことを「忘れ」去っている。それはすなわち、プロレタリアートとその同盟者を一方とし自国のブルジョアジーとその国外の同盟者を他方とする階級闘争は、たえず激烈に進行しており、それはやがてレーニンが言うところの革命的情勢に、すなわち革命が勃発するような局面にまで発展するだろう、ということである。反帝民主革命が大規模に発展し、プロレタリアートがその指導権を握るうえでますます有利な条件が世界には形成されつつあるが、こうした条件は、民族独立の闘争からさらに次の発展段階へ、すなわち社会主義をめざす闘争へと移行するために利用されなければならな

い。レーニンが教えているように、われわれはブルジョアジーとその国家権力を一掃することによって革命を最後まで遂行しなければならない。こうした基礎の上に立ってはじめて、真の自由、真の独立と主権を語ることができるのである。

われわれのマルクス・レーニン主義的概念に従えば、封建階級やブルジョア階級が支配し敵対的諸階級が存在する社会では、人民が自由と主権を有することは不可能である。自由と独立と主権は、具体的な社会的・政治的内容をもつものである。プロレタリアート独裁の条件のもとでは、真の完全な独立と主権は保証されるが、搾取階級の手に国家権力が握られているところでは、搾取者と被搾取者、および国と国とのあいだの不平等な経済的、政治的関係のために、結局のところ人民の自由と主権は失われてしまうか、もしくは制限されてしまう。したがって、「非同盟世界」あるいは「第三世界」に属する国国においては、民族の真の自由と主権について語ることはできず、ましてや人民の主権についてはなおさらである。どの国の人民が真に自由でどの国の人民が隷属状態にあるのか、またどの国家が独立主権国家でどの国家が被抑圧従属国家であるのかを正しく規定することは、マルクス・レーニン主義理論にもとづく科学的分析を通じてのみ可能である。マルクス・レーニン主義理論は、各国人民の抑圧者と搾取者はだれか、またどの道が人民の自由と独立、主権をもたらす道なのかを明確に指し示す。われわれアルバニアの共産主義者は諸国家と人民の自由と独立を、このように、ただマルクス・レーニン主義に照らしてのみ理解するのである。

矛盾にたいする中国修正主義者の態度は観念論、修正主義、降伏主義の態度である。

マルクス・レーニン主義の教えにもとづく正しい革命戦略を実行するには、世界の革命と解放の潮流における原動力をあらゆる側面から弁証法的に分析・評価し、また敵の勢力の強い面と弱い面を正しく評価することが要求されるだけでなく、現代に固有の諸矛盾を科学的に正しく認識することが同時に要求される。

もしわれわれがマルクス・レーニン主義理論の教えに従って、諸矛盾を具体的事実と結びつけ、また情勢の実際の発展と結びつけて理解するならば、われわれは誤りを犯すことはないであろう。

矛盾に関して言えば、中国指導部がおこなう「理論化」や「解釈」や「哲学的解明」は、マルクス・レーニン主義の教師たちがあれほど明確に定式化した多くの命題を混乱させ書き換えるものである。矛盾を実際に即して解釈するのではなく、それとはちがった解釈をすることによって、かれらは、解放闘争と各国人民、革命と社会主義建設を支持するのではなく、ブルジョアジーと帝国主義を支持し、それらと合意や妥協を結んでいる。マルクス・レーニン主義の哲学者を装うこの中国指導部は、二つの仮面をつけている。すなわち一つは、自分たちがマルクス・レーニン主義理論の面で正しいかのように見せかけるための仮面であり、もう一つは、それを実際には歪曲するための

仮面である。

矛盾についての、また同盟や妥協についてのかれらの態度は、国際情勢と世界に存在する諸矛盾——帝国主義諸国間、個個の資本主義国家間の矛盾、プロレタリアートとブルジョアジーとの矛盾、等等——についてかれらがおこなう歪んだプラグマチックな分析から生まれている。そうした態度の根底にあるのは、かれら自身の修正主義的な観念論の世界観である。

しかしながら中国指導部が、矛盾の問題や同盟と妥協の問題を議題にのぼせているのは、何も偶然ではない。中国指導部はいまやその仮面を脱ぎ捨て、革命に公然と敵対しているのである。かれらは右翼日和見主義、修正主義の旗手になり下がっている。あらゆる修正主義者と同様中国共産党指導部も、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの言葉を引用することによって、マルクス・レーニン主義からの逸脱とかれら自身の修正主義路線を「正当化」しようと努めている。もちろんかれらは、この引用した言葉を切り縮め、ばらばらにして内容を抜き去り、こうして骨抜きにしたうえで、それを利用してかれら自身の立場と論点をマルクス・レーニン主義として売りさばいているのである。しかしながら、われわれの正しい理論をこのように歪曲し、恣意的に切り縮めて解釈しているのは、何も中国修正主義者が最初ではなく、また最後でもない。かれらよりずっと以前から——そしていまもあいかわらず——、社会民主主義の頭目連中やチトー一味、さらにソ連、イタリア、フランスやその他の国国の修正主義者がそれと同じことをやっているのである。

中国指導部は何よりもまず、矛盾をもてあそぶことによってアメリカ帝国主義にたいする自らの態度を正当化し、またそれと接近し結託するための道をならそうと努めている。

中国修正主義者は次のように主張している。すなわち、現代世界にはたった一つの矛盾しかなく、この矛盾こそが「第三世界」と「第二世界」、および「第一世界」の半分をしてソ連と対峙させているのである、と。各国人民を帝国主義者の一グループと団結させるこうした論点から出発しつつ、かれらは階級矛盾をいっさい除外して、ただソ連社会帝国主義とだけたたかわなければならないと唱えている。

それならば、各国人民と超大国との矛盾関係、および超大国相互の矛盾関係の問題について、現状がどうなっているかを分析してみよう。

今日の諸条件のもとで、一貫した革命的戦略・戦術を確定するさいに第一級の重要性を帯びるのは、米ソ二つの帝国主義超大国――それらは、資本主義の抑圧・搾取の制度を擁護する最大の勢力であり、世界反動の主要な砦である――にたいする原則的な立場である。この二つの帝国主義超大国は、革命と社会主義、全世界人民の不倶戴天の敵であり、またもっとも危険な敵である。さらにそれらは、あらゆる革命運動と解放運動に敵対する憎むべき国際的憲兵の役割を担うとともに、自らの行動によって世界を破滅的な戦争へと追いやるもっとも侵略的な戦争挑発大国である。

アメリカ帝国主義およびソ連社会帝国主義という、現代における最大級の二つの帝国主義国のあいだには、深刻な矛盾が存在しており、このことは、アルバニア労働党はもとよりだれしも否定す

ることはできない。われわれがたえず強調してきたように、二つの超大国間の矛盾は単に存在しているというだけでなく、それはよりいっそう深まりつつある。それと同時に超大国は、一部の問題についてかれらなりに合意をはかろうと努力している。レーニンはこのような現象を、資本の二つの傾向によって説明している。彼は次のようにのべている。

「……二つの傾向が存在している……一つは、すべての帝国主義者の同盟を避けられないものにしている傾向であり、もう一つは、ある帝国主義者と他の帝国主義者を対立させている傾向である……」。*

* 『全ロシア中央執行委員会とモスクワ・ソヴェトの合同会議における対外政策についての報告』——邦訳『レーニン全集』第二七巻三七五—三七六ページ

ではなぜ、二つの超大国のあいだには非和解的な矛盾と対立があるのだろうか。それは、かれらが帝国主義大国であり、かれらのいずれもが新たな勢力圏を打ち立て、各国人民を奴隷化し搾取するために世界覇権を争っているからである。かれらはいずれも貪欲で飢えており、それがかれらのあいだにいがみあいや鋭い軋れきを引き起こしている。この軋れきはかれら同士の戦争に、さらには流血の世界戦争に発展しかねないものである。

われわれマルクス・レーニン主義者は、超大国間に存在する矛盾を、革命と各国人民の解放闘争の利益のために利用しなければならない。

敵陣営内の矛盾を利用することは、革命的戦略・戦術の一構成部分である。スターリンがのべたように、労働者階級の敵の内部にある矛盾や衝突——それらが一国内におけるものであれ、あるいは国際舞台での帝国主義諸国家間におけるものであれ——の利用は、プロレタリア革命の間接的予備軍である。レーニンとスターリンの指導下にあった社会主義国家ソ連が、十月革命後の時期あるいはまた第二次世界大戦中に、帝国主義間矛盾を考慮に入れそれを利用したことは、周知の歴史的事実である。

だが、革命勢力や社会主義諸国が敵内部の矛盾を評価し利用する場合、それはつねに、これらの矛盾をどんな方法、形態、手段で利用すべきかを明確にするため、矛盾とその鋭さの度合いについて、また、ある特定の時期や時点における勢力関係について正しいマルクス・レーニン主義的分析を加えたうえでなされるのである。そしてその原則は、これらの矛盾はつねに革命のために、各国人民とその自由のために、そして社会主義の大義のために利用されなければならないということである。敵内部の矛盾の利用は、革命運動と解放運動の発展・強化をもたらすべきであって、それらを弱化させ衰退させるものであってはならない。それはまた、人民のなかに敵にたいするどんな幻想も生み出す余地をあたえず、革命勢力を敵との闘争に、とりわけ主要な敵との闘争にたえずより積極的に立ち上がらせるものでなければならない。

アメリカおよび修正主義ソ連という二つの超大国は、革命と社会主義の鎮圧をかれらの計画の主眼としている。中国指導部は、資本主義と社会主義との非和解的矛盾を示すこうした事実を指摘しないばかりか、実際にはそれを否認しさえしているのである。超大国は覇権を争奪しあい相互に矛盾をもちつつも、自由を求める各国人民を弾圧し革命を破壊するというかれらの共通の目標――これもまた、全面戦争や局地戦争につながっていく――を見失うことはけっしてないが、マルクス・レーニン主義者がこのことを忘れ去ることは当然にも許されはしない。この問題について中国修正主義者は、かれら自身に言わせればもっとも危険で、もっとも侵略的・好戦的なソ連社会帝国主義とのみ闘争するという周知の立場を、引き続き固持している。かれらはアメリカ帝国主義を第二位に引き下げ、アメリカは「現状維持を欲している」とか、それは「衰退しつつある」とか主張している。そこからかれらは、ソ連社会帝国主義に反対してアメリカ帝国主義と同盟を組むことは実現可能であり、また実現すべきであるという結論にいきついているのである。

アメリカ帝国主義は、中国指導部の主張とは異なり、いささかも衰えたり温和になったりしてはいない。逆にそれは、ソ連社会帝国主義と同様に侵略的で野蛮であり、強大である。アメリカ帝国主義が、かつて占めていた支配的地位をもはや保持してはいないという事実も、こうした事情を少しもかえるものではない。それは資本主義の発展の弁証法であり、帝国主義は衰退し腐朽しつつある資本主義であるというレーニンの命題を確証するものである。しかしそこからさらにすすんで、一方または他方の超大国が現実に有する侵略的な経済力と軍事力を過小評価するまでに至るなら

ば、それは許しがたいことである。また、帝国主義者が実際に弱体化し衰退しているということから、一方の帝国主義はさほど危険ではなくなり、他方の帝国主義のほうがより危険であると主張することも、許しがたいことである。帝国主義超大国は二つともに危険である。なぜならかれらは、かれらの墓穴を掘ろうとする者との闘争をけっして忘れてはいないからである。そして各国人民こそが、超大国の墓掘人にほかならないのである。

中国指導部のように、ただソ連社会帝国主義との闘争だけを唱え、実際にはアメリカ帝国主義との闘争をやめることは、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を堅持しないことを意味するものである。ソ連社会帝国主義と最後までたたかうべきだということは疑うまでもない。しかしだからといって、アメリカ帝国主義とも同様の厳しさでたたかうことを怠るならば、それは容認しえないことであり、革命にたいする裏切りとなる。中国の方針に従えば、アメリカ帝国主義およびソ連社会帝国主義の正体は何なのか、この二つの超大国はなぜ矛盾をもっているのか、またこの矛盾の本質は何かということは明らかにならず、さらには、われわれが深めるべき両者のあいだの闘争は何を基盤にしているのか、またこの二つの帝国主義国家が世界戦争を引き起こすのを阻止するためにわれわれは何をしなければならないのか、などといったことも明らかにはならないであろう。

もしわれわれがこれらの問題を理論的に正しく理解するなら、また、われわれがマルクス・レーニン主義理論にもとづいて正しく行動するなら、二つの超大国に反対し人民を支配するブルジョア

資本家集団に反対する各国人民の闘争にたいして、われわれがこれを必ず支持し援助しなければならないことはまったく明らかになるだろう。今日、資本主義世界は深刻な危機に見舞われている。しかしこの危機については、その全体としての規模から評価しなければならず、また資本主義世界に存在する諸矛盾についても、その全体としての深刻度から評価しなければならない。

中国修正主義者は自己のプラグマチックな反マルクス主義的論理に従って、ソ連を何の矛盾もなく発展しつつある国として、またそれを、ポーランド、東ドイツ、ハンガリー、チェコスロバキア、ルーマニア、ブルガリアなど他の修正主義諸国を何の支障もなく支配している帝国主義として描き上げている。かれらはまた、ソ連ブロックを上り坂にあるブロックとして、さらにソ連を、いたるところで覇権を打ち立てようとする世界に残るただ一つの帝国主義として描き上げている。

東欧の修正主義諸国にたいするソ連の支配権について言えば、それは何よりもまず、ソ連軍がこれらの諸国を軍事占領していること、ソ連社会帝国主義がこれら諸国の富を容赦なく無法に略奪し、またそれらをソ連の共和国連邦制度のなかに完全に組み込もうとしていることに示されている。もちろん、修正主義ソ連のこうした策動は反抗に出くわしている。修正主義の内部にうっ積した形で存在するこれらの矛盾と反抗は、よりいっそう激化しやがて爆発する時がくるであろう。

われわれがソ連社会帝国主義の性質を侵略的だと言ってきたのは、それがチェコスロバキアを侵略・占領し、アフリカやその他の地域に干渉してきたからであり、また、それがさらに次の侵略行動を企み準備しているからである。しかしだからといって、アメリカ帝国主義はソ連社会帝国主義

ほど侵略行為を働いてはいないとか、あるいはそれほど侵略的ではないとか言えるだろうか。

中国指導部は、アメリカの朝鮮侵略やベトナム、カンボジア、ラオスにたいする長期の残虐な戦争を忘れ去り、またその中東での戦争、中米の共和国諸国にたいする干渉、等等のことを忘れ去っている。かれらはこれらのことをすべて帳消しにして、いまではアメリカ帝国主義は温和になった(！)などという結論を引き出しているのである。かれらは、アメリカ帝国主義が世界中にその触手を延ばし、いたるところに軍事基地を設け、それらを拡充強化していることを忘れている。毛沢東や周恩来もこのことを忘れていたし、中国修正主義指導部もそれを忘れて、アメリカ帝国主義は弱体化し温和になった、だからかれらとは同盟を結ぶことができる(！)と、われわれに向かって言っている。そうした行動をとることは、一般に帝国主義、とりわけアメリカ帝国主義との闘争を消し止め、さらにはソ連社会帝国主義――中国はかれらと非常に激烈にたたかっていると自称しているが――との闘争さえ事実上消し止めることを意味している。

ソ連社会帝国主義が拡張にひどく飢えていることは事実である。かれらがアンゴラとエチオピアに介入していること、また地中海やアラブ諸国の一部に足場を設け、紅海水域を制圧し、あるいはインド洋に軍事基地を設置しようと策動していることなど、すべてこうしたことは露骨な帝国主義的行動である。しかしソ連社会帝国主義が打ち固めているこうした拠点は、アメリカ帝国主義が他の諸国に築き上げているその新植民地主義的な経済的地位や戦略的軍事拠点ほど強固なものではない。中国指導部が一見過小評価しているようで、実は認識しつつ維持しようとしているのは、ほか

でもなくこうした状態なのである。

それと同時に中国修正主義者は、次のような事実を見て取っているにちがいない。それはすなわち、西ヨーロッパの資本主義諸国家とアメリカとのあいだには矛盾が存在するにもかかわらず、かれらは互いに緊密な結びつきをもち、NATOやヨーロッパ共同市場などの政治的、軍事的、経済的同盟を通じて結びついているということである。アメリカの資本が西ヨーロッパ諸国の経済に、またそれだけでなく東欧とソ連にも深く浸透していることを中国指導部が知らないはずはない。かれらは、アメリカが世界各国にすでに何百億ドルもの資本を投下し、いまも引き続き投下していることを十分に承知しているのである。それなのに、中国指導部は一体何を期待しているというのか。もしやかれらは、西側資本主義諸国が——アメリカとの矛盾が余りにも大きいがために——アメリカから離反して自分自身の陣営を弱めれば、また、これらの国国がアメリカとともに保持する軍事力やアメリカとの経済・社会・文化関係を破棄して、ソ連社会帝国主義の前に自国を無防備でさらすようになれば、そこから中国自身が利益を得ることができる——そうしたことを期待しているとでもいうのか。これこそ、中国の対外政策がはらむ一つの矛盾である。

すでに指摘したように、革命勢力と解放勢力が、二つの超大国とその他の帝国主義諸国や資本主義・修正主義諸国とのあいだに存在する矛盾を利用すべきだ、ということは疑うまでもない。しかしながら重要なのは、このことを正しく理解し、またつねに革命の利益という見地からこれに従属させてとらえなければならないということである。帝国主義諸国および帝国主義諸グループ相互間

の矛盾、資本主義・修正主義諸国間の矛盾、等等を利用することは、労働者階級とマルクス・レーニン主義的革命家にとってけっして自己目的とはなりえない。
帝国主義諸国と二つの超大国との矛盾を利用するということは、それらのあいだの亀裂を深め、またそれらの国国の革命勢力ならびに愛国的勢力にたいして、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義——この両者はかれらを経済的、政治的、軍事的に従属させ、搾取し、かれらの民族性そのものを否定しようとしている——に反対してたたかうよう促すことにほかならないのである。

では、中国は一体どうふるまっているのだろうか。

中国の政策は、西側資本主義諸国とアメリカとの「神聖同盟」を提唱するものである。それはさらにすすんで、西ヨーロッパ諸国のプロレタリアートとこれらの国国の反動的ブルジョアジーとの同盟を提唱するまでになっている。一体、この政策のどこにマルクス・レーニン主義的革命路線があるというのか。どこに矛盾を利用する路線があるというのか。こうした政策で中国指導部は、ソ連に対抗するこのブロックを意のままに強化できるとでも思っているのだろうか。これは、かれらの夢見るユートピアにすぎないが、かれら自身の観点について言えば、それは形而上学である。
アメリカや西側資本主義諸国、さらにそれらと並んで日本やカナダは、中国指導部が考えているほど愚かではないし、またかれらの政策は中国の政策ほど幼稚ではない。かれらはかれらなりに、

中国とソ連とのあいだに存在する矛盾をいかに利用すべきかを十分に心得ている。かれらは侵略的大国であるソ連を弱めるすべを知っており、それに従って行動している。またかれらはこの面では老練であり、かれらが成果を収めていないとは言えない。アメリカとその他すべての資本主義国家は、東側修正主義諸国とクレムリンとの矛盾をあおり立てている。

いまや中国もまた、こうしたアメリカの古手の政策を実行しはじめている。華国鋒のルーマニア、ユーゴスラビア訪問はこの方向にそったものであった。もちろん、中国がヨーロッパに進出し矛盾をあおり立てていることや、とりわけバルカンで自らの有利な活動の場をつくり出そうと策動していることなど、すべてこうしたことは各国人民と革命の利益のためになされているのではない。それらは、ヨーロッパ諸国人民を互いに殺しあわせ帝国主義戦争の肉弾にかえるための、中国の戦争挑発政策の一部分なのである。

『プラウダ』は、アメリカの急速な軍備増強を非難する論陣を——もちろん何の効果ももたらさなかったが——ずっと以前から張っている。その関心は、アメリカのこうした動きを批判することにあるのではない。というのは、ソ連社会帝国主義自身も同じことをやっているからである。問題は、アメリカの軍事力の強化がソ連の戦力を相対的に弱めることになるので、ソ連はアメリカの侵略的軍事力との均衡を保つためにその跡を追いかけていかなければならない、ということなのである。けれども、ソ連が軍備拡張競争においてアメリカに追いつこうとすれば、それはソ連自身の経済力を弱めることになる。なぜならそのことは、大量の物資と人的資源、および多額の財源を経済

から軍備へと転用することを意味するからである。このことはブレジネフ一味の悩みの種になっている。

だが、驚くべきことに中国修正主義者は、かれらの機関紙『人民日報』を通じて無条件にアメリカの肩をもち、アメリカが軍備競争の面で優位を失わず、不断にその軍事力を強化するよう訴える論調を、次から次に打ち出している。ここに見られるように、『人民日報』によれば軍備をすすめているのはアメリカではなく、ただソ連だけだということなのである。中国修正主義指導部ほどのアメリカ支持者は、ほかのどの国にも見当らない。ブルジョアジーが事実を批判したり解釈したりする場合、かれらは少なくとも一定の節度を保ちながら事態のなりゆきを――もちろん恣意的にではあるが――考慮しようと努めるものである。しかし中国指導部のようなふるまい方は、まったく前代未聞である。

アメリカのバンス国務省長官は鄧小平との会談の席上、かれにたいして、「アメリカはソ連にたいして軍事的優位を有している」と説明した。しかし鄧小平は、当時中国を訪問中のアメリカ人ジャーナリスト大型代表団にたいして、「北京は(バンスの言明を)信じない」、「ソ連はアメリカよりはるかに優位である」と語った。「馬耳東風」とはまさにこのことである。

中国は、帝国主義超大国が一方だけでなく双方ともに新たな植民地を築き、各国人民を抑圧し、市場を拡大するために世界再分割を狙っているという事実に疑惑を投げかけ、自らの論点をマルクス主義であるかのように描き出しているが、このような論点を受け入れることはできない。

一方の帝国主義は強大で他方の帝国主義は弱小であるとか、一方は侵略的で他方は温和であるといった問題の立て方は、それ自体マルクス・レーニン主義ではない。このような問題の立て方は、中国修正主義者がアメリカやNATO、ヨーロッパ共同市場と、またスペイン国王やイラン国王、チリのピノチェットやあらゆるファッショ的独裁者と同盟を結ぶうえで、自らの指針としている反動的思想を反映したものである。アメリカ帝国主義にとっても、また、現代における銀行と最大級の資本の支配にとっても無害な中国の政策は、徹頭徹尾のブルジョア改良主義、平和主義の政策であり、愚劣きわまるものである。

中国指導部が次のような事実を知らないはずはない。それはすなわち、アメリカの金融資本、およびトラストや独占体はいささかも対外投資を縮小したり、搾取と奴隷化への野望を捨て去ったりしておらず、逆にそれらはいっそう強大になり、世界の力関係を自分たちにとって有利にかえようと努めているということである。

ソ連社会帝国主義者も同じことをやっている。かれらの経済政策、すなわちソ連に存在する巨大トラストの経済政策が狙いとしているのは、衛星国や他の諸国をあらゆる方法と手段で血の一滴までしぼり取ることである。かれらは新たな装いを凝らし別の名をかたってあらわれているが、かれら自身もまた――最初のうちはいわゆる協定や交渉を通じてであるが、いざとなれば武力すなわち戦争によってでも――自分たちにとって有利に力関係をかえようと躍起になっているのである。

アメリカは「現状維持を欲し」、「衰退しつつある」が、ソ連社会帝国主義は「もっとも危険でもっとも侵略的、好戦的である」などという論拠によって、中国修正主義者が証明しようとしているのは、ソ連に対抗するうえでアメリカは中国の同盟国となりうるし、またそうしなければならないということである。かれらがアメリカとの各種の関係を拡大したり、その軍事予算の増額と軍備拡張を公然と支持したりしていることは、このことを立証するものである。

現代は、マルクス・レーニン主義者と革命家、および各国人民がアメリカ帝国主義と妥協しそれに依拠することが可能となるような情勢にあると、中国修正主義者は説いている。わが党は、狂暴なアメリカ帝国主義とのいかなる妥協にも反対する。なぜならそのようなことは、革命と各国人民の解放の利益とはならないからである。われわれはこれまでもアメリカ帝国主義とたたかってきたし、今後もかれらを完全に打ち砕くまでたたかうであろう。われわれは同時にソ連社会帝国主義ともたたかっており、最後までたたかいぬくであろう。

中国がアメリカ帝国主義にあたえている支持は、いささかも革命と各国人民の利益となるものではなく、むしろ反革命を利するものである。中国指導部はかれらの反動的政治・イデオロギー路線によって、世界各国の人民をアメリカ帝国主義の毒牙のもとにさらしている。かれらが望んでいるのは、各国人民が反抗を起こさずに従順でいることであり、またそればかりか、これらの人民が一方の超大国――それは、アメリカが各国人民の汗と苦役によって築き上げた富を横取りしようとしているのだが――に反対してアメリカ帝国主義と団結することである。中国指導部は、ヨーロッパ

共同市場に参加している資本主義諸国に互いに団結するよう助言している。またかれらは、ヨーロッパの資本主義連合のなかに人民をも組み入れている。それはつまり、革命とプロレタリアート独裁についてはこれ以上口にせず沈黙を保ち、逆に自らすすんでトラストや資本家に奉仕し、またかれらとともに、ソ連社会帝国主義に対処するためのよりいっそう強大な経済力と軍事力をつくり出そうという立場である。

中国が支持し経済的にてこ入れしているヨーロッパ共同市場は、西ヨーロッパの独占体トラストの最大限利潤を維持し、発達した工業諸国を結束させるための道具にほかならない。レーニンがのべているように、これらの諸国の富裕階級はアフリカやアジア、およびその他の地域から巨大な貢ぎ物をしぼり取っている。これらの資本主義諸国家を支持することで中国指導部は、実際のところ、これらの国国の人民およびその支配下に落ちた国国の人民の犠牲にあぐらをかいている一握りの寄生的資本家たちを支持しているのである。

自らの反動的立場を正当化しようとする中国修正主義者の「三つの世界」論は、労働運動の隊列における日和見主義の一変種にほかならず、帝国主義が市場をつくり出し他の諸国人民から利潤をしぼり出すことを助けるものにほかならない。そうしてこの日和見主義者自身も、資本家の食いぶちから施しを受けるというわけである。

中国指導部がヨーロッパの資本主義勢力および資本主義諸国家を擁護し、革命勢力とプロレタリアートを支持していないことは紛れもない事実だが、かれらはそれによって、これらの革命勢力と

プロレタリアートがアメリカ帝国主義やソ連社会帝国主義、「統合ヨーロッパ」やヨーロッパ共同市場、コメコンなどの企みに反対しそれを粉砕するのを妨げようとしている。というのもこれらはみな、要するに、巨大な怪物のように人民の生き血を吸う帝国主義体制の支柱だからである。

中国修正主義指導部は西ドイツ、イギリス、日本、フランス、イタリアその他の発達した資本主義国家を「第二世界」に含め、また理論上ではそれらの「二面的」性格をあれこれとのべ立てているが、それにもかかわらずかれらは、それらの諸国家を革命の敵だとは見なしていない。逆に中国はこのことに目を閉じ、それらの諸国家をソ連社会帝国主義に反対するために利用すると称して、それらと公然たる妥協を結ぶほうが有利なことを発見したのである。

反マルクス主義のプラグマチックな政策で自分自身も盲になっている中国指導部は、次のような事実を「忘れ」去っている。すなわち、西ドイツ、イギリス、日本、フランス、イタリア、およびそれに類する他の諸国家は、かつてと同様いまも帝国主義国家であり、従来からそれらに固有のものであった奴隷化と植民地主義への志向は取り除かれてはいないし、また取り除かれるはずもないということである。第二次世界大戦後、これらの帝国主義諸国が弱体化し――それもいちじるしく弱体化し――そのかつての地位を失い、アメリカ帝国主義が優位に立つものへとかわったことは事実である。しかしそれにもかかわらず、フランスもイギリスも、あるいはその他の諸国家もどれ一つとして、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国における自己の市場を保持し、また新たな市場を獲得するための闘争をあきらめてはいないのである。

アメリカ帝国主義ほど強大ではないこれらすべての資本主義・帝国主義諸国家のあいだには、矛盾も存在するが、しかし同時に、相互のあいだで取り決めを結ぶという傾向も存在している。

第二次世界大戦後、アメリカ帝国主義はヨーロッパにおける旧同盟諸国の復興を援助し、またアメリカ独占体は、これらの諸国の独占体を共通の利益の網の目で自己に結びつけた。しかし、かれらのあいだにはたえず矛盾が存在してきた。なぜならそれらはいずれも、市場を独占するうえで、また原料を輸入し自国の工業製品を輸出するうえで、手を縛られないように努めているからである。この場合にも、国際的な現実は、資本の二つの客観的傾向に関するレーニンの命題の正しさを実証している。

それと同様に、これらの資本主義諸国がアメリカ帝国主義とだけでなく、ソ連社会帝国主義とも同時に矛盾をもっているということも事実である。そこで次のような問題が生じる。すなわち、これらの矛盾をどう利用すべきかということである。帝国主義間矛盾は、いかなる場合にも、中国修正主義者の説くような方法で利用することはできない。われわれマルクス・レーニン主義者は、ドイツのシュトラウスやシュミットらの一味、イギリスの保守党や労働党の頭目連中など、さまざまな反動派がソ連社会帝国主義と矛盾をもっているというただそれだけの理由で、かれらを擁護することはできない。もしかりにわれわれが、「ヨーロッパの資本主義諸国家は共同市場に結束すべきだ」とか、「統合ヨーロッパ」はソ連社会帝国主義に対抗しうるだけの力をつけるべきだ、などという中国の説教を支持してそうしたことを実行するならば、それは、隷属の鎖を断ち切ろうとする

これらの国国のプロレタリアートの闘争と努力を犠牲にし、またこれらの国における革命の展望を破壊することを、われわれ自身が容認することになってしまうであろう。

中国修正主義者は、アメリカ帝国主義と無原則的な妥協をすることによってマルクス・レーニン主義と革命を裏切っている。**マルクス・レーニン主義者は矛盾と妥協に関するマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの命題をその真髄において理解している。中国はこの命題を真理にまったく反する仕方で解釈している。**

レーニン主義の路線を堅持するわが党は、あらゆる性質の妥協に反対するものではないが、しかし裏切り的妥協には反対する。妥協が許されるのは、それが必要な場合、それが階級的利益と革命の利益に役立つ場合である。しかも、妥協によって戦略を犠牲にしたり、あるいはマルクス・レーニン主義の諸原則にたいする忠誠を犠牲にしたり、階級的利益と革命の利益を損なったりしてはならないということを、たえず念頭に置かなければならないのである。

妥協にたいする態度に関してレーニンは、なかでも次のようにのべている。

「プロレタリア革命の支持者が、資本家あるいは資本家階級と妥協することは、ゆるされるであろうか。……この一般的質問にたいして、いな、とこたえることは、あきらかに愚劣であろう。プロレタリア革命の支持者が資本家と妥協または協定をむすぶことがゆるされるのは、いうまで

もないことである。万事は、**どのような**協定が、**どのような事情のもとで**、むすばれるかにかかっている。この点に、そしてただこの点にのみ、プロレタリア革命の見地からみて正当な協定と、裏切的・変節的な（同じ見地からみて）協定との相違をもとめることができるし、もとめなければならない」*。

さらにレーニンはこうつづけている。

「結論は明白である。すなわち、一般的に言って、ときには強盗との協定がゆるされるべきであり必要であるという抽象的な命題から、強盗行為への共犯を正当化する結論を引き出すことがばかげているのと同様に、強盗との協定または妥協を、どんなものでも拒否するのもばかげている」**。

レーニンはまた、次のようにものべている。

「真に革命的な党の任務は、あらゆる妥協を拒否するというような不可能事を宣言することにはなく、**すべての妥協を通じて**——それらの妥協が避けられないかぎり——、自分の原則、自分の階級、自分の革命的任務、革命を準備し人民大衆を革命の勝利にむかって訓練する自分の事

業、にたいする忠誠を貫く能力をもつという点にある***」。

＊　『妥協について』――邦訳『レーニン全集』第三〇巻五〇九―五一〇ページ
＊＊　同前――邦訳全集第三〇巻五一一ページ
＊＊＊　『妥協について』――邦訳全集第二五巻三三三ページ

妥協が許されうるのはただ、レーニンのこうした教えから出発する場合だけである。そうだとすれば、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義が各国人民と革命のもっとも凶悪な敵であることを承知のうえで、この二つの超大国と妥協するということが、どうして社会主義と世界革命の利益になりえようか。このような妥協は必要でないばかりか、逆に革命の利益を危うくするものである。このように重大な問題について妥協したり、原則を踏みにじったりすることは、マルクス・レーニン主義を裏切ることに等しい。

もしも毛沢東をはじめとする中国指導部が、かねてから矛盾について「理論上」多くのことを語ってきたというのなら、かれらは帝国主義間矛盾の利用や帝国主義者との妥協をうんぬんするだけでなく、何よりもまずわれわれの時代における基本的諸矛盾――プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの矛盾、被抑圧人民・諸国を一方とし二つの超大国と世界帝国主義全体を他方とする矛盾、および社会主義と資本主義とのあいだの矛盾――について語らなければならないはずであ

る。しかし中国指導部は、客観的に存在し、消し去ることのできないこれらの矛盾については沈黙している。かれらが口にするのはただ一つの矛盾、すなわちかれら自身によれば、全世界とソ連社会帝国主義とのあいだの矛盾だけであり、こうしてかれらは、アメリカ帝国主義および世界帝国主義全体との無原則的妥協を自ら正当化しようと努めている。

　マルクス・レーニン主義的階級分析と事実が示しているように、帝国主義諸国および帝国主義グループ間に存在する矛盾や裂け目は、資本主義・帝国主義諸国における労働と資本との矛盾、あるいは被抑圧人民と帝国主義抑圧者との矛盾を排除したり、副次的な地位に引き下げたりするものではいささかもない。そしてほかでもなく、プロレタリアートとブルジョアジーとの矛盾、被抑圧人民と帝国主義との矛盾、および社会主義と資本主義との矛盾こそが、もっとも深刻で永続的な非和解的矛盾なのである。したがって、帝国主義間矛盾または資本主義・修正主義諸国家間の矛盾の利用が意義をもつのは、ブルジョアジーに反対し帝国主義と反動に反対する革命運動と解放運動の強力な発展にとってもっとも有利な条件をつくり出すのに、それが役立つ場合だけである。だからこのような矛盾は、プロレタリアートと人民のなかに帝国主義やブルジョアジーへの幻想を生み出すことなく利用されなければならない。ぜひとも必要なことは、レーニンの教えを労働者と人民に明らかにすることであり、抑圧者と搾取者にたいする非妥協的な態度だけが、また帝国主義とブルジョアジーにたいする自らの断固たる闘争と革命だけが、真の社会的・民族的自由を保証するのだという自覚をかれらにもたせることである。

敵内部の矛盾の利用は革命の基本任務とはなりえず、またそれは、ブルジョアジーと反動的ファッショ独裁を打倒し帝国主義抑圧者を打倒する闘争に対置されうるものでもない。

この問題についてのマルクス・レーニン主義者の立場は明白である。かれらは人民とプロレタリアートに向かって語りかけ、大衆にたいして、アメリカ帝国主義者とソ連社会帝国主義者の抑圧と覇権、侵略と戦争挑発の企図を打ち砕き、西側および東側の反動的ブルジョアジーとその独裁を打倒するために決起せよと呼びかける。

われわれの社会主義国家に限って言えば、それはたえず敵陣営内部の矛盾を利用してきた。この矛盾を利用するうえでわが党が出発点としているのは、社会主義国と、帝国主義諸国およびブルジョア・修正主義諸国とのあいだに存在する矛盾、そして帝国主義間矛盾を正しく評価することである。

マルクス・レーニン主義がわれわれに教えているように、社会主義国と資本主義・修正主義諸国とのあいだの矛盾は、まったく相対立する利害をもつ二大階級――労働者階級とブルジョアジー――のあいだの矛盾を反映したものであり、それは永続的、根本的、非和解的なものである。それは、世界的規模で資本主義から社会主義へと移行する歴史的時代全体を一本の赤い糸のように貫いている。他方における帝国主義諸国間の矛盾は、搾取者相互の、すなわち共通の根本的利害をもつ諸階級相互の矛盾のあらわれである。したがって、帝国主義諸国間の矛盾と衝突がどんなに激化しようとも、世界帝国主義またはその個個の部隊が社会主義国に侵略をしかけるという危険性は、依

然としてかわることのない、つねに現実的な危険性である。帝国主義者のあいだの裂け目や、帝国主義間の不和、衝突は、社会主義国にたいする帝国主義の敵対行動の危険性をせいぜい減じるか、もしくは一時的に先へ延ばすだけである。したがって、敵内部のこうした矛盾を利用することは社会主義国にとって有益ではあるが、それはこうした危険性を除去しうるものではない。レーニンはこのことを力説して次のようにのべている。

「ソヴェト共和国が長期間帝国主義諸国家とならんで存在するということは、考えられない。結局は、どちらか一方が勝利するであろう。しかし、この結末がやってくるまでは、ソヴェト共和国とブルジョア諸国家とのあいだに幾多のきわめて恐ろしい衝突がおこることは、避けられない*」

＊『ロシア共産党(ボ)第八回大会—中央委員会の報告』——邦訳『レーニン全集』第二九巻一四〇ページ

レーニンのこうした教えは、今日もその有効性を完全に保っている。それは、第二次世界大戦中のファシストによる対ソ侵略、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略とその後のベトナム侵略、さらにアルバニアにたいする帝国主義、社会帝国主義の敵対活動と種種の陰謀など、一連の歴史的諸事件によって実証されてきた。したがって、わが党は次のように強調してきたし、いまも強調している。す

なわち、社会主義国家と、帝国主義諸国ならびに資本主義・修正主義諸国とのあいだの矛盾、および、社会主義アルバニアにたいするこれらの諸国の侵略行動の危険性をほんのわずかでも過小評価したり、あるいは、帝国主義諸国相互間の矛盾がきわめて激化しているのでかれらはわれわれの祖国にそうした行動をしかけることはできないと考え、その結果少しでも警戒心をゆるめたりするならば、それは非常に危険な結果をともなうであろう、と。

アルバニア労働党はまた、革命勢力と解放勢力、自由を愛好する進歩的勢力だけが、社会主義国であるわが国にとって真に頼りになる同盟者となりうる、という事実から出発する。わが国はブルジョア・修正主義世界のさまざまな国国と国家関係を維持し、帝国主義諸国および資本主義・修正主義諸国相互の矛盾を利用しているが、同時にまた、労働者階級と勤労人民大衆の革命闘争と解放闘争が発展しているあらゆる国で、これらの闘争を断固として支持しており、このような支持を自らの崇高な国際主義的責務と見なしている。アルバニア労働党は、こうした観点をたえず一貫して堅持してきた。わが党はその第七回大会において重ねて強調したように、超大国と資本主義・修正主義ブルジョアジー、世界反動に反対し、社会的・民族的解放をめざしてたたかうプロレタリアートと各国人民、マルクス・レーニン主義諸党、および革命家と進歩的人人を支持するであろう。

中国共産党もかつては、矛盾に関するマルクス・レーニン主義の周知の原則と命題を引き合いに出したことがある。たとえば、一九六三年に中国共産党中央委員会が発表した『国際共産主義運動の総路線についての提案』と題する有名な文書のなかで、中国は次のようにのべている。「社会主

義国と帝国主義国のあいだのなんらかの必要な妥協は、被抑圧人民と被抑圧民族にこれにしたがって帝国主義とその手先に妥協することを要求するものでは決してありません」。さらにそれはこうつけ加えている。「いかなるばあいにも、平和共存の名によって、被抑圧人民と被抑圧民族に自分の革命闘争を放棄するよう要求することは誰もできないのであります」。中国指導部が当時このように語ったのは、その同じ時期にフルシチョフ一味が、各国の人民と共産党にアメリカ帝国主義とその頭目たちが平和的になったことを認めさせ、アメリカ帝国主義との関係修復というソ連の政策にかれらを従わせようとしていたからである。ところがいまでは、中国共産党指導部自身が、各国の人民と革命家、マルクス・レーニン主義諸党と全世界のプロレタリアートに、帝国主義国や資本主義国と連合し、ブルジョアジーおよびすべての反動派と団結して、ソ連社会帝国主義に反対するよう説いているのである。しかもかれらは、この考えを婉曲な言い回しによってではなく、あけすけに表明している。そうした動揺と一八〇度の転換は、マルクス・レーニン主義の原則的政策とは縁もゆかりもないものである。それは、自国のブルジョアジーと帝国主義の利益に原則を従属させるあらゆる修正主義者によって遂行されている、プラグマチックな政策に特有のものである。

中国指導部とすべての「三つの世界」論者は、アメリカ帝国主義や国際ブルジョアジーとの無原則的妥協を自ら正当化するために、一九三九年の独ソ不可侵条約と第二次世界大戦における米英ソ連合についての歴史的真実を故意に歪曲している。

独ソ不可侵条約は、スターリンが帝国主義間矛盾を巧みに利用したものであった。それは、ヒッ

トラーの対ソ侵略が切迫していた時期であった。当時すでに、ナチス・ドイツはオーストリアとチェコスロバキアに、また、ファシスト・イタリアはアルバニアに侵攻し、さらに、ミュンヘン協定が締結され、ドイツの戦車は東方へとばく進しつつあった。ソ連がドイツと――同盟ではなく――不可侵条約を結んだのは、西欧諸国が、ナチスおよびファシスト侵略者を封じこめるためにスターリンが呼びかけたソ連国家との共同行動に応じることを拒否し、また、これらの諸国がヒットラーをソ連領土の侵略へと駆り立てていることが明らかになったのちであった。独ソ不可侵条約はこれら諸国の企みを破産させるとともに、ナチスの侵略を迎え撃つために準備をととのえる時間をソ連にあたえたのである。

米英ソ連合についていえば、それが結成されたのは、ヒットラー・ドイツがフランス占領後、イギリスと対戦中にソ連にたいして狂暴な侵略をしかけた時期であり、また、枢軸諸国との戦争がいちじるしく明瞭な反ファッショの解放的性格を帯びてきた時期であったことは、周知のとおりである。指摘しなければならないのは、当時のスターリンとソ連はいついかなる場合にも、プロレタリアートと各国共産党に、革命を放棄し反動的ブルジョアジーと団結するよう提唱したり、呼びかけたことはなかったということである。そして事実、ブラウダーが、米英ソ連合にとって必要だからと称して階級闘争を放棄し、階級協調を唱えたとき、かれはスターリンと共産主義運動によって修正主義者、革命の背教者という烙印をおされたのである。

以上のように、中国が、アメリカ帝国主義や個個の反動勢力と無原則的な妥協や同盟を結ぶのを

正当化しうるものは、何ら見当らない。中国修正主義者が試みている歴史上の類推は、根拠のないものである。

中国指導部は、われわれアルバニア人がどんな妥協にも反対し、利用すべき矛盾を利用しようとしていないかのように印象づけるための宣伝に努めている。もちろんかれらは、われわれがこの問題においてマルクス・レーニン主義の立場に立っていることを承知してはいるが、なおかつかれらがこのような歪曲したやり方で宣伝をするのは、自分たちがマルクス・レーニン主義の科学的理論と革命の道から逸脱していることをおおい隠すためである。かれらがそのようにふるまう狙いは、プロレタリアの党と国家の正しい政策と立場を汚すことにある。かれらの非難は事実無根のものである。事実を見てみよう。

わが党は、アラブ諸国人民にたいしても例外ではなく、かれらの正義の事業をたえず精力的に支持してきたし、また最後まで支持しつづけるであろう。われわれは、ずっと以前からアメリカ帝国主義に盲従する手先となり、中東における憲兵となっているイスラエルに反対するパレスチナ人民の闘争を支持する。イスラエルは、アラブにおけるアメリカ巨大独占企業の豊富な油田を守り、また中国修正主義者が言うところの現状を維持する役目を負っている。

サダト大統領とその政府がかつてソ連と同盟関係にあったことは事実だが、それにもかかわらずわれわれは、イスラエル占領地域を奪回するためのエジプト人民の闘争を支持した。だが、同時にわれわれは、エジプトにたいするソ連の狙いと、中東全体におけるその策略とを暴露したのであ

る。われわれは、エジプトにたいするソ連の植民地主義的狙いについて、片時も沈黙したことはなかった。アメリカ帝国主義とイスラエルにたいしても、われわれはまさにこのようにふるまい、かれらに反対するエジプト人民の闘争を同じように一貫して支持してきたのである。

わが党はエジプト人民と他のアラブ諸国人民の利益を擁護するとともに、現在、アメリカ帝国主義がイスラエルと結託してすすめている策動を同時に暴露している。エジプト人民の利益のためなどという口実で侵略者イスラエルと妥協することは、それがいかなる方針、いかなる路線にそったものであれ、われわれは是認することができない。

ところが中国指導部は、アメリカ帝国主義を暴露しはしない。かれらは、イスラエル＝エジプト協定を称賛するとともに、アラブ諸国人民がその主要な敵であるアメリカ帝国主義およびイスラエルと和解を結び、妥協するように促している。このような立場はマルクス・レーニン主義ではなく、またこのような中国流の妥協は、各国人民の利益になるものではない。一方の帝国主義と縁を切って他方の帝国主義の懐に飛び込むことが「各国人民の自由にとって利益となる行為」だという中国の愚論は、断じて受け入れることはできない。こうした典型的なブルジョア的陰謀術策は、帝国主義両超大国間の矛盾の深化を促すマルクス・レーニン主義的行動と言えるものではない。

アルバニアの党と人民は強盗的帝国主義戦争に反対するとともに、各国人民と革命の利益になる――またつねにそうでなければならない――正義の民族解放戦争を断固として支持する。またアルバニアの党と人民は、あるブルジョア国家の統治者が進歩的であり、自国人民を帝国主義の覇権か

ら解放するためにたたかっていると判断したときには、そのような国家でも支持することに反対はしない。しかしながらわが国は、人民の利益を損なって自己の階級的利益のために、一方あるいは他方の超大国と同盟を結ぶ反動的支配集団の支配する国家とは、提携を結んだり、または中国修正主義者の言う妥協をしたりすることはできない。

同様に社会主義アルバニアは、「第三世界」や「第二世界」の諸国家と正常な外交関係を維持することにも反対するものではない。それが反対するのは、二つの超大国およびファッショ的諸国家との外交関係だけにすぎない。しかしわれわれは、貿易、文化、その他の諸関係と同様、わが国の外交関係を発展させるうえでも、まず第一に、わが国自身の利益と革命の利益を考慮するという原則に従って行動するのであって、これに反する行動をとったことは一度もないし、また今後もけっしてとりはしないであろう。

権力を握ったわれわれマルクス・レーニン主義者は、ブルジョア・資本主義諸国家と外交関係を樹立しなければならないが、それは、この関係がわが国と相手国の双方にとって利益となるからである。こうした利益は、相互的なものである。

マルクス・レーニン主義者は、つねに原則を銘記していなければならない。かれらは、ある時時に生じる事情を理由に原則を踏みにじったりすることはできない。われわれが念頭に置いていなければならないのは、ブルジョアジー上層部が支配する国国では、かれらは人民とプロレタリアートに反対し、貧農と都市小ブルジョアジーに反対して不断に闘争しているということである。したが

って社会主義国は、自国がブルジョア諸国と国家関係を結んでいるか否かにかかわらず、自己が各国人民の闘争を支持しており、またかれらの支配者の反動的、反人民的行為に賛成してはいないことを、これらの人民に明らかにしなければならない。

われわれマルクス・レーニン主義者は、単に被抑圧階級とその抑圧者のあいだに存在する矛盾についてだけでなく、同時に国家間の矛盾、すなわちこれらの国国の政府と、アメリカ帝国主義、ソ連社会帝国主義、その他の資本主義諸国等等とのあいだに生じる矛盾についても認識し、これに留意しなければならない。われわれは、つねに次のような政策を遂行しなければならない。それはすなわち、ある国の反動的政府が、自らの利益と支配階級の利益のためにアメリカ帝国主義と一時的に断絶し、かわりに別の帝国主義、たとえばイギリスやソ連、またはどれかほかの帝国主義のもとに身を寄せたとしても、ただそれだけの理由でこの政府を擁護したりはしないということである。われわれはかれらのあいだに存在する矛盾を利用しなければならないが、その目的は、われわれ自身の立場を通じて、自国の反動政府に反対するその国のプロレタリアートと被抑圧大衆の闘争の発展を援助することにある。もしかりに——中国修正主義者が設けた区分に従えば——「第二世界」または「第三世界」のある国の反動的、抑圧的な資本家政府と、「第一世界」のどちらかの国の政府とのあいだに矛盾が生じたとしても、このような矛盾がその国の人民を資本のくびきから、また自国を支配する反動的ブルジョアジーの圧制から解放するのに必ず役立つものと考えるべきではない。この場合に問題となるのは、もっぱら、ブルジョア階級の利害と搾取階級を代表する政府の利

害であり、だれがより大きな利益を生み出し、だれが権力者としての座をもっともよく守ることができるか、またただれが既存の権力者を追放して自分の息のかかった者たちを権力にすえようとしているのか、ということなのである。

プロレタリアートの闘争を問題とする場合には、ブルジョアジーにたいする態度を、社会主義国が社会制度の異なる諸国家とのあいだに有する外交、貿易、文化、科学の面での関係と混同してはならない。こうした国家間の関係は必要であり発展させなければならないが、しかし社会主義国は、そうした関係を打ち立てる目的を明確にしなければならない。社会主義国におけるイデオロギー的・政治的生活、および精神的・物質的生活は、国家関係を結んでいる他の諸国の人民にとって模範となるものでなければならず、また国家関係の発展を通じて、これらの非社会主義国の人民が、そこに社会主義制度の優位性と恩恵を見出すようなものでなければならない。もちろん、これらの人民が社会主義の道を歩むか否かはかれら自身の問題であるが、しかしながら、立派な模範を示すことは社会主義国の義務である。

中国指導部は、こうした政治上、理論上、組織上のすべての問題について曖昧であり、しかも、それらを明らかにしようとしないばかりか、かれらは毛沢東の言葉どおり、「事物をはっきりさせるには事物をかき回さなければならない」からと言いつつ、問題をわざといっそう曖昧にしている。このような論点は正しくない。それとは反対に、われわれは事物を明らかにし、人民が革命をおこなうよう説得しなければならない。なぜなら、事物はすでに曖昧なままで存在しているからで

ある。かき回すと言うのなら、死にかけている帝国主義をもっと大いにかき回そうではないか。逆にかれらを助け、生き延びるための松葉づえをあたえてやるべきではない。われわれは資本主義の寿命を縮めることによって、各国人民とプロレタリアートを解放し、社会主義と共産主義への展望を近づけなければならない。これこそがわれわれの革命の道であり、マルクス・レーニン主義の道である。ほかに道はありえない。

かつて中国指導部は、アメリカ帝国主義との「食うか食われるか」の闘争という表現を用いていたが、かれらは当時でもそれを実行したことがなく、まして今日に至っては実行しているはずもない。かれらが食うか食われるかの闘争をしないのは、かれら自身がアメリカ帝国主義に接近し、アメリカと同盟を結んでいるからである。

中国が帝国主義諸国や世界の他の諸国と結んでいる外交・通商・文化関係は、資本主義的土台のうえになり立っている。これらの諸国との関係において中国が狙っているのは、強力な帝国主義諸国家からの援助を期待し、受け入れた援助を通じて自国の経済的、政治的地位を打ち固め、それによって自らも二つの超大国を相手に争奪しあうことである。中国がラジオやその他の手段でおこなっている宣伝の意図は、単に中国が古代文化を有する強大な国家だということだけではなく、同時にまた、現在の中国の政策が進歩的であり、真にマルクス・レーニン主義的であるということを、世界に印象づけることにある。しかしながら、中国修正主義指導部のこうした行動は、資本主義と帝国主義の権力を打ち砕くためにたたかっている世界各国の人民にとって、けっして模範とすべき

ものにはならないし、またなりうるはずもない。

「第三世界」の団結についての中国の観点は反動的である

中国指導部は、「第三世界」のすべての諸国の団結を追求しているが、これらの諸国はどの見地から見ても種種雑多である。すなわち、これらの諸国の経済的、社会的、文化的発展から見ても、またそのそれぞれの国が、今日有する程度の自由と独立をかちとるために要した年月、およびそのためにたどってきた道筋から見ても、である。

では一体中国は、自らが説くこの団結を、どんなものと考えているのだろうか。中国指導部は、この団結がマルクス・レーニン主義の道を通じて、また革命と人民解放の利益にそって達成されるものであるとは考えていない。かれらはそれを、ブルジョア的見地から、すなわち、これらの諸国の支配者が締結しあるいは破棄する条約や協定によって達成されるものと見なしている。だが今日、これらの支配者はいずれかの帝国主義国と結びついており、しかも将来は、かれら自身が互いの結束のために結んだ諸協定を自ら破棄することさえしかねないのである。

中国修正主義指導部は次のことを忘れ去っている。すなわち、これらの諸民族国家の団結は、個個の国におけるプロレタリアートと勤労大衆の――何よりもまず、自国に浸透している外国帝国主

義に反対し、しかも同時に、国内の資本主義と反動にも反対する――闘争を通じてのみ保証されうるということである。こうした基礎の上に立ってはじめて、これら諸国の団結はもたらされるのである。またこうした基礎の上にのみ、外国帝国主義に反対し、国王や国内の反動的ブルジョアジー、封建領主や独裁者に反対する統一戦線が実現されるのである。

資本主義のもとでの団結は上からのみ、すなわち、ブルジョアジーの獲得物を保持しそれを革命から守るために、最上層部においてのみ達成される。それに引きかえ真の団結、すなわち、人民の団結は、もっぱら下から、プロレタリアートをその中核として実現されるのである。

もちろん、いわゆる第三世界の一国またはすべての国国において、プロレタリアートが帝国主義に反対する他の諸政治勢力と団結するために駆使できるような戦術があれば、それをにべもなく拒否することはできない。またある一定の局面、すなわち、ある国のブルジョア指導部と外国帝国主義とのあいだに、またはそうした指導部と「第三世界」諸国に属する別の国の反動的指導部とのあいだに、深刻な矛盾が生じるといった局面のもとでは、革命勢力はこのブルジョア指導部と団結することとでさえ度外視することはできない。

革命勢力は、こうしたあらゆる機会と可能性をとらえて利用しなければならないのである。レーニンが、社会主義国と国際プロレタリアートの援助は条件に応じて区別されたものでなければならない、とのべたのはそういう理由からである。

しかしながら中国指導部が提唱しているのは、帝国主義に立ち向かうためと称する、反動的諸政

府との無条件の同盟にほかならない。そのうえ、かれらが帝国主義を非難する場合も、それが意味しているのは帝国主義全体ではなく、ソ連社会帝国主義だけなのである。

帝国主義と資本主義の弱化は、今日における主要な世界史的傾向である。また、帝国主義の影響下から自らを解放しようとするさまざまな国家の努力も、帝国主義の弱体化を促進するいま一つの傾向をなしている。中国修正主義指導部は国国の差異を区別せず、全般的および特殊的な状況も研究せずに、この第二の傾向を絶対化しているが、しかしこの傾向は、帝国主義の干渉と支配から自己を解放するためにたたかう各国人民の正しい団結の道へと通じるものではない。同様に、ヨーロッパを「第二世界」諸国家の大陸と見なし、それらを「第三世界」と連合させる中国修正主義者の観点も、正しい道に至るものではない。このような資本主義国家群が、世界資本主義全般の衰退に賛成することはけっしてありえない。イギリスの貴族的ブルジョアジーや西ドイツの報復主義的ブルジョアジー、さらに、狡猾なフランス・ブルジョアジーやその他の大資本家グループからの援助と協力によって、そうしたことが実現できるとでも言うのなら、それこそ嘆かわしいばかりの幼稚さ加減である。

「三つの世界」論の擁護者は、こう主張するかもしれない。われわれはこれらの資本主義諸国の団結を説くことによって、帝国主義を弱めるつもりなのだ、と。しかしこの団結は、一体どの帝国主義を弱めるのだろうか。「三つの世界」論が社会帝国主義に反対する統一戦線の結成を呼びかけている例の帝国主義、また、ヨーロッパの資本主義諸国が矛盾をもちながらも同盟を結んでいる例

の帝国主義を、なのか。このような国家群の強化を唱えることは明らかに、アメリカ帝国主義および西ヨーロッパの資本主義諸国家の地位の強化を唱えるということである。

また、他方で中国指導部が、「第二世界」諸国といわゆる第三世界諸国のあいだの同盟の結成について語るとき、それはこれら諸国の支配集団相互の同盟を意味している。それでもなお、こうした同盟が各国人民の解放を促すのだなどと主張することは、観念論、形而上学の反マルクス主義的観点である。それゆえ、解放を求める各国の広範な人民大衆をそうした修正主義理論で欺瞞することは、各国人民と革命にたいする犯罪行為である。

中国共産党はこう考えている。すなわち、帝国主義は、植民地主義のくびきをようやく断ち切ったばかりの――しかし、すぐにまた新植民地主義のくびきにつながれてしまった――諸国のあいだに矛盾が存在していることを知らず、気づきもせず、また理解できぬままそれを利用しないでいる、と。事実の示すところによれば、帝国主義はこうした矛盾を、自らの利益のために日日たえず利用しているのである。帝国主義は、これらの諸国および人民をそそのかして互いに争わせ、分裂と反目をあおり立て、かれらが個個のいくつかの問題についてさえも団結できないように仕向けている。

帝国主義も、自己の延命を図るための死活をかけた闘争をしているのであって、それが尋常な手段では達成できないと見るや、かれらは公然たる侵略と戦争に乗り出し、自己の優位と覇権を奪回しようとするのである。

中国指導部は、「第三世界」諸国を相互に団結させようとするばかりでなく、ソ連社会帝国主義に対抗するために、それらをアメリカとも団結させようとしている。換言すれば、中国修正主義者は「第三世界」諸国人民にたいして、主要な敵はソ連社会帝国主義なのだから、現在はアメリカ帝国主義にも、またその同盟者であり、自国を支配する反動的ブルジョアジーにも、歯向かってはならないと公然と告げているのである。中国の「理論」に従えば、「第三世界」諸国は自らの自由と独立、主権を打ち固めるためにたたかってはならず、ブルジョアジーの支配を打倒する革命のためにではなく、現状維持のためにたたかわなければならなくなる。中国修正主義者が革命の利益と民族解放の事業に敵対し、アメリカとの一致を説くことによって、これらの諸国を背信的な妥協へと追いやろうとしていることは、おのずから明らかである。

真のマルクス・レーニン主義党は、これらのすべての諸国のプロレタリアートと人民が、内と外からの抑圧と奴隷化──それがどんな形態をとってあらわれようとも──に抗して決起し、革命をやりとげるように鼓舞激励するという、国際主義的責務を負っている。ただこうすることによってのみ、これら諸国人民が帝国主義と社会帝国主義の双方──かれらは、大多数の「第三世界」諸国の資本主義ブルジョアジーとありとあらゆる方法で結びついている──とたたかうための条件をつくり出すことができると、わが党は考えている。

ところで、中国は一体どんなことをしているのだろうか。中国は、ザイールのモブツとその一味を擁護している。中国は宣伝を通じて、いかにもかれらが、ソ連によって仕組まれた傭兵部隊の侵

略に反対してザイール人民を擁護しているかのように印象づけようとしているが、かれらが実際に擁護しているのはモブツ反動政権なのである。モブツ一味は、アメリカ帝国主義に仕える手先である。中国は自らの宣伝と「親ザイール」の立場によって、モブツとアメリカ帝国主義、および新植民地主義とのあいだで結ばれている同盟を支持し、ザイールの現状に変化がいささかも起きないよう躍起になっている。真の革命家の任務は、帝国主義者の手先である反動的支配者を擁護するのではなく、モブツと国内の資本に反対し、アメリカやフランス、ベルギーやその他の帝国主義に反対するザイール人民の、自由と主権のための闘争を励ますために活動することである。

われわれは、ザイールのモブツに反対するのと同様、アンゴラのネトおよびかれをそそのかす勢力にも反対している。なぜなら、ソ連とネトがアンゴラでやっていることは、アメリカとモブツがザイールでやっていることと何一つかわらないからである。この両国における情勢の推移を考察するならば、植民地と市場の分割をめぐる超大国間の争奪がこの地域でいかに激烈をきわめているかが明らかになる。われわれは、ネトもソ連も支持しはしないが、しかしかれらとたたかうからといって、アンゴラ人民の敵であるアメリカ帝国主義とその雇兵を支持することはできない。いかなる情勢、いかなる状況のもとでも、またいついかなるときにも、われわれは革命的人民を支持しなければならず、ザイールとアンゴラの場合でもわれわれは、自らの首にかけられた超大国のくびきを断ち切るためにたたかうこの両国の人民だけを支持しなければならない。

ザイールの革命家には何を忠告をすべきだろうか。中国修正主義の忠告のように、この国の人民

が帝国主義によっていっそうひどく抑圧されるようにモブツと妥協することをか。否、マルクス・レーニン主義者はザイール人民にも、また他のいかなる人民にも、このような妥協を勧めることはできない。

一例として、中国のパキスタンにたいする政策をとり上げよう。富裕なブルジョアジーと大ラティフンディストによってつねに支配されてきたカーン(汗=統治者の称号)のパキスタンは、中国のいわゆる同盟国であった。中国はこの国に援助をおこなったが、それは革命的な方向での援助ではなかった。中国の援助は、自国人民を残酷に搾取するパキスタンの反動的ラティフンディスト=ブルジョアジー——それは、ネールやガンジーらの反動的頭目一味がインド人民を抑圧しているのと同様である——を強めるものであった。ズルフィカル・アリ・ブットの政府も例外ではなかった。当初、東パキスタンが西パキスタンから分離するという事態が起こった。東パキスタン人民と、西パキスタンを支配する反動的ブルジョアジーとのあいだには大きな矛盾が存在していたが、インドはこの矛盾を巧みに利用してあおり立て、ついには東パキスタン人民がアリ・ブットの西パキスタンにたいして反乱を起こすという事態にまで発展させた。東パキスタンはバングラデシュと名づけられ、またそれにともなって、民主主義と人民の利益のためにたたかうことを標榜するムジブル・ラーマン政府が成立した。しかしある日、かれはアメリカ帝国主義と緊密に結託した分子によって殺害された。そしていまや、中国の盟友でありパキスタン最大の富豪地主であるアリ・ブット自身も、他の反動派のクーデターによってついに打倒され、失脚したのである。

ところで、権力を握ったこの反対派は一体どんな勢力なのか、またそこにはどんな人人が属しているのか。これもやはり、軍人と資本家と大地主からなる反動的勢力なのである。かれらも、アメリカやソ連、あるいは中国と結びついていることから、また自らの階級的利害に動かされて、反動的権力を強固に保持しようと努めている。こうした状況のもとで、中国指導部のように、パキスタン人民に一方または他方のブルジョア政治勢力を支持し、これと同盟せよとか、支配者集団にすげかえよとか呼びかけることは、かれらに革命の正しい進路を指し示すことにはならない。ブットとその反対派の双方からはさみ撃ちにされているパキスタン人民にたいして、革命の力強い炎を燃え立たせ、この二方面からの攻撃を粉砕し、自国に存在する同じ体質の二つの支配集団を打倒するように呼びかけること――これこそが、正しい道なのである。この二方面における闘争のなかで、パキスタン人民は矛盾を巧みに利用しなければならない。

いわゆる第三世界あるいは非同盟世界の多くの国国についても、同様のことが当てはまる。

以上のように中国指導部は、マルクス・レーニン主義者との友誼・同盟はもとより、ブルジョア資本主義諸国家との同盟の面でもうまくいっていない。ではなぜうまくいかないのだろうか。それは、かれらの政策がマルクス・レーニン主義ではなく、かれらがおこなう分析とそこから引き出す推論が誤っているからである。中国は「第三世界」諸国をその庇護下に置こうともくろんでいるが、こうした事情のもとで、これら諸国の人民がどうして中国を信頼できようか。

ただプロレタリアート独裁とマルクス・レーニン主義イデオロギーだけが、そして社会主義だけ

が、各国人民の離間と分裂のあらゆる種を取り除いて、かれらのあいだの誠実な愛情と親密な友情を、また鋼のような団結を培うのである。各国人民の相互の団結と友情をつくり出し、また諸問題をかれら自身の利益にもっとも合致した最良の方法で解決していくうえでは、政治的均衡を打ち立てるためと称して、モブツやブット、あるいはガンジーらの腐敗したブルジョア分子に援助したり、譲歩したりするようなことがあってはけっしてならない。この政治的均衡なるものは、隷属の現状を維持することに奉仕する反科学的、反人民的な日和見主義的「均衡」論のあらわれである。

われわれマルクス・レーニン主義者は、新植民地主義とあらゆる国の抑圧的な資本主義ブルジョアジーに反対し、要するに、各国人民の抑圧者に反対して闘争をおこなう。もしも、真の共産党がプロレタリアートと勤労大衆を励まし、かれらを組織し指導するならば、この闘争を発展させることができる。プロレタリアートと大衆にたいする党の指導が首尾よく実現されるのは、この党が雑多な旗印を掲げ、何とでも解釈される曖昧な気風ではなく、マルクス・レーニン主義の革命的気風を備えている場合だけである。真の社会主義国のマルクス・レーニン主義党は、自国の利益だけから出発するのではなく、同時に世界革命の利益をもつねに考慮しつつ行動するのである。

中国の「第三世界」論とユーゴスラビアの「非同盟世界」論は各国人民の革命闘争を破壊するものである

ソ連修正主義者やチトー修正主義者、中国修正主義者やその他の現代修正主義者など、マルクス・レーニン主義のすべての背教者たちは、プロレタリアートの勝利の理論であるマルクス・レーニン主義とたたかうために全力を上げている。わが党による「三つの世界」論の暴露は、中国修正主義者を窮地に陥れた。なぜなら、かれらはわれわれの反駁と暴露にたいして理論的に答えることができないからである。しかもそれができないのは、かれらがわれわれを恐れているからではなく、自分自身に論拠がないことを恐れているからなのである。

「第三世界」の概念を打ち出した――または取り入れた――毛沢東と鄧小平自身は、それを理論的に論証しようとはしなかったが、それは単にできなかったからというだけではなく、目的があってのことであった。なぜかれらはそうしなかったのだろうか。こうしたかれらの「手落ち」はごまかしであり、その狙いは人民を欺き、毛沢東が生み出したという理由だけで、人民に馬鹿げた論点を有無も言わせず受け入れさせようとすることにある。毛沢東が、この「哲学的」ないしは「政治的」概念の理論的根拠を説明できなかったのは、それがまったく説明しようのないものだからである。かれとその弟子たちは、世界を三つに区分する概念を宣伝しはするが、唱えるばかりでそれを

論証しようとはしない。というのも、かれらはこの論点が論証できないものであることを自覚しているからである。

中国の「第三世界」とユーゴスラビアの「非同盟世界」はほとんど同一のものである。この二つの「世界」に含まれている狙いは、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだの階級闘争の消滅を理論的に正当化するとともに、強大な帝国主義・資本主義諸国が、抑圧と搾取のブルジョア制度を維持し永久化するのに手を貸すことである。

理論的根拠をまったく欠いた反マルクス主義の謬論である「第三世界」論、および中国修正主義がつくり出したそれにまつわる神話は、「第三世界」諸国のプロレタリアートとさいなまれた広範な人民大衆にも、またこれら諸国の指導者にも、何ら影響をおよぼしてはいない。中国指導部がその傘のもとに引き入れようとしているこれらの国国の指導者は、かれらなりの根強い考えをもち、自分自身のイデオロギーと明確な方針をもっているので、かれらには中国のおとぎ話は通じないのである。鄧小平一味は、中国はその広大な国土と人口によってこれらの国国に自己の意志をおしつけることができる、と考えている。アメリカ帝国主義にとって、中国の「三つの世界」論は、それがかれらの計画に差しつかえないかぎりでは、ある程度まで好都合なものである。この理論は混乱した状況が世界に生み出されるのを助長しているが、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義はいずれも、こうした混乱に乗じて自己の覇権を拡大し、いわゆる第三世界諸国の資本家やブルジョア的地主の頭目どもを自分たちとの協定や同盟に引きずり込み、いっそう固く縛りつけようとしてい

る。こうした状況はまた、中国修正主義者の社会帝国主義的狙いにも合致している。

「非同盟世界」論に関して言えば、ユーゴスラビア修正主義者はそれを、マルクス・レーニン主義理論にかわるべき普遍的理論に祭り上げている。かれらの考えでは、マルクス・レーニン主義理論は「時代遅れ」になりもはや「通用」しなくなった、なぜなら、各国人民も世界もかわったからだ、というわけである。かれらはカリリョとは異なり、マルクス・レーニン主義を公然とは非難しないけれども、自己の「非同盟世界」論を擁護することでそれとたたかっている。それに引きかえマルクス・レーニン主義の擁護者は、ユーゴスラビア修正主義者に従えば、たえず同じ「過ち」をくり返し、この革命的学説の原則と準則が改められるべきだということに同意せず、したがってかれらは「慢性病患者」だ、というのである。またこれらの修正主義者によれば、アルバニア労働党（それはかれらの攻撃の目標になっている）は、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの科学的な原則・方法と学説を「かれらの時代とはまったく異なる世界」に適用しようとしているがゆえに、「慢性病的」な党だというわけである。

チトー一味の見解はまったくの反マルクス主義である。さらにかれらは、現代世界の発展過程に分析を加えるさいにも、こうした立場から出発している。一般に現代修正主義、とりわけユーゴスラビア修正主義と中国修正主義は、革命の敵対物である。ユーゴスラビア修正主義者と中国修正主義者はアメリカ帝国主義を強大な勢力と見なし、しかも、この帝国主義はより理性的な方針を採用

し、かつ——これらの修正主義者が言うところの——同盟を欲しない発展途上の現代世界を「援助」することのできる勢力だと見なしている。しかしながら、ユーゴスラビアの理論は、「非同盟」という用語そのものについてすら的確な定義をあたえることができないのである。それが「非同盟」世界に含めている諸国は、一体どの見地から非同盟と言えるのか——政治的、イデオロギー的にか、それとも経済的、軍事的になのか。ユーゴスラビアのエセマルクス主義理論はこの問題には触れず、また論じようとしないが、それというのも、ユーゴスラビアが新しい世界と銘打って自ら先導しようとするこれらすべての諸国が、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義への種種の形態による従属から抜け出せないでいるからである。

ユーゴスラビアの「理論」は、一般に古い型の植民地主義はすでに廃止されているという事実を大いに利用しているが、しかしそれは、多くの国国の人民が新植民地主義の手中に陥っていることについては語っていない。われわれマルクス・レーニン主義者は、古い形態の植民地主義が廃止されている事実を否認するものではないが、しかし、新植民地主義がそれにとってかわっていることを指摘する。かつてと同じ植民地主義者が依然として各国人民を抑圧しつづけているが、しかしそれは今日、かれらの経済力と軍事力によって、また腐敗した生活様式を導入し人民を政治的、イデオロギー的に攪乱することによっておこなわれているのである。チトー一味はこのような状況を世界の大変革と呼び、さらには、かれら自身が全面否定しているスターリンは言うにおよばず、マルクスやレーニンでさえそうした可能性には思いもおよばなかった、とまで言っている。かれらに言

わせれば、各国人民はいまや独立し自由であり、かれらが熱望しているのは、ただ非同盟だけであり、また、世界の富の分配がより合理的かつ公正におこなわれることだけだというのである。

この「熱望」を実現するために、ユーゴスラビアの「理論家」たちは、アメリカ帝国主義者やソ連社会帝国主義者、それに発達した資本主義諸国が、国際会議や協議を通じて、あるいはそれらが互いに譲歩することによって、今日の世界を変革することに誠心誠意寄与するよう求めている。しかも、かれらの言う今日の世界は、「社会主義へ移行するに足る自覚水準に到達している」のである。

チトー修正主義者の説く「社会主義」とはこのようなものであり、かれらはこれを盛んに説教して、各国人民をできるだけ現実から遊離させようとしている。かれらは革命に反対する一方で、社会平和が維持され、「下層階級の生活水準の向上」についてブルジョアジーとプロレタリアートが合意を結ぶようになることを支持している。すなわちかれらは、上流階級が「世界中の貧しい人人」に、自己の利潤のおこぼれを「気前よく」あたえてくれるよう、卑屈に乞い願っているのである。

チトーは「非同盟世界」論を、先にのべた「今日の世界の状況」にいかにも合致したかのような、「普遍的学説」に仕立て上げようとしている。世界各国の人民はすでに覚醒しており、自由に生きることを求めているが、チトーの理論によれば、この「自由」が未だなお「完全なもの」でないのは、NATOおよびワルシャワ条約機構という二大ブロックが存在しているからだというわけであ

る。

チトーは、反ブロック政策の旗手、推進者であるかのように装っている。なるほどかれの国は、NATOあるいはワルシャワ条約機構のいずれの加盟国でもないが、しかしそれは幾重もの糸によってこれらの軍事機構と結びついているのである。ユーゴスラビアの経済ならびにその政策は自立的なものではなく、この国が資本主義諸国、なかでもアメリカ帝国主義から受ける信用や借款、援助によって左右されている。チトーがアメリカ帝国主義を最大の頼りにしているのはそのためである。しかし、同時にかれは、ソ連社会帝国主義やその他すべての資本主義大国にも頼っている。したがって、非同盟を自称するユーゴスラビアは、事実上——たとえ公式にではないにしても——超大国の侵略機構と同盟を結んでいるのである。

世界各国には、チトーがいわゆる非同盟世界に仲間入りさせようとしている、かれと同類の指導者が数多くいる。一般にこれらの人物は、マルクス主義者ではなく資本主義的ブルジョアであり、しかもその多くは革命に敵対している。かれらのうちのある者は、社会主義者とか民主主義者、社会民主主義者とか共和派、あるいは独立共和派とかその他のレッテルを自分たちにつけているが、それらはほとんどの場合、プロレタリアートと被抑圧人民を欺瞞し、奴隷状態につなぎとめ、またかれらを犠牲にして私利私欲をはかることに役立っている。

「非同盟」諸国には、反マルクス主義の資本主義的イデオロギーが蔓延している。これらの諸国の多くは、チトー一味のユーゴスラビアと同じように、超大国および世界のあらゆる発達した資本

主義国と結びつき、絡みあっている。チトーは全世界の国国にたいして、かれの主導のもとに「非同盟世界」に結集するよう訴えているが、その根底をなすのはもっぱら、革命を鎮圧し、プロレタリアートと各国人民が古い資本主義社会を覆し、新しい社会、すなわち社会主義を打ち立てるための内乱に決起するのを阻むという狙いと行動である。

これが、「非同盟」諸国の糾合というチトーの思想であり、またその指針となる主要原理なのである。かれはこれらの国国を結集し、その指導権を握ることに成功したと自負しているが、しかし実際上、そういったものは存在していない。というのは、チトー一味の「非同盟世界」論についてであれ、あるいは中国の「三つの世界」論についてであれ、その意義を認める――その提唱者自身は、このことを期待し、そのために努力しているのだが――ような者はだれ一人いないからである。だれもが、自分自身にもっとも差し迫った最大の利益をもたらす道を、思い思いに歩んでいるのである。

あらゆる点から見て、アメリカ帝国主義と世界資本主義は、中国の「第三世界」よりむしろ、チトーの「非同盟世界」のほうが気にいっているように見える。発達した資本主義諸国とアメリカ帝国主義は、中国の「三つの世界」論を支持しながらも、やはり幾分かの慎重さとためらいがある。なぜなら、中国を強大にすることは、アメリカ自身にとって好ましくない状況をもたらし、それがついには危険なものへと発展しかねないからである。それにひきかえチトーの「非同盟世界」は、アメリカにとって何ら危険をつくり出すものではない。だからこそカーターは、最近チトーが訪米

したさいに、「非同盟世界」づくりにおけるかれの役割を大いにもち上げ、「非同盟諸国」運動を「今日の世界の主要諸問題を解決するうえでのきわめて重要な要素」と評したのである。

「非同盟諸国」はその大多数が資本主義国であり、それらはすでに自分の賽を投げている。それらは、政治的には巧妙に立ち回り、自国により多くの援助をもたらす帝国主義・資本主義国の側にくっついている。ブルジョアジーや資本家の見方に従えば、政治をおこなうということは、とどのつまり、相手をいかに巧妙にだましペテンにかけることができるか、また相手をどれだけ出し抜くことができるかということである。こうした政策は、そのつどその場の状況に応じて、自己の階級とその頭目連中の利益のために、より強大な国から少しでも金銭をかすめようとする身売りの政策である。

チトー主義がその「非同盟世界」論で説いているのは、まさにこのような政策である。しかしそれはどの国においても、チトーが唱えるのと同じ方向にそって実行されているというわけではない。「非同盟」諸国は、それら自身が何をすべきか、またどのように行動すべきかなどについて、チトーに尋ねたりはしない。一部の例外を除いてこれらの国国の統治者は、資本主義国としての国力を強化し、自国の人民を搾取し、いずれかの帝国主義大国と親交を保つとともに、人民のいかなる反抗や蜂起、いかなる革命の勃発をも阻止し鎮圧しようと努めている。チトー一味の「非同盟世界」政策とは、総じてこのようなものである。

中国の「第三世界」論も、現状を支持している点では同じである。チトー一味の「非同盟世界」

が意図するところは、ブルジョア階級を肥え太らせその権力の座を維持するために、アメリカ帝国主義やその他の資本主義諸国に信用供与を乞い求めることである。中国もその「第三世界」論によって、超大国になり上がり世界を支配するために、自らも肥え太り、経済的、軍事的に強大になることを欲している。この二つの「世界」の狙いは反マルクス主義である。それは、資本を支持し、アメリカ帝国主義を支持するということである。

チトーの訪中および華国鋒のユーゴスラビア訪問のさい示されたように、ユーゴスラビアは中国をほめちぎるとともに抜け目なく媚を売っているが、それは中国修正主義者の気質にうまくあわせたものであり、かれらをユーゴスラビアの立場に誘い込み、そうして「非同盟諸国」論を北京に理解させるだけでなく、全面的に受け入れさせようとするものである。華国鋒と鄧小平を頭とする中国修正主義指導部は、自分たちの「第三世界」論を放棄しはしないものの、チトー一味の「非同盟世界」論には公然たる支持を表明している。かれらは自ら意思表示しているように、「第三世界」諸国人民を欺瞞するという共通の反マルクス主義的目的のために、ユーゴスラビア修正主義者と二つの同じ路線、同じ線路の二つのレールにそって緊密に協力しあうことを望んでいるのである。ユーゴスラビア指導部は、中国を擁護しつつ、こうした考えをさらに発展させている。また、かれらは中国を擁護すると同時に、この誇大妄想国家にとっては侮辱的な「論拠」をいくつか打ち出している。また、チトー一味は中国の現在の政策を現実的と称して、中国を支持し擁護するとともに、中国指導部にたいしてわが党がおこなっている暴露に反対している。

ユーゴスラビアはこうのべている。中国は大国であるから、いまのところは遅れた発展途上国であっても、今後必ず発展するにちがいない、と。さらに、チトー一味はこうも主張している。アルバニア労働党などのマルクス・レーニン主義諸党が、中国が正当にも発展を望み、非同盟を志向し、民族解放戦争に援助をあたえていること、またその他もろもろのことを理由にして中国を非難するのは誤りだ、と。ユーゴスラビアは、中国を自分の衛星国の一つにかえるという野心を抱いている。ユーゴスラビア修正主義者にとって重要なことは、中国が何のためらいもなく自分たちの反マルクス主義的見解を取り入れることとなのである。

チトーを頭とするユーゴスラビアは、その「非同盟世界」論によってたえずアメリカ帝国主義に忠勤をはげんできた。そして、チトー一味はいままた、中国をアメリカへの接近と同盟の方向に追いやることで、この勤めを果たしつつある。チトーが北京へ行き、そこで会談をした主たる目的は、それであった。この会談の結果生まれた親密な友好関係は、さらに華国鋒のユーゴスラビア訪問を契機に、両国家間のみならず両党間の多面的な協力関係の形をとるようになった。チトーの北京訪問中に中国指導部は、ユーゴスラビア共産主義者同盟がマルクス・レーニン主義党であり、ユーゴスラビアには真の社会主義が建設されているということを半ば認めた。さらにかれらは、華国鋒がベオグラードへ行ったとき、このことを公式かつ全面的に表明したのである。

かつてミコヤンとフルシチョフは、チトーが「マルクス主義者」であることを完全に認めるとともに、「ユーゴスラビアには社会主義が建設されている」、「ユーゴスラビア共産党はマルクス・レー

ニン主義党である」と言明したが、言いかえれば、毛沢東主義者も、まさにこれと同じことをしたのである。

アメリカは、自己の気の向くままにチトーを操ったり、あるいは華国鋒や鄧小平を操ったりしている。この後者の二つの操り人形は、人形劇の表舞台にはあらわれずこっそりと姿を隠しており、かれらの理論が攻撃を受けても、反論のための事実がないことを知っているので、「われわれは論争をしない」(！)と宣言している。アルバニアならびに、マルクス・レーニン主義のアルバニア労働党は、かれらを世界世論の前に完膚なきまでに暴露したが、それなのになぜかれらは論争をしようとしないのか。一体かれらは何を期待しているのか。かれらが論争をしないのは、マルクス・レーニン主義と革命にたいするかれら自身の裏切り的陰謀が暴露されるのを恐れているからである。中国指導部はユーゴスラビアや他の国国を通じて、中国はアルバニアとの論争には応じないと語っているが、そこには、真実をおし隠そうとする意図がこめられている。

アメリカやソ連、およびその他の資本主義諸国は、たえず二国間、多国間の会議をおこない、また各種の協議や総会を開いて決議を採択し、演説をおこない、さらに記者会見に応じたりして、多くのうそを並べ立て、いい加減な期待感をふりまくとともに、脅迫と恫喝に訴えている。すべてこれらのことは、かれらが自分達ののめり込んだ危機から抜け出し、抑圧されさいなまれた各国人民が報復の念に燃えるのを食い止め、さらには、広範な勤労大衆とプロレタリアートをペテンにかけ、進歩的民主主義者を欺瞞するためにおこなわれている。そして、ユーゴスラビア修正主義者と中国

修正主義者自身も、こうしたあらゆる薄汚ない、悪らつな、仕組まれた演出のなかで、その役どころを演じているのである。

「発展途上世界」論もまた、こうした策動の舞台で一つの役割を演じており、人民の意識を惑わすという同じ反マルクス主義的狙いをもっている。この理論は、政治的問題は語っても無益だという理由で、これを論じようとはしない。この理論にとっては、「経済問題」および「発展に関する問題」一般が存在しているにすぎない。しかしながら、「発展途上世界」論が一体どんな発展を追求しているのかはだれにも明らかではない。世界の多数の国国が経済、政治、文化、およびその他すべての分野において自国の発展を求めていることは言うまでもない。また、プロレタリアートを先頭とする世界各国の人民は、腐れ切った古いブルジョア資本主義世界を打倒し、それにかわる新しい世界、すなわち社会主義を建設することを求めている。ところが、「非同盟世界」論や「発展途上世界」論は、この新しい世界については一言も語らないのである。

われわれマルクス・レーニン主義者が個個の国国について語る場合、われわれはそれらの国について自分の見解をも同時にのべ、あれこれの国についてその発展水準を評価し、またこの面におけるそれぞれの国の発展の可能性についても評価をおこなう。われわれは、各国の人民は自力に依拠して革命を遂行し、新しい社会を建設しなければならない、と主張する。またわれわれは、次のことをも主張する。すなわち、あらゆる国が自由な独立主権国家となるためには、新しい社会を打ち

立てなければならず、抑圧者とたたかいかれらを打倒し、また自国を隷属下に置くあらゆる帝国主義とたたかい、自らの政治的、経済的、文化的諸権利を獲得しそれらを擁護し、さらには、完全な自由と独立を有する祖国を、つまり、すべての勤労大衆と同盟を結んだ労働者階級が権力を握る、そうした祖国を築かねばならない、と。これがわれわれの主張であり、われわれは二つの世界に関するレーニン主義の命題を断固として擁護するものである。われわれは新しい社会主義世界に属しており、古い資本主義世界と死を賭してたたかっている。

これ以外のすべての「理論」、すなわち、世界を「第一世界」、「第二世界」、「第三世界」、「非同盟世界」、「発展途上世界」、あるいはまた別の——将来考案されるかもしれない——「世界」に区分するすべての「理論」は、資本主義に奉仕し、各国人民を隷属下につなぎとめようとする大国の覇権とその狙いに奉仕するものである。だからこそわれわれは、これらの反動的な反マルクス主義理論と全力を上げてたたかうのである。

全世界とりわけ、いわゆる第三世界や非同盟世界、あるいは発展途上世界の国国で、わが党の闘争は共感のこもった注目を受けている。中国やチトー一味、およびソ連の修正主義理論、さらにアメリカ帝国主義やその他の帝国主義の理論は、これら諸国の人民を欺瞞することを狙いとしているが、しかしこれらの人民は、われわれのマルクス・レーニン主義的見解に、またわが党のイデオロギー的・政治的立場に、抑圧と搾取から自己を永遠に解放するための正しい道を、そしてこの道にかなった正しい立場を見出している。

まさしくこの理由から、マルクス・レーニン主義およびわが党の敵は、われわれにセクト主義者、極左主義者、あるいはブランキ主義者という非難を浴びせ、われわれが国際情勢を正しく分析しておらず、いくつかの時代遅れの図式にしがみついている、などと躍起になって非難するのである。かれらの非難の矛先は明らかに、われわれの革命的学説に向けられており、かれらはそれを「マルクス・レーニン主義的図式化」とか「スターリン主義的図式主義」などと呼んでいる。

かれらはまた、こう言ってわれわれを非難する。すなわち、君たちは、古い植民地主義の搾取形態から抜け出すとともに新植民地主義の搾取形態に陥った国国にたいして、直ちにプロレタリア革命を遂行し、直ちに社会主義へ移行するよう呼びかけている、などと。かれらは、これによってわれわれを冒険主義者に描き上げ、それでわれわれに打撃をあたえているつもりでいる。しかしわが党は、マルクス・レーニン主義理論を忠実に堅持している。この理論は、革命の道筋とそれが経るべき段階、また、反帝民族民主革命であれ、あるいは社会主義革命であれ、この革命が首尾よく遂行されるために満たされるべき諸条件について、正確に規定しているのである。われわれは、わが国における反ファッショ民族解放戦争の時期にこの理論を忠実に堅持したし、いまも社会主義建設において、またわれわれのイデオロギー闘争と対外政策において、それを忠実に堅持している。われわれの分析は正しく、したがって、いかなる中傷もそれをぐらつかせることはできない。

第二章　超大国に成り上がる中国の計画

本書は、はじめに、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義の世界支配をめざす地球的戦略を分析し、現代修正主義の雑多な変種の生成・発展、および、マルクス・レーニン主義と革命にたいしてこれらすべての敵がおこなう闘争に分析を加えたが、それと同時にわれわれは、中国修正主義の地位とその戦略についても立ち入って論じた。

中国は、自らの政治路線をマルクス・レーニン主義と称しているが、それがまったく正反対のものであることは現実の示すとおりである。われわれマルクス・レーニン主義者がしなければならないのは、ほかでもなく、この路線の本質をあばき出すことである。われわれは、中国の修正主義理論がマルクス主義理論としてまかりとおることを許してはならず、また中国が、自ら踏み出した方向にそって——実際には革命に敵対しているにもかかわらず——革命のためにたたかっているかのようにふるまうのを許してはならない。

中国は、国内での資本主義の陣地を打ち固めるとともに、世界における自己の覇権を確立し、帝国主義大国にのし上がり、それによって自らも、言うなれば「しかるべき地位」を占めようと努めているが、このことは、中国自身が遂行している政策によっていちだんと明白なものになりつつあ

る。

歴史の示すとおり、あらゆる資本主義大国は、世界大国にのし上がり、他の諸大国に追いつき追いこし、それらと世界支配を争奪しあうことをめざすものである。だが、ブルジョア大国が、帝国主義大国へと成長転化するうえでたどってきた道は、それぞれに異なっている。それは、特定の歴史的、地理的事情や、生産力の発展等等によって規定されてきた。アメリカ合衆国のたどった道は、植民地占領を基礎に形成されたイギリスやフランス、ドイツのような、ヨーロッパの古株の列強のそれとは異なったものである。

第二次世界大戦後、アメリカ合衆国は最大の資本主義強国となった。それは、自己の保有する強大な経済力と軍事力に立脚し、また新植民地主義をすすめることによって、帝国主義超大国に成長転化した。しかしその後まもなく、アメリカと並んで、ソ連という別の超大国があらわれた。それは、スターリンの死後、フルシチョフ指導部がマルクス・レーニン主義を裏切った結果、帝国主義超大国に変質してしまったのである。この目的のためにソ連は、社会主義によって築かれた強大な経済力、技術力および軍事力を活用した。

今日われわれは、さらに別の大国、すなわち現在の中国も、超大国になり上がろうと躍起になっているのを目の当りにしている。というのは、それもやはり、資本主義の道を急速に突きすすんでいるからである。しかしながら、中国には植民地がなく、発達した大規模工業も、全体として強力な経済もなく、したがってまた、他の二つの帝国主義超大国に匹敵するほどの強大な熱核力ももた

ない。

超大国になるためには、発達した経済と核爆弾を装備した軍隊を保有すること、また、市場と勢力圏を確保し、外国に資本を投下するなどのことが絶対に必要となる。中国は、これらの諸条件をできるだけ早急にととのえようと、懸命になっている。このことは、一九七五年の全国人民代表大会で周恩来がおこなった報告のなかに謳われており、さらにそれは、中国共産党一一全大会でも、中国を今世紀末までに近代的な強国にかえ、アメリカとソ連に追いつくという目標が打ち出されることによって、ふたたび強調されたのである。いまでは、この計画は全体として拡大され、細部に至るまで綿密に仕上げられて、「四つの近代化」政策と称するものになっている。

では、自らも超大国になり上がろうとする中国は、一体どんな道を選んだのだろうか。現在のところ、世界の植民地や市場は他の諸国によって占有されている。かといって、中国指導部が主張するように、アメリカやソ連に匹敵する経済力と軍事力を二〇年以内に、しかも自力で築き上げるということは不可能である。

こうした条件下で中国が超大国になり上がるためには、主として次の二つの段階を経なければならない。まず第一段階では、アメリカ帝国主義とその他の発達した資本主義諸国に信用供与や資本投下を要請し、また新技術を輸入して、国内の資源——その大部分は、債権国への返済にふりあてられる——を開発しなければならない。そして第二段階では、アメリカ帝国主義者やソ連社会帝国主義者が現にそうしているように、中国人民からしぼり上げた超過利潤を各大陸の諸国に投下する

ことになるだろう。

超大国になり上がろうとする中国の策動は、何よりもまず、同盟国を選び出し、同盟を結ぶことを主眼としている。今日の世界には、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義という二つの超大国が存在しているが、**中国指導部は、アメリカ帝国主義の側に頼るべきだと計算しており、経済、金融、技術、機構、および軍事の各分野において、アメリカ帝国主義からの援助に大きな期待をかけている。**そして事実、アメリカの経済・軍事力は、ソ連社会帝国主義のそれよりも強大である。中国修正主義者はこのことを十分知りつつも、口先では、アメリカは衰退しつつあると言っているのである。かれらは、自己の道を追求していくうえで、大した利益の望めない弱いパートナーに頼ることはできない。かれらがアメリカを同盟国に選んだのは、それが強大であるからにほかならない。

中国がアメリカと同盟を結び、自己の政策をアメリカ帝国主義の政策に呼応させているのには、さらに別の目的がある。そこには、ソ連社会帝国主義にたいする威嚇が含まれており、このことは、中国指導部がソ連に敵対して、けたたましい宣伝と気違いじみた行動をおこなっていることからも明らかである。自らの追求するこうした政策によって、中国は、ソ連に次のことを思い知らせようとしている。すなわち、帝国主義戦争が勃発した場合には、アメリカと結んだ中国は、ソ連に対抗する巨大な勢力になるだろうということである。

また、現在の中国の政策は、その他すべての発達した資本主義国との友好関係と同盟を結び、それらの国国から政治的、経済的利益を引き出すことを狙いとしている。中国は、アメリカが、これらのいわゆる「第二世界」諸国との同盟を強化するよう望んでおり、またそのために努力を払っている。中国は、これらの諸国がアメリカ帝国主義と団結する――あるいはもっと正確に言えば、それに従属する――よう促し、また自らも、アメリカ帝国主義を目上の同盟者と見なしているのである。

中国政府が、日本や西ドイツ、イギリス、フランスなど、あらゆる富裕な資本主義国家とあれほど緊密な関係を打ち立てようと躍起になっているのは、以上のような理由からである。また、アメリカやその他の発達した資本主義諸国――それらが共和国であるか、王国であるかを問わず――の政府が、経済・文化・科学訪中代表団を頻繁に派遣し、それに応じて、中国側の代表団がこれらの諸国を訪問しているのも、同じ理由からである。中国は、アメリカやその他の資本主義工業国における、ソ連社会帝国主義に反対するあらゆる言論と行為をことさらに取り上げようと努め、それによって、これらの国国を支持する自己の立場をあらゆる機会に誇示しようとしているが、中国のこうした系統的な行動もまた、同じ理由にもとづくものである。

中国指導部のこのような政策が、アメリカの注意を引きつけ、そのしかるべき支持を受けないはずはない。周知のように、第二次世界大戦中、アメリカ国務省内には、中国問題をめぐって二つのロビーが存在していた。一つは、親蔣介石派のロビーであり、もう一つは、親毛沢東派のロビーで

あった。もちろんその当時、アメリカの国務省と上院で勝利を収めたのは蔣介石派のロビーであったが、他方、現地で、すなわち中国本土では、毛沢東派のロビーが勝利した。後者のロビーの推進者には、マーシャルやウェデマイヤー、エドガー・スノーらが含まれており、かれらは中国の親密な助言者となり、新中国におけるありとあらゆる制度を奨励し、もり立てた。今日、この旧縁の絆はふたたびよみがえり、強まり、いっそう充実した具体的なものとなりつつある。中国とアメリカが互いにますます接近しつつあることは、いまやだれの目にも明らかである。しばらく以前になるが、アメリカでもっとも情報性に富む新聞の一つ、『ワシントン・ポスト』紙が、次のようにのべたことがある。「現在アメリカには、ある合意が存在しており、それは右派からでさえ、また、北京にほとんど共感を示さない人人からでさえも支持されている。この合意によれば、過去にどんな事が起こったにせよ、もはや、中国をアメリカにとっての脅威と見なすべき理由は何一つないというのである。台湾を除けば、両国政府が一致しないような事柄はほんのわずかにすぎない。そして実際には、他の分野での利益をはかるために、台湾問題は棚上げにすることで双方は合意しているのである」。

中米関係のなかで取り上げられている台湾問題は、形だけのものにとどまっている。いまでは中国も、この問題に固執してはいない。中国は香港についても気にはかけず、また、マカオがいまなおポルトガルの支配下にあるということについても、いっこうに懸念していない。中国政府は、この植民地を中国に返還するというポルトガル新政権の申し入れにたいしても、「贈りものを返すこ

とはない」と言って、受け入れないでいる。こうした植民地の存続は、それ自体一つの時代錯誤であるが、それとても、中国指導部のプラグマチックな政策に支障をきたすものではない。香港やマカオが植民地にとどまっている以上、台湾だけが植民地であってはならないという理由が果たしてあるだろうか。見たところ、中国は、台湾の現状が将来も維持されることに大きな関心をもっているようである。中国は、アメリカ帝国主義者やイギリス、日本、その他の帝国主義者とのあいだで、だれはばかることなく公然と関係をおしすすめているが、それとは別に、この三つの植民地を通じて、かれらとの闇取引をおこなっていくことにも関心を抱いている。したがって、鄧小平や李先念が売りさばこうとしているたわごと、すなわち、中米関係は台湾にたいするアメリカの立場にかかっているなどといった論は、中国が超大国になるためにすでに乗り出しているアメリカとの関係修復の道をおおい隠す煙幕にすぎない。

カーターは、アメリカは中国との外交関係を樹立すると声明している。台湾に関するかぎり、アメリカは、日本のとった立場、すなわち、台湾島との外交関係は形式上断絶するが、経済・文化関係、またそれを隠れ蓑とした軍事関係は断絶しないという立場をとるだろう。実際のところ、中国が関心をよせているのは、アメリカと台湾との軍事関係なのである。中国は、アメリカが台湾や日本、朝鮮南部、インド洋に軍事力を維持するよう望んでいる。なぜなら中国は、そうすれば、ソ連にたいする平衡力が生まれ、自国にとって有利になると考えているからである。

すべてこうした立場は、中国指導部が選択した方向とかかわっている。その方向とは、アメリカ

およびその他の資本主義大国からの借款や資本投下を通じて、中国の経済発展と軍事力増強をはかり、それによって中国を超大国に仕立て上げるというものである。中国は、毛沢東の「マルクス主義的」路線にそった正しい政策を実行しているなどと主張して、この方向を自ら正当化している。毛沢東によれば、「中国は、世界の偉大な成果、新しい発明や技術を利用して、外国のものを国内の発展のために役立てるべきだ」、などというわけである。『人民日報』の論文にも、また中国指導部の演説にも、こうしたスローガンがふんだんに並べられている。中国の思考に従えば、諸外国での発明や工業の成果を利用することは、とりもなおさず、アメリカや日本、西ドイツ、フランス、イギリス、その他の資本主義諸国から借款を導入したり、資本投下を受け入れたりすることなのである。しかも中国は、これらのことを手放しで歓迎している。

中国指導部が取り入れている修正主義理論は、次のようなものである。すなわち、中国のように資源に富む大国は、返済能力があるのだから、アメリカ帝国主義からであれ、あるいは他のどんな資本主義強国やトラスト、銀行からであれ、借款を導入することができる、という理論である。ユーゴスラビア修正主義者は、この考えを明らかに擁護している。かれらは、世界金融寡頭制と、とりわけアメリカ資本からの援助で「独自の社会主義の建設」をすすめた自己の経験を宣伝することによって、中国に手本を示し、中国がちゅうちょすることなくこの道を邁進するよう励ましている。

大国であれば、受け入れた借款を返済することはできるだろう。だが、帝国主義がこれらの大国――それが修正主義ソ連であれ、中国であれ、あるいはどこかほかの国であれ――にたいしておこ

なう資本投下は、新植民地主義の重大な影響をそれらの国に残さずにはおかない。また、それらの国の人民の富と労苦も、外国の資本主義独占体やコンツェルンの利益のために搾取されるのである。アメリカ帝国主義者や西ヨーロッパの発達した資本主義諸国、ならびに日本は、中国や修正主義諸国への資本投下をすすめているが、かれらが意図しているのは、それらの国国に食い込み、自国のコンツェルンをそれぞれの国のトラストや主要工業部門と結合し、それらと緊密に協力させることである。

帝国主義諸国による対中国投資の問題は、修正主義者が説いているほど単純なものではない。かれらは、このような自国への資本の浸透について、それが国家間の関係によるものではなく、政治的な意味あいや利害を含まない民間の銀行や企業によるもの(もっとも中国首脳部は最近、外国からの政府借款を受け入れると表明している)である以上は、無害なものだなどと称しているのである。どんな大国であれ小国であれ、ある国がこうした道に足を踏み入れ、あれこれの帝国主義に多大な債務を負うことは、国の自由と独立、主権にとって避けがたい危険をつねにはらんでいる。それが、中国のように経済的に貧しい国の場合には、なおさらである。真の社会主義国ならば、そうした債務を負う必要はない。真の社会主義国は、自国の富と内部蓄積のなかに、そして人民の創造力のなかにこそ、国内の経済的発展の源泉を見出すのである。小国アルバニアの事例は、社会主義国が自国の発展のための手段や資源、潜在力をいかに無尽蔵に有しているかをきわめて鮮かに示すものである。さらに、それが大国の場合には、その国がマルクス・レーニン主義の進路を一貫して

前進するならば、こうした手段や資源はよりいっそう豊富なものとなろう。

アメリカ帝国主義、および欧米の巨大企業にたいする中国市場の開放は、アメリカ帝国主義者と国際ブルジョアジー全体に手放しで喜ばれ、歓迎された。多国籍企業やアメリカ産業資本家は、中国の経済とその莫大な資源について豊富な知識を備えており、そこでかれらは、中国に自己の経済網を築き上げ、合弁企業を設立し、巨額の利潤をかせぎ出そうと極力努めている。アメリカの大企業にかぎらず、日本やドイツ、その他の発達した資本主義諸国の企業も、中国でそうした活動をおこなっている。

中国は、すでに日本とのあいだに、年間一千万トンにのぼる原油供給契約を結んでいる。イタリアのENI(イタリア炭化水素公団)は、中国に石油探査機器の特許を売り込むため、大型訪中代表団を派遣したが、すでにそれは、一足先に訪中していたアメリカ石油企業の大型団が、石油の共同採掘と共同開発に関する協定を中国と取り交した後であった。さらに、鉄やその他の鉱物など、巨大な鉱脈がすでに国内で探知されているか、あるいは今後発見されると見込まれるような鉱山部門でも、中国はそうした協定を結んでいる。現在、中国を訪れているドイツの石炭王たちも、数百億マルクに相当する契約を取り決めたばかりである。中国の閣僚連中が日本やアメリカ、あるいはヨーロッパとのあいだを往復しているのは、借款を取り付け、最新の技術設備について契約を結び、また、近代兵器を購入し、科学技術協定を締結する等等のためである。中国のあらゆる機関や企業は、東京から、あるいは、ウォール街やヨーロッパ共同市場からやって来る実業家に門戸を開いて

いる。これらの実業家は北京に殺到し、中国政府が申し出ている大型「近代化」プロジェクトの契約を獲得するために、互いにしのぎを削っている。こうして中国もまた、帝国主義的渇望に、すなわち、中国国内の鉱物と原料を握り、労働力を搾取するという帝国主義の深い欲望に、のみ込まれようとしている。

だれでも知っているように、資本家は、前もって自己の経済的、政治的、イデオロギー的利益を考慮してからでなければ、だれにも援助をあたえはしない。それは、資本家がどれだけの利潤率を上げるかといった単純な問題ではない。資本主義国は、借款の供与とあわせて、自国の生活様式と資本主義的な考え方をも「援助」受け入れ国にもち込むとともに、こっそりと足場を築き、じわじわとおし広げ、そのくもの巣を張りめぐらす。そして、巣の真中に陣取ったくもは、巣にかかるすべての蠅を餌食にしようとつねに待ちかまえているのである。ユーゴスラビアがその餌食となり、いまではソ連もそうなりつつある。さらに中国もまた、やがてはそうなるであろう。

したがって、中国は――現在すでにそうしているように――政治上、イデオロギー上の諸問題で譲歩するだろうし、また中国の市場も、アメリカ帝国主義とその他の工業資本主義国にとって、きわめて重要な「はけ口」となるだろう。

アメリカ、西ドイツ、日本、その他の国国が中国にたいしておこなっている借款供与と資本投下は、多かれ少なかれ、中国の独立と主権を損なわずにはおかない。そうした借款は、それを受け入れるあらゆる国家を従属させる。なぜなら、債権国の側は、その国に自己の政策をおしつけようと

するからである。だから、帝国主義の機構に組み込まれた国は、どれもみな――大国であれ、小国であれ――その政治的自由、独立と主権を切り縮められたり、喪失したりするのである。ソ連が資本主義復活の道に乗り出した当時は、同じ道に足を踏み入れている現在の中国よりも、経済的、軍事的にはるかに強大であったが、そのソ連でさえこのように、主権を損なわれた状態に陥っている。

もちろん、帝国主義の機構に組み込まれたとしても、自国の自由と独立を喪失していく速さの点では、小国の方が急速であり、ソ連や中国のような大国の場合は、より緩慢であると言えるだろう。それは、これらの大国が経済的、軍事的により大きな潜在力を備えているからだけでなく、さらに、この潜在力に頼って自己の市場を保持し、新たな市場を占取し、勢力圏を創出し拡大するために、またそうして互いに圧力をかける――それでもなお活路が見出せないときには、戦争にまで突入する――ためにたたかおうとするからである。だがこうしたことも、手かせ足かせとなる借款や資本投下という鎖から、これらの国を救うものではない。借款は利子をつけて返済しなければならないものであり、もし返済できなければ、新たな債務を背負い込むことになる。債務がかさむたびに、資本家は返済を迫るが、それでも返済できないときには、圧力をかけてくるのである。たとえば、アメリカの独占企業は、政府に自分たちの政策を強要し、また政府をして、あらゆる手段で――必要とあれば、宣戦布告に訴えても――自分たちの資本を保護させている。

中国指導部は、アメリカ帝国主義およびアメリカの資本家に依拠して、自国の経済を発展させよ

うと血眼になっているが、そこから察するならば、アメリカ帝国主義が弱体化したというかれらの騒騒しい叫びは、まったく空空しく聞こえてくる。そうした主張は、かれらが謳う自力更生と同様に、単なるこけおどしにすぎない。中国修正主義者は、その実際行為を見ればだれにでもわかるように、口で言うこととはまったく逆のことを考えているのである。

中国の各種の公式機関紙は、ソ連がアメリカや西ドイツ、日本やその他の諸銀行から信用供与を受けていることについて、しばしば懸念を表明している。それらの新聞は、アメリカとその他の発達した資本主義諸国にたいして、ソ連はこれらの国国からの技術援助と信用供与を、自国の経済力および軍事力の発展・強化のために利用するから注意せよとか、こうした援助や信用供与は、社会帝国主義——それは今日、中国指導部に言わせれば、第三帝国(訳注)の地位を占めるようになった——によって自分自身が受ける脅威を増大させるようなものだとか警告している。したがって中国の新聞は、そうした信用供与はできるだけ早目に打ち切るべきだと要求しているのである。それは、西ドイツの名だたるナチ報復主義者であるシュトラウスの言辞とそっくりである。

(訳注)　ナチ独裁下のドイツを指す。ヒットラーは中世の神聖ローマ帝国を「第一帝国」、第一次世界大戦前のドイツ帝国を「第二帝国」と呼び、自己の「第三帝国」をその継承者と見なした。

中国指導部は、ソ連が受け取る信用供与について「憂慮」を示しているが、その真意を推察する

のはむつかしいことではない。もちろん、かれらが懸念しているのは、その信用供与が資本主義的性格のものであるからでも、また、ソ連の国家主権にとって危険なものであるからでもない。そうではなく、かれらは、アメリカ資本の巨頭連とアメリカ政府、およびその他の帝国主義諸国の資本家と政府が、こうした信用と援助をソ連にではなく、中国――それはこれらの資本家と政府にとって危険をもたらすのではなく、利潤を生み出すのである――に供与するよう求めているのである。

以上が、超大国になり上がる中国の計画の一つの側面である。**いま一つの側面は、中国が世界の低開発諸国を支配し、いわゆる「第三世界」の「リーダー」にのし上がろうと策動していることである。**

中国の現支配集団は、「第三世界」をことさら強調するとともに、中国をもそのなかに含めているが、かれらがそうするのは偶然ではなく、目的があってのことである。中国修正主義者のいう「第三世界」は、十分に明確な政治的狙いをもつものである。それは、中国をできるだけ早急に超大国に仕立て上げようとする戦略の一部分である。中国は、「第三世界」諸国や「非同盟」諸国、あるいは「発展途上」諸国をすべて自己の回りに糾合して、一大勢力をつくり出そうとはかっている。この勢力は、中国の総合的な国力を増大させるだけでなく、中国が米ソという他の二超大国に対抗し、市場と勢力圏の分割をめぐるかけ引きに大きな比重を占め、そして、帝国主義超大国としてのしかるべき地位を獲得するうえでも、助けとなるであろう。中国は、世界の諸国をなるだけ多く自

己の周囲にかき集めようと狙っており、しかも、各国人民が新植民地主義から自己を解放し、反帝闘争を通じて社会主義へ移行するのをあたかも支持するかのようなスローガンを掲げて、それをなしとげようとしている。中国の言う帝国主義とは、何となく抽象的なものだが、ことソ連については、もっとも危険な帝国主義と言い切っている。

中国が、理論的内容をまったく欠いたこのようなデマゴギー的スローガンを打ち出しているのは、自己の覇権主義的目的を実現する手段として、それを利用しようと期待しているからである。その狙いとは、まずはじめに、いわゆる第三世界において中国の支配を打ち立て、そののちに、この「世界」を自らの帝国主義的利益のために操ることである。当面のところ、中国はこのことを、社会主義国としての自己の名声の陰におし隠そうと努めており、社会主義国が他国を隷属させ鼻であしらったり、威圧や攻撃を加えたり、あるいは、抑圧・搾取するなどという意図をもつことはありえない、という前提を逆に利用しようとしている。中国の用いるこうしたスローガンを支えているのは、「偉大な」毛沢東によって創立された中国共産党の名声、すなわち、この党は、マルクスとレーニンの理論――資本主義制度や植民地的搾取などのあらゆる害悪とたたかう理論――を忠実に堅持するマルクス・レーニン主義党であるなどといった評価である。

中国が、自己とはちがったものになりすまし、「第三世界」という文句の陰に隠れ、何の基準も階級的定義もなく自己をこの「世界」に含めているのは、そうすれば、この「世界」にたいする支配権を確立するという自らの戦略目的が、より容易に達成されうると考えているからである。ソ連

も、他の諸国にたいして同じような欺瞞的手段を用いてきた。フルシチョフ修正主義者は口をそろえて、われわれは「共産主義者」だ、われわれの党は「真のマルクス・レーニン主義党」だ、とのべつまくなしに唱えつづけている。またこうした装いのもとで、ソ連修正主義者は、自分たちの世界覇権を打ち立てようと躍起になっている。したがって、中国の行動とソ連社会帝国主義者のそれとのあいだには、どんな本質的な差異もないと言えよう。

中国がすすめているこれらすべての政策と行動は、帝国主義とは、市場を占取し、世界を支配し、いたるところに支配権を打ち立てようとする金融寡頭制の支配である、というマルクス・レーニン主義による特徴づけを完全に立証するものである。そして中国自身も、この道にそって「第三世界」諸国に浸透し、そこに「足場」を築こうとしている。しかし、こうした「足場」を手に入れるには、多大な犠牲が強いられる。

「第三世界」に食い込み、市場を占取するためには、資本が必要である。「第三世界」諸国で権力の座にある支配階級は、資本投下や借款、「援助」を求めている。しかしながら中国は、これらの国国に大規模な「援助」をあたえうるような状態にはない。なぜなら、それに必要な経済力がないからである。中国が現在、アメリカ帝国主義の援助によってつくり出そうとしているのは、そうした経済力にほかならない。こうした事情のもとで、「第三世界」諸国の支配的ブルジョアジーは、経済上、技術上、軍事上では、当面のところ中国から多くは期待できないということを十分承知している。強大な経済力、技術力、および軍事力を有するアメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義から

は、もっと多くのものが期待できるというわけである。

とはいえ中国も、帝国主義的意図をもつあらゆる国と同様に、世界市場の獲得のためにたたかっており、今後もなおいっそう熾烈にたたかうであろう。また中国は、自己の影響力と支配の拡大のために、今後ともいっそう奮戦するであろう。こうしたもくろみは、現在でも見てとることができる。中国が香港に銀行を置いてからはすでに久しくなるが、いまではそれだけでなく、ヨーロッパやその他いたるところに銀行を開設しつつある。中国は今後、とりわけ「第三世界」諸国に銀行を開設し、資本を輸出するために力を入れるであろうが、現在のところ、この分野での活動はまだ微微たるものにすぎない。中国の「援助」といっても、それはせいぜい、セメント工場や鉄道、病院を建設できるぐらいのごく限られたものである。中国が、経済的・軍事的進出と拡張に本格的かつ大規模に乗り出せるようになるのは、中国にたいするアメリカや日本、その他の国国の資本投下が期待どおりに実を結ぶとき、すなわち、中国の経済、貿易、軍事技術が発展するようになってからのことである。だが、そうなるには時間を要する。

その時期がくるまで、中国は、現在すでにはじめているように、「援助」や信用供与を――それらを通じて、ソ連やアメリカがはるかに高い利息をせしめているのにたいして――無償または低利でおこなうという政策を用いるしかない。中国資本の対外進出が可能にならないうちは、中国指導部は、「発展途上国」にたいする小額の「援助」や信用供与の宣伝面に注意を注ぎ、その「国際主義的性格」と「私心のない目的」、さらにそれに加えて、「自力更生」で自国を解放し建設するとい

う金科玉条を自画自賛するであろう。

中国は経済的、軍事的に発展すればするほど、資本輸出によって小国や低開発国に浸透し、それらを支配する願望をますます強めるだろう。そうなれば、中国はもはや、借款に一―二パーセントの利息を課するにとどまらず、他のあらゆる国と同じやり方をとるようになるであろう。

しかし、すべてこうした計画と努力も、たやすく達成されうるものではない。いわゆる第三世界諸国に影響力をもつ発達した帝国主義・資本主義国は、略奪戦争によって久しく以前に獲得した市場が中国に横取りされるのを、そうやすやすとは許しはしない。これらの国国は、旧来の地位を頑強に維持しているだけでなく、新たな地位を獲得しようとあらゆる手だてをつくしており、中国が「第三世界」諸国に手を出そうとするのを容認してはいない。

帝国主義は、どんな同盟者にたいしても、それが苦境にあるときであれ、あるいは興隆しているときであれ、容赦しはしない。帝国主義は、ときとして、より大きな利潤をかせぐために、必要上一定の譲歩をすることはあるが、たいていの場合、それは圧制を――弱小国にたいしてだけでなく、資本主義工業国のような発達国にたいしても――強めようとする。たとえばアメリカは、資本主義同盟諸国が、相互のあいだで引き起こした帝国主義戦争によって自ら窮地にはまり込んだときには、これら同盟国にたいして必ずそうした政策をとってきた。さらには、これらの同盟国が戦後復興に努力を払っているときでさえも、アメリカ帝国主義は、自己の支配が確立されている他の諸国にそれらが割り込んでくるのを阻もうと極力努めてきたのである。このようにして、第二次世界

大戦後アメリカは、戦争によって弱体化したイギリスとフランスを「援助」すると称して、スターリング(ポンド)圏やフラン圏などの市場に浸透した。資本主義の発展にとりきわめて重要な冶金、化学、交通・運輸など多くの分野において、アメリカの独占体とカルテルは、圧倒的な規模でイギリス、フランス、その他の独占体とカルテルを浸食し、これらの国国をアメリカ帝国主義に従属させた。他のあらゆる帝国主義と同様、貪欲で残忍なこの帝国主義は、中国にたいしても、それ以外のふるまい方をするはずがないのである。

「第三世界」諸国への経済的・軍事的進出が困難なことを考慮したうえで、中国は、政治的・イデオロギー的影響力を打ち立てることによって、これら諸国にたいする支配権を確保することができると考えている。中国の考えによれば、それは、次の三つの方針をとることによって達成される。すなわち、アメリカ帝国主義や資本主義諸国の支配集団との闘争を手控え、逆にかれらと同盟を結ぶこと。中国と国境を接するソ連社会帝国主義とたたかい、アジア、アフリカ、ラテンアメリカにおけるかれらの拠点を弱め、たたきつぶすこと。そして、これら諸大陸のプロレタリアートと辛苦にあえぐ人民を、エセ革命的、エセ社会主義的デマゴギーと策略によって欺き、それとともに、あらゆる革命的解放運動を掘り崩すことである。

社会帝国主義と並んで、アメリカ帝国主義とその他の帝国主義諸国も、中国のこうした狙いをよく心得ている。そして「第三世界」諸国も、それを知っているからこそ、中国に疑惑を抱いている

のである。これらの国国は、中国は自分たちに虚勢を張っており、その狙いは、自分たちを支援することではなく、中国自身が超大国になり上がることにあるのだということを見抜いている。いわゆる第三世界諸国の支配的指導層は、そのほとんどがアメリカ帝国主義と、あるいは、イギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、日本などの発達した資本主義国と、ずっと以前から密接に結びついている。だからこそ、中国が「第三世界」に愛想をふりまいても、発達した帝国主義・資本主義国は、全然気にもとめないのである。

中国は、自らの政策と、毛沢東思想なるそのイデオロギーとによって、「第三世界」に仲間入りしようとしているが、そうした努力も実を結ぶことはありえないだろう。というのも、そのイデオロギーと政治路線は混沌としたものだからである。中国の政治路線は混乱しており、しかもそれは、時時の状況と目前の利益に従ってさまざまに変動するプラグマチックな路線である。「第三世界」諸国の支配階級は、このようなイデオロギーを恐れてはいない。なぜならかれらは、それが、革命と各国人民の真の解放を支持するものではないことを理解しているからである。これらの国国のブルジョアジーは、自国人民にたいする抑圧と搾取の実行をいっそう容易にするために、ありとあらゆる名称のもとに自分自身の政党をつくり上げている。いわゆる第三世界諸国に投下された外国資本と固く結びついているこれらの政党にとって、中国の路線とたたかいそれを暴露したとしても、何ら支障があるわけではない。そのため、中国修正主義指導部は、これらの国国の諸党派には微笑をふりまく方針をとり、あらゆる方法と機会を利用して、それらと「密月の仲」になろうと努

めている。

中国は、「第三世界」を支配するというもくろみをもって、この「世界」の勤労大衆の闘争を、自己の利益となる径路へ流し込もうと全力をつくしている。しかしながら今日、プロレタリアートを先頭とする被抑圧人民は、一九世紀末、あるいは二〇世紀初頭におけるような人民ではない。かれらは、アメリカやソ連であれ、あるいは中国であれ、新旧の帝国主義大国による覇権と服従を強いるあらゆる政策に反対している。今日、世界の広範な人民大衆は、全般的に目覚め、自らの闘争を通じて経済的・政治的権利を守るという一定の自覚を、何らかの形でかち得ている。中国は、いわゆる第三世界諸国に革命と民族解放の思想を伝えるのではなく、中国自身の影響力の浸透にとって阻止力となる革命を消し止めようと努めているが、これら諸国の人民がそのことを見きわめていないはずがない。アメリカやその他の新植民地主義国と同盟を結ぶ中国の路線そのものが、各国人民の眼前で中国社会帝国主義を暴露しているのである。

中国が、「第三世界」諸国で積極的に革命を宣伝することができないのは、もしそうすれば、例の超大国——中国は、国内への資本投下と先進的技術の導入をそれに期待している——と衝突することにもなりかねないからである。さらに中国は、いわゆる第三世界の一連の諸国における反動的支配集団を支持し、それらが権力の座に居坐るのを助けているが、革命によって打倒されるのがほかでもなくこの支配集団であるという理由からしても、中国は革命を宣伝するわけにはいかないのである。

自国をできるだけ早急に超大国へと成長転化させ、いわゆる第三世界をはじめ、いたるところに覇権を打ち立てるという大それた野望に駆られた中国指導部は、帝国主義間戦争の挑発を、自らの戦略と対外政策の基礎とするまでになっている。かれらが大いに期待しているのは、アメリカとソ連がヨーロッパで真向から激突し、その間、中国は火の粉のかからぬところで悠然と待機し、この二つの主要な争奪相手が核の戦火のなかで破滅することによって、ひとり中国だけが生き延び、世界の全能の支配者となることである。

　中国は、他の超大国と争奪するに足るほど自分を強力だと感じるまでは、また、超大国としての「ふさわしい地位」を手に入れるまでは、自らは平和を求め、他にたいしては戦争を求めるであろう。中国修正主義者は、米ソ間の戦争を挑発する一方で、自らはそれを免れ、「近代化」を推進しようと露骨な外交戦術をもてあそんでいるが、それは、さしあたっては平和を維持するというかれら自身の必要と結びついている。鄧小平が、今後二〇年のあいだ戦争は起きないだろうと公言しているのも、偶然ではない。そのことによってかれが言おうとしているのは、今後二〇年間、超大国と他の帝国主義諸国は中国を恐れなくてもよいということである。だがそれと同時に、中国指導部は、中国を巻き込む恐れのない遠く離れたヨーロッパでは、超大国間の戦争をあおり立てているのである。こうしたことがどの程度まで実現可能かという問題はさておき、ともかくも中国指導部は、この方向に力を入れている。なぜなら、かれらの考えでは、中国を超大国に仕立て上げるという目的を実現するには、平和な時期が必要であり、しかもそれは、かれらにとって欠くべからざる

ものとさえ感じられるからである。

中国は、「ヨーロッパの統合」、あるいは、「ヨーロッパの発達した資本主義諸国の結束」の強化を声高に訴えている。中国は、すべての問題についてこうした結束を支持するとともに、老かいな狼や狐どもにたいし、ソ連社会帝国主義による重大な脅威を前にして、いかに相互の軍事上、経済上の、また国家機構やその他の面での結束を強化すべきかについて「教え」をたれている。だが、それらの狼や狐どもは、そうした中国の教えを請うまでもなく、危険がどこから生じるのかを察知することができるし、また実際、充分に承知しているのである。

西側の発達国は、中国の助言や希望を「文字どおりに」実行するほど、うぶではない。それらは、ソ連から生じうる不慮の危険に対処するため、自国の強化をはかっており、またそれと同時に、ソ連との関係を過度に悪化させて「ロシアの熊」を怒らせたりしないように、多大な努力を払っている。当然にもこのことは、中国の願望に反するものである。

中国が、中ソ間の矛盾を自らあおり立てていることは、ヨーロッパの資本主義諸国やアメリカにとって好ましいことである。なぜなら、それによってこれらの諸国は、ソ連にたいして、「中国こそがあなたがたの主要な敵であり、それにひきかえわれわれは、中国が何と言おうと、あなたがたとともにデタント（緊張緩和）と平和共存の確立を望んでいるのだ」と、それとなく告げることができるからである。また他方で、これらの国国は、自分たちが平和を求めているかのようなそぶりを示しつつ、自らを武装し、主要な敵、すなわち革命に備えて支配と相互の軍事的結束を強化してい

る。これこそ、ヘルシンキ会議やベオグラード会議など、あらゆる会議がその目的としているものである。これらの会議は、ナポレオン敗北後のウィーン会議——それは、舞踏会と宴会に明け暮れた会議としてその名をとどめている——のように、いつ終わるともなく延延とつづけられている。

鄧小平がAFP通信局長とのインタビューのなかで公式に言明したように、中国指導部は、ソ連社会帝国主義とたたかうために、「第三世界、第二世界、およびアメリカを含む広範な戦線」の結成を呼びかけている。

アメリカ帝国主義や西側ヨーロッパ等を、ソ連社会帝国主義との戦争へ駆り立てようとする中国修正主義指導部の戦略は、ソ連と、アメリカおよびNATO同盟国とのあいだの戦争よりも、むしろ、中ソ戦争を引き起こす危険性をはらんでいる。

中国は他国を戦争へ追いやろうとしているが、他方ではその中国とまったく同じやり方で、アメリカ帝国主義や発達した資本主義国も、そして、ブルジョア資本家集団が権力を握るその他のあらゆる国も、中ソ両国を互いにけしかけようとしているのである。したがって、アメリカの政策と中国自身の誤った戦略とによって、ソ連が刺激され、軍事力を一段と強化し、帝国主義超大国として、まず最初に中国を攻撃するといったことも大いにありうることである。

中国の側も、自分の力に自信がつけばソ連を攻撃するという志向を、根強くもっている。なぜなら中国は、シベリアおよびその他の極東地域にたいして、大きな領土的野心を抱いているからである。中国はずっと以前から、こうした領土的要求をもち出しているが、今後も、あらゆる種類の武

器を装備した軍隊が建設され、備えができたときには、それ以上に強硬な主張をおしつけるようになるであろう。そしてこのような含みをこめて華国鋒は、イギリスの元保守党内閣首相ヒースに次のように言明したのである。かれは、「われわれは、統一した強力なヨーロッパを見ることができるのを期待しています。また、ヨーロッパも同じように、強力な中国を期待しているものと信じます」と語った。要するに華国鋒は、ヨーロッパの大ブルジョアジーにたいして、こう言おうとしたのである。「あなたがたは国力を強化して、西の方からソ連を討ちなさい。一方、われわれ中国も今後力をつけ、東からかれらを討つでしょう」と。

中国の政策は、アメリカにとりきわめて有益な、広広とした道を切り開いたが、この道を最初に開いたのは、毛沢東と周恩来、およびニクソンであった。米中間には多くのかけ橋がかけられた。それらは擬装を施されていたが、効果的で実り多いものであった。ニクソンは、「われわれは、サンフランシスコと北京を結ぶ長大なかけ橋をかけねばならない」と唱えた。毛沢東と周恩来が、ウォーターゲート事件ののちにニクソンを招請したことも、また、ニクソンが毛沢東の接見を受けたことも、それなりの理由と目的があってのことである。それはつまり、アメリカとの友好は――それに道を開いた大統領自身は、不正事件のために失脚したにもかかわらず――単なる個個の人物同士の一時的な友情ではなく、中国とアメリカという国と国とのあいだの友好である、ということを意味しているのである。

カーターが政権の座についている現在、中米間の友好関係は強化されつつある。アメリカは、中

国が現在とっている立場に大きな関心を抱いており、またカーターも、中国の戦略をさまざまな手口で助長している。

アメリカの関心は、中国に政治、経済、軍事の全面にわたる援助をあたえ、中国をソ連にけしかけることにある。アメリカが核に関する機密を中国に提供していることは、すでに明らかになっている。またアメリカは、核戦争に役立つ最新のコンピューターを中国に供与している。中国は、自国で原子力潜水艦が建造できるほどの完全な資料をすでに入手し、さらに現在、ワシントンでは、中国にたいする近代兵器の供与について正式の協議が公然と開かれている。アメリカが中国にこのような「祝福」を授けているのは、言うまでもなく、中国が第二次世界大戦中の日本のように、アメリカ自身をも脅かすほどの強大な陸海軍国にのし上がるのを助けてやるためではない。そうではなく、アメリカ帝国主義は、世界のどんな国にいわゆる「援助」をあたえる場合でも、周到に計算しているのであり、中国にたいしてはとりわけそうである。

このようにして、中国は、米ソ両国に拮抗するような超大国になることをめざし、そのために血道を上げているが、このことは、新たな軋れきと戦争の惨禍――それは局地的な性格のものでもありうるし、全面戦争の性格を帯びることもありうる――をもたらさずにはおかないだろう。

「三つの世界」論の理論・戦略の全体と、それが唱える同盟と「戦線」、およびそれが達成しようとする目標――これらは、帝国主義世界戦争をあおり立てるものである。

ニキタ・フルシチョフと現代修正主義者は、フルシチョフ式「平和共存」という悪名高い理論をでっち上げ、「社会平和」、「平和競争」、革命の「平和的な道」、「武器も戦争もない世界」を唱えた。それは、現代における基本矛盾を隠蔽し緩和させることによって、階級闘争を弱めようとするものであった。フルシチョフがことさらに吹聴したのは、ソ連とアメリカ帝国主義との矛盾、さらには、社会主義制度と資本主義制度との矛盾一般が消滅するということであった。その当時、かれは次のような考えを抱いていた。それは、世界には変化が生じており、今後、社会主義と資本主義との歴史的矛盾は、経済、政治・イデオロギー、文化、その他の分野での平和競争によって解決されてゆくだろう、というものであった。

「それはいずれ時が証明するだろう。そのときには、だれが正しいかはっきりする」と、ニキタ・フルシチョフは言ったが、それはつまり、こうした競争のなかで、また「不可侵の平和」のなかで、各国人民はもっとも適切な政体を自由に選択するだろうということであった。フルシチョフは各国人民にたいして、超大国に自国の富を売り渡すとともに、この悪名高い「平和」競争によって自由と独立、福利が確保できるのを待つよう忠告したのである。もちろん、こうした反マルクス主義の政策は暴露された。そして、それにたいして最初に攻撃を加えたのはわが党であった。

中国共産党は、すでに毛沢東の生前から、フルシチョフと同様の政策をとってきた。この政策もまた、プロレタリアートとブルジョアジー、各国の人民と支配者が互いに階級闘争をやめ、ソ連社会帝国主義のみに反対して一致団結し、アメリカ帝国主義のことは忘れ去るようにと呼びかけて

いる。

「三つの世界」論は、フルシチョフの「平和共存」論に勝るとも劣らぬ反動的な理論である。しかしながら、現代修正主義の首唱者であったフルシチョフとその追随者たちが、うわべでは平和主義者を装っていたのに引きかえ、毛沢東や鄧小平、華国鋒らは、むき出しの戦争挑発者として登場している。かれらは、中国をも含めた帝国主義・資本主義連合に、プロレタリアートの勝利と各国人民の解放をめざす闘争の、すなわち革命闘争の機関としての色合いと意義を施そうとしている。けれども現実には、毛沢東と中国共産党の「三つの世界」という「理論」が呼びかけているのは、革命ではなく、帝国主義戦争なのである。

帝国主義国および帝国主義グループ相互間の矛盾と争奪の激化は、武力衝突や、奴隷化のための略奪戦争を引き起こす危険性を内包している。それは、歴史がいかんなく証明した、マルクス・レーニン主義の周知の命題である。その正しさは、今日の国際的推移によっても実証されている。

超大国は、自由を愛する人民と諸国を眠り込ませ、その警戒心を麻痺させるとともに、かれらを幻惑し不意打ちを食わせるために、騒騒しい宣伝によって平和主義をふりまいているが、アルバニア労働党は何度となく声を大にして、こうした宣伝を暴露してきた。アルバニア労働党はまた、アメリカ帝国主義とロシア社会帝国主義が世界を新たな世界戦争へ追いやろうとしており、しかも、そうした戦争勃発の危険性は現実的であって、けっして妄想ではないという事実に、一度ならず注意を喚起してきた。そうした危険性は、各国の人民と広範な勤労大衆、自由愛好諸国・勢力、そし

て全世界のマルクス・レーニン主義者と進歩的人人にとって、たえず不安の種とならざるをえず、かれらはこのような危険を前にして、なすすべもなく、ただじっと傍観しているわけにはいかない。では、帝国主義戦争挑発者の手を縛るには、どうすればよいのか。

帝国主義戦争挑発者に屈服・投降したり、また、かれらとの闘争を緩和させるという道によってそれをなしとげることは、不可能である。事実が証明しているように、アメリカ帝国主義は、フルシチョフ修正主義者の無原則的な妥協と譲歩によっても、少しも従順になったり、おとなしく平和的になったりしなかったばかりか、逆にますます傲慢で貪欲になった。しかしだからといって、マルクス・レーニン主義者は、帝国主義国または帝国主義グループの双方を互いにたたかわせることに賛成するものではなく、ましてや、帝国主義戦争を呼びかけるものでもない。なぜなら、それによって傷つくのは人民だからである。偉大なレーニンが指摘したとおり、われわれの政策の狙いは、戦争を挑発することにあるのではなく、帝国主義者が一致団結して社会主義国に襲いかかるのを阻むことにある。レーニンは次のようにのべている。

「もしわれわれが実際に労働者と農民を戦争に引きいれたとすれば、それは犯罪であるだろう。しかしわれわれのあらゆる政策と宣伝は、けっして諸国民を戦争に引きいれることではなく、戦争をおわらせることに向けられている。そして社会主義革命だけが、永遠の戦争からの活路であるということは、経験が十分に証明している*」。

＊『第八回全ロシア・ソヴェト大会』――邦訳『レーニン全集』第三一巻四七七ページ

したがって、労働者階級と広範な勤労者層および人民を革命的行動に立ち上がらせ、自国の帝国主義戦争挑発者の手を取り抑えるということこそ、唯一の正しい道である。マルクス・レーニン主義者はたえず、不正義の戦争にたいするもっとも断固たる反対者であったし、いまもそうである。レーニンが教えているように、共産主義的革命家の責務は、帝国主義の戦争挑発計画を粉砕し、戦争の勃発を阻止することである。もしもかれらがそのことを達成できなかったとき、そのときには、労働者階級と人民大衆を立ち上がらせ、帝国主義戦争を革命的解放戦争に転化しなければならない。

帝国主義者と社会帝国主義者のなかには、侵略戦争の血が流れている。かれらを戦争へとつき動かすのは、世界を自己の隷属下に置くという野望である。しかしながら、帝国主義世界戦争を引き起こすのは帝国主義者自身であるが、血の犠牲を払うのは、プロレタリアートと各国人民であり、革命家とすべての進歩的人人なのである。だからこそ、世界のマルクス・レーニン主義者、プロレタリアートと各国人民は、帝国主義世界戦争に反対し、帝国主義者の計画を挫折させ、かれらが世界を新たな屠殺へと引きずり込むことができないように、仮借なくたたかうのである。

したがって、中国修正主義者のように帝国主義戦争を主張するのではなく、それに反対してたた

かわなくてはならない。マルクス・レーニン主義者の任務は、世界のプロレタリアートと人民を抑圧者との闘争に決起させ、抑圧者の手から権力と特権を奪い取り、プロレタリアート独裁を打ち立てることである。ところが、中国はそうしようとはせず、中国共産党もそのために活動しようとはしていない。この党がしているのは、その修正主義理論によって革命を弱め、先へ引き延ばすとともに、プロレタリアートの前衛部隊、すなわち、この革命を組織し指導するマルクス・レーニン主義党を分裂させるということである。

中国指導部の唱える道はでたらめである。それは、マルクス・レーニン主義というわれわれの学説とはあいいれない道である。それどころか、中国の修正主義路線は、プロレタリアートと各国人民を切り崩して無力にするものであり、またかれらにたいし、犯罪的帝国主義戦争という血まみれの、かくも忌まわしい戦争の重荷を、自ら背負うようにと迫るものである。

こうした理由からも、毛沢東の「三つの世界」論、そして中国共産党と中国国家の政治的行動が革命的であり、マルクス・レーニン主義であるなどとはけっして言うことはできない。

フルシチョフが、社会主義と帝国主義とのあいだの経済競争、および政治上、イデオロギー上の競争を唱えたとき、中国指導部はこうした論点に反対すると称して、次のようにのべた。真の平和共存を実現するには、帝国主義とたたかわなければならない、なぜなら、「共存」によって帝国主義を打ち倒すことはできず、革命の勝利と各国人民の解放をもたらすことはできないからである、と。

しかしながら、こうした宣言は単なる空文句にとどまってしまった。実際には、中国共産党指導部は、フルシチョフ式の平和共存を支持してきたし、いまも支持しているのである。すでに本書でも引用した『国際共産主義運動の総路線についての提案』という文書のなかでは、こうのべられている。「原則的政策こそ、唯一の正しい政策である……原則的政策とはどのようなものだろうか。それはつまり、どんな政策を立案し練り上げる場合にも、われわれはプロレタリアの立場に立たねばならず、プロレタリアートの根本的利益から出発し、マルクス・レーニン主義の理論と基本命題を指針としなければならないということである」。中国共産党はこのようにのべていたが、では、現在に至るまでかれらは、一体どんなことをしてきたのだろうか。それがしてきたのは、まったく反対のことであった。

右の文書以外にも、中国共産党は折りにふれ、「アメリカ帝国主義は、革命と社会主義、全世界人民の最大の敵として暴露しなければならない」と言明してきた。また、それに加えて、「アメリカ帝国主義にたよるべきではなく、どの帝国主義と反動派にもたよるべきではない」とものべている。しかし、中国共産党はこれらの論点を実行に移さなかった。マルクス・レーニン主義の基本原則に確固として立脚するアルバニア労働党は、帝国主義および社会帝国主義との闘争を断固堅持している。そして、ほかならぬこの問題において、社会主義アルバニアは中国と対立し、アルバニア労働党は中国共産党と対立しているのである。中国指導部は、われわれアルバニア人に次のような非難を浴びせている。きみたちは、「国際情勢と諸矛盾をマルクス・レーニン主義で分析」しよう

とはせず、したがってまた、「統合ヨーロッパ」とヨーロッパ共同市場、そして全世界のプロレタリアはアメリカと団結してソ連に反対しよう、と呼びかけている中国の路線にも従おうとはしない、と。結局のところ、かれらによれば、アメリカ帝国主義や「統合ヨーロッパ」等等を支持しない以上、われわれはソ連社会帝国主義にいわば味方しているのだ、ということになる。

このようなかれらの立場は、「反修」を隠れ蓑とした修正主義であるばかりでなく、社会主義アルバニアを敵視し中傷するものでもある。アメリカ帝国主義は侵略的、好戦的であり、戦争を挑発している。アメリカは、中国の言うように現状維持だけを求めているのではなく、拡張を求めている。でなければ、アメリカはソ連とのあいだに矛盾をもつはずがない。中国指導部は、「アメリカは一匹のねずみ同然になり、世界中どの街へいっても、『殺せ、殺してしまえ！』とののしられている」という毛沢東の言葉を引きあいに出すが、その狙いは、戦争を望んでいるのはソ連だけであり、アメリカの側は望んでいないということを示すことにある。アメリカにたいするこうした柔軟さは、「一匹のねずみにかわり果てた」――だが同時に、中国の同盟国となるべき――この国が攻撃されるのを防ぐためなのである。これこそ、「マルクス主義者」毛沢東の反マルクス主義戦略である！

「三つの世界」論にもとづく分析のうえに打ち立てられた中国の「戦略」は、「二つの超大国の争奪の重点はヨーロッパにある」と「明確に」規定している。何と奇妙な話ではないか。では、どうしてヨーロッパだけが重点になって、アジアやアフリカ、オーストラリアやラテンアメリカな

ど、ソ連が拡張を求めている世界のどこか別の地域が重点とはならないのか。

中国の「理論家」たちは、このことについて説明しようとはしない。かれら自身の「論拠」の立て方はこうである。すなわち、アメリカの主な争奪相手はソ連であり、これら二つの超大国のうち、一方は現状維持を求め、他方は拡張を求めている。かれらは、ヒットラーのときのように、ヨーロッパで戦争を勃発させるだろう。そしてヒットラー自身も、拡張と世界制覇を追求したが、それをなしとげるには、まずはじめにフランス、イギリス、それからソ連を打ち破らなければならなかった。だからこそヒットラーは、ほかならぬヨーロッパで戦争を引き起こしたのだ、と。さらに中国修正主義者は、スターリンはイギリスとアメリカに頼ったと論をすすめ、それならばなぜ、われわれもアメリカに頼ってはならないことがあろうか、と結論づけている。しかしながら、本書ですでに説明したように、ソ連がイギリスやアメリカと手を結んだのは、ドイツによる対ソ侵攻ののちであって、それ以前ではなかったということを、かれらは忘れているのである。

ヴィルヘルム二世のドイツが、フランスとイギリスに攻撃をかけたとき、第二インタナショナルの頭目たちは「ブルジョア祖国擁護」を唱えた。ドイツとフランスの社会主義者は、いずれもこの立場に陥った。レーニンがこのことをいかに非難し、また、帝国主義戦争にどのように反対したかは周知のとおりである。現在、中国修正主義者は民族独立の擁護と称して、ヨーロッパ諸国人民と帝国主義との団結を説いているが、かれらのそうした行動もまた、第二インタナショナルの支持者たちの行動と同様のものである。レーニンの諸命題にそむいて、かれらは、二つの超大国が将来引

き起こそうとしている核戦争をあおり立てるとともに、西ヨーロッパ諸国の人民とプロレタリアートに向かって、次のような「愛国的」呼びかけを発している。すなわち、ブルジョアジーとの「小異」(つまり、抑圧や飢え、虐殺や失業についての)を捨てて、かれらの国家権力を脅かすのをやめ、NATOや「統合ヨーロッパ」、そして大ブルジョアジーとコンツェルンのヨーロッパ共同市場と団結し、ブルジョアジーの訓練された兵士として、ただソ連とだけたたかいたまえ、と。第二インタナショナルでさえ、これほどのことはできなかったであろう。

ところで、中国修正主義指導部は、ソ連人民にたいし、また、ワルシャワ条約機構とコメコンに加盟するその他の修正主義諸国の人民にたいして、一体どんなことを忠告しようとしているのか。そういったことは何一つしていないのである！　かれらはむしろ、この件については沈黙をきめこみ、これらの人民をいっさい無視しているのである。ときおりかれらは、これらの国国の修正主義支配集団に、ソ連から離反し、アメリカと手を結ぶよう勧告しているが、それらの国の人民にたいしては、事実上次のように訴えかけている。血に飢えたクレムリン一味におとなしく服従し、かれらの肉弾になるのだ！　と。中国修正主義指導部のこのような路線は、プロレタリアに敵対し、戦争を挑発するものである。

すべてこうしたことが示すように、中国指導部は意図的に国際情勢を複雑化させているのである。かれらはこの情勢を、中国を超大国にかえるという自己の利益から見ているのであって、革命の利益から見ているのではない。かれらが情勢をとらえようとしているのは、自分たちの帝国主義

国家の見地からであって、各国人民を解放するという見地からではなく、また、自国の革命と他の諸国の革命を抹殺する見地からであって、二つの超大国ならびに他のブルジョア資本主義諸国の圧政者に反対し、プロレタリアートと人民の闘争を組織し強化していくという見地からではない。さらにそれは、帝国主義世界戦争を扇動する見地からであって、それに反対する見地からではない。

超大国になり上がろうとする中国の路線は、だれよりもまず中国自身と中国人民にとって、重大な影響をおよぼすものとなろう。

中国の政策をマルクス・レーニン主義で分析することによって達する結論は、中国指導部が中国を袋小路に引き込もうとしている、ということである。かれらは、アメリカ帝国主義と世界資本主義に奉仕し、それによって自らも幾ばくかの利益を得ようと考えているが、そうした利益はあてにはならず、しかも、中国にとっては高くつくものとなろう。それはかえって、自国を破滅へ追いやるものとなり、そうなれば、他の諸国にも重大な余波をおよぼさずにはおかないだろう。

反マルクス主義のイデオロギーに励まされて超大国になり上がろうとする中国の政策は、あらゆる国の人民、そしてとくに、いわゆる第三世界諸国人民の眼前で暴露されつつあり、今後さらにいっそう暴露されるであろう。世界各国の人民は、社会主義であれ修正主義であれ、また、資本主義であれ帝国主義であれ、あらゆる国のとる政策の狙いを理解している。かれらは、中国が「第三世界」の一員を装いつつも、自分たちと共通の熱望と目的をもってはいないことを見抜いており、中

国が社会帝国主義の政策を追求していることを見てとっている。したがって、社会的・民族的抑圧を助長するこうした反人民的政策が、各国人民にとって容認しがたいということははっきりしている。それは、反動的一味にとってのみ、すなわち、人民を支配し抑圧する者たちにとってのみ利益となるような政策なのである。

中国は、アメリカの後おしを受けてエチオピアとたたかっているソマリアを支持し、それに武器を供与している。他方のエチオピアは、ソマリアに食い込もうとするソ連の支持を受けている。エリトリアでも、これと同じことが起こっており、こうして、中国が一方の側につき、ソ連が他方の側についている。もしソマリアに、中国を好意的な目で見る者がいるとすれば、それは権力者であって、殺傷されているその国の人民ではない。また中国は、ソ連の支持を受けているエチオピア指導部からも、さらには、エチオピア人民――かれらは、いわゆるエチオピア占領を狙うソマリアとの戦闘に駆り出されている――からも、好意の目で見られてはいない。

アルジェリアではどうかといえば、やはりそこでも、中国はよい目で見られてはいない。アルジェリアは「ポリサリオ」戦線を支援しているが、中国のほうは、モーリタニアとモロッコの側に、すなわちアメリカ帝国主義の側についているのである。

中国はその対外政策において、いわゆる親アラブ路線を遂行しているが、この政策の内容は、もっぱら、アラブ諸国人民を糾合してソ連社会帝国主義とたたかわせるという点にある。ここからして、中国がアラブをだれよりもまずアメリカに何とか接近させるよう促していることは、おのずと

明らかである。

イスラエルに関しては、中国指導部は口をきわめてそれを非難している、だが現実には、かれらの戦略は親イスラエルである。アラブ人民、とりわけパレスチナ人民は、かねてからこのことに気づいている。

アジア諸国においては、中国は、永続的かつ顕著な影響力をもってはいないと言えよう。中国は、より離れた諸国とはもとより、近隣諸国とさえも、誠実で親密な友好関係にはない。中国の政策は正しいものではなく、それがマルクス・レーニン主義の政策でないかぎり、正しいものとはなりえない。そうした政策を基礎としていては、ベトナムや朝鮮、カンボジア、ラオス、タイなどと誠実な友好を結ぶことはできない。中国自身は、これらの国国との親交を望んでいるかのようにふるまっているが、しかし実際上、それらとのあいだには、政治・経済問題および領土問題をめぐる確執が存在している。

中国は自らが遂行する政策によって、いまやベトナムとの公然たる衝突にまで至っており、両国の国境ではゆゆしい出来事が起こっている。中国社会帝国主義者は、ベトナムの内政に重大な干渉を加えてきたが、現在では、自らの拡張主義的狙いのために、カンボジアとベトナムその他の国国のあいだの紛争をあおり立てている。中国指導部が、つい昨日まで自分たちの兄弟国、親密な友と見なしていたベトナムにたいしてさえ、そうしたふるまい方をしているとなれば、アジア諸国は中国の政策を一体どう考えればよいのか。果たして中国の政策を信頼できるだろうか。

ラテンアメリカ諸国については、中国の影響力をうんぬんすること自体が時間の無駄というものである。そこでの中国の影響力は、政治的・イデオロギー的にであれ、あるいは経済的にであれ、皆無である。その影響力は、せいぜいピノチェットの類の、凶悪な殺し屋的ファシストと親睦関係にあるぐらいが関の山である。中国のこのような立場は、ラテンアメリカ人民のみならず、全世界世論の憤激をかき立てている。かれらは、中国指導部が、人民のうえに君臨する圧政者や独裁者、将軍連中を支持し、さらには、この大陸の諸国人民ののど元を締めつけているアメリカ帝国主義を支持していることを、見抜いているのである。ここからして、ラテンアメリカ諸国での中国の影響力は、堅固で強力なものではなく、とるに足りないものであると言えよう。

中国指導部の政策は、各国人民の共感と支持を得ていないばかりか、逆に、中国をますます進歩的諸国と世界プロレタリアートから孤立させることになるだろう。一九七七年一〇月一日、すなわち国慶節の当日、天安門の楼上には、中国の指導者と並んでドイツの旧ナチス将軍や日本軍国主義の将官たち、ポルトガルのファシスト将軍その他が列席した。それを見れば、どの国のプロレタリアートと人民も、またどんな革命家も、中国の政策を支持するはずがない。

中国は、自国の広範な勤労大衆への搾取を強めることなしには、超大国への変貌の道をすすむことはできない。アメリカやその他の資本主義国は、中国への資本投下によって超過利潤を確保しようと努めるだろうし、また、中国社会の土台と上部構造が資本主義の方向へと急速かつ根本的に転換されるよう迫るであろう。中国ブルジョアジーとその巨大な官僚機構を支え、かつ外国資本家

への借款と利子の返済をまかなうために、数億もの大衆にたいする搾取を強めることは、疑いもなく、一方における中国のプロレタリアートおよび農民と、他方におけるブルジョア・修正主義支配者とのあいだに深刻な矛盾を引き起こすであろう。そしてこのことは、ブルジョア・修正主義支配者を自国の勤労大衆と対立させ、中国国内に、鋭い衝突と革命的爆発をもたらさずにはおかないのである。

第三章　「毛沢東思想」は反マルクス主義の理論である

中国共産党の現状と幾多の曲折、その動揺的、日和見主義的立場と戦略上の度重なる転換、および、中国指導部がこれまで追求してきた、また現に追求している中国の超大国化政策——これらのことから、至極当然にも生じる問題は、中国革命における毛沢東とその思想、いわゆる毛沢東思想の地位と役割という問題である。

「毛沢東思想」は、マルクス・レーニン主義の特質を欠いた「理論」である。かつて権力の座にあった者も現在権力を握っている者も、中国のあらゆる指導者は、その組織形態や行動様式の点でも、またかれらが掲げる戦略的・戦術的目標の点でも、「毛沢東思想」を大いに活用してきたが、それはすべて、自己の反革命的計画を実行に移すためであった。

われわれアルバニアの共産主義者は、中国の不審な行動と矛盾に満ちた動揺的立場を目にし、また、中国の内外政策の無原則性とプラグマチズム、マルクス・レーニン主義からの逸脱、あるいはそれをおおい隠すためにかれらが左翼的言辞を弄するのを目の当りにして、「毛沢東思想」にたいする見解をしだいに固め、その危険性を確信するようになった。民族解放戦争期にわが党が創立さ

れたときにも、また解放後においても、わが党の党員は中国についてはほとんど知識をもっていなかった。しかし、世界のすべての革命家と同様われわれも、「中国は広大な大陸であり、たたかっている。中国では外国帝国主義とその権益に反対する革命がわき立っている」などと、中国を進歩的に評価していた。われわれは、孫逸仙の活動、かれとソ連およびレーニンとのつながりや友情について、大ざっぱにではあれ若干の知識をもっていたし、国民党のことや中国人民の抗日戦争についても、また中国共産党——それは、マルクス・レーニン主義者毛沢東を指導者とする偉大な党であると見なされていた——の存在についてもいくらかは知っていた。しかし、それがすべてであった。

わが党が中国とよりいっそう緊密な接触をもつようになったのは、一九五六年以降であった。この関係は、わが党がフルシチョフ現代修正主義に反対する闘争をくり広げるにつれて、しだいに発展した。そのとき以来、われわれと中国共産党、より正確にいえばその指導幹部との接触はより頻繁で緊密なものとなったが、それは、中国共産党自身がフルシチョフ修正主義者と公然と衝突するようになってからはなおさら進展した。しかし、われわれが認めなければならないのは、中国の指導者との会談は良好で同志的なものであったとはいえ、そのなかでもなお毛沢東と中国共産党は、われわれにとってやはり大きな謎であったということである。

ではなぜ、中国と中国共産党、毛沢東は謎であったのか。それが謎であったというのは、一連の政治的、イデオロギー的、軍事的、組織的重要問題にたいする中国指導部の態度——指導部全体の

ものであれ個個の指導者のものであれ――が、あるときには右に、あるときには左に動揺をくり返していたからである。かれらの態度はあるときには断固としていたが、別のときには優柔不断であった。かれらはときには正しい立場をとることもあったが、多くの場合目についたのは、その日和見主義的立場であった。毛沢東の生前の全期間を通じて、中国の政策は概して動揺的なものであったし、状況に応じてたえず変動する、マルクス・レーニン主義の背骨を欠いた政策であった。かれらは重要な政治問題について今日はああ言ったかと思えば、翌日にはそれとまったく矛盾することを言った。中国の政策のなかに、それを貫く首尾一貫した赤い糸を見出すことはできなかった。

もちろんこうした態度はすべてわれわれの注意を引いたし、われわれはそれらを承認しはしなかった。しかし、それでもなおわれわれは、毛沢東の活動について知りうる範囲において、毛沢東はマルクス・レーニン主義者であるとの漠然とした考えに立っていた。われわれは、次のような毛沢東の多くの命題、すなわち、プロレタリアートとブルジョアジーとの矛盾を非敵対的矛盾として処理する命題、社会主義の全期間を通じて敵対的諸階級が存在するという命題、あるいは革命における農民の役割を絶対視する「農村で都市を包囲する」という命題等等については留保し、われわれ自身のマルクス・レーニン主義的見解をもっていた。われわれは機会あるごとに、その見解を中国指導部に表明した。しかし、毛沢東と中国共産党の政治的な見解と立場のうちで、わが党のマルクス・レーニン主義的な見解と立場に合致しない一部のものについては、われわれはそれを特定の状況のもとではやむをえない大国の一時的な戦術であると見なしていた。しかし、時の経過とともに

よりいっそう明らかになったように、中国共産党がとっていた立場はけっして正当な戦術ではなかったのである。

わが党は事実を分析して、一定の全体的・個別的結論に達した。そのことによってわれわれは警戒心を高めたが、中国共産党、中国指導部との論戦についてはこれを避けた。それは、われわれがかれらと論戦をおこなうのを恐れたからではなく、中国共産党と毛沢東本人の誤った反マルクス主義の路線についてわれわれが知っていた事実が不完全なものであり、そのために最終的結論を引き出すことができなかったからである。また他方で中国共産党は、なおしばらくはアメリカ帝国主義と反動に反対していたし、ソ連のフルシチョフ修正主義にも反対の態度をとっていた。もっともいまにしてみれば明らかなように、ソ連修正主義に反対するかれらの闘争は、マルクス・レーニン主義の原則にもとづく正しい立場からおこなわれたものではなかった。

またわれわれは、政治、経済、文化、社会その他の分野にわたる中国の国内事情についても十分な知識をもっていなかった。中国の党と国家の組織についても、われわれはずっと何も知らされずにきた。中国共産党は、われわれがそれらの組織形態について学ぶ可能性をまったくあたえようとはしなかったのである。ただ、われわれアルバニアの共産主義者が知っていたのは、中国の国家組織の概要にすぎなかった。それというのもわれわれには、中国共産党の経験にふれ、それがどのように活動しいかに組織されているのか、またどんな方向で各部門の活動が展開され、その方向とは具体的にどのようなものであるのかを知る可能性が、あたえられていなかったからである。

中国指導部は狡猾にふるまった。かれらは、中国の党と国家の活動を知るうえで必要な多くの文書を公表しようとはしなかったし、また各種の文書を公表すること自体を用心深く避けてきた。われわれの手元にあるわずかな文献でさえ、断片的なものにすぎない。公式なものと考えられる『毛沢東選集』全四巻には、一九四九年以前の資料しか含まれておらず、しかもそれらには、中国で実際に起こった状況が正確に反映されないように、慎重に手が加えられているのである。

文学作品は言うにおよばず、中国の新聞の政治的・理論的問題提起はまったく混乱しており、単に宣伝的性格をもつものにすぎなかった。それらの論文は、「三反・五反」「四旧四新」「両憶三査」「七分の功績と三分の誤り」等等といったように算術的に表現された、中国特有の紋切り型の公式で満たされていた。われわれがこれらの算術的数字から「理論的」な意味をくみとるのは困難であった。というのは、われわれは伝統的なマルクス・レーニン主義の理論と素養に従って思考し、行動し、著述するのをつねとしているからである。

中国指導部は、かれらの経験に学ぼうとするわが党の代表団を、いっさい招請しなかった。そして、わが党の要求によって何らかの代表団が訪中したときでさえ、中国側はもっぱら宣伝に終始し、党の活動についていくらかでも説明をしたり、経験を伝えたりするのではなく、それよりもむしろ、人民公社や工場を訪問させるためにわが党代表団をあちこちと引き回すだけであった。ところで、かれらがそうした不可解な態度をとったのは、だれにたいしてなのか。それはかれらの友人であり、もっとも困難な状況下で中国を擁護していた、ほかならぬわれわれアルバニア人にたいして

なのである。そうした行為はすべて、われわれにとっては理解しがたいものであったが、それらは同時に、中国共産党が自らの実情についてわれわれに明確には知られたくないということを示す一つの合図でもあったのである。

しかし、わが党の注意をもっとも強くひいたのは、文化革命であった。それは、われわれの心のなかに一連の重大な疑問を呼び起こした。毛沢東によって発動された文化革命の期間中に、中国共産党と中国の国家の活動における政治上、イデオロギー上、組織上のおどろくべき思想と行動が明るみに出された。それらは、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの教えにもとづくものではなかった。わが党は、かれらの過去の怪しげな行動と、文化革命の期間中に見られた行動とを判断し、またとりわけ文化革命から今日に至るまでの事態、すなわち互いに対立する自己流の政綱をもつあれこれの集団が指導部内においてくり返してきた興亡——きょうは林彪集団かと思えば、あすは鄧小平あるいは華国鋒の集団といった具合に——に評価を加えてきたが、こうした事態はすべて、毛沢東と中国共産党の見解と行動にさらにいっそう突っ込んだ検討を加え、「毛沢東思想」についてより全面的な認識をもつことをわが党に迫るものであった。この文化革命が党によって指導されたものではなく、毛沢東が出した呼びかけによって引き起こされた無秩序な爆発であるのを見たとき、われわれには、それが革命的立場に立つものであるとは思えなかった。何百万という未組織の青年、学生・生徒が立ち上がり、北京に向けて、また党委員会と国家の諸機関に向けて行進し、それらを解散させたが、かれらにそうさせたのは、中国における毛沢東の権威であった。中国

で当時言われていたのは、これらの青年は「プロレタリア・イデオロギー」を代表しており、党とプロレタリアに「真の」道を指し示す(!)ということであった。

そのような顕著な政治的性格をもっていた革命が、文化革命と呼ばれていたのであった。わが党の見解では、この名称はきわめて不的確なものであった。というのは、中国で燃え上がったこの運動は、実際には政治的運動であり、文化的運動ではなかったからである。しかし主要な問題は、この「プロレタリア大革命」の指導部には党もプロレタリアートも存在していなかったという事実であった。こうした深刻な事態は、革命におけるプロレタリアートの指導的役割を過小評価し青年を過大評価する、毛沢東の古くからの反マルクス主義的概念を根源としていた。毛沢東は、「『五・四』いらい、中国の青年たちはどんな役割をはたしてきたか。ある種の先頭部隊としての役割をはたしてきた。このことは頑迷分子をのぞいて、全国のすべての人びとがみとめている。先頭部隊としての役割とはなにか。それは率先的役割であり……」とのべている。*

* 『青年運動の方向』――『毛沢東選集』第二巻三二五ページ

このように労働者は傍観者の地位に置かれ、しかも多くの場合、かれらは紅衛兵に反対し、それとたたかいさえしたのである。当時中国に滞在していたわが同志たちは、工場労働者が青年たちと戦闘しているのを目の当りに目撃した。党は四分五裂となって崩壊し、共産党員とプロレタリアー

トはまったく無視されていた。それは、まさに重大な事態であった。

わが党が文化革命を支持したのは、中国革命の勝利が危機に瀕していたからであった。毛沢東自身われわれに、党と国家の権力は劉少奇、鄧小平の裏切り者集団に乗取られており、中国革命の勝利は危機に瀕していると語った。こうした状況のもとで、だれが事態をそこまでに至らせたのかはさておいて、わが党は文化革命を支持したのである。わが党は、兄弟の中国人民を擁護し、中国における革命と社会主義の事業を擁護したが、権力を奪いあうために互いに争い、果ては武力衝突さえ引き起こしていた反マルクス主義集団による派閥抗争については、これを支持しなかった。

その後の事態の推移が示しているように、プロレタリア文化大革命はけっして革命でも、偉大でも、文化的でもなく、ましてやいささかもプロレタリア的ではなかった。それは、実権を握っていた一握りの反動派を駆逐するための、全中国的規模での宮廷反乱であった。

この文化革命というのは、もちろん一種のごまかしであった。それは中国共産党と大衆諸組織のいずれをも瓦解させ、中国を新たな混乱に引きずり込んだ。この革命を導いていたのは非マルクス主義分子たちであったが、かれらも別のファッショ的反マルクス主義分子による軍事クーデターによって粉砕されたのである。

われわれの新聞・雑誌は毛沢東を偉大なマルクス・レーニン主義者と呼んできたが、われわれはけっして中国の宣伝機関による定義——それらは毛沢東をマルクス・レーニン主義の教師と呼び、「毛沢東思想」をマルクス・レーニン主義のより高度な第三の段階と呼んでいた——を用いはしな

かったし、それを認めもしなかった。わが党は、中国における毛沢東崇拝の増長は、マルクス・レーニン主義と両立しえないと考えた。

文化革命の混沌とした展開とその結末によって、まだ十分には固まってはいなかったが、次のような考えはよりいっそう強められた。それは、中国ではマルクス・レーニン主義は知られておらず適用もされていないということであり、要するに中国共産党も毛沢東も、見せかけやそれらが用いる「プロレタリアートとその独裁、プロレタリアートと貧農の同盟」といったスローガン、あるいはその他多くの同じような決まり文句にもかかわらず、マルクス・レーニン主義の観点をもちあわせてはいないのだ、ということであった。

こうした事態に照らして、わが党は、フルシチョフ修正主義にたいする中国指導部の態度に見られた動揺の原因について、さらに突っ込んだ究明をはじめた。そうした動揺は、たとえば一九六二年、アメリカ帝国主義に反対する共同戦線などという名目でソ連修正主義者との和解と団結を求めたときや、一九六四年に、ソ連との和解の努力をつづけていた周恩来がモスクワを訪れ、実権を握ったブレジネフ集団に歓呼を送ったときに見られたものである。これらの動揺は偶然のものではなかった。それは、革命的原則と一貫性の欠如を反映したものであった。

ニクソンが中国に招かれ、毛沢東をはじめとする中国指導部がアメリカ帝国主義との接近と連合の政策を声明したとき、中国の路線と政策がマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義にまったく反するものであることは、なおいっそう明白になった。その後、中国の排外主義的、覇権主

義的野望はますます公然たるものになっていった。中国指導部は、各国人民の革命闘争と解放闘争、および世界プロレタリアートと真のマルクス・レーニン主義運動に、それまでよりいっそう露骨に反対しはじめた。かれらは、いわゆる「三つの世界」論を打ち出し、それをマルクス・レーニン主義運動全体の総路線としておしつけようと試みた。

アルバニア労働党は、革命と社会主義の利益のために、また、中国共産党の路線に見られる誤りは情勢にたいする誤った評価とさまざまな困難性に起因するものであるとの考えから、中国指導部がそれらを正し、克服するのを再三再四援助しようとしてきた。わが党は、毛沢東やその他の中国の指導者に、誠実で同志的な方法で自己の見解を率直に表明してきたし、マルクス・レーニン主義運動の総路線、各国人民と革命の利益を直接に損なう中国の行動の多くについては、中国共産党中央委員会にたいし、公式に文書でわれわれの批判と不同意とを通告してきた。

しかし中国指導部は、わが党の正当な原則的指摘をけっして歓迎しなかった。かれらは一度もそれにこたえたためしがなく、また、それを検討しようとさえしなかった。

その間にも、内外における中国指導部の反マルクス主義的行動は、すます露骨で目に余るものとなった。こうしたことはすべて、他のあらゆるマルクス・レーニン主義者と同様わが党にも、中国共産党の路線、党を導く政治的・イデオロギー的概念、この党の具体的活動とその帰結について再評価をおこなうことを迫った。その結果われわれは、中国共産党をかつて導きいまも導いている「毛沢東思想」が、現代修正主義の危険な一変種であり、それにたいしては、理論と政治の領域で

全面的な闘争をくり広げなければならないことを理解するようになったのである。

「毛沢東思想」は修正主義の一変種である。それは早くも第二次世界大戦前に、とりわけ毛沢東が実権を握った一九三五年以降に形成されはじめた。この時期に、毛沢東とその支持者たちは、「教条主義」、「出来合いの型」、「洋八股」等等に反対する闘争のスローガンを掲げて「理論的」キャンペーンに乗り出し、マルクス・レーニン主義の普遍的性格を否定して民族的マルクス主義を仕上げるという問題をもち出した。毛沢東は、マルクス・レーニン主義のかわりに、問題を扱うための「中国のやり方」、および「新鮮でいきいきとした、中国の民衆によろこばれる中国的な作風＊」を説き、こうして、マルクス主義はそれぞれの国において独自の個別的内容をもたなければならないという修正主義的命題を宣伝した。

＊『党八股に反対しよう』――『毛沢東選集』第三巻八七ページ

「毛沢東思想」は、現代におけるマルクス・レーニン主義の最高峰であると宣言された。中国指導部は、「毛沢東は、マルクス、エンゲルス、レーニン以上のことをなしとげた」と言明してきた。毛沢東の指導下で開かれた九全大会において採択された中国共産党規約には、「毛沢東思想は……時代のマルクス・レーニン主義である」、毛沢東は「……マルクス・レーニン主義をうけつぎ、

守り、発展させて、マルクス・レーニン主義をまったく新しい段階に高めた*」と書かれている。

＊『中国共産党第九回全国代表大会文献集』一一八―一一九ページ

党活動の基礎をマルクス・レーニン主義の原則と準則にではなく、「毛沢東思想」に置いたことによって、中国共産党内の日和見主義と派閥抗争のための門戸はよりいっそう広く開け放たれた。「毛沢東思想」はさまざまな観点の混合物であり、そこではマルクス主義からの借り物の思想と命題が、その他の哲学の観念論的、修正主義的かつプラグマチックな原理と渾然一体となっている。その根源は古代中国哲学にあり、中国の政治的・イデオロギー的過去、ならびに国家と軍閥の慣習にある。

中国の指導者は、現在権力を握っている者も、またかつて権力の座にあり、その後権力の座からすべり落ちはしたが自己の反革命的企てを実行に移すために策動しつづけてきた者も、すべて「毛沢東思想」をイデオロギー的基礎としてきたし、いまもしている。毛沢東本人も、自分の思想が万人によって、すなわち左派によっても右派によっても――かれは中国指導部を構成するさまざまな集団をそう呼んだ――利用されうるものであることを認めていた。一九六六年七月八日に江青にあてた手紙のなかで毛沢東は、「実権を握った右派は自己の地位を強めるために一時期私の言葉を利用するだろうが、しかし左派も私の他の言葉を用い、組織を強めて右派を打倒することができ

る*」とはっきりのべている。このことが示しているように、毛沢東はマルクス・レーニン主義者ではないし、かれの観点は折衷的なものである。それは、毛沢東の「理論的著作」にも明白にあらわれている。それらの著作は、「革命的」な言辞やスローガンで粉飾されてはいるが、「毛沢東思想」がマルクス・レーニン主義とは無縁のものであるという事実をおおい隠すことはできない。

＊『ル・モンド』紙、一九七二年一二月二日付

毛沢東の著作をほんの一部でも批判的に研究しさえすれば、また、共産党の役割や、革命と社会主義建設の問題等等に関する基本的諸問題をかれがどのように扱っているかを批判的に検討しさえすれば、「毛沢東思想」とマルクス・レーニン主義の根本的相違は一目瞭然である。

最初に、**党の組織化と党の指導的役割の問題**を取り上げよう。毛沢東は、党に関するレーニン主義の原則を適用するのに賛成であると主張している。しかし、党についての、とりわけ党生活の実際についてのかれの思想を具体的に分析すれば、かれがレーニン主義の原則と準則を修正主義的命題に置きかえていることは明白になる。

毛沢東が中国共産党を組織するうえでよりどころとしたのは、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの原則ではなかった。かれは、中国共産党をレーニン主義型の党、すなわちボリシ

ェビキ党にするために活動しはしなかった。毛沢東が求めていたのは、プロレタリア階級の党ではなく、階級的制約のない党であった。かれは、党と階級の区別を取り払うために、党を大衆化するというスローガンを掲げた。その結果この党は、だれもが自分の好きなときに入党したり脱党したりできるものになってしまった。この問題に関する「毛沢東思想」の見解は、ユーゴスラビア修正主義者や「ユーロコミュニスト」のそれと一致している。

それ以外にも毛沢東は、党建設およびその原則と準則を、自己の政治的立場と利益に、また、あるときには右翼日和見主義的な、あるときには左翼冒険主義的な自己の政策に、あるいは派閥抗争などに、つねに従属させてきた。

中国共産党の内部には、真にマルクス・レーニン主義的な思想と行動の一致は、かつて存在したことはなかったし、いまも存在していない。その創立以来たえず存在してきた派閥間の抗争のために、中国共産党内には正しいマルクス・レーニン主義路線が確立されず、したがってまた、マルクス・レーニン主義思想はこの党の指針とはならなかった。党の主要な指導者にあらわれていたさまざまな傾向には、その時時によって左翼主義的なものもあれば右翼日和見主義的なものもあり、また、中間派的なものもあれば、極端な場合には公然たる無政府主義、排外主義、人種主義の観点に至るものまであった。毛沢東とその取り巻き集団が党首脳部の地位についていた全期間を通じて、こうした諸傾向は中国共産党のきわだった特徴の一つをなしていた。毛沢東自身、党内における「二つの路線」の存在の必要性を唱えてきた。かれに従えば、二つの路線の存在と闘争は自然なことで

あり、それは対立物の統一の一つのあらわれであり、原則性と妥協を統一した弾力的政策であるということになる。かれは、こう書いている。「こうすれば、われわれは手を二本もつことになる。つまり、誤りを犯した同志にたいし、一方の手ではこれと闘争し、もう一方の手ではこれと団結するのである。闘争の目的はマルクス主義の原則を堅持することにあり、これを原則性という。これが一方の手である。もう一方の手では団結をはかる。団結の目的は活路をあたえ、妥協を成立させることにあり、これを弾力性という*」。

＊『党内団結の弁証法的方法』――『毛沢東選集』第五巻七七四ページ

こうした見解は、共産党は組織された一個の前衛部隊であり、単一の路線、思想と行動の鋼鉄の団結をもつものでなければならないとするレーニン主義の教えにまったく反している。

党外で進行する階級闘争の反映として党内に階級闘争が存在するということは、「党内における二つの路線」に関する毛沢東の概念とは縁もゆかりもない。党は、敵対的階級間の闘争がおこなわれる諸階級の闘技場ではなく、相対立する目的をもつ人人の集まりでもない。真のマルクス・レーニン主義党はただ労働者階級のみの党であり、この階級の利益に立脚する。このことは、革命と社会主義建設の勝利にとって決定的な要素である。共産党の内部に多数の路線、対立する諸潮流の存在を許さない党に関するレーニン主義的原則を擁護して、イ・ヴェ・スターリンは次のように強調

している。
「……共産党はプロレタリアートの**一枚岩**の党であって、種々ことなった階級的要素のブロックの党ではない*」

* 『国の工業化およびソ同盟共産党(ボ)内の右翼的偏向について』——邦訳『スターリン全集』第一一巻三一三ページ

ところが毛沢東は、党を相矛盾する利害を有する諸階級の連合と見なし、内部で二大勢力、すなわちプロレタリアートとブルジョアジー、「プロレタリア司令部」と「ブルジョア司令部」——それらは党の底辺から最高指導機関に至るすべてに代理人をもつものでなければならなかった——とが互いに対決し闘争する組織であると考えた。そこで一九五六年、かれは左右両派の指導者を中央委員に選出しようとして、そのために、次のようなあきれるほど幼稚な論拠を挙げたのである。かれはこうのべている。「かれらが路線上の誤りを犯したことは、全国に知れわたっており、全世界に知れわたっている。かれらを選ぶ理由は、かれらの名が売れているという点にある。かれらの名は売れているのだ。誤りを犯さないか、小さな誤りしか犯さないきみの名は、かれらの名ほど売れていないのだから、どうにもしようがないではないか。小ブルジョア階級がきわめて多いわが国

では、かれらは旗じるしなのである」。[*] 毛沢東は党内における原則的闘争を放棄する一方で、諸派閥をもてあそび一部の派閥をしりぞけるために他の一部と妥協して、自分自身の地位を強固にしようとしたのである。

＊『党の団結をつよめ、党の伝統を受け継ごう』――『毛沢東選集』第五巻四六七―四六八ページ

そうした組織綱領をもつ中国共産党は、けっしてマルクス・レーニン主義党ではなかったし、またそうではありえなかった。そこでは、レーニン主義の原則と準則は無視されていた。党の集団的最高機関である党大会は、定期的に開かれたことがなかった。たとえば、七全大会から八全大会までのあいだには一一年間、戦後の八全大会から九全大会までのあいだには一三年間の開きが存在している。さらに、開催された大会も形式的なものであり、活動上の会議というよりはむしろ示威的なものであった。大会代議員も、党生活のマルクス・レーニン主義的原則・準則にのっとって選出されるのではなく、指導機関によって任命され、終身代表制にそって行動した。

最近『人民日報』は、中国共産党中央委員会「中央弁公室」のいわゆる理論学習小組の論文[*]を掲載した。この論文がのべているところによれば、毛沢東は「中央弁公室」の名のもとに、政治局や党中央委員会、あるいは国家と軍隊、公安機関等の幹部を監視と統制のもとに置く特別機構を身辺に設置した。この弁公室に出入りし、その活動を知ることは、中央委員や政治局員を含めてだれに

も禁じられていた。あれこれの派閥集団を登用したり引きずり降したりする計画は、ここで策定された。中央弁公室の要員はいたるところにおり、党の統制を離れて独自に盗聴し、監視し、報告した。それ以外にもこの弁公室は、「毛主席の警備隊」という名に隠れた武装部隊のすべてを意のままにすることができた。五万人強を擁するこの近衛部隊は、主席が「一撃を加え」ようと意を決したときにはいつでも行動を起こした。それは、中国共産党史上しばしば起こったことであり、最近では、華国鋒による「四人組」とその支持者の逮捕にも見られるとおりである。

＊『毛主席の教えを永遠に銘記してプロレタリア階級独裁下の継続革命を堅持する』——『人民日報』一九七七年九月八日付

毛沢東はまた、大衆との接触を保つという口実のもとに、各地に特別な情報提供者網をつくり出した。これらの情報提供者が任務としていたのは、だれにも内密で下部の幹部を監視し、大衆の状況と心理を調査することであった。かれらは毛沢東ただ一人にたいして直接報告した。こうして、大衆とのコミュニケーション手段のいっさいから切り離されていた毛沢東は、もっぱらお抱えの「中央弁公室」の特務による報告を通じて世界を見ていたのである。毛沢東は、「わたし自身について言えば、わたしはラジオを聞かない人間の一人です。外国のものも、中国のものもです。わたしは、ただ放送するだけです」とのべ、さらに次のように言った。「わたしは、『人民日報』はもう

見ないと声明しました。わたしは編集長に、君の新聞は読まないといいました*」。

＊アルバニア労働党の同志との談話(一九六七年二月三日)より——アルバニア労働党中央文書保管所

『人民日報』の論文は、中国の党と国家における毛沢東の反マルクス主義的指導と個人的権力をよりいっそう鮮明に理解するうえで、新しい材料を提供している。毛沢東は、全党や下級の委員会は言うにおよばず、党中央委員会や党大会すらもまったく尊重したためしがなかった。各級党委員会と指導幹部、そして中央委員会自身も、この「中央弁公室」という「特別司令部」——それは、ただ毛沢東にだけ責任を負っていた——から命令を受け取るだけであった。各級党会議や被選出党機関は、いかなる権限も有してはいなかった。『人民日報』の論文は、「電報や手紙、文書を出すばあいには、すべてまず毛沢東の目を通し、その承認を受けてからでなければならなかった」とのべている。それは、毛沢東が早くも一九五三年に、次のような厳命を下していることからも明らかである。「今後、党中央の名義で文書、電報を出すばあいは、すべて、わたしが目を通してからでなくてはならない。さもなければ無効である」*と。このような状況のもとでは、集団的指導や党内民主主義、あるいはレーニン主義的準則については語ることさえできない。

＊『劉少奇、楊尚昆が規律にそむき、独断で党中央の名義を用いて文書を出したことにたいする批判』

――『毛沢東選集』第五巻一一七ページ

毛沢東の無制限の権力は、自分の後継者を指名するほど絶大なものであった。かれは一度は、劉少奇を後継者に指名した。のちにかれは、自分の死後党と国家における後継者となるのは林彪だと言明した。マルクス・レーニン主義党の慣例として前代未聞のこうしたやり方は、党規約においてさえ定められていた。そして、毛沢東死後の党主席として華国鋒を指名したのも、これまた毛沢東自身であった。権力を一手に掌握した毛沢東一人が、党と国家の首脳陣を次次に批判し、裁き、処罰し、のちにふたたび復活させた。鄧小平の場合も、そうであった。かれは一九六六年一〇月二三日のいわゆる自己批判書のなかで、次のように言明していた。「劉少奇とわたしは、真の王党派です。わたしの誤りの本質は、わたしが大衆を信頼せず、革命的大衆を支持せず、かれらに反対している点にあります。わたしは革命を抑圧する反動路線を歩んできました。階級闘争のなかで、わたしはプロレタリア階級の側に立たず、ブルジョア階級の側に立ってきました。……そうしたことをすべてからわかるように……わたしが責任ある地位についているのは不適当です*」。そして、この頑迷な修正主義者は、これらの罪状を犯したにもかかわらず、ふたたび以前の地位に返り咲いたのである。

＊　鄧小平の自己批判書より――アルバニア労働党中央文書保管所

党とその役割に関して見られる「毛沢東思想」の反マルクス主義的本質は、党と軍隊の関係が理論上どのように考えられ、実践上どのように適用されているかを見ても明らかである。毛沢東は、「党は軍隊の上に立つ」とか「政治が鉄砲を指揮する」等等の決まり文句を並べ立ててはいるが、実際にはかれは、国内生活における主要な政治的役割を軍隊に担わせている。戦争の当時、かれは次のようにのべている。「軍隊の幹部はすべて……労働者を指導し労働組合を組織すること、青年を動員し組織すること、新解放区の幹部と団結しかれらを訓練すること、工業や商業を管理すること、学校、新聞、通信社、放送局を管理すること、外交問題を処理すること、各民主政党、人民団体にかんする問題を処理すること、都市と農村の関係を調整し、食糧、石炭、その他の必需品の問題を解決すること、金融と財政の問題を処理することなどがうまくできるようにならなければならない*」。

＊『軍隊を工作隊に変えよ』――『毛沢東選集』第四巻四四四ページ

このように、軍隊は党や国家機関の上に、またすべてのものの上に置かれている。このことから明白になるように、革命と社会主義建設における決定的要素としての党の役割に関する毛沢東の言葉は、単なるスローガンにすぎなかったのである。解放戦争当時にも、また中華人民共和国成立後

も、実権を握るために次次と派閥間でくり広げられてきた果てしない抗争において、つねに決定的な役割を演じたのは軍隊であった。文化革命の時期にも、軍隊は主役を演じた。それは、毛沢東の最後の手段であった。一九六七年に毛沢東は、次のようにのべている。「われわれは軍隊の力に頼っています。……われわれは北京では二個師団を持っているだけでしたが、五月には旧北京市党委員会と決着をつけるためにさらに二個師団を投入しました＊」。

＊　アルバニア人民共和国友好代表団との談話（一九六七年一二月一八日）より——アルバニア労働党中央文書保管所

毛沢東は、かれのイデオロギーに反対する者を一掃するために、いつも軍隊を出動させてきた。のちにかれは、劉少奇および鄧小平の集団に対抗させるために、林彪を頭とする軍を起用した。のちにかれは周恩来と組んで、林彪に反対するために軍を組織し投入した。毛の死後にも軍は、「毛沢東思想」に動かされ、同様の役割を演じた。華国鋒も、かつて中国で権力の座についたすべての者と同様、軍隊にたより、軍隊を通じて行動した。毛沢東の死の直後、かれはただちに軍を発動し、葉剣英や汪東興らの軍人と結託してクーデターを画策し、反対者を逮捕したのである。

中国の権力はいまなお軍隊に掌握されており、党はその尻尾につき従っているにすぎない。それは、修正主義の支配する国国に共通した特徴である。真の社会主義国も、社会主義の敵が反乱を

起こしたときにそれを粉砕し、帝国主義者と外国の反動による攻撃のさいに国を防衛するために、プロレタリアート独裁の強力な武器として軍隊を強化する。しかし、マルクス・レーニン主義がわれわれに教えているように、軍隊がそうした役割を果たすのは、あくまでも党の指揮下においてでなければならず、党が軍隊の指揮下にあってはならないのである。

現在中国に君臨しているのは、軍のもっとも強力な、もっとも反動的な諸派閥であり、かれらは、中国を社会帝国主義に仕立て上げようと狙っている。

今後、中国が帝国主義超大国へと変質していくにつれて、国内生活における軍の役割と実権はますます増大しつづけるにちがいない。それは、資本主義制度と資本主義経済を守るための、完全武装した近衛部隊として強化されるであろう。軍は、ブルジョア資本主義独裁——それは、人民の抵抗が強まった場合には公然たるファッショ的形態をとることもありうる——の道具となるであろう。

「毛沢東思想」は、国の指導部において多数の政党が存在する必要性を、すなわちいわゆる複数政党制を説くことによって、革命と社会主義建設における共産党の一元的役割に関するマルクス・レーニン主義の学説と完全に対立している。毛沢東はエドガー・スノーに語ったように、アメリカの例にならった複数の政党による国の指導が、もっとも民主的な統治形態であると考えていた。毛沢東は、「いったい、一つの党だけでよいのか、いくつかの党があるほうがよいのか」と問い、自らこうこたえている。「現在の考えでは、やはりいくつかの党があるほうがよいようだ。過去にそうであったばかりでなく、将来もそうであってよい。つまり、長期に共存し、相互に監督しあうと

いうことである」*。毛沢東は、ブルジョア諸政党が中国共産党と同等の権限と特権をもって国家権力と国政に参加することを、不可欠であると見なしていた。そればかりか、ブルジョアジーのこれらの政党――それはかれに従えば「歴史的に発生したもの」である――は、中国共産党までもが消滅するときになってはじめて消滅するというのである。つまり、両者はまさに共産主義に至るまで共存することになる。

＊『十大関係について』――『毛沢東選集』第五巻四二八ページ

「毛沢東思想」によれば、すべての階級とすべての政党の協力を基盤として、はじめて新民主主義制度は存在でき、社会主義建設も可能になるのである。すべての政党の「長期共存、相互監督」に基礎を置くそうした社会主義的民主主義と社会主義政治制度についての考え方――それは、イタリアやフランス、スペインその他の修正主義者の現在の説にきわめて似かよっている――は、革命と社会主義建設におけるマルクス・レーニン主義党の一元的指導の役割にたいする露骨な否定である。歴史的経験がつねに実証してきたように、マルクス・レーニン主義党の一元的指導の役割がなければ、プロレタリアート独裁は存在しえないし、社会主義を建設し防衛することもできない。スターリンは、次のようにのべている。

「……プロレタリアートの独裁は、一つの党、すなわち共産党に指導されるばあいに、はじめて完全なものとなりうる。この党は、他の諸政党と指導権をわかたないし、また、わかってはならない」。＊

＊『第一回アメリカ労働者代表団との会談』――邦訳『スターリン全集』第一〇巻一一七ページ

毛沢東の修正主義的概念がその基礎としているのは、ブルジョアジーとの協調と同盟の政策である。中国共産党はつねに、この政策を実行してきた。相対立するイデオロギーの共存を直接に表現した「百花斉放、百家争鳴」という反マルクス主義、反レーニン主義の方針の起源となっているのも、この政策である。

毛沢東に従えば、社会主義社会では、プロレタリア・イデオロギーや唯物論、無神論と並んで、ブルジョア・イデオロギーと観念論、宗教の存在が認められなければならず、「香り高い花」と並んで「毒草」の成長などといったことが認められなければならないのである。そうした方針は、マルクス主義の発展にとって、また論争と思想の自由に道を開くためにも、必要なものとされている。しかし実際には、かれはこの方針を通じて、ブルジョアジーとの協調、ブルジョア・イデオロギーとの共存という政策に理論的根拠をあたえようとしているのである。毛沢東はこうのべている。「誤謬、醜悪、敵対のものに接することを禁止し、観念論や形而上学のものに接することを禁止

し、孔子、老子、蔣介石のものに接することを禁止する——こうした政策は、危険な政策である。このために、人びとは思想がおとろえ、一本調子となり、世間のあら波にもたえられず……」*。ここから毛沢東が引き出しているのは、観念論と形而上学、ブルジョア・イデオロギーは永遠に存在するものであり、したがってそれらを禁止すべきではなく、それらが開花し、表に出て競い合う可能性をあたえるべきである、という結論なのである。あらゆる反動的なものにたいするこうした妥協的立場は、社会主義社会における騒乱を不可避的なものと呼び、敵の活動を禁止することを誤りというほどまでになっている。かれは、次のようにのべている。「騒ごうとする者には騒がしておき、騒ぎたいだけ騒がしておけばよかろう。一カ月で足りなければ、二カ月でもよい。要するに、騒ぎあきるまで、けりをつけないことだ。急いでけりをつけても、いつかはまた騒ぎだすだろう」**。

* 『省・市・自治区党委員会書記会議における講話』——『毛沢東選集』第五巻五三八ページ

** 同前——選集第五巻五四九ページ

これらはすべて、「研究」会議の討論の場でおこなわれた学術上の発言ではない。それは、マルクス・レーニン主義に対抗して築き上げられた反革命、日和見主義の政治路線であり、それこそが中国共産党を瓦解させたのである。この党の内部では、多数の種種雑多な見解や思想が流布され、今日では現実に百家争鳴の状態にある。この路線によって、ブルジョア不満分子が百花の咲きそろ

った花園を自由にぶんぶんと飛びまわり、その害毒をふりまくことができたのである。
また、イデオロギー問題に関するこうした日和見主義的立場の根源は、何よりも、中国共産党がその創立から国の解放を達成するまでに至る全期間を通じて——さらにはその後も——自己をイデオロギー的に強化する努力を払わず、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの理論を党員の心のなかに根づかせるための活動をおこなわなかったという点に、また、マルクス・レーニン主義イデオロギーの基本的諸問題に精通し、それを一歩一歩中国の具体的条件に一貫して適用するために奮闘してはこなかったという点にある。

「毛沢東思想」は、マルクス・レーニン主義の革命理論に対立するものである。

毛沢東はその著作のなかで、社会の発展過程における革命の役割にたびたびふれているが、かれが主張しているものは本質的には形而上学的、進化論的概念である。事物の漸進的発展をらせん状のものと見なす唯物論的弁証法に反して、毛沢東が説いた発展の形態は円状の周期的な循環であり、かれはそれを、均衡から不均衡にすすみ再び均衡へ——あるいは、運動から休止を経て運動へ、高揚から衰退を経て高揚へ、前進から後退を経て前進へ等等——立ちもどる潮の干満に似た過程と考えた。毛沢東は、火の浄化作用という古代哲学の概念をもち出して、こう書いている。「定期的に『火をつけ』なければならない。今後どうやればよいか。一年に一回焼くか、それとも三年に一回焼くか、諸君はどちらがよいと思うか。わたしの見るところ、少なくとも閏年（うるうどし）、閏月（うるうづき）がめぐ

ってくるように、三年に一回、五年で二回、一つの五カ年計画の期間に少なくとも一回やるべきである」*。こうしてかれは、古代の星占い師のように、太陰暦にもとづいて定期的な放火の法則を導き出し、「大治」から「大乱」へ、そして再び「大治」へともどる——こうして循環は周期的にくり返される——発展の法則を導き出しているのである。このように「毛沢東思想」は、レーニンがのべている、

「すべての存在するものの『自己運動』を理解する鍵をあたえ……『飛躍』、『漸次性の中断』、『対立物への転化』、古いものの消滅と新しいものの出現、を理解する鍵をあたえる」**

そうした唯物論的弁証法の発展観に対置して、「死んだ、生気のない、ひからびた」形而上学的発展観をもち出している。

* 『ブルジョア右派の攻撃を撃退しよう』——『毛沢東選集』第五巻六八二ページ

** 『弁証法の問題について』——邦訳『レーニン全集』第三八巻三二七ページ

このことは、矛盾に関する毛沢東の問題の取扱い方を見れば、さらに明白になる。中国の宣伝機関によれば、毛沢東はこの問題に「特別の貢献」をし、この分野で唯物論的弁証法をさらに発展させたなどと言われている。たしかに、毛沢東は多くの著作のなかで、しばしば対立物と矛盾、対立

物の統一について論じ、しかもマルクス主義の用語を用いたり引用したりさえしているが、それにもかかわらず、かれはこの問題についての弁証法的唯物論の理解からはかけ離れているのである。かれは矛盾を論じるにあたって、マルクス主義の命題から出発するのではなく、古代中国哲学の命題から出発している。かれは対立物を外部的な現象と機械的に見なし、対立物の相互転化が単なる地位の交代であると考えている。毛沢東は、古代哲学から上と下、前進と後退、右と左、軽いものと重いもの等等といった不変の対立物をいくつかとり出し、それらを操ることによって、事物や現象に内在する内部矛盾を本質的には否定し、発展を単なる反復、すなわち不変の状態の連鎖——そこでは同じ対立物、それらのあいだの同じ関係が見られるにすぎない——と見なしているのである。毛沢東は対立物の相互転化を、矛盾の解決、あるいはそれらの対立物を包含する現象そのものの質的変化としてではなく、単なる地位の交代として理解しており、それをすべてのものに当てはまる形式的な図式として用いている。この図式にもとづいて、毛沢東は、「教条主義がその反面に転化すれば、マルクス主義になるか、修正主義になるか、である*」、「形而上学は弁証法に、弁証法は形而上学に転化する」等等とまで言明している。このような馬鹿げた主張、対立物についてのこのような詭弁的論法の背後にあるのは、毛沢東の日和見主義、反革命の思想である。このようにかれは、社会主義革命を社会の質的変化——そのなかでは敵対的諸階級も、人間による人間の抑圧と搾取も廃絶される——と見なすのではなく、ブルジョアジーとプロレタリアートの単なる地位の変化と考えている。この「発見」を確証するために、毛沢東は次のように書いている。「ブルジョ

ア階級とプロレタリア階級が転化しあうことができないのなら、なぜ革命を経て、プロレタリア階級が支配者に変わり、ブルジョア階級が被支配者に変わるのか。たとえば、われわれと蔣介石国民党とは根本的に対立している。対立する双方が闘争しあい、排除しあった結果、われわれと国民党の地位にはともに変化がおこり**……」。毛沢東はこれと同じ論法を、共産主義社会の二つの段階に関するマルクス・レーニン主義理論を修正するために用いている。「弁証法によれば、人がいつかは死ぬのと同じように、歴史的現象の一つとしての社会主義制度も、いつかは死滅し、共産主義制度によって否定されるのである。もしも、社会主義制度は死滅しない、社会主義の生産関係と上部構造は死滅しない、というなら、それでもマルクス主義と言えるだろうか。これでは、宗教の教義と同じであり、神の不滅をとなえる神学と同じではないか***」。

＊　『事態は変化しつつある』——『毛沢東選集』第五巻六五二ページ
＊＊　『省・市・自治区党委員会書記会議における講話』——選集第五巻五四一ページ
＊＊＊　同前——選集第五巻五五四ページ

こうして毛沢東は、社会主義と共産主義についてのマルクス・レーニン主義の概念を公然と修正している。それらは本来、同じ型の、同じ社会・経済制度の二つの段階であり、ただそれぞれの発展と成熟の度合によってのみ互いに区別されるが、毛沢東は社会主義を、共産主義とは根本的に対

立するものとして描き出しているのである。

革命全般についても、毛沢東はそうした形而上学的、反マルクス主義的概念から問題を扱っている。つまりかれは革命を、地上に人類が存在する限り周期的にくり返される果てしない過程、敗北から勝利へ、勝利から敗北へと無限にすすむ過程と見なしている。革命についての毛沢東の反マルクス主義的概念——それはときには進化論的であり、ときには無政府主義的である——は、かれが中国革命の問題を論ずるさいに、いっそう明白なものとなる。

その著作からもわかるように、毛沢東は、マルクス・レーニン主義理論をよりどころとして中国革命の諸問題を分析し、その任務を確定したのではなかった。一九六二年一月に中国共産党中央委員会が召集した拡大工作会議における講話のなかで、毛沢東自身次のように認めている。「多年におよぶわれわれの革命活動は盲目的におこなわれてきた。われわれは、どんなふうに革命をやるのか、革命の矛先をだれに向けるのか、その段階性、すなわちまずはじめにだれを打倒し、それからだれを打倒するのか等等についてはっきりしていなかった」。中国共産党が民主主義革命のなかでプロレタリアートの指導権を確保し、それを社会主義革命に転化することができなかったのは、こうしたことによるものである。中国革命の発展過程全体が、中国共産党の混乱した路線の証拠である。この党を導いてきたのはマルクス・レーニン主義ではなく、革命の性質とその段階性、革命の原動力等等に関する「毛沢東思想」の反マルクス主義的概念であった。

毛沢東は、ブルジョア民主主義革命とプロレタリア革命の密接な結びつきを、正しく理解するこ

とも、説明することもできなかった。マルクス・レーニン主義理論は、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命のあいだにはけっして万里の長城は存在せず、これら二つの革命は長期の期間によって隔てられるべきではないということを科学的に立証したが、それとは反対に、毛沢東はこう主張している。「革命の転化は将来のことである。……いつ転化するかは、……時間的にはかなり長くかかる。政治上、経済上のすべての必要条件がそなわらないうちは、また、転化が全国の最大多数の人民にとって不利でなく、有利になるような時がこないうちは、かるがるしく転化を提起すべきではない*」。

＊『日本帝国主義に反対する戦術について』――『毛沢東選集』第一巻二三二ページ

毛沢東が固執したこの反マルクス主義的概念は、革命の全期間を通じて、さらに解放後においてさえ、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に転化させることに反対するものであった。そこで一九四〇年、毛沢東は、「中国革命は二歩にわけてあゆまなくてはならず、その第一歩は新民主主義であって、社会主義は第二歩である。しかも、第一歩の期間はかなり長く*……」とのべたのである。さらにかれは、一九四九年三月の中央委員会総会で、解放後の中国の発展についての綱領を提起し、「この期間には、……都市と農村のすべての資本主義的要素は、その存在と発展を許すべきである**」とのべている。中国共産党と毛沢東が、中国革命を社会主義革命に転化させるためにたた

かわず、ブルジョアジーと資本主義的社会関係の発展に自由な余地を残したのは、こうした観点と「理論」に起因している。

＊　『新民主主義論』――『毛沢東選集』第二巻四九二ページ
＊＊　『中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告』――選集第四巻四八一ページ

民主主義革命と社会主義革命の関係の問題について、毛沢東は第二インタナショナルの頭目たちと同じ立場をとっている。かれらは、革命の発展についてのマルクス・レーニン主義理論を攻撃し歪曲した元祖であり、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命のあいだには長い期間が存在し、その期間にブルジョアジーは資本主義を発展させ、プロレタリア革命への移行の条件をつくり出すという命題を打ち出した。かれらは、資本主義のはびこる余地をあたえずにブルジョア民主主義革命を社会主義革命に転化させることは、不可能なことであり、段階を飛びこえることだと考えた。毛沢東もまた、次のようにのべ、この考えを完全に支持している。「連合し統一した、新民主主義の国家がなく……私的資本主義経済……の発展がなければ……植民地・半植民地・半封建の廃墟のうえに社会主義社会を建設しようとしても、それはまったくの空想にすぎない＊」。

＊　『連合政府について』――『毛沢東選集』第三巻三三三ページ

革命の原動力に関する毛沢東の問題の扱い方を見れば、革命についての「毛沢東思想」の反マルクス主義的概念は、さらにはっきりとする。毛沢東は、プロレタリアートの主導者的役割(ヘゲモーン)を認めなかった。レーニンがのべたように、帝国主義の時代にあっては、すべての革命において、すなわち民主主義革命においても、反帝民族解放革命においても、また社会主義革命においても、プロレタリアートが指導権を握らなければならない。毛沢東はプロレタリアートの役割について語ってはいるが、実際には革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーを過小評価し、農民の役割を過大視している。毛沢東は、こう言っている。「……現在の抗日は実質的には農民の抗日だということである。新民主主義の政治とは、実質的には農民に権力をあたえることである*」。

＊『新民主主義論』──『毛沢東選集』第二巻五〇四ページ

毛沢東はこうした小ブルジョア理論を、「農村で都市を包囲する」という概括的な命題で表現した。かれは、「……革命的な農村は、都市を包囲することができる……」、「中国の革命運動は、農村での活動を主とし、都市での活動を副とすべきである*」と書いている。毛沢東はこの考えを、国家における農民の役割についてのべたさいにも表明している。かれは、他の諸政党や諸勢力は農民とその観点に服さなければならないとのべたことがある。かれはこう書いている。「……何億とい

う農民が……立ちあがろうとしており、その勢いはあらしのようにはやくて、猛烈で、どんな大きな力も、それをおさえつけることはできないであろう。……すべての革命的な政党、革命的な同志は、みなかれらの前で、その審査をうけ、取捨がきめられるであろう」**。毛沢東に従えば、革命において主導者（ヘゲモーン）としての役割を果たすのは労働者階級ではなくて、農民だということになる。

＊『若干の歴史的問題についての決議』――『毛沢東選集』（新日本出版社版）第三巻二四五－二四六ページ

＊＊『湖南省農民運動の視察報告』――『毛沢東選集』第一巻二〇ページ

また毛沢東は、革命における農民の主導者（ヘゲモーン）的役割という命題を、世界革命の道として説いている。いわゆる第三世界――それは、中国の政治文献では「世界の農村」とも呼ばれている――を「今日の社会を変革する主な原動力」と見なす反マルクス主義的概念の起源は、ここに存在している。中国の見解によれば、プロレタリアートは第二義的な社会勢力であり、マルクスとレーニンによってあたえられたところの役割、すなわち、資本に抑圧されたすべての勢力と同盟を結んで資本主義とたたかい、革命の勝利をかちとるという役割を、演じることはできないというわけである。

中国革命において優勢を占めていたのは、中・小ブルジョアジーであった。この広範な小ブルジョアジー層は、中国の動向全体を左右するものであった。

マルクス・レーニン主義理論は農民、そして一般的に小ブルジョアジーは動揺的であると教えて

いるが、毛沢東はこの理論に立脚していなかった。もちろん、貧農と中農は革命のなかで重要な役割を演じるものであり、プロレタリアートの緊密な同盟者としなければならない。しかし、小ブルジョアジーである農民階級が、革命においてプロレタリアートを指導することはできない。そのように逆のことを考え、説教するのは、反マルクス・レーニン主義である。中国革命の全過程に否定的な影響をおよぼしてきた、毛沢東の反マルクス主義的観点の主な根源の一つは、ここに存在している。

中国共産党は、革命におけるプロレタリアートの主導者的役割（ヘゲモーン）という革命の根本的指導原理について、理論上はっきりとしていなかった。そのためにこの党は、それを一貫して適切に実行することもなかった。経験が示しているように、農民はプロレタリアートと同盟し、その指導のもとで行動する場合にのみ、自己の革命的役割を果たすことができる。このことは、わが国の民族解放戦争によっても立証された。アルバニア農民はわが国の革命における主力軍であったが、農民を指導したのは――きわめて少数であったにもかかわらず――労働者階級であった。なぜならば、革命を指導したのは、労働者階級の前衛である共産党――今日の労働党――に体現されたプロレタリアートのイデオロギー、すなわちマルクス・レーニン主義だったからである。だからこそわれわれは、民族解放戦争だけでなく、社会主義建設にも勝利を収めてきたのである。

われわれはその途上で無数の困難に遭遇しはしたが、次から次へと成果をかちとってきた。われわれがそうした成果を達成したのは、何よりもまず、党がマルクスとレーニンの理論の核心を完全に身につけ、革命とはどのようなものであり、それを遂行しているのはだれか、だれがそれを指導

すべきなのかを理解していたからであり、また、農民と同盟した労働者階級の先頭にはレーニン主義型の党が存在しなければならないことを認識していたからである。共産主義者が認識していたように、この党は単に名前だけの共産党であってはならず、わが国の具体的条件のもとでマルクス・レーニン主義理論を革命と党建設に適用する党、レーニンとスターリンの時代における社会主義建設の模範に従って、新たな社会主義社会をつくり出す活動に着手する党でなければならなかった。こうした立場によって、わが党は勝利を手中にし、またそれによってわが国は、政治上、経済上、軍事上で、それが今日有するほどの強大な力を得ることができたのである。もしもわれわれが、これとはちがったように行動し、この偉大な理論の諸原則を一貫して適用しなかったならば、わが国のように敵に包囲された小国で、社会主義を建設することは不可能だったであろう。また、もしわれわれが一時的に政権を握ったとしても、ギリシャで起こったように、ブルジョアジーはそれを奪い返していたであろう。ギリシャ共産党は、まだ闘争で勝利をかちとる前に、自国の反動ブルジョアジーとイギリス帝国主義に武器を差し出したのである。

したがって、革命におけるヘゲモニーの問題はきわめて重要な原則問題である。なぜなら、革命の発展方向はそれを指導する者によって決定されるからである。レーニンは次のように強調している。

「ヘゲモニーの思想の放棄は、……改良主義のもっとも粗雑な形態であって*……」

＊『ロシア社会民主党内の改良主義』——邦訳『レーニン全集』第一七巻二三六ページ

「毛沢東思想」によるプロレタリアートの指導的役割の否定は、ほかでもなく、中国革命をブルジョア民主主義革命に引きとどめ、社会主義革命へと発展させなかった原因の一つである。毛沢東は『新民主主義論』のなかで、中国において革命の勝利後に樹立される政権は、「民主的諸階級」——かれはそのなかに、農民とプロレタリアート以外にも、都市小ブルジョアジーと民族ブルジョアジーを含めている——の連合に基礎を置くものになるだろうと説いている。かれはまた、「飯があれば、みんなでたべようというからには、一党、一派、一階級が独裁すべきではない」＊とのべている。この思想は、中華人民共和国の国旗(訳注)にも反映されている。そこには、四つの階級、すなわち労働者階級と農民、都市小ブルジョアジー、民族ブルジョアジーをあらわした四つの星がかたどられている。

＊『新民主主義の憲政』——『毛沢東選集』第二巻五六八ページ

(訳注) いわゆる五星紅旗。四つの星に囲まれた真中の大きな星は中国共産党をあらわしている。

祖国の解放と独立した中国国家の創設をもたらした中国革命は、中国人民にとって、また世界の

反帝民主勢力にとって、偉大な勝利であった。解放後の中国では、多くの積極的な変革がおこなわれた。外国帝国主義と大地主による支配は根絶され、貧困と失業にたいするたたかいがおこなわれ、労働者階級に有利な一連の社会的・経済的改革が遂行された。さらに、教育、文化の立ち遅れを克服する努力がなされ、戦争によって荒廃した国土を再建するために一連の措置がとられるとともに、社会主義的性質をもつ若干の変革がおこなわれた。以前には無数の人人が餓死した中国で、もはや飢餓が存在しなくなった、等等。これらのことは否定できない事実であり、中国人民の重要な勝利である。

中国で共産党が政権につき、このような措置がとられたことから、中国はいかにも社会主義の道を歩んでいるかのように思われた。しかし、事態はそうならなかった。中国共産党はブルジョア民主主義革命の勝利ののち、左翼主義に陥らずまた段階を飛びこえることなく、慎重に前進すべきであったが、それにもかかわらずこの党は、「毛沢東思想」を活動の基礎とすることによって、「民主的」、自由主義的、日和見主義的であることを自ら露呈した。かれらは、社会主義への正しい道にそって国を一貫して導きはしなかったのである。

毛沢東の非マルクス主義、折衷主義のブルジョア的な政治的・イデオロギー的観点は、解放中国の上部構造を不安定なものにし、国家や経済の混乱した組織状態——それはけっして安定したことはなかった——を生み出した。中国は不断の動乱、しかも無政府的な動乱のもとに置かれた。毛沢東本人も「物事をはっきりさせるには、まずかきまわさなければならない」というスローガンを唱

えて、この動乱を助長した。

新中国の国家で特別な役割を果たしたのは、周恩来である。かれは有能な経済専門家であり組織者であったが、けっしてマルクス・レーニン主義の政治家ではなかった。典型的なプラグマチストであったかれは、自己の非マルクス主義的見解を実行し、しかも、中国で権力を握ったどの集団にも自己の見解をぴったりと適応させることに長じていた。かれは、倒れてもつねに立ち上がる「不倒翁(おきあがりこぼし)」であった。とはいえそれは、つねに真中より右に倒れはしても、けっして左に倒れることはなかったのである。

周恩来は、無原則的妥協の大家であった。かれは、蔣介石や高崗、劉少奇、鄧小平、毛沢東、林彪、「四人組」をそれぞれ支持したり断罪したりしたが、レーニンとスターリン、マルクス・レーニン主義を支持したことはけっしてなかった。

解放後、毛沢東、周恩来らの見解と立場の帰結として、党の政治路線にはあらゆる方面にわたって幾多の動揺が見られた。「毛沢東思想」はブルジョア民主主義革命の段階が長期につづくべきだと唱えたが、中国ではそうした傾向が温存されていた。毛沢東は、この段階では資本主義の発展にともなって社会主義への前提条件がつくり出されると主張し、前者を優先した。また、このことと結びついているのが、社会主義とブルジョアジーの長期にわたる共存というかれの命題であり、かれはそれを社会主義にもブルジョアジーにも有益なものとして提起している。そうした政策に反対し、その論拠として十月社会主義革命の経験をもち出した者に答えて、毛沢東は次のように言って

いる。「ロシアのブルジョア階級は反革命的階級で、当時、かれらは、国家資本主義というものを受けいれず、サボタージュや破壊活動をおこない、武器をとって反抗した。ロシアのプロレタリア階級は、かれらをかたづけてしまうよりほかはなかった。この事が、各国のブルジョア階級の怒りを買い、かれらはののしりだしたのである。われわれのところでは、民族ブルジョア階級にたいして、比較的おだやかに対処しているので、かれらは、わりあい気分がよく、まだいくらかいいところもあると感じている」。＊毛沢東に従えば、そうした政策は国際ブルジョアジーによる中国評価を改めさせたというわけだが、実際にはそれは中国の社会主義に重大な損失をあたえたのである。

＊『党の団結をつよめ、党の伝統を受け継ごう』――『毛沢東選集』第五巻四五三ページ

毛沢東は、ブルジョアジーにたいする自己の日和見主義的立場を、新経済政策（ネップ）に関するレーニンの教訓を創造的に生かしたものとして描き出している。しかし、野放しの資本主義的生産を許容し、社会主義においてブルジョア的諸関係を温存する毛沢東の概念と、レーニンの教えとのあいだには、根本的な差異が存在する。レーニンは、ネップが資本主義の要素の発展を一定期間許容する一歩後退であることを認めつつ、次のように強調した。

「プロレタリアートが、その手にかたく権力をにぎっており、運輸と大工業とをその手にかた

くにぎっているかぎり、その点でプロレタリア権力にとって恐ろしいものは、なにもない*」。ところが毛沢東がそれを提唱した一九四九年にも、また一九五六年にも、中国のプロレタリアートは政治権力や大工業をその手に握ってはいなかったのである。

* 『食糧税について』——邦訳『レーニン全集』第三二巻三九四ページ

さらにレーニンは、ネップを、長期の内戦で荒廃した当時のロシアの**具体的諸条件によって余儀なくされた一時的な**方策であるとみなし、社会主義建設の普遍的法則とは考えなかった。そして事実、ネップ布告の一年後、レーニンは、退却は終わったことを強調し、経済において私的資本にたいする攻勢を準備するというスローガンを打ち出したのである。それに引きかえ中国では、資本主義的生産を維持する期間は、半永久的につづくものと見なされていた。毛沢東の見解に従えば、解放後の中国では、外見上は中国共産党が政権につきはするが、そこに樹立される制度はブルジョア民主主義制度でなければならなかった。これが、「毛沢東思想」というものであった。

ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への移行は、プロレタリアートが断固としてブルジョアジーを権力から排除し、それを収奪することによって、はじめてなしとげられる。中国の労働者階級がブルジョアジーと権力を分有しているかぎり、またブルジョアジーがその特権を維持してい

るかぎり、中国に樹立された国家権力は、プロレタリアートの国家権力ではありえなかったし、したがって、中国革命が社会主義革命へ成長転化することもありえなかった。

中国共産党は、搾取階級にたいして寛大な日和見主義的立場をとってきたし、毛沢東は、資本主義分子の社会主義への平和的な統合を公然と唱えてきた。毛沢東は、次のように言っている。「天下の頑迷分子はきょうも頑固、あすも頑固、あさっても頑固であるが、いつまでも頑固をとおすことはできず、ゆくゆくは変わるものである。……頑迷分子は、実際には頑であっても固ではない。……なかにはよい方に変わったものもいるが……あやまりを認め、よい方に変わったのである。要するに、頑迷派は変化するものである」*。

＊『新民主主義の憲政』――『毛沢東選集』第二巻五七四ページ

毛沢東は、この日和見主義的な考えに理論的根拠をもたせようと願望し、「対立物の転化」をもてあそびつつ、こうのべている。つまり、討論や批判、改造を通じて、敵対的矛盾は非敵対的矛盾に転化し、搾取階級とブルジョア・インテリゲンチャはその対立物に、すなわち革命派に転化することができる、と。毛沢東は、一九五六年に次のように書いている。「しかし、わが国の条件のもとでは、その大多数の者は、将来、程度の差こそあれ、転化をとげるであろう。われわれが正しい政策をとったので、現にかなりの反革命分子が、革命に反対しない者に改造されており、いくらか

有益な仕事をした者もいる」*。

＊『十大関係について』——『毛沢東選集』第五巻四三〇ページ

時がたてば階級敵は悔い改めるだろうという、こうした反マルクス主義的概念にもとづいて、かれは階級敵との階級和解を唱え、それらが肥え太り、搾取し、革命に敵対する言動をふりまくのを放任した。毛沢東は、階級敵にたいするこうした降伏主義的立場を正当化するために、こう書いている。「いま、われわれにはやるべき事がたくさんある。もしも毎日のように攻撃し、五十年も攻撃していたら、それはたまったものではない。どうしても改めようとしない者は一部いるが、そういう者は誤りをたずさえて棺桶にはいり、閻魔大王に会いに行けばよい」*。中国の国政は実際上、敵との協調というこうした観点に従って動かされていたために、旧官僚の手に握られたままであった。蔣介石側の将軍たちでさえ、閣僚になった。占領国日本のかいらいであった満州国皇帝溥儀でさえ、きわめて手厚い保護を受け、博物館の展示物——各国代表団はかれに会い、その話を聞いて、「社会主義」中国ではそうした人人がどのような再教育を受けているのかを理解するというわけである——にされてしまった。この旧かいらい皇帝を宣伝する目的は、なかでも、諸外国の国王や頭目連中、反動的かいらいどもの不安を取り除き、かれらに、毛沢東の「社会主義」はすばらしく、それを恐れる理由は何もないと思わせる点にあった。

＊『ブルジョア右派の攻撃を撃退しよう』――『毛沢東選集』第五巻七〇二ページ

中国人民にたいして数えきれない犯罪をおかした封建地主や資本家にたいしてとられた立場も、まったく階級闘争らしからぬものであった。毛沢東は、そうした立場を理論にまで祭り上げ、反革命派を公然と庇護のもとに置いた。かれは、こう言明している。「……ひとりも殺さず、大部分を捕えずである。……公安局は逮捕せず、検察機関は起訴せず、法院でも裁判にかけない。百人の反革命分子のうち、九十いく人かはこのように処理する」＊。毛沢東は詭弁を弄して、反革命分子の処刑はよくない、そうした行為は生産を妨げ、国の科学水準を低めるものであり、世界に悪名を博するだけだなどとのべ、もし一人の反革命分子を処刑すれば、「第二、第三の者もそれと比較され、けっきょく数多くの首がはねられてしまう……地に落ちた首は、つなぎあわせることはできず、また、ニラとちがって、いちど切りとると、二度と伸びてこない」＊＊と言っている。

＊『十大関係について』――『毛沢東選集』第五巻四三二ページ
＊＊同前――選集第五巻四三三ページ

「毛沢東思想」は、矛盾について、また諸階級および革命におけるそれらの役割について、この

ような反マルクス主義的概念を唱えているが、その結果、中国はけっして社会主義建設の正しい道を歩みはしなかった。中国社会には、過去の経済的、政治的、イデオロギー的、社会的残存物が生き残り、存在しつづけているだけでなく、搾取階級がなおも階級として存在し、依然として権力を握っている。ブルジョアジーも単に存在しつづけているというだけでなく、かつての所有財産からの定息をいまも受け取っているのである。中国では、資本主義的地代は法律上も廃止されていない。というのも、中国指導部は、一九三五年に毛沢東が定式化したブルジョア民主主義革命の戦略に従ってきたからである。かれは当時、「人民共和国の労働法は……民族資本家の金もうけにも反対しない*」とのべている。「土地にたいする同権政策」にそって、富農層——それは中国固有の形態で存在していた——は大きな特権と利益を保持していた。毛沢東自身、富農に手をつけてはならないという通達**を出した。なぜなら、そうすることは、政治的にも経済的にも組織的にも中国共産党との統一戦線を形成していた、民族ブルジョアジーの怒りを買うことになるからだ、というわけであった。

＊　『日本帝国主義に反対する戦術について』——『毛沢東選集』第一巻二三一ページ

＊＊　『富農にたいする戦術について意見をもとめる』——選集第五巻一八ページ

これらの事例がすべて示しているように、「毛沢東思想」は、中国を真の社会主義への道にそっ

て導きはしなかったし、またそれは不可能でもあった。事実周恩来が、一九四九年、アメリカ政府の援助を内密に打診したさいに言明したように、毛沢東も、その主な支持者も、社会主義の道を求めてはいなかったのである。周恩来はこう記している。「中国はまだ共産主義社会ではなく、また、もし毛沢東の政策が適切に実行されるならば、今後長期にわたって共産主義社会になることはないでしょう」*。

＊『インターナショナル・ヘラルド・トリビューン』紙、一九七八年八月一四日付

毛沢東と中国共産党は、デマゴギーを弄するやり方で、社会主義社会と共産主義社会の建設について あれこれと語っているが、それらはすべてかれらのプラグマチックな政策の都合に合わせられている。そのためにかれらは、いわゆる大躍進の期間中にも、革命をたたかい抜いて社会主義を熱望していた大衆の目をくらまそうとして、二、三回の五カ年計画を積み重ねれば、中国はたちまち共産主義に移行すると豪語したのである。しかしながら、かれらはその後、自らの失敗を糊塗するために、社会主義の建設と勝利には一万年が必要だという理論をつくり上げはじめた。

なるほど、中国共産党は共産党と自称してはいたが、それが歩んできたのは別の方向、すなわち混乱に満ちた自由主義的進路、日和見主義的進路であったし、かれらは国を社会主義へと導くことができる勢力とはなりえなかった。この党がたどってきた道——それは毛沢東の死後、よりいっそ

う明瞭に具体化された――は、社会主義の道ではなく、ブルジョア的社会帝国主義大国を築き上げる道であった。

反マルクス主義の学説の一つである「毛沢東思想」は、プロレタリア国際主義を大国排外主義に置きかえている。

中国共産党は、その活動のまさに第一歩から、露骨な民族主義的、排外主義的傾向を示していた。事実が物語っているように、この傾向は、その後の時期においても根絶されはしなかった。中国共産党の創立者の一人、李大釗は、次のようにのべている。「ヨーロッパ人は、世界はもっぱら白人のものであると考え、自分たちは優れた階級であり、有色人は劣っていると思っている」。李大釗はさらに、こうつづけている。「中国人は、世界の他の人種との階級闘争に備えるべきである。そのなかでわれわれは、自己の特別な民族的資質をふたたび発揮するであろう」。中国共産党は、その創立の当初から、このような観点にむしばまれていたのである。

そうした人種主義的、民族主義的観点は、劉少奇や鄧小平はもちろん、毛沢東の頭のなかからもけっして消え去りはしなかった。毛沢東は、一九三八年に中央委員会総会でおこなった報告のなかで、「こんにちの中国はこれまでの中国の発展であり、われわれは……孔子から孫中山にいたるまでを総括して、この貴重な遺産をうけつぐべきである。これは当面の偉大な運動を指導するのに、重要なたすけとなるものである」*とのべている。

＊『民族戦争における中国共産党の地位』――『毛沢東選集』第二巻二七九ページ

もちろん、どのマルクス・レーニン主義党も認めているように、党は過去からの自国人民の遺産に立脚すべきではあるが、同時にこれらの党は、遺産ならどんなものでもかまわないというのではなく、ただ進歩的なものだけに立脚すべきだということを銘記している。共産主義者は、思想やその他の分野における反動的遺物を排撃する。中国の連中は、中国古来の形式や内容、理念に関しては、きわめて保守的であり、外国嫌いでさえある。かれらは古いものを、きわめて貴重な宝として保存していた。われわれがかれらとおこなった会談からわかったのは、かれら中国人は世界のあらゆる革命的経験にほとんど重きを置いていないということであった。かれらにとって貴重なのは、もっぱら自分自身の政策であり、自分たちと蔣介石との闘争、自分たちの長征、および毛沢東の理論だけであった。諸外国人民の進歩的価値については、かれらはそれらをほとんど、あるいはまったく尊重せず、それどころか、それらに学ぼうとする努力さえ払おうとはしなかった。毛沢東は、「中国人は外国でつくり出された公式を投げ捨てなければならない」と公言していた。しかし、それが一体どの公式なのかは、かれも明らかにしていない。かれがとがめているのは、「外国からの借りものの決まり文句や教条のすべて」なのである。ここで、次のような疑問がわいてくる。つまり、中国になじまないこれらの「教条」や「決まり文句」のなかには、中国人がつくり出したもの

ではない科学的社会主義の理論も含まれているのではないだろうか、という疑問である。
中国共産党指導部は、マルクス・レーニン主義をソ連の専売特許と見なし、毛沢東らはそれにたいして、排外主義的な見方、大国的見解を抱いていたし、いわば一種のブルジョア的なねたみをもっていた。かれらは、レーニンとスターリンの時代のソ連を世界プロレタリアートの偉大な祖国と見なしていなかったし、全世界のプロレタリアは革命を遂行するうえでそれに頼るべきであり、またブルジョアジーと帝国主義の気違いじみた総攻撃から全力を挙げてそれを守り抜くべきであるとも考えてはいなかった。
中国共産党の最高指導者である毛沢東と周恩来は、数十年も前から、スターリンの指導下にあったソ連に敵対する言動をとっていた。かれらは、スターリン本人に反対する言辞さえ吐いていた。毛沢東は、スターリンが主観主義であると非難し、「対立面のこうした闘争と統一を、スターリンは結びつけることができなかった*」とのべた。かれはまた、スターリンは「中国について、いくつかのまちがった事をやった。第二次国内革命戦争後期における王明の『左』翼冒険主義、抗日戦争初期における王明の右翼日和見主義は、いずれもスターリンのところからきたものである**」などと言い、また、ユーゴスラビアとチトーにたいするスターリンの行為は誤っていた、等等と言い立てた。

* 『省・市・自治区党委員会書記会議における講話』――『毛沢東選集』第五巻五四一ページ

＊＊『十大関係について』――選集第五巻四三九ページ

なるほど毛沢東は、たまにはスターリンを擁護し、かれの誤りは三分にすぎないと言っているが、実際にかれが言及しているのはスターリンの誤りばかりである。毛沢東が、一九五七年の共産党・労働者党モスクワ会議において、「スターリンの前では、われわれは先生の前に立った生徒のように感じた。ところがいま、われわれはフルシチョフに会って、互いに同志のように感じ、くつろいだ気分でいる」とのべたのは、偶然ではない。こうしてかれは、スターリンにたいするフルシチョフの中傷を公に歓迎し、是認するとともに、フルシチョフの路線を擁護したのである。

他の修正主義者とまったく同様に、毛沢東も、スターリンが一貫して守り、さらに豊かに発展させたマルクス・レーニン主義の諸原則から自分が逸脱していることを正当化するために、スターリン批判を利用した。スターリンを攻撃することによって、中国修正主義者がもくろんでいたのは、スターリンの業績と威信を傷つけるとともに、毛沢東の権威を高め、かれを世界の指導者の一員、マルクス・レーニン主義の教師の一人に仕立て上げることであった。そして毛沢東は、つねに正しい誤りのない路線を歩んできた、などと称されたのである！　また、スターリンとコミンテルンは、中国共産党と毛沢東が、革命におけるプロレタリアートの指導的役割、プロレタリア国際主義、あるいは革命闘争の戦略・戦術等等についてのマルクス・レーニン主義の諸原則を一貫して実行してこなかったことに、叱責と批判を加えてきたが、中国のスターリン批判は、そうしたことを

めぐってかれらがスターリンに不満をつのらせていたことのあらわれでもあった。毛沢東は、スターリンは「戦争に勝つと、こんどはチトー式の勝利ではないかとわれわれを疑い、一九四九年、一九五〇年の二年間、われわれに大きな圧力をかけてきた*」とのべ、こうした不満を露骨にあらわしている。同様に周恩来も、チラナにおけるわれわれとの会談のなかで、「スターリンは、われわれが親米派ではないか、われわれがユーゴスラビアの道をいくのではないかと疑っていました」と語った。時の経過は、スターリンがまったく正しかったことを実証したのである。中国革命とそれを導く思想にたいするスターリンの予見は、的確であることが明らかになった。

＊『十大関係について』――『毛沢東選集』第五巻四四〇ページ

毛沢東指導下の中国共産党と、スターリン指導下のソ連共産党とのあいだの対立、および、中国共産党とコミンテルンのあいだの対立は、原則上の対立であり、マルクス・レーニン主義の革命的戦略・戦術の基本的諸問題をめぐる対立であった。一例をとれば、中国共産党中央委員会は、中国革命の一貫した正しい発展に関するコミンテルンのテーゼや、都市の労働者階級と解放軍の共同行動に関するコミンテルンの指示、あるいは、中国革命の性質と段階についてのコミンテルンのテーゼ等等を、無視してきた。毛沢東ら中国共産党の指導者は、在中国コミンテルン代表についていつも軽蔑的に語り、かれらは「愚か」で「無知な」な連中であり、「中国の実際を知らない」などと

言っていたのである。毛沢東は、個個の国の「客観的実際」は「そもそも外国人にはわからないもの」であると見なし、コミンテルン代表の援助は不必要であり、まったく不可能であると考えた。毛沢東は、一九六二年一月の拡大中央工作会議における講話のなかで、次のようにのべている。「中国という客観世界は、中国人によって認識されるものであり、中国問題を扱うコミンテルンの同志たちによって認識されるものではない。コミンテルンのこれらの同志たちは、中国社会と中国民族、中国革命が全然わからないか、あるいはよくわからなかったのである。それなら、どうしてここで外国の同志たちについて語る必要があるだろうか」。

毛沢東は、自分たちが収めた成果について語る段になると、コミンテルンを度外視する。ところがかれは、中国共産党の挫折と偏向について、また、この党が中国の情勢を正しく理解せず、そこから正しい結論を引き出すことができなかったことについては、その罪をコミンテルンと在中国コミンテルン代表になすりつけるのである。毛沢東ら中国の指導者は、かれらが中国で権力を奪取し社会主義を建設するための一貫した闘争をおこなうのを、コミンテルンは妨害し、事態を錯綜させたなどと言って、コミンテルンを非難している。しかし、過去の事実と、とりわけ今日の中国の現実が確証しているように、中国に関するコミンテルンの諸決定と指令は全般的には正しいものであったし、中国共産党の行動は、マルクス・レーニン主義の諸原則にもとづくものでも、その精神にかなったものでもなかったのである。

「毛沢東思想」は、中国共産党の活動の基礎をなしてきたし、いまもなしているが、その特徴と

なっている偏狭な民族主義と大国排外主義は、国際共産主義運動にたいするこの党の立場、およびそのなかでの活動にも反映されている。

それは、フルシチョフの裏切り以後に生まれた新しいマルクス・レーニン主義諸党にたいする中国共産党の立場に、具体的にあらわれている。中国指導部は当初から、これらの党をまったく信用していなかった。中国共産党中央委員会のなかにあって、国際共産主義運動との関係について決定を下す立場にあった耿飈は、こうした見解を露骨に表明した。かれは、「中国はマルクス・レーニン主義党の結成を承認しないし、これらの党の代表がわが国を訪れることも望んではいません。かれらの訪問は、われわれにとってはわずらわしいことです」とのべ、こう強調した。「しかし、かれらを追い払うわけにはいかないので、どうすることもできないのです。われわれがかれらを受け入れるのは、ブルジョア政党の代表を受け入れるのとちょうど同じです」*。プロレタリア国際主義とは縁もゆかりもないこうした政策がとられていたのは、毛沢東の生前からであり、その頃かれは、考え指図する能力を十分にもっており、そのうえでこの政策を完全に承認していたのであった。

＊ 北京におけるわが党同志との談話（一九七三年四月一六日）より――アルバニア労働党中央文書保管所

ところが、中国指導部自身の願望とは逆に、これらの新しいマルクス・レーニン主義党が力をつけはじめると、かれらは別の戦術をとり、あらゆる新党とグループを、それらが「マルクス主義

党」、「革命党」、「紅衛兵」等と自称しさえすれば、何の区別も例外もなく、すべて承認するようになった。アルバニア労働党は、中国共産党のこうした態度と戦術に批判を加えた。その他の真のマルクス・レーニン主義党も、同様に批判をおこなった。それにもかかわらず、中国修正主義指導部は、同じ方針をとりつづけたのである。

その後中国指導部は、かれらのプラグマチックな政策に従って、新たに結成された党やグループにたいしてさまざまに異なる態度をとるようになった。かれらは真のマルクス・レーニン主義党を敵と呼ぶ一方、それらの党に反対する党やグループはこのうえもなくもてはやした。現在、中国修正主義者は、「毛沢東思想」を天までもち上げるこうした反マルクス主義の党やグループとつながりをもっているだけでなく、かれらの代表を次次と北京に招き、それらに工作するとともに、資金援助や政治的・イデオロギー的指示をあたえており、また、アルバニア労働党や真のマルクス・レーニン主義諸党にたいする敵対活動の方策を授けている。中国修正主義者はこれらの党・グループに、「毛沢東思想」と「三つの世界」論、一般的には中国の対外政策を宣伝し、華国鋒と鄧小平にたいする崇拝を促し、「四人組」を断罪するよう要求している。中国修正主義者にとっては、これらの要求を受けいれる党が「マルクス・レーニン主義」なのであり、それに反対する党は、反マルクス主義、冒険主義等等との宣告を受けるわけである。

以上のことが示しているように、中国修正主義指導部は、マルクス・レーニン主義諸党との関係において、各国の真の共産党の関係を規定するレーニン主義の原則と準則を実行しはしなかった。

フルシチョフ修正主義者のように、かれらは「親の党」という反マルクス主義の概念から出発して、他党に指図し、圧力を加え、その内部問題に干渉する一方、兄弟党からの同志的な助言や提案を受け入れたことはなかった。かれらは、マルクス・レーニン主義諸党による多党間会議に反対し、革命を準備し勝利させる問題、あるいは、現代修正主義と闘争しマルクス・レーニン主義を擁護する問題などの重要な諸問題を討議し、経験の交換や行動の一致等等をはかるための会議に反対してきた。こうした態度の理由として上げられるのは、何よりもまず、多党間会議において真のマルクス・レーニン主義者と対決することをかれらが恐れていたということであった。なぜなら、もしそうすれば、世界資本に奉仕し、中国を超大国に仕立て上げる戦略に奉仕するかれらの反マルクス主義、修正主義の理論が暴露され、その化けの皮がはがされるからであった。

「毛沢東思想」の反マルクス主義的本質を示すいま一つの徴候は、中国共産党が種種雑多なファシスト党や修正主義党、その他の党・グループとのあいだで維持してきたし、いまも維持しつづけている関係である。いまではかれらは、さまざまな国、たとえばイタリアやフランス、スペイン、その他のヨーロッパ諸国やラテンアメリカ諸国などの旧来の修正主義党にも浸透し、あるいは関係を樹立するための素地をつくろうと努めている。中国修正主義者は、これらの関係に、ますます大きな意義をあたえるようになっている。なぜなら、これらの党はどれもみな、戦術のうえではさまざまなちがいこそあれ――それは、各国における資本主義の性質、強大さの相違によるものである――、イデオロギー的には中国共産党と軌を一にしているからである。

中国共産党は、これら旧来の修正主義党との関係を徐徐に拡大し、相互の行動の歩調を合わせるようになるだろう。それと同時にかれらは、「マルクス・レーニン主義」を自称し中国の路線に追随する小集団を引き続き利用し、自らの立場を揺るぎなく堅持している既存のマルクス・レーニン主義諸党、あるいは現在生まれつつあるか、今後生まれるであろうその他の諸党を攻撃し、それらを分裂させようとするであろう。中国修正主義者は、そのようにふるまうことによって、資本主義、および社会民主主義・修正主義政党を公然と手助けし、革命の勃発と勝利を妨げており、とりわけ、この革命を指導する真のマルクス・レーニン主義党が強化され、主体的要素がととのうのを阻止しているのである。

いわゆるユーゴスラビア共産主義者同盟は、国際共産主義運動を分裂させることに全力を注ぎ、社会主義とマルクス・レーニン主義に猛攻撃を加えてきたが、中国共産党はかれらにたいしても、同様の戦術をとってきた。現中国指導部は、ユーゴスラビア修正主義者と足並みをそろえ、また、マルクス・レーニン主義とすべてのマルクス・レーニン主義党に反対し、革命と社会主義、共産主義に反対する闘争において両者の行動を一致させたいと望んでいる。

毛沢東と中国共産党は、ユーゴスラビア修正主義にたいしてプラグマチックな態度をとってきたし、チトーとチトー主義に関するかれらの見解は、大転換をとげてきた。最初のうち、毛沢東は、チトーは誤っておらず、スターリンのほうこそチトーにたいして誤りをおかしているのだと言っていた。その後、ほかならぬこの毛沢東は、チトーを、ヒットラーや蔣介石と同列に置き、「チトー

やヒットラー、蔣介石、ツァーの類の連中は、あらためさせることができない。かれらは死刑にすべきだ」と語った。ところが、かれはまたもや態度をひょう変し、チトーと会談する強い願望を表明するようになった。チトー自身、最近、次のように言明している。「わたしは、毛沢東の生前に中国への招きを受けた。連邦執行会議議長ゼマル・ビエディッチの中国訪問中、毛沢東はかれに、わたし(チトー)が訪中すべきだとの希望を表明した。また、華国鋒主席がわたしに告げたところによれば、五年前に毛沢東は、一九四八年の場合にもユーゴスラビアの側に道理があったと力説しつつ、わたし(チトー)を中国に招くべきだったと言った。かれはこのことを、内内には語っていたらしい。しかし、当時の中ソ関係を考慮して、このことは公には話されなかったのである*」。

＊ スロベニア社会主義共和国活動者会議におけるチトーの演説(一九七八年九月八日)より

中国修正主義指導部は、毛沢東のこの「遺志」を忠実に実行している。華国鋒は、チトーの訪中と、とくに自分自身のユーゴスラビア訪問を、チトーに賛辞を呈するための好機として利用し、かれを、ユーゴスラビアのみならず国際共産主義運動の「偉大な指導者」、「卓越したマルクス・レーニン主義者」に描き出した。こうして、中国指導部もまた、スターリンとボリシェビキ党、アルバニア労働党、および国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義にたいするチトー一味の攻撃を、ことごとく追認したのである。

中国修正主義者は、チトー一味、あるいはカリリョらのような「ユーロコミュニスト」と密接な政治的・イデオロギー的関係を結び、反マルクス主義、トロツキズム、無政府主義、社会民主主義の党やグループに支援をあたえているが、それは、次のことを示している。すなわち、「毛沢東思想」に導かれた中国指導部が、革命に敵対し、各国人民の解放闘争の利益に敵対して、マルクス・レーニン主義の背教者たちとイデオロギー上の共同戦線を張っているということである。それだからこそ、共産主義の敵はすべて、中国の「理論」にこおどりしているのである。というのもかれらは、「毛沢東思想」と中国の政策が、革命と社会主義に矛先を向けたものであることを知っているからである。

これまでわれわれが分析してきた諸問題は、「毛沢東思想」の反マルクス主義的、反レーニン主義的内容のすべてを網羅するものではない。しかしそれだけでも、長年にわたって中国共産党の最高指導者の地位にあり、中国の反帝民主革命の勝利に重要な役割を演じた毛沢東が、けっしてマルクス・レーニン主義者ではなく、進歩的革命的民主主義者にすぎなかった、という結論を引き出すには十分である。かれは、中国国内、すなわち党と人民のなかで、あるいは中国国外で、偉大なマルクス・レーニン主義者としての名声を高め、かれ自身も、共産主義者、マルクス・レーニン主義的弁証家であるかのようにふるまっていた。しかし、実際はそうではなかったのである。かれは、マルクス主義弁証法の一部の要素を観念論や、ブルジョア的・修正主義的哲学と組み合わせ、あるいは何と古代中国哲学とさえ組み合わせた折衷主義者であった。したがって、毛沢東の見解を研究

するには、公刊されたかれの著作の一部のなかの脚色された語句を見るだけではなく、それらを全体的に見なければならず、さらに、それらが実際にどのように適用されているかを研究し、あわせて、それらがどのような実際の結果をもたらしているのかを考慮しなければならない。

「毛沢東思想」の評価を下すにあたっては、それが形成された具体的な歴史的条件を念頭に置くことも重要である。毛沢東の思想が形成されたのは、資本主義の腐朽の時代、すなわち、プロレタリア革命が日程にのぼり、大十月社会主義革命の実例とマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの偉大な教えが、全世界のプロレタリアートと革命的人民の無謬の指針となった時代においてであった。こうした新しい条件のもとで生まれた毛沢東の理論、つまり「毛沢東思想」は、現代におけるもっとも革命的な、もっとも科学的な理論であるマルクス・レーニン主義の装いをまとわなければならなかったし、事実そうしたのである。しかし、「毛沢東思想」はその核心において、やはりプロレタリア革命の事業に敵対する「理論」であり、腐朽し危機にあえぐ帝国主義を救うものである。そのために、われわれは、毛沢東と「毛沢東思想」を反マルクス主義と言うのである。

「毛沢東思想」について語る場合、そのなかに一本の鮮明な線を認めることは困難である。というのは、この章の冒頭でのべたように、それは、無政府主義やトロツキズム、チトーやフルシチョフ、「ユーロコミュニスト」流の修正主義、果てはマルクス主義の一言半句をふりまわすものに至るまで、雑多なイデオロギーの混合物だからである。この混合物全体のなかには、孔子や孟子、その他の中国の哲学者——それらは、毛沢東の思想形成と、教養、理論上の発展に直接の影響をおよ

ぼした——もまた、名誉ある地位を占めている。毛沢東の見解のなかで、歪められたマルクス・レーニン主義の形態をとってあらわれている側面ですら、濃厚な民族主義と外国嫌い、果ては仏教的なものさえもともなったある種の「アジア・コミュニズム」の色彩と特徴を帯びている。それは結局のところ、マルクス・レーニン主義との公然たる対立にいきつかざるをえなかったのである。

現在中国を支配している華国鋒と鄧小平の修正主義集団が、その反動的な政策と行動の理論的基礎、イデオロギー的土台としているのは、「毛沢東思想」である。

当初、実権を握った華国鋒、葉剣英をはじめとする集団は、自己の不安定な地位を強めるために、毛沢東の旗を掲げた。かれらはこの旗のもとで、天安門事件を弾劾し、鄧小平に修正主義者のレッテル——それはかれにふさわしいものではあったが——を張りつけ、かれを解任した。この集団がクーデターで権力を握り、「四人組」を粉砕したのも、この旗のもとにおいてであった。しかしながら、つねに中国の特質をなしていた混乱は、よりいっそう激しいものになった。このような混乱状態は、鄧小平を前面におし出し、かれを権力の座に復活させた。そしてかれは、ファショ的手法をともなう極右路線をふたたび歩みはじめたのである。

鄧小平の目標は、かれ自身の派閥集団の地位を強化し、アメリカ帝国主義および世界反動ブルジョアジーとの同盟というかれの露骨な進路を歩むことであった。鄧小平は、「四つの近代化」計画を打ち出し、文化革命に終止符を打つとともに、この革命によって国家権力や党、軍の諸機関に昇進した大量の幹部を解任し、それにかわって、過去に摘発され、糾弾を受けたもっとも腹黒い反動

分子を登用した。

現在われわれが目撃しているのは、鄧小平の追随者たちが北京の壁に貼りめぐらした反毛沢東の大字報である。現在は、「報復」の時期である。その目的は第一に、毛沢東の「威信」を地に落とし、華国鋒という邪魔物を取り除くことであり、第二に、鄧小平を全能のファッショ的独裁者にするとともに、劉少奇の名誉回復をおこなうことである。

こうした反動的策動を目の当りにして、中国にも世界にも、毛沢東——かれは、けっしてマルクス・レーニン主義者ではなかった——に反対する鄧小平の闘争を、スターリン——かれは偉大なマルクス・レーニン主義者であったし、いまもそうである——に泥を投げつけたフルシチョフの犯罪と比較する人人がいる。しかし、どんなに頭がからっぽな者であっても、そうした類比を受け入れることはできない。

もしも、もっとも正確な比較をするとすれば、それは、ブレジネフをはじめとする修正主義集団がフルシチョフを引きずりおろしたのと同じように、いまでは中国のブレジネフ、鄧小平が、中国のフルシチョフである毛沢東をその座から引きずりおろそうとしている、ということになる。

こうしたなりゆき自体が、一つの修正主義的な確執であり、個人的権力をめぐる闘争なのである。中国では、それが常態であった。そこには、マルクス主義的なものは何もない。こうした状態を清算することができるのは、中国の労働者階級のみであり、「毛沢東思想」とか「鄧小平思想」とか、あるいはそうした類の反マルクス主義、修正主義のブルジョア思想を一掃した真のマルクス

・レーニン主義党のみである。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの思想こそが、真のプロレタリア革命を通じて、中国をこのような状態から救うことができるのである。

われわれは、いつかは中国においてマルクス・レーニン主義とプロレタリア革命が勝利し、中国のプロレタリアートと人民の敵は打ち破られるであろうと確信している。もちろんそれは、流血と闘争なしにはなしとげられないであろう。なぜなら、裏切り者に勝利し、社会主義の勝利をたたかい取るうえで欠かすことのできない指導者、すなわち革命的マルクス・レーニン主義政党を中国につくり出すには、多大の奮闘が要求されるからである。

われわれは、兄弟の中国人民と中国の真の革命家が、幻想や神話から自己を解放するであろうと確信している。かれらは、中国共産党指導部に巣くっているのはマルクス・レーニン主義的革命家ではなく、ブルジョアジーと資本主義の従僕であり、かれらが歩んでいる道は社会主義とも共産主義とも縁もゆかりもない道であるということを、政治的、イデオロギー的に認識するようになるであろう。しかし、大衆と革命家がこのことを理解するためには、「毛沢東思想」がマルクス・レーニン主義ではないこと、また、毛沢東がマルクス・レーニン主義者ではなかったということを悟ることが必要である。われわれマルクス・レーニン主義者が「毛沢東思想」に批判を加えるのは、権力闘争のなかで鄧小平とその取り巻き集団が毛沢東を目のかたきにして攻撃を加えているのとは、およそ異なるものである。

われわれアルバニアの共産主義者は、これらの問題について公明正大に語ることによって、マル

クス・レーニン主義を擁護する自己の責務を果たしているのであり、同時に国際主義者として、中国の人民と革命家が現在置かれている苦境から正しい活路を見出すよう援助しているのである。

マルクス・レーニン主義の擁護はすべての真の革命家にとって重大な責務である

今日の国際情勢は激動している。資本主義・修正主義国における危機は激化の度を加えており、また超大国の侵略政策は、各国人民の自由と独立ならびに全般的平和にとって、新たな重大な脅威を日増しにつくり出している。ブルジョア理論と、フルシチョフ修正主義、チトー修正主義、および「ユーロコミュニスト」の理論、またそれらと並んで中国の理論は、社会主義を破壊し革命を圧殺しようとする帝国主義と現代修正主義の、大がかりな戦略計画の重要な構成部分をなすものである。

こうした状況下にあって、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の諸原則を擁護し、世界の主要な諸問題について革命的立場を堅持することは、今日、わが党ならびにすべての真のマルクス・レーニン主義者にとって基本的任務となっている。われわれは自らの正義の闘争によって、革命と社会主義、人民解放の事業が勝利するという確信を、各国人民と進歩的人類のなかに打ち立てなければならない。わが党は正しい道を歩んでおり、今後も勝利を収めるであろう。なぜな

らば、世界の革命家と人民、そしてマルクス・レーニン主義の真理は、われわれの側にあるからである。

全世界のマルクス・レーニン主義者と革命家は、アルバニア労働党が、マルクス・レーニン主義を他の諸党による攻撃から守り、またプロレタリア国際主義の原則を、雑多な修正主義者がそれを投げ捨てているときに、擁護してきたことを知っている。またかれらは、アルバニア労働党の立場が、自国の利益だけから出発したものではなく、同時に、プロレタリアート全体の身近で切実な、かつきわめて重大な利益を体現したものであり、、世界を革命的に変革するためにマルクス・レーニン主義を基礎とし、指針とするすべての人人の利益を代表するものである、ということを知っている。

同時にまた、われわれ自身も気づいているように、アメリカ帝国主義およびソ連社会帝国主義との関係において中国がとっている政策は、いわゆる第三世界諸国をはじめとするいたるところで、疑念と不満、たえざる批判を呼び起こしているが、それは当然のことである。なぜなら、これらの国国の真面目な人人は、中国の政策は正しくなく、自分たちを抑圧している帝国主義を支持する政策であるということ、また、中国指導部が説いていることの多くはかれら自身の行為とも、具体的実際とも一致していないということを、見きわめているからである。各国人民の目に明らかなように、中国は、人民の利益を脅かす社会帝国主義の政策を遂行しているのである。

この面においても、わが党はささやかな貢献をおこなっている。各国人民がわが党を信頼してい

るのは、わが党が真実を語り、しかもその真実が、アルバニアで具体的に適用されてきたマルクス・レーニン主義理論を根拠としているからである。過去におけるわが国の経過――国内の解放戦争にせよ、当時の社会的・経済的状態、および政治的・精神的状態にせよ――は、国内の支配者と外国の帝国主義支配者の過酷な抑圧のもとに、いまもなおしいたげられている世界の多数の国国と多くの点で共通するものであった。人民の手に権力を奪取し、プロレタリアート独裁を打ち立て、さらに社会主義を建設するなかでわが党が蓄積してきた経験は、これらの国国の人民にとって、具体的な実例となり助けとなるものである。アルバニア社会主義人民共和国でかちとられた勝利と成果は、マルクス・レーニン主義理論を基礎としたものであり、アルバニア労働党は、この理論を自己の導きとし、またそれを実際に適用している。

中国自身の従僕や極反動派以外には、「三つの世界」論という中国の破産した理論を真向から擁護しようとする者はだれ一人いない。アメリカ帝国主義との関係修復をはかる中国の政策は、だれも見たいとは思わない帝国主義戦争の亡霊をよみがえらせ、また、何びとにとっても耐えがたい植民地的、新植民地的な暗黒状態をいっそう深刻にしている。さらにその政策は、だれもが廃止されるよう望んでいる資本主義的搾取を、支持しているのである。

アルバニア労働党は、マルクス・レーニン主義思想の純潔を守るために断固としてたたかってきたし、現在も、そして今後もつねに、そのためにたたかうであろう。アルバニア労働党はまた、この思想を歪曲し、それをブルジョア・修正主義思想や反革命思想にとってかえようとするすべての

者に反対し、今後もたえず反対するであろう。わが党は、プロレタリアの党、マルクス・レーニン主義の党として、世界革命の一翼を積極的に担っており、これまでと同様、世界革命のためにはどんな犠牲をも払う決意である。何者も、わが党をこの国際主義に満ちた、栄えある輝かしい道から逸脱させることはできない。また、何者も、わが党を脅しつけたり、屈服させたりすることはできない。わが党はいかなる類の日和見主義とも妥協せず、マルクス・レーニン主義からのいかなる逸脱、そのいかなる歪曲とも妥協することはありえない。わが党は、他のあらゆる修正主義と同様中国修正主義とも、断固たたかうであろう。

わが党はマルクス・レーニン主義党であり、またそうである以上、われわれは真実を率直に語るのを恐れてはならない。わが党はその党員数からいえば小さいが、しかしそれは、数数の戦闘のなかできたえ抜かれた党である。わが党は、マルクス・レーニン主義の純潔を守り、革命と社会主義を擁護するため、諸問題についてつねに率直かつ大胆に自己の意見をのべてきた。事実が示すとおり、中国修正主義にたいするわれわれの闘争は正しいものであり、必要不可欠である。だからこそその闘争は、真のマルクス・レーニン主義者と革命家の賛同と支持を受けているのである。

わが党自身もそうであるように、真の革命政党は、いかなる場合にも自己の原則的立場を放棄するものではない。わが党の勇気と品性を思い上がりとしか見なさないような者がいるからといって、われわれは後ずさりすることはできない。党は、その党員たちが思い上がるのを戒め、かれらが階級敵にたいして、つねに不屈の決意をもって堂堂と立ち向かうように教えている。これらの点

について は、党の大小を論ずる余地はない。

共産主義者と真の革命家、そしてマルクス・レーニン主義者は、今日の世界情勢がどのように発展しつつあるかについて、認識を徹底させなければならない。情勢の発展の仕方は千篇一律ではない。もしも、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの教えと世界プロレタリアートの革命闘争の経験、および、各国の真のマルクス・レーニン主義党の経験が研究され、理解され、適切に摂取されるならば、こうした情勢の発展を正しく認識することができるし、革命を強力に推進することができる。

われわれアルバニアの共産主義者は、マルクス・レーニン主義に習熟することが絶対に必要であるということを、十分に理解しなければならない。資本主義・修正主義による包囲と、それがわが国におよぼしている圧力について、われわれはけっして過小評価するようなことがあってはならない。われわれは、これらの問題を認識するうえで、また、自己を取り巻く敵との現実の闘争をくり広げるうえで、けっして自己を過信してはならない。

革命はこれまでも暗礁にぶつかってきたが、前途にはなお多くの暗礁が待ち受けている。それらは機雷で爆破しなければならないが、ただちに爆破できるものもあれば、徐徐に崩さなければならないものもあり、さらには、いったん迂回したのちにとどめの一撃を加えなければならないものもある。革命の戦略・戦術についての理解とは、こうしたことを言うのである。革命の勝利への確信をつくり出すには、広範な人民大衆を組織すること、また、真のマルクス・レーニン主義党の揺る

がぬ指導を受けるという自覚をプロレタリアートにもたせることが、ぜひとも必要である。というのは、さもなければかれらは、冒険主義的行動に走り、革命の勝利を危くするかもしれないからである。共産主義者と被抑圧人民大衆は、次のことを悟らねばならない。すなわち、帝国主義と世界資本主義は、大衆を弾圧し反革命を組織することでは、多くの経験を積んでいるということである。したがってわれわれは、われわれ自身のイデオロギーと政策、戦略・戦術がどんな敵をもしのぐほど強力である――なぜならそれらは、正義の事業、すなわち共産主義の事業に奉仕するものだからである――ということを踏まえつつ、同時に、敵の戦略・戦術にも通じて、それに対処するようにしなければならない。

現在、わが党ならびに全世界のマルクス・レーニン主義諸党にとって、中国修正主義との闘争はもっとも重視すべきものとなっており、重要な課題となっている。しかしこのことは、われわれが中国修正主義とわたりあっているあいだは、ソ連修正主義やチトー修正主義、あるいは「ユーロコミュニズム」――それらは、現代修正主義のきわめて危険な変種である――のことを忘れ去ってもよいというのではない。これらすべての反マルクス主義潮流は、それぞれの闘争形態にちがいこそあれ、戦略・戦術上では同じ流れをくむものであり、共通の目的をもって共同の闘争をおこなっている。

こうしたすべての理由からして、われわれは、アメリカ帝国主義と世界のあらゆる反動的資本主義ブルジョアジーにたいする闘争の必要性について、またそれだけでなく、ソ連修正主義、ユーゴ

スラビア修正主義、中国修正主義、およびその他の修正主義との闘争についても、けっして注意をそらしてはならない。相互にさまざまな矛盾をもちつつも、これらの敵はみな、一本の糸で結ばれている。すなわちそれは、革命に反対し、マルクス・レーニン主義諸党とその相互の団結に反対し、さらには、プロレタリアートとすべての勤労大衆が自らを全面的に組織し、革命に撃って出ようとするのに反対して、たたかうということである。

現代修正主義、とりわけソ連修正主義やチトー修正主義、中国修正主義とたたかうことは、たやすいことではない。それどころか、この闘争は苛酷で長期的なものであり、今後もそうなるであろう。この闘争を首尾よくすすめ、一歩一歩勝利をかちとっていくためには、わが国の共産主義者と幹部、インテリゲンチャとすべての勤労大衆は、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンのイデオロギーを吸収しなければならず、それとともに、現代修正主義との闘争についてのわが党の豊富な経験を学ばなければならない。このようにしてはじめて、われわれは障害を乗りこえ、いばらにみちた敵の密林のなかを無事に通り抜けることができるのである。

これまでどおりわが労働党は、正しいマルクス・レーニン主義路線について、鮮明で確固とした、かつ大胆な立場を堅持しなければならない。明確に定められた目標をもつわが党のこうした路線は、アメリカ帝国主義とソ連社会帝国主義、および中国社会帝国主義を暴露し、それらとの仮借ない闘争を成功裡にすすめるうえで、助けとなるであろう。

わが党の任務、および全世界の真の共産主義者の任務は、マルクス・レーニン主義理論を擁護

し、またそれにたいする、ブルジョアジーと現代修正主義者、そしてすべての日和見主義者と裏切り者による歪曲を一つ残らず取り除くために、献身的にたたかうことである。

マルクス・レーニン主義は勝利のイデオロギーである。それを擁護し、守り発展させる者こそが、革命の栄えある部隊の一員となるのであり、プロレタリアートとすべての被抑圧者を率いて世界を変革し、資本主義を破壊して新しい世界、すなわち社会主義世界を打ち立てる――そうした真の共産主義者の無敵の大軍をなすのである。

帝国主義と革命　　1400円

1979年10月1日

著者　エンベル・ホッジャ
訳者　マルクス・レーニン主義文献
　　　翻　訳　グ　ル　ー　プ

発行所　下関市上田中町3丁目3の28
　　　　電話0832㉛6023(代)　振替(下関)11899
　　　　人　民　の　星　社

エンベル・ホッジャ　アルバニア労働党第7回大会における報告　B6判 1200円

エンベル・ホッジャ 1960,6～12　修正主義と闘うアルバニア労働党　B6判（上製本） 2500円

日本共産党（左派）中央委員会編　日本共産党（左派）第二回大会主要文献集　B6判 350円

マルクス・レーニン主義文献翻訳グループ訳　マルクス エンゲルス　共産党宣言　B6判 250円

日本共産党（左派）中央理論機関誌　革命戦士（月刊）

定価500円（〒120円）

¥1,400